小神明勝沢境遺跡
小神明富士塚遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その３）報告書

2012年2月

国　土　交　通　省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

小神明勝沢境遺跡
小神明富士塚遺跡
一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その３）報告書
二〇一二・二
国　土　交　通　省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第524集

小神明勝沢境遺跡
小神明富士塚遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その３）報告書

2012年2月

国　土　交　通　省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

国道17号線は首都東京と上信越地域の政令指定都市である新潟県新潟市を結び、日本列島中央部を縦断する大動脈です。上武道路は、一般国道17号の混雑緩和と沿線地域における交通や物流の円滑化と促進を図るため、大規模バイパスとして埼玉県熊谷市から群馬県前橋市田口町に至る路線が計画されました。平成10年には、地域高規格道路として前橋渋川バイパスとともに「熊谷渋川連絡道路」として指定を受けました。

上武道路の建設は平成元年に新田郡尾島町(現太田市)安養寺から前橋市今井町の国道50号線までの間が開通し、平成17年には前橋市今井町から前橋市富田町まで、平成20年には同市上泉町までの区間が供用されました。

上武道路の沿線には、旧石器時代から近世に至る約３万年間に及ぶ遺跡が累積しています。この地域は県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地が広がっており、群馬県教育委員会の調整の結果、道路建設に先だって埋蔵文化財の記録保存の措置がとられることになりました。

上武道路の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和48年度から着手し、間断の時期をはさんで現在も発掘調査が進められています。小神明勝沢境遺跡と小神明富士塚遺跡は、赤城山の南東麓に位置する遺跡であり、平成20年から21年度にかけて発掘調査を行いました。両遺跡からは古墳時代から平安時代に及ぶ集落や中世から近世の屋敷跡が発見され、この地域の開発の一端が明らかになりました。ここに、遺跡の発掘成果を埋蔵文化財発掘調査報告書として刊行します。

発掘調査から調査報告書の刊行に至るまで、国土交通省関東地方整備局、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会をはじめ関係諸機関並びに関係各位の皆様には、多大なご高配とご協力を賜りました。ここに銘記して心より謝意を表しますとともに、本調査報告書が地域の歴史理解を深め、豊かな社会と未来を指向するための一助として広く活用されますことを願い序といたします。

平成24年２月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　須田栄一

例　言

1．本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その３)による小神明勝沢境遺跡、小神明富士塚遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．小神明勝沢境遺跡は、群馬県前橋市小神明町367、370、372、374、377、378、380、381番地に所在する。小神明富士塚遺跡は、群馬県前橋市小神明町346-1、346-2、349-4、350-1、350-2、350-3、350-4、350-5 、351-1、351-2、353-2、353-3、353-4番地、小神明町富士塚3-1、4、5、6-1、7-1、9、10-1番地、小神明町観音堂24番地、上細井町東田ノ口25-1、29-1、30、31、32-1、34-2番地、上細井町田ノ口32-1番地に所在する。
3．事業主体は、国土交通省関東地方整備局である。
4．調査主体は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
5．調査期間は、小神明勝沢境遺跡が平成20年10月１日～ 12月10日である。小神明富士塚遺跡は平成20年９月１日～平成21年３月31日及び平成22年２月１日～平成22年３月31日に発掘調査を行った。調査面積は、小神明勝沢境遺跡が5949㎡である。小神明富士塚遺跡の調査面積は、15332㎡である。
6．調査体制は以下のとおりである。
平成20年度の小神明勝沢境遺跡は、発掘調査担当が中降之(専門員(主任))、大塚智央(調査研究員)である。
委託は、遺跡掘削工事が須賀工業株式会社、地上測量が技研測量設計株式会社である。
平成20年度の小神明富士塚遺跡は、発掘調査担当が女屋和志雄(上席専門員)、坂口一(主任専門員(総括))、平井敦(主任調査研究員)である。
委託は、遺跡掘削工事が株式会社シン技術コンサル、地上測量と空中写真撮影が技研測量設計株式会社である。
平成21年度の小神明富士塚遺跡は、発掘調査担当が佐藤明人(専門員(主任))である。
委託は、遺跡掘削工事が山下工業株式会社、地上測量が技研測量設計株式会社である。
7．整理事業の期間と体制は以下のとおりである。
期間は平成22年10月１日～平成23年７月31日である。平成22年度の整理担当は高島英之(専門員(総括))である。平成23年度の整理担当は大西雅広(上席専門員)である。
8．本書作成の担当者は以下のとおりである。
本文執筆は、高島英之、矢口裕之(専門員(総括))である。デジタル編集は齋田智彦(主任調査研究員)、遺構写真は発掘調査の担当者、遺物写真は佐藤元彦(補佐(総括))である。
遺物観察、観察表執筆は縄文時代の土器が橋本淳(主任調査研究員)、弥生時代の土器が大木紳一郎(上席専門員兼資料２課長取扱)、縄文時代の石器、その他石製品が岩崎泰一(上席専門員)、古墳時代以降の土器が神谷佳明(上席専門員)、女屋和志雄(上席専門員)、中世以降の土器、陶磁器が大西雅広(上席専門員)、保存処理が関邦一(補佐)である。
9．岩石の同定は飯島静男氏(地質学者、群馬地質研究会)に依頼した。
10．出土した動物遺体の同定は宮崎重雄氏(古生物学者、元群馬県立大間々高校教諭)に依頼した。
11．テフラの分析は、株式会社火山灰考古学研究所に、谷地に分布する堆積物の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
12．発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、前橋市教育委員会事務局管理部文化財保護課のご指導とご助言を得た。
13．発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡　　例

1．本書で使用した方位は、総て国家座標(座標第Ⅸ系)を用いた。調査区は、X＝46934 ～ 47102、Y＝-66007 ～ -66520の範囲に収まり、真北方向角は＋0°26′17″である。
2．遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。
3．遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。遺物写真の縮率は原則1/3とし、それ以外のものは明記した。
4．本書で使用した図のトーンは以下のことを表している。

灰釉陶器　赤色塗彩　漆　攪乱　煙

5．遺構の記述にあたっては以下の点に留意して記述した。
竪穴住居について　位置は遺構が含まれるグリッドを記載した。主軸方位は掘立柱建物の場合は桁行の方向。竪穴住居の場合は竈の煙道の方向、竈を伴わない竪穴住居は北からの竪穴住居辺の方向を求めた。
遺構が重複する場合は層序に基づく前後関係を記述した。遺構の形状は、正方形、長方形、隅が丸い方形(正方形の角が丸いもの)、隅が丸い長方形(長方形の角が丸いもの)におおよそ分類して記述した。
遺構の規模は、遺構検出面の大きさを計測し、推定により復原したものは数値に＋を付して記載した。なお、竈が存在する竪穴住居の面積は、竪穴住居外の竈部分は含まれない。面積は床面の面積をプラニメーターで計測した。方位は遺構の壁などの走向を座標北から東西への傾きとして計測した。床面の状況は傾斜や凹凸の有無、硬化した面の有無などを記述した。
遺構の埋土は、層序や層相を記述し、鍵層となるテフラ有無を記述した。遺構内の炉や竈は位置や規模を記載し、遺構の保存状態を記述した。遺構内に見られる周溝、柱穴、貯蔵穴は位置や規模、保存状態について記述した。柱穴の規模は長径・短径・深さを記載した。
遺構から出土した遺物は、遺構内の遺物の出土状態と特徴的な遺物について記述した。遺構の時代は、出土した遺物や遺構の層序関係から推定した。
6．報告書で使用する火山砕屑物の鍵層は、通常はテフラ名を使用し、地層の記載では略称を使用した。略称の標記は次のとおりである。As-A (浅間Ａテフラ)、As-B (浅間Ｂテフラ)、Hr-FP (榛名二ッ岳伊香保テフラ)、Hr-FA (榛名二ッ岳渋川テフラ)、As-C (浅間Ｃテフラ)。なお、テフラの命名や年代に関しては矢口(2011)を参照されたい。
7．報告書で使用した地形図は、国土地理院発行1/25000「前橋」図幅他であり、図には出典を明示している。
8．遺構の推定年代は、出土遺物の相対年代によって推定されたものついて「○世紀第○四半期」の範囲で示し、例えば、８世紀第３四半期とみられる場合には、「８ＣⅢ」、８世紀第３～第４四半期であれば「８世紀後半」と表記した。

目　次

序

例言

凡例

第１章　調査に至る経緯と事業の経過

１．調査に至る経緯 …… 1
２．発掘調査及び整理作業の方法 …… 4
３．発掘調査と整理作業の経過 …… 7

第２章　遺跡の地理的、歴史的環境

１．遺跡の自然環境 …… 10
２．遺跡の歴史的環境 …… 11
３．発掘地の層序 …… 20

第３章　小神明勝沢境遺跡で発見された遺構と遺物

１．調査の概要 …… 23
２．Ａ区の調査概要 …… 23
３．竪穴住居 …… 23
４．溝 …… 33
５．Ｂ区の調査概要 …… 33
６．竪穴住居 …… 33
７．溝 …… 36
８．土坑 …… 37
９．焼土の塊を含む土坑 …… 38
10．埋設土器 …… 38
11．遺物集中 …… 40
12．Ｃ区の調査概要 …… 40
13．竪穴住居 …… 40
14．溝 …… 43
15．土坑 …… 46
16．Ｄ区の調査概要 …… 48
17．竪穴住居 …… 48
18．溝 …… 52
19．遺構外の出土遺物 …… 52

第４章　小神明富士塚遺跡で発見された遺構と遺物

１．調査の概要 …… 58
２．Ａ区の調査概要 …… 58
３．竪穴住居 …… 61
４．掘立柱建物 …… 85
５．道 …… 94
６．溝 …… 95
７．井戸 …… 101
８．土坑 …… 102
９．ピット …… 121
10．Ｂ区の調査概要 …… 123
11．溝 …… 123
12．ピット …… 125
13．縄文時代遺物包含層と出土遺物 …… 126
14．Ｃ区の調査概要 …… 128
15．溝と土坑 …… 128
16．Ｄ区の調査概要 …… 137
17．竪穴住居 …… 138
18．竪穴状遺構 …… 146
19．掘立柱建物 …… 149
20．溝 …… 154
21．井戸 …… 156
22．土坑 …… 159
23．遺構外の出土遺物 …… 174

第５章　自然科学分析による遺跡の理解

１．小神明勝沢境遺跡Ｂ区の２号竪穴住居で見つかったテフラの同定 …… 177
２．小神明勝沢境遺跡Ａ区谷地に分布する堆積物の自然科学分析 …… 179
３．小神明富士塚遺跡Ａ区２号土坑から出土したウマの遺体について …… 184
４．自然科学分析の成果と発掘調査からの評価 184

第６章　調査成果のまとめ

１．縄文時代から弥生時代の遺跡 …… 185
２．古墳時代から奈良時代及び平安時代の遺跡 186
３．小神明富士塚遺跡Ｄ区の中世以降の屋敷遺構群について …… 186

文献 …… 187
遺物観察表 …… 189
写真図版
報告書抄録
付図１　小神明勝沢境遺跡、小神明富士塚遺跡（Ａ区・Ｂ区）遺構全体図
付図２　小神明富士塚遺跡遺構全体図

表目次

第1表　遺構名、遺構番号の対照 ・・・

第103図　B区縄文時代遺物包含層の出土遺物 ・・・

	2	C区１号竪穴住居遺物出土状況(西)
	3	C区１号竪穴住居掘り方全景(西)
	4	C区１号竪穴住居掘り方土層断面B-B'（南）
	5	C区１号竪穴住居竈全景(西)
	6	C区１号竪穴住居土層断面a-a'（南）
	7	C区１号竪穴住居竈掘り方全景(西)
	8	C区１号竪穴住居掘り方土層断面b-b'（西）
PL.11	1	C区１号竪穴住居貯蔵穴全景(南)
	2	C区１号溝全景(北)
	3	C区１号溝土層断面A-A'（北）
	4	C区２号溝全景(南)
	5	C区２号溝土層断面A-A'（南）
	6	C区３号溝全景(西)
	7	C区３号溝土層断面A-A'（西）
	8	C区１坑群全景(東)
PL.12	1	C区１号土坑全景(東)
	2	C区１号土坑土層断面(南西)
	3	C区２号土坑全景(東)
	4	C区２号土坑土層断面(南)
	5	C区３号土坑全景(東)
	6	C区３号土坑土層断面(南)
	7	C区４号溝全景(東)
	8	C区４号土坑土層断面(南)
PL.13	1	C区５号土坑土層断面(東)
	2	C区６号土坑全景(東)
	3	C区６号土坑土層断面(南)
	4	C区面壁土層断面(北)
	5	D区全景(東)
	6	D区１号竪穴住居全景(西)
	7	D区１号竪穴住居土層断面B-B'（北）
PL.14	1	D区１号竪穴住居掘り方全景(南)
	2	D区１号竪穴住居竈土層断面(南)
	3	D区１号竪穴住居掘り方全景(西)
	4	D区１号竪穴住居貯蔵穴土層断面(北)
	5	D区２号竪穴住居全景(西)
	6	D区２号竪穴住居土層断面B-B'（南）
	7	D区２号竪穴住居掘り方全景(西)
	8	D区２号竪穴住居掘り方土層断面A-A'（西）
PL.15	1	D区２号竪穴住居貯蔵穴土層断面(南)
	2	D区２号竪穴住居ピット１全景(南)
	3	D区２号竪穴住居遺物出土状況
	4	D区２号竪穴住居遺物出土状況(甕)
	5	D区１号溝全景(南)
	6	D区２号溝全景(南)
PL.16	1	A区全景
	2	A区全景(東)
PL.17	1	A区２号竪穴住居全景(南)
	2	A区２号竪穴住居土層断面A-A'（南）
	3	A区２号竪穴住居掘り方全景(南)
	4	A区３号竪穴住居全景(南西)
	5	A区３号竪穴住居土層断面A-A'（南西）
	6	A区３号竪穴住居竈全景(西)
	7	A区３号竪穴住居竈土層断面a-a'（西）
	8	A区３号竪穴住居竈土層断面b-b'（南）
PL.18	1	A区４号竪穴住居全景(南)
	2	A区４号竪穴住居土層断面A-A'（南）
	3	A区５号竪穴住居全景(西)
	4	A区５号竪穴住居土層断面A-A'（南西）
	5	A区５号竪穴住居掘り方全景(西)
	6	A区５号竪穴住居竈全景(西)
	7	A区５号竪穴住居竈土層断面a-a'（西）
	8	A区５号竪穴住居竈土層断面b-b'（南）
PL.19	1	A区５号竪穴住居竈掘り方全景(西)
	2	A区５号竪穴住居竈掘り方土層断面a-a'（西）
	3	A区５号竪穴住居竈掘り方土層断面b-b'（南）
	4	A区５号竪穴住居遺物出土状況(南西)
	5	A区６号竪穴住居全景(西)
	6	A区６号竪穴住居掘り方土層断面A-A'（西）
	7	A区６号竪穴住居竈全景(西)
	8	A区６号竪穴住居竈土層断面a-a'（西）
PL.20	1	A区６号竪穴住居竈掘り方全景(西)
	2	A区６号竪穴住居竈掘り方土層断面a-a'（西）
	3	A区６号竪穴住居竈掘り方土層断面b-b'（南西）
	4	A区７号竪穴住居全景(南西)
	5	A区７号竪穴住居土層断面A-A'（南西）
	6	A区７号竪穴住居竈土層断面a-a'（西）
	7	A区７号竪穴住居竈土層断面b-b'（南）
	8	A区７号竪穴住居竈掘り方土層断面a-a'（西）
PL.21	1	A区７号竪穴住居竈掘り方土層断面b-b'（南）
	2	A区８号竪穴住居全景(南)
	3	A区８号竪穴住居掘り方全景(南)
	4	A区８号竪穴住居２号竈全景(南)
	5	A区８号竪穴住居２号竈土層断面b-b'（東）
	6	A区８号竪穴住居２号竈掘り方全景(南)
	7	A区８号竪穴住居２号竈掘り方土層断面a-a'（南）
	8	A区８号竪穴住居２号竈掘り方土層断面c-c'（南）
PL.22	1	A区８号竪穴住居２号貯蔵穴土層断面(南)
	2	A区９号、10号竪穴住居全景(西)
	3	A区９号、10号竪穴住居土層断面A-A'（南西端・南東から）
	4	A区９号、10号竪穴住居土層断面A-A'（中央・南東から）
	5	A区９号、10号竪穴住居土層断面A-A'（北東端・南東から）
	6	A区９号、10号竪穴住居掘り方全景(西)
	7	A区９号竪穴住居竈土層断面a-a'（西）
	8	A区９号竪穴住居竈土層断面b-b'（南）
PL.23	1	A区９号竪穴住居竈掘り方全景(西)
	2	A区９号竪穴住居竈掘り方土層断面b-b'（南）
	3	A区９号竪穴住居貯蔵穴土層断面(西)
	4	A区10号竪穴住居竈掘り方全景(南)
	5	A区11号竪穴住居全景(西)
	6	A区11号竪穴住居土層断面A-A'（西）
	7	A区11号竪穴住居竈土層断面a-a'（西）
	8	A区11号竪穴住居竈掘り方全景(西)
PL.24	1	A区11号竪穴住居竈掘り方土層断面a-a'（西）
	2	A区11号竪穴住居竈掘り方土層断面b-b'（南）
	3	A区11号竪穴住居貯蔵穴土層断面(西)
	4	A区12号竪穴住居全景(西)
	5	A区12号竪穴住居土層断面A-A'（北端・西から）
	6	A区12号竪穴住居土層断面A-A'（南端・西から）
	7	A区12号竪穴住居掘り方全景(西)
	8	A区12号竪穴住居竈全景(西)
PL.25	1	A区12号竪穴住居土層断面a-a'（西）
	2	A区１号掘立柱建物全景(東)
	3	A区２号掘立柱建物全景(南)
	4	A区３号掘立柱建物全景(北)
	5	A区４号掘立柱建物全景(西)
	6	A区５号掘立柱建物全景(西)
	7	A区６号掘立柱建物全景(南)
	8	A区７号掘立柱建物全景(南)
PL.26	1	A区３号掘立柱建物８号柱穴土層断面(南東)
	2	A区５号掘立柱建物４号柱穴全景(西)
	3	A区５号掘立柱建物６号柱穴全景(西)
	4	A区５号掘立柱建物６号柱穴土層断面(南)
	5	A区５号掘立柱建物７号柱穴全景(南)
	6	A区６号掘立柱建物１号柱穴全景(南東)
	7	A区６号掘立柱建物２号柱穴全景(南)
	8	A区６号掘立柱建物３号柱穴全景(東)
	9	A区６号掘立柱建物３号柱穴土層断面(東)
	10	A区６号掘立柱建物４号柱穴全景(南東)
	11	A区６号掘立柱建物５号柱穴土層断面(南東)
	12	A区６号掘立柱建物６号柱穴全景(北西)
	13	A区６号掘立柱建物６号柱穴土層断面(南東)
	14	A区７号掘立柱建物１号柱穴土層断面(南)
	15	A区７号掘立柱建物８号柱穴土層断面(南)
PL.27	1	A区１号溝底部石敷検出状況(北)
	2	A区１号溝全景(北)
	3	A区１号溝底部石敷検出状況(北)
	4	A区１号溝土層断面A-A'（南）
	5	A区１号溝土層断面D-D'（南）
	6	A区３号溝土層断面A-A'（東）
	7	A区３・４・５・８号溝、31号土坑土層断面B-B'（西）

	8	A区４号溝全景(東)
PL.28	1	A区４号溝土層断面A-A'（東）
	2	A区５号溝全景(北)
	3	A区５号溝、５号掘立柱建物４号柱穴土層断面A-A'（南）
	4	A区６号溝全景(南)
	5	A区６号溝土層断面B-B'（南）
	6	A区７号溝全景(北)
	7	A区７号溝土層断面B-B'（南）
	8	A区８号溝土層断面B-B'（南）
PL.29	1	A区１号井戸全景(南)
	2	A区１号井戸土層断面(南)
	3	A区２号井戸全景(北)
	4	A区２号井戸土層断面(南)
	5	A区１号土坑全景(南)
	6	A区１号土坑土層断面(南)
	7	A区２号土坑全景(東)
	8	A区３号土坑土層断面(南)
	9	A区４号、12号土坑全景(南)
	10	A区12号土坑土層断面(南)
	11	A区５号土坑全景(北)
	12	A区５号土坑土層断面(西)
	13	A区６号土坑全景(北)
	14	A区６号土坑土層断面(西)
	15	A区７号土坑全景(西)
PL.30	1	A区７号土坑土層断面(南)
	2	A区８号土坑全景(南西)
	3	A区８号土坑土層断面(南)
	4	A区９号土坑全景(西)
	5	A区９号土坑土層断面(南)
	6	A区10号土坑全景(南西)
	7	A区11号土坑全景(西)
	8	A区11号土坑土層断面(西)
	9	A区13号土坑全景(北西)
	10	A区13号土坑土層断面(南西)
	11	A区14号土坑全景(東)
	12	A区14号土坑土層断面(南)
	13	A区16号土坑全景(西)
	14	A区16号土坑土層断面(西)
	15	A区20号土坑全景(南)
PL.31	1	A区20号土坑土層断面(西)
	2	A区21号土坑全景(南)
	3	A区21号土坑土層断面(西)
	4	A区24号土坑全景(南)
	5	A区24号土坑遺物出土状況(西)
	6	A区24号土坑土層断面(南)
	7	A区27号土坑全景(南西)
	8	A区27号土坑土層断面(南東)
	9	A区28号土坑全景(南)
	10	A区28号土坑土層断面(南)
	11	A区29号土坑全景(東)
	12	A区32号土坑全景(東)
	13	A区29号、32号土坑土層断面(東)
	14	A区30号土坑全景(東)
	15	A区30号土坑土層断面(東)
PL.32	1	A区31号土坑全景(西)
	2	A区33号土坑全景(西)
	3	A区33号土坑土層断面(西)
	4	A区34号土坑全景(東)
	5	A区３号掘立柱建物６号柱穴、34号土坑土層断面(南)
	6	A区35号土坑全景(北西)
	7	A区35号土坑土層断面(南)
	8	A区37号土坑全景(東)
	9	A区38号土坑全景(南東)
	10	A区39号土坑全景(南)
	11	A区39号土坑土層断面(南)
	12	A区40号土坑全景(西)
	13	A区40号土坑土層断面(西)
	14	A区41号土坑全景(北)
	15	A区41号土坑土層断面(南)
PL.33	1	A区42号土坑全景(西)
	2	A区42号土坑土層断面(西)
	3	A区43号土坑全景(東)
	4	A区43号土坑土層断面(西)
	5	A区44号土坑全景(東)
	6	A区44号土坑土層断面(西)
	7	A区45号土坑全景(南東)
	8	A区45号土坑土層断面(南)
	9	A区46号土坑全景(南東)
	10	A区47号、48号土坑全景(東)
	11	A区47号、48号土坑土層断面(南)
	12	A区49号土坑全景(東)
	13	A区50号土坑全景(西)
	14	A区50号土坑土層断面(南)
	15	A区51号、52号土坑土層断面(南)
PL.34	1	A区53号土坑全景(西)
	2	A区53号土坑土層断面(西)
	3	A区54号土坑全景(南)
	4	A区54号土坑土層断面(南)
	5	A区55号土坑土層断面(西)
	6	A区57号土坑全景(南)
	7	A区57号土坑土層断面(南)
	8	A区58号土坑全景(西)
	9	A区58号土坑土層断面(西)
	10	A区58号土坑全景(西)
	11	A区59号土坑全景(北西)
	12	A区59号土坑土層断面(南)
	13	A区60号土坑全景(南)
	14	A区61号土坑全景(南)
	15	A区61号土坑土層断面(南)
PL.35	1	A区１号道土層断面A-A'（南）
	2	A区１号道土層断面B-B'（南）
	3	A区２号道全景(東)
	4	A区２号道土層断面(東)
	5	B区１号～３号溝全景(西)
	6	B区１号溝土層断面A-A'（西）
	7	B区１号、２号溝土層断面B-B'（西）
PL.36	1	B区１号ピット全景(南)
	2	B区１号ピット土層断面(南)
	3	B区３号ピット全景(南)
	4	B区３号ピット土層断面(南)
	5	B区４号ピット全景(南)
	6	B区４号ピット土層断面(西)
	7	B区５号ピット全景(南)
	8	B区５号ピット土層断面(南)
	9	B区６号ピット全景(南)
	10	B区６号ピット土層断面(南)
	11	B区７号ピット全景(南)
	12	B区８号ピット全景(南)
	13	B区８号ピット土層断面(南)
	14	B区９号ピット全景(南東)
	15	B区９号ピット土層断面(東)
PL.37	1	B区縄文時代遺物包含層遺物出土状況(東)
	2	B区縄文時代遺物包含層遺物出土状況(西)
	3	B区縄文時代遺物包含層遺物出土状況(西)
	4	B区縄文時代遺物包含層遺物出土状況(西)
	5	C区全景(西)
PL.38	1	C区１号～５号溝全景(北)
	2	C区１号～６号溝土層断面A-A'（西側・南から）
	3	C区１号～６号溝土層断面A-A'（中央・南から）
	4	C区１号～６号溝土層断面A-A'（東側・南から）
	5	C区６号溝全景(東)
	6	C区６号溝土層断面(東)
	7	C区７号溝全景(南)
	8	C区７号溝全景(北)
PL.39	1	C区７号溝土層断面A-A'（南）
	2	C区８号溝全景(西)
	3	C区８号溝土層断面(東)
	4	C区９号溝全景(北西)
	5	C区９号溝土層断面(南東)
	6	C区10号溝全景(南)

7　C区11号、12号溝全景(南)
8　C区11号、12号溝上層断面A-A′(南)
PL.40　1　C区11号、12号溝上層断面B-B′(南)
2　C区13号、14号溝全景(北)
3　C区１号土坑全景(南)
4　C区１号土坑上層断面(南)
PL.41　1　D区１号、２号掘立柱建物全景(西)
2　D区３号掘立柱建物全景(西)
3　D区４号掘立柱建物全景(西)
4　D区１号竪穴住居全景(南西)
5　D区１号竪穴住居遺物出土状況(南西)
6　D区１号竪穴住居上層断面(南西)
7　D区１号竪穴住居掘り方全景(南西)
8　D区１号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状況(東)
PL.42　1　D区１号竪穴住居貯蔵穴上層断面(西)
2　D区１号竪穴住居土坑上層断面(南西)
3　D区２号竪穴住居全景(南)
4　D区２号竪穴住居上層断面A-A′(西端・南から)
5　D区２号竪穴住居上層断面A-A′(東端・南から)
6　D区２号竪穴住居上層断面B-B′(北端・西から)
7　D区２号竪穴住居上層断面B-B′(南端・西から)
8　D区２号竪穴住居掘り方全景(南)
PL.43　1　D区２号竪穴住居竈全景(西)
2　D区２号竪穴住居竈掘り方全景(西)
3　D区２号竪穴住居竈掘り方上層断面a-a′(西)
4　D区２号竪穴住居竈掘り方上層断面b-b′(南)
5　D区２号竪穴住居貯蔵穴全景(南)
6　D区２号竪穴住居ピット１全景(北西)
7　D区２号竪穴住居ピット２全景(北西)
8　D区２号竪穴住居ピット３全景(北西)
PL.44　1　D区２号竪穴住居ピット４全景(西)
2　D区１号竪穴状遺構全景(西)
3　D区１号竪穴状遺構上層断面(西)
4　D区２号竪穴状遺構全景(西)
5　D区２号竪穴状遺構上層断面(西)
6　D区３号竪穴状遺構全景(北西)
7　D区３号竪穴状遺構上層断面(北西)
8　D区１号溝全景(東)
PL.45　1　D区１号溝上層断面(東)
2　D区２号溝全景(南)
3　D区２号溝上層断面A-A′(南)
4　D区３号溝全景(南西)
5　D区３号溝上層断面A-A′(南西)
6　D区３号溝上層断面B-B′(南西)
7　D区４号溝全景(南西)
8　D区５号、６号溝全景(南)
PL.46　1　D区１号井戸全景(北西)
2　D区１号井戸石検出状況(北西)
3　D区２号井戸全景(西)
4　D区２号井戸上層断面(南)
5　D区３号井戸全景(西)
6　D区３号井戸上層断面(南)
7　D区４号井戸全景(南西)
8　D区４号井戸上層断面(南)
9　D区５号井戸全景(南)
10　D区５号井戸上層断面(西)
11　D区６号井戸全景(南西)
12　D区６号井戸上層断面(南)
13　D区１号土坑全景(西)
14　D区１号土坑上層断面(西)
15　D区２号土坑全景(南)
PL.47　1　D区２号土坑上層断面(南)
2　D区３号土坑全景(西)
3　D区４号土坑全景(西)
4　D区４号土坑上層断面(西)
5　D区５号土坑全景(西)
6　D区５号土坑上層断面(南)
7　D区６号土坑全景(西)
8　D区６号土坑上層断面(西)
9　D区７号土坑全景(西)
10　D区７号土坑上層断面(西)
11　D区８号土坑全景(南)
12　D区９号土坑全景(南西)
13　D区10号土坑全景(西)
14　D区10号土坑上層断面(西)
15　D区11号土坑全景(西)
PL.48　1　D区11号土坑上層断面(西)
2　D区12号、13号土坑全景(西)
3　D区12号、13号土坑上層断面(北)
4　D区14号、15号土坑上層断面(西)
5　D区16号土坑全景(西)
6　D区14号、15号土坑全景(西)
7　D区17号土坑全景(西)
8　D区16号、17号土坑上層断面(西)
9　D区18号土坑上層断面(西)
10　D区20号土坑全景(西)
11　D区21号土坑全景(西)
12　D区21号土坑上層断面(西)
13　D区22号土坑全景(北)
PL.49　1　D区22号土坑上層断面(西)
2　D区23号土坑全景(南)
3　D区24号土坑全景(西)
4　D区25号～27号土坑全景(北)
5　D区25号～27号土坑上層断面(南)
6　D区26号土坑上層断面(東)
7　D区28号土坑全景(南)
8　D区28号土坑上層断面(南)
9　D区29号土坑全景(北)
10　D区29号土坑上層断面(東)
11　D区30号土坑全景(東)
12　D区30号土坑上層断面(東)
13　D区31号土坑全景(東)
14　D区31号土坑上層断面(西)
15　D区32号土坑全景(北)
PL.50　1　D区33号土坑全景(東)
2　D区33号土坑上層断面(東)
3　D区34号土坑全景(北)
4　D区35号土坑全景(東)
5　D区35号土坑上層断面(東)
6　D区36号、37号土坑全景(東)
7　D区36号土坑上層断面(西)
8　D区37号土坑上層断面(南)
9　D区39号土坑全景(北)
10　D区40号土坑全景(東)
11　D区40号土坑上層断面(東)
12　D区41号土坑上層断面(南)
13　D区42号土坑上層断面(南)
14　D区43号土坑全景(西)
15　D区谷地全景(西)
PL.51　小神明勝沢境遺跡A区１号～４号竪穴住居。B区１号竪穴住居出土遺物
PL.52　B区２号竪穴住居。１号溝。１号遺物集中。１号埋甕。C区２号、３号溝。２号土坑出土遺物。
PL.53　C区１号竪穴住居。D区１号、２号竪穴住居出土遺物。
PL.54　D区１号溝、小神明勝沢境遺跡及びC区の遺構外の出土遺物
PL.55　C区遺構外の出土遺物
PL.56　小神明勝沢境遺跡及びD区の遺構外の出土遺物
PL.57　小神明富士塚遺跡A区２号、３号、５号竪穴住居の出土遺物
PL.58　A区５号～７号竪穴住居の出土遺物
PL.59　A区８号、９号、11号竪穴住居。１号、２号溝。２号井戸、24号土坑の出土遺物
PL.60　A区10号、31号、58号土坑。B区縄文時代包含層。D区１号土坑、２号竪穴状遺構、３号、５号、６号溝の出土遺物
PL.61　D区１号、２号竪穴住居出土遺物
PL.62　小神明富士塚遺跡の遺構外の出土遺物
PL.63　花粉化石
PL.64　植物珪酸体

第１章　調査に至る経緯と事業の経過

１．調査に至る経緯

（１）上武道路のあらまし

国道17号線は、首都東京と上信越地域の新潟市を結び、日本列島中央部を縦断する大動脈である。一般国道17号上武道路は、この幹線の混雑緩和と沿線地域における交通や物流の円滑化と促進を図る大規模バイパスとして計画され、埼玉県熊谷市から群馬県前橋市田口町に至る40.5㎞の地域高規格道路である（第１図）。

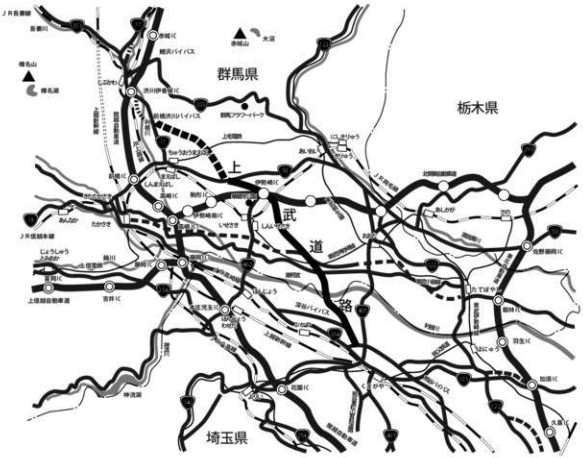
国道17号線は、江戸時代の五街道の一つである中山道と高崎から寺泊に至る三国街道に沿っている。路線は日本橋を起点にして埼玉県さいたま市をとおり、北関東地域に達する。国道17号は、埼玉県北の熊谷市から深谷市、本庄市、群馬県高崎市などを経由して前橋市、渋川市、沼田市へと利根川沿いを北上し、新潟県境に向かう。

国道17号線は、埼玉県熊谷市から群馬県境までの間が片側一車線の対面通行になっており、一級幹線道路としての交通量は飽和傾向のため恒常的に渋滞が頻発し、さらにこれを解消するために造られた熊谷バイパスや深谷バイパスでも慢性的な渋滞状況が認められた。

こうした観点から上武道路の建設は、熊谷市から前橋市の間を短距離にすることを念頭に計画された。その結果、この幹線は地域の主要都市である本庄市や高崎市を通らずに、深谷市から太田市や伊勢崎市郊外を経て、前橋市南東部から北東部に至り、前橋市中心部を大きく迂回するルートが決定されることとなった。

（２）上武道路の建設と埋蔵文化財の保護

昭和40年代に入り建設大臣の事業認可を受け、昭和45



第１図　一般国道 17 号（上武道路）の路線
（国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所2004作成「一般国道17号上武道路」より）

年度には国道50号線以南の22.4㎞が事業化され、昭和50年度から工事が着手された。これに先行して群馬県教育委員会は昭和45年度から沿線の遺跡分布調査及び試掘調査を開始した。

昭和48年に当時の建設省(現在の国土交通省)と群馬県教育委員会との間に協定書が取り交わされた。これにより昭和49年１月に伊勢崎市三和町と新田町下江田前の発掘調査がはじまり、昭和63年10月までに延べ534,000㎡、35遺跡が調査された。この発掘調査によって遺物収納箱約5,050箱の遺物が出土し、発掘調査の成果を取りまとめる整理事業は、昭和56年４月から平成７年３月まで継続され26冊の発掘調査報告書が刊行された。

その後上武道路は、平成４年２月に埼玉県境の新上武大橋が供用され、深谷バイパスから前橋市今井町の国道50号線までの間が開通した。

また、平成12年３月には東武伊勢崎線から国道354号バイパスまで2.2㎞の連続立体化事業「尾島、境立体」が完成、供用を開始した。さらに、北関東自動車道の連結道路として交通量増加が予測される伊勢崎インターチェンジの前後区間延長5.2㎞についても４車線で供用が開始された。これによって、伊勢崎市境上淵名から前橋市今井町の国道50号交点までの10.9㎞が４車線道路として完成、供用されている。

さらには、２車線で供用を開始した太田市粕川町～伊勢崎市境下渕名間(「尾島、境立体」部分を除く)は、延長4.9㎞が平成21年３月に４車線が拡幅され供用し、太田市阿久津町～太田市安養寺間の延長1.4㎞は平成22年３月に４車線が拡幅され供用した。

国道50号線以北の上武道路建設は、平成元年度に延長13.1㎞のうち前橋市上泉町の主要地方道前橋大間々桐生線までの4.9㎞区間が1期工事として事業化された。

それ以降、建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会文化財保護課との間で路線内における埋蔵文化財包蔵地の取り扱い協議が継続的に行われた。

(３)上武道路建設に伴う発掘調査の再開

平成11年４月１日には、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長並びに財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の三者間で「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その１)の実施に関する協定書」が締結され、同11年度当初から上武道路７工区において、実に10年ぶりに上武道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が再開された。

上武道路７工区の調査は、平成14年度までに、前橋市今井町の国道50号線の北側に接する今井道上Ⅱ遺跡から同江木町萱野Ⅱ遺跡までの12遺跡、総面積で209,000㎡の遺跡が発掘調査された。

こののち埋蔵文化財発掘調査の実施に関する三者協定は、平成16年11月10日に国土交通省関東地方整備局長、群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との三者間で締結され、「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その２)の実施に関する協定書」として協定変更された。

この協定書によって前橋市江木町の萱野Ⅱ遺跡の東半分から以東が上武道路７－２工区に伴い、萱野Ⅱ遺跡東半分を含め、堤沼上遺跡、亀泉坂上遺跡、亀泉西久保Ⅱ遺跡、荻窪南田遺跡、上泉唐ノ堀遺跡などの６遺跡、総面積で78,404㎡が、平成17年３月末までに調査された。

前橋市上泉町以東から田口町の上武道路８工区については、平成18年２月16日に「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その３)の実施に関する協定書」が締結され、同年６月20日に変更協定を再締結した。

この協定による調査区間は上泉町から田口町に至る約８㎞である。この間にある上泉唐ノ堀遺跡、上泉新田塚遺跡群、上泉武田遺跡、五代砂留遺跡群、芳賀東部工業団地遺跡群、鳥取松合下遺跡、駒城遺跡、鳥取塚田遺跡、堤遺跡、小神明勝沢境遺跡、小神明富士塚遺跡、東田之口遺跡、丑子遺跡、上細井五十嵐遺跡、天王遺跡、東紺屋谷戸遺跡、上町・西紺屋谷戸、王久保遺跡、上細井新田上遺跡、上細井中島遺跡、上細井蝉山遺跡、山王・柴遺跡群、引切塚遺跡、青柳宿上遺跡、日輪寺諏訪前遺跡、諏訪遺跡、川端山下、川端根岸遺跡、川端細ヶ沢遺跡、関根遺跡群は、計31遺跡で、総面積は約40万㎡が発掘調査対象地となっている(第２図)。

この地域は、赤城火山南麓の裾野を占める場所にあたり、大部分が火山麓扇状地と呼ばれるなだらかな斜面になっている。また、北東側に火山や山地を背景とし、南に開ける日照環境に恵まれた土地条件から当地は、群馬県内においても原始から古代の遺跡が濃密に分布する地

域となっている。

上武道路８工区は、協定書に則り平成18年度に前橋市上泉町の上泉唐ノ堀遺跡と上泉新田塚遺跡群から発掘調査を開始し、平成23年度の現在、なお発掘調査が進行中である。

また発掘調査事業と並行して、上武道路に伴う発掘調査が終了した遺跡は、発掘調査の成果をまとめる整理事業が開始され、発掘調査報告書の編集が順次行われている。

現在の上武道路は、前橋市富田町までの2.0km区間が平成17年３月に、上泉町の主要地方道前橋大間々桐生線までの2.9kmが平成20年６月に暫定２車線で供用されて、全線開通は平成29年度(2017年度)の予定である。

上武道路の終点は、前橋市田口町の現国道17号線との立体交差部分であり、その延長には新たに建設された一般国道17号前橋渋川バイパスが供用されている。前橋渋川バイパスは、平成22年３月20日に全体延長約5.7kmのうち、前橋市田口町から利根川を渡る新坂東橋を経て、渋川市半田までの延長約4.5kmの区間が暫定２車線で供用を開始している。

遺跡名(平成18年２月協定変更時点の名称)

52 上泉唐ノ堀(かみいずみからのほり)・53 上泉新田塚(かみいずみにったづか)遺跡群・54 上泉武田(かみいずみたけだ)・55 五代砂留(ごだいすなどめ)遺跡群・56 芳賀東部工業団地(はがとうぶこうぎょうだんち)・57 鳥取松合下(とっとりまつあいした)・58 胴城(どうじょう)・59 鳥取塚田(とっとりつかだ)・60 堤(つつみ)・61 小神明勝沢壇(こじんめいかつさわさかい)・62 小神明富士塚(こじんめいふじづか)遺跡群・63 東田之口(ひがしたのくち)・64 丑子(うしご)・65 上細井五十嵐(かみほそいいがらし)・66 天王(てんのう)・67 東組屋谷戸(ひがしこんやがいと)・68 上町(かみちょう)・69 西組屋谷戸(にしこんやがいと)・70 王久保(おうくぼ)・71 上細井新田上(かみほそいしんでんかみ)・72 上細井中島(かみほそいなかじま)・73 上細井榊山(かみほそいさかやま)・74 山王・柴(さんのう・しば)遺跡群・75 引切塚(ひきりづか)・76 青柳宿上(あおやぎやどうえ)・77 日輪寺諏訪前(にちりんじすわまえ)・78 諏訪(すわ)・79 川端根岸(かわばたねぎし)遺跡群・80 川端山下(かわばたやました)・81 川端細ケ沢(かわばたこまがさわ)・82 関根(せきね)遺跡群

第２図　上武道路８工区の遺跡(25000分の１地形図「前橋」(平成９年10月１日発行)、「渋川」(平成14年10月１日発行)図幅を使用)

２．発掘調査及び整理作業の方法

（１）埋蔵文化財包蔵地

文化財保護法第95条では「国及び地方公共団体は、周知の埋蔵文化財包蔵地について、資料の整備その他その周知の徹底を図るために必要な措置の実施に努めなければならない。」としている。ここでいう埋蔵文化財包蔵地とは、地下に埋蔵されている文化財を包蔵する範囲を呼び、遺跡はおおよそ埋蔵文化財包蔵地に相当する。

小神明勝沢境遺跡と小神明富士塚遺跡は、群馬県前橋市内に所在することから前橋市教育委員会により登録、管理され、前橋市教育委員会と群馬県教育委員会によって資料の整備やその周知が行われている（第３図）。

遺跡の範囲は、群馬文化財情報システムWEB版にて公開されている。また遺跡の概要を検索することができる。（http://www2.wagamachi-guide.com/gunma/index.html）

群馬文化財情報システムWEB版に掲載された遺跡情報は以下の通りである。

小神明勝沢境遺跡は、前橋市小神明町380番地他に所在し、市町村遺跡番号は778である。遺跡は古墳時代の集落とされ、現況は水田、畑地、道路である。

小神明富士塚遺跡は、前橋市小神明町富士塚下他に所在し、市町村遺跡番号は403である。遺跡は縄文時代、奈良時代、平安時代、中世の時代とされ、遺跡の種類は集落、古墳、その他とされている。また、現況は水田、宅地、畑地、道路である。

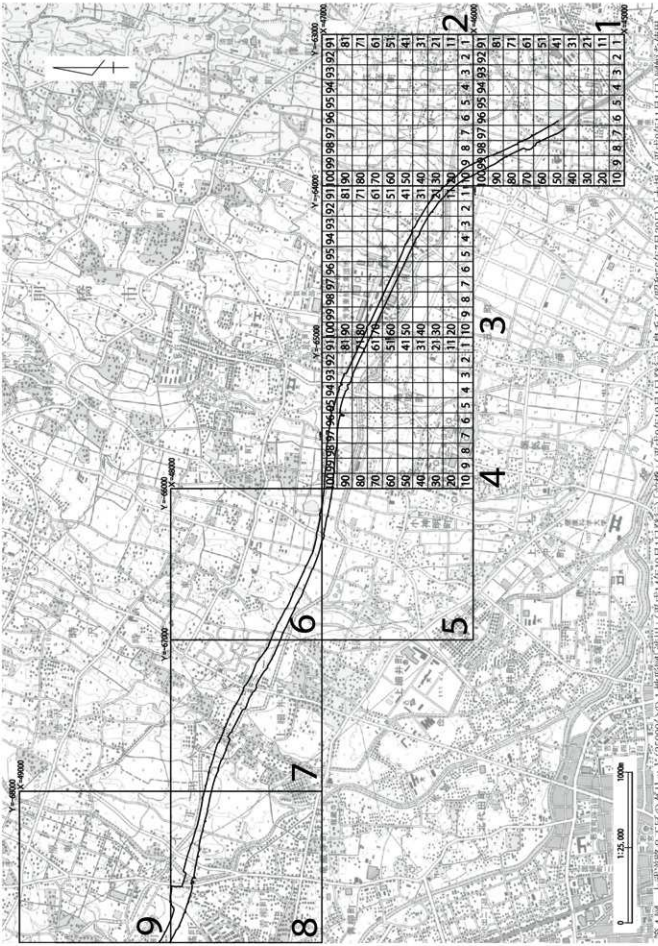
なお、小神明富士塚遺跡Ｃ区とＤ区は田之口遺跡の範囲に含まれる。田之口遺跡は、前橋市上細井町田ノ口１番１他に所在し、市町村遺跡番号は124である。遺跡は古墳時代、奈良時代、平安時代とされ、遺跡の種類は集落、その他とされている。また、現況は宅地、畑地、道路である。

（２）発掘地の位置

発掘調査地の遺構や遺物の位置は、グリッド（grid）と呼ばれる方眼で面的に把握し、または座標を使って点としての位置を表した。

グリッドの設定は、国家座標Ⅸ系（世界測地系）を利用した。上武道路８工区に１区画１km四方の大グリッドを網羅し、南から北へNo．１～13の番号を付した。小神明勝沢境遺跡と小神明富士塚遺跡はともにNo．５～６の大グリッドに位置する（第４図）。

第３図　小神明勝沢境遺跡と小神明富士塚遺跡の範囲（25000分の１地形図「渋川」（平成14年10月１日発行）図幅を使用）



第4図　工区設定（1:25,000のグリッド：2500m×1000m）

大グリッドは、さらに１区画100m四方の中グリッドに100分割した。分割された中グリッドは、大グリッドの南東隅を起点にして、東からから西に向かってNo．１～10の番号を付した。また起点に戻り、北に１桝づらしてNo.11～20の番号を付す方法を繰り返しNo．１～100に区分した。

中グリッドは、１区画５m四方の小グリッドに400分割した。小グリッドは、発掘調査の現場における最小の基本単位となる区画である。小グリッドは、中グリッドの南東隅を起点にして、東から西に向かってＡ～Ｔの記号を付し、同時に南から北に向かって１～20の番号を付して、Ａ１～Ｔ20に区分した。

なお、大グリッドの境界が発掘調査地を通らない多くの調査区では、大グリッドの番号を省略して「93H19」の様に標記する。また、大グリッドの境界が発掘調査地を通る調査区では、「5-95M20」の様に大グリッド名を先頭に付けて標記する。

発掘調査の調査区は、発掘作業の工程上作業の行いやすさや廃土などの作業工程を勘案して発掘現場で付けられた謂わば作業区の区分である。しかし、発掘調査用地は用排水路や崖、道路や盛土など現況や地形的な環境によって左右されるため、結果として集落遺跡や低地、水田や畠などの生産域が調査区と調和的に検出されることも多い。

小神明勝沢境遺跡は、東から道路や水路を境界にＡ区からＤ区に、小神明富士塚遺跡は東からＡ区からＤ区に区分された。（第５図）。

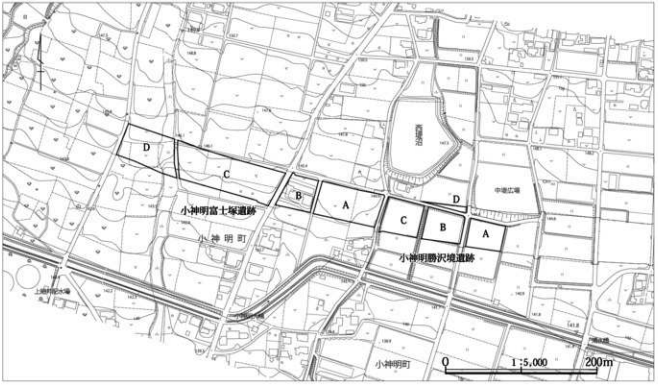
小神明勝沢境遺跡の調査区の国家座標Ⅸ系（世界測地系）のＸ軸とＹ軸は、以下の通りである。Ａ区はＸ＝46930～46975、Ｙ＝-66005～-66080、Ｂ区はＸ＝46945～46985、Ｙ＝-66060～-66120、Ｃ区はＸ＝46950～47005、Ｙ＝-66115～-66170、Ｄ区はＸ＝46985～47000、Ｙ＝-66055～-66105の範囲である。

小神明富士塚遺跡の調査区の国家座標Ⅸ系（世界測地系）のＸ軸とＹ軸は、以下の通りである。Ａ区はＸ＝46965～47025、Ｙ＝-66175～-66265、Ｂ区はＸ＝46985～47040、Ｙ＝-66245～-66310、Ｃ区はＸ＝46995～47075、Ｙ＝-66295～-66445、Ｄ区はＸ＝47030～47105、Ｙ＝-66440～-66520の範囲である。

（３）発掘調査の記録方法

発掘調査は、調査担当者の指導の下で重機により表土掘削を実施し、遺構検出面の検出作業は発掘作業員による人力での掘削により行われた。

遺構検出面で確認された遺構の分布や重複、埋土の観



第５図　小神明勝沢境遺跡と小神明富士塚遺跡の調査区（前橋市原形図（平成21年）を使用）

察などから調査工程を決定し、遺構には必要に応じて埋土などの地層を観察する帯を設定してから、人力による掘削をおこなった。

なお、重機による表土掘削は作業委託で行われ、遺構などの人力掘削は、請負による作業委託で実施した。

発掘された遺構は、セクション図、エレベーション図、遺構平面図を必要に応じて作成した。竪穴住居や掘立柱建物などの遺構は、原則として20分の１遺構平面図で記録し、土坑や溝などの遺構は40分の１遺構平面図を作成した。なお、現地での測量作業は遺構平面図と一部の断面図を測量会社に委託した。遺構の地質断面図や地形断面図は、発掘調査の担当者の指導のもと作業員が測量した。

遺構の発掘過程で観察された埋土の地層断面は、調査担当者が観察し地質断面図に層相記載や土壌の観察所見を記録した。

発掘調査においては、調査担当者が遺構や遺物の写真撮影を行い、測量された遺構平面図や地層断面図に観察された所見などを記録した。遺構や遺物、埋土などの地層断面は、一眼レフのデジタルカメラと中判カメラを使用してデジタルデータ及び銀塩写真で写真撮影を行い記録した。

（４）整理作業の方法

遺構平面図や地層断面図は調査区や遺構ごとに整理し、書類用の紙袋に入れて収納した。発掘現場で測量した遺構平面図などの電子データはCD-ROMなどのメディアに保管した。

発掘現場で撮影された遺構などの写真データは、DVD-ROMなどのメディアに保管した。写真データは、そのファイル名を調査区、遺構略号、遺構番号、撮影方向、撮影内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。

遺物の整理について述べる。土器や石器は遺構や包含層などを対象に破片の接合を行った。接合の作業は遺構平面図に記録された遺物の出土位置、出土状態の写真、遺構の地質断面図を参考にしながら進めた。

発掘調査報告書に掲載する土器は、接合の作業を終え復元されたものを中心に、各遺構の埋没当初に堆積したものや、遺構の時代を決定する根拠となる遺物を抽出して選択した。なお、報告書に掲載しない遺物は、遺構や出土位置、種別、器種などを観察した後に遺物収納箱に整理して収納した。

発掘調査報告書に掲載する土器や石器は、デジタルカメラを使用して写真撮影を行った後に遺物実測図を作成した。土器や石器の遺物実測図は等倍で作成し、完形の土器は三次元計測システムを使用して実測図を作成した。

作成した遺物実測図はトレースしたものを電子化した。土器の拓本は作成した拓本の原画をスキャナーで電子化した。

土器や石器の観察記録は、表にまとめて観察表を作成した。土器の口径、底径、高さは実測図から読み取り、土器の胎土の観察は含まれる岩片などを中心に記載した。また土器の特徴は文様や整形技法の特徴を記載した。

石器の石材は、ルーペを使用した肉眼観察により行い、風化面や割れた断面の観察による所見から分類した。石材の鑑定は飯島静夫氏が行い、整理事業の担当者がこれを確認した。

３．発掘調査と整理作業の経過

（１）発掘調査の経過

小神明勝沢境遺跡並びに小神明富士塚遺跡は、一般国道17号上武道路の建設に伴う８工区における発掘調査である。両遺跡とも平成20年度に発掘調査を実施し、小神明富士塚遺跡の一部は平成21年度に発掘調査を行った。

平成20年度の発掘調査は、９月から上武道路に伴う発掘調査の堀城遺跡を調査した班が移動し、小神明富士塚遺跡の発掘調査にあたった。９月上旬からＡ区の準備にかかり、発掘調査を開始した。９月下旬にはＣ区の発掘調査の準備を開始した。発掘調査は歳をまたいで平成21年３月にいったん終了し、休止期間をおいて平成22年２月に調査を再開したが、発掘調査がすべて終了したのは平成22年３月中旬であった。

小神明勝沢境遺跡の発掘調査は平成20年10月から開始され、Ｃ区から準備を進めＡ区及びＢ区へ順次調査が進められた。発掘調査は年末の12月に調査を終了した。

平成20年度の小神明富士塚遺跡の調査は以下の通りである。

９月11日(木)調査担当者が現場に着任した。除草作業を実施する。

９月26日(金)Ａ区遺構の確認作業及び遺構の調査を開始する。

９月29日(月)Ｃ区調査を開始する。

10月17日(金)Ａ区１号、２号竪穴住居や２号溝を調査する。

10月24日(金)Ａ区４～６号竪穴住居調査。Ｃ区１～５号溝の調査を行う。

11月13日(木)Ａ区３～９号竪穴住居。２号土坑の調査を開始する。

11月21日(金)Ａ区２号掘立柱建物。３～11号竪穴住居。７、８、24号土坑の調査を開始する。

12月12日(木)Ａ区12号竪穴住居、溝、井戸などの調査を開始する。Ｃ区の調査が終了する。

12月22日(月)Ａ区遺構の全景写真を撮影する。

平成21年

１月７日(水)Ｄ区の調査を開始する。

１月13日(火)Ａ区の調査が終了する。Ｄ区の遺構確認を開始する。

２月２日(月)Ｄ区１号、２号竪穴住居や掘立柱建物、２号、３号溝の調査を開始する。

２月９日(月)Ｄ区遺構の空中写真撮影を行う。

２月17日(火)Ｄ区旧石器の確認調査を行う。

３月３日(火)調査を終了する。

平成22年度の小神明富士塚遺跡の調査は以下の通りである。

２月１日(月)Ｂ区の調査を開始する。

２月17日(水)Ｂ区遺構の全景写真を撮影する。

２月23日(火)縄文時代の遺物包含層を調べるために試掘溝の掘削を開始する。

３月15日(月)調査が終了する。

平成20年度の小神明勝沢境遺跡の調査は以下の通りである。

10月１日(水)調査に着手する。

10月14日(火)Ｃ区の調査に着手する。

10月17日(金)Ｃ区の谷地を詳しく調査する。

10月27日(月)Ｃ区１号竪穴住居の調査に着手する。

10月29日(水)Ａ区、Ｂ区の調査に着手する。

11月６日(木)Ｃ区１号竪穴住居や４号、５号土坑、谷地、Ａ区浅間Ｂテフラ下位の遺構面を精査する。

11月12日(水)Ｃ区調査が終了した。Ａ区調査を継続して、溝の調査を進める。

11月18日(水)Ｄ区調査に着手する。

11月19日(木)Ｂ区調査に着手する。

11月25日(火)Ａ区１～４号竪穴住居の調査、Ｂ区遺構面の精査、Ｄ区１号竪穴住居調査を行う。

12月４日(木)Ａ区調査が終了する。Ｂ区２号竪穴住居、１～３号土坑の調査を行う。Ｄ区２号竪穴住居の調査に着手する。

12月10日(水)Ｂ区１号竪穴住居、１・２号焼土坑を調査する。Ｄ区２号竪穴住居の調査を終了し、発掘調査を終了した。

(２)整理事業の経過

小神明勝沢境遺跡並びに小神明富士塚遺跡は、縄文時代から江戸時代の遺構群が見られた複合遺跡である。両遺跡の整理作業及び発掘調査報告書編集作業は、平成22年10月１日から平成23年７月31日に実施され、平成23年度に報告書を刊行した。

平成22年度の整理事業は、遺物整理や土器の接合作業、復元作業を行い、遺構図面の編集、トレース作業、遺物写真の撮影と編集を行った。平成23年度は報告書掲載遺物の実測図作成、報告書レイアウト作成と編集、遺構写真や遺物写真の補正、本文執筆を行い報告書の組版作業を開始し報告書を刊行した。

(３)整理事業において変更した遺構番号の対照

発掘調査において現場で付与された遺構の名称及び遺構番号は整理事業の過程で必要に応じて削除や変更を行った。発掘調査で記録された資料は、整理事業で遺構の内容や解析を行い吟味される。その結果、発掘現場で認識された遺構の認定に誤りが認められた場合は遺構名称の変更や欠番化が行われる。同様にピット群から建物や建物の主要な柱穴が認識された場合、建物の柱穴として系統的な遺構番号を付けたり、付け替えによってピット番号の欠番が生じる場合などである。

以下に遺構の名称や番号の付け替えに対する対照表をあげる。報告書刊行後に掲載遺物の資料を調べる場合、発掘調査資料の原図には付け替え前の番号で検索することができる(第１表)。

第１表　遺構名、遺構番号の対照

小神明第2保護区

区	遺構名	変更箇所	
		旧正面	旧正面
A	1号竪穴住居	第建C-1	第建C-2
		1-E	1PC-C
		1-F	1PB-E
		1-G	1PA-A
		1-H	1PB-F
	2号竪穴住居	第建C-1	第建C-1
		2-E	2PC-C
		2-F	2PB-E
		2-G	2PA-A
		2-H	2PB-F
	3号竪穴住居	P1	P2
		P2	P1
		P3	P4
		P4	P3
		3-C	3PA-A
		3-D	3PB-E
		3-E	3PB-D
		3-F	3PC-C
		3-G	3PB-E
		3-X	3PB-E
		3-Y	3PE-E
		P5	P5
B	1号掘建土器	1号掘建土器	1号建
	1号焼土坑	1号焼土坑	1号焼土遺構
	2号焼土坑	2号焼土坑	2号焼土遺構
C	1号建	4-E	4PC-A
	2号土坑	8-E	8PA-A
	3号土坑	8-E	8PA-A
	4号土坑	8-E	8PA-A
	5号土坑	8-E	8PA-A
D	2号竪穴住居	1号土坑	P1

小神明第１保護区

区	遺構名	変更箇所	
		旧正面	旧正面
A	3号竪穴住居	3-E	3PB-E
		3-F	3PA-A
	5号竪穴住居	5-E	5PB-E
		5-F	5PA-A
	7号竪穴住居	7-E	7PA-A
	8号竪穴住居	8-E	8PA-A
		8-F	8PA-A
	9号竪穴住居	第建-C	第建PB-E
		第建-E	第建PA-A
		第建-F	第建PA-A
	10号竪穴住居	第建-C	第建PC-C
		第建-E	第建PA-A
		第建-F	第建PA-A
	12号竪穴住居	8-E	8PA-A
	1号掘立柱建物	P1	C
		P2	J
		P3	E
		P4	D
		P5	A
		P6	B
		P7	C-1
		P8	J-1
		P9	J-2
		1-E	EPB-E
		1-D	EPC-E
		1-C	EPA-A
	2号掘立柱建物	2-E	EPB-E
		2-D	EPA-A
	3号掘立柱建物	3-E	EPB-E
		3-D	EPA-A
	4号掘立柱建物	P6	P9
		P9	P10
		P7	P5
		P8	P6
		P9	P7
		P10	P8
		4-E	EPB-E
		4-D	EPA-A
A	5号掘立柱建物	P1	305pit
		P2	4Spit
		P3	3Spit
		P4	2Spit
		P5	1Spit
		P6	29Spit
		P7	28Spit
		5-E	EPC-C
		5-C	EPB-E
		5-D	EPB-E
	6号掘立柱建物	P1	35Spit
		P2	33Spit
		P3	8号・9号pit
		P4	7Spit
		P5	16Spit
		6-E	EPB-E
		6-D	EPA-A
	7号掘立柱建物	7-E	EPB-E
		7-D	EPA-A
		7-C	EPB-E
	1号溝	1-C	EPB-E
		1-D	EPB-E
		1-E	EPB-E
		1-F	EPC-C
	2号溝	2-E	EPA-A
		2-F	EPA-A
	3号溝	3-E	EPA-A
		3-C	EPA-A
	5号溝	5-E	EPB-E
		5-F	EPA-A
	7号溝	7-E	EPA-A
		7-F	EPA-A
	2号井戸	8-E	EPA-A
	3号井戸	8-E	EPA-A
	4号井戸	8-E	EPA-A
	5号井戸	8-E	EPA-A
	6号井戸	8-E	EPA-A
	7号井戸	8-E	EPA-A
	8号井戸	8-E	EPA-A
	9号井戸	8-E	EPA-A
	10号井戸	8-E	EPA-A
	11号井戸	8-E	EPA-A

小神明第１保護区

区	遺構名	変更箇所	
		旧正面	旧正面
A	12号井戸	8-E	EPA-A
	13号井戸	8-E	EPA-A
	14号井戸	8-E	EPA-A
	15号井戸	8-E	EPA-A
	16号井戸	8-E	EPA-A
	17号井戸	8-E	EPA-A
	18号井戸	8-E	EPA-A
	19号井戸	8-E	EPA-A
	20号井戸	8-E	EPA-A
	21号井戸	8-E	EPA-A
	22号井戸	8-E	EPA-A
	23号井戸	8-E	EPA-A
	24号井戸	8-E	EPA-A
	25号井戸	8-E	EPA-A
	26号井戸	8-E	EPA-A
	27号井戸	8-E	EPA-A
	28号井戸	8-E	EPA-A
	29号井戸	8-E	EPA-A
	30号井戸	8-E	EPA-A
	31号井戸	8-E	EPA-A
	32号井戸	8-E	EPA-A
	33号井戸	8-E	EPA-A
	34号井戸	8-E	EPA-A
	35号井戸	8-E	EPA-A
	36号井戸	8-E	EPA-A
	37号井戸	8-E	EPA-A
	38号井戸	8-E	EPA-A
	39号井戸	8-E	EPA-A
	40号井戸	8-E	EPA-A
	41号井戸	8-E	EPA-A
	42号井戸	8-E	EPA-A
	43号井戸	8-E	EPA-A
	44号井戸	8-E	EPA-A
	45号井戸	8-E	EPA-A
	46号井戸	8-E	EPA-A
	47号井戸	8-E	EPA-A
	48号井戸	8-E	EPA-A
	49号井戸	8-E	EPA-A
	50号井戸	8-E	EPA-A
	51号井戸	8-E	EPA-A
	52号井戸	8-E	EPA-A
	53号井戸	8-E	EPA-A
	54号井戸	8-E	EPA-A
	55号井戸	8-E	EPA-A
	56号井戸	8-E	EPA-A
	57号井戸	8-E	EPA-A
	58号井戸	8-E	EPA-A
	59号井戸	8-E	EPA-A
	60号井戸	8-E	EPA-A
	61号井戸	8-E	EPA-A
	62号井戸	8-E	EPA-A
	63号井戸	8-E	EPA-A
	64号井戸	8-E	EPA-A
	65号井戸	8-E	EPA-A
	66号井戸	8-E	EPA-A
	67号井戸	8-E	EPA-A
	68号井戸	8-E	EPA-A
	69号井戸	8-E	EPA-A
	70号井戸	8-E	EPA-A
	71号井戸	8-E	EPA-A
	72号井戸	8-E	EPA-A
	73号井戸	8-E	EPA-A
	74号井戸	8-E	EPA-A
	75号井戸	8-E	EPA-A
	76号井戸	8-E	EPA-A
	77号井戸	8-E	EPA-A
	78号井戸	8-E	EPA-A
	79号井戸	8-E	EPA-A
	80号井戸	8-E	EPA-A
	81号井戸	8-E	EPA-A
	82号井戸	8-E	EPA-A
	83号井戸	8-E	EPA-A
	84号井戸	8-E	EPA-A
	85号井戸	8-E	EPA-A
	86号井戸	8-E	EPA-A
	87号井戸	8-E	EPA-A
	88号井戸	8-E	EPA-A
	89号井戸	8-E	EPA-A
	90号井戸	8-E	EPA-A
	91号井戸	8-E	EPA-A
	92号井戸	8-E	EPA-A
	93号井戸	8-E	EPA-A
	94号井戸	8-E	EPA-A
	95号井戸	8-E	EPA-A
	96号井戸	8-E	EPA-A
	97号井戸	8-E	EPA-A
	98号井戸	8-E	EPA-A
	99号井戸	8-E	EPA-A
	100号井戸	8-E	EPA-A
	101号井戸	8-E	EPA-A
	102号井戸	8-E	EPA-A
	103号井戸	8-E	EPA-A
	104号井戸	8-E	EPA-A
	105号井戸	8-E	EPA-A
	106号井戸	8-E	EPA-A
	107号井戸	8-E	EPA-A
	108号井戸	8-E	EPA-A
	109号井戸	8-E	EPA-A
	110号井戸	8-E	EPA-A
	111号井戸	8-E	EPA-A
	112号井戸	8-E	EPA-A
	113号井戸	8-E	EPA-A
	114号井戸	8-E	EPA-A
	115号井戸	8-E	EPA-A
	116号井戸	8-E	EPA-A
	117号井戸	8-E	EPA-A
	118号井戸	8-E	EPA-A
	119号井戸	8-E	EPA-A
	120号井戸	8-E	EPA-A
	121号井戸	8-E	EPA-A
	122号井戸	8-E	EPA-A
	123号井戸	8-E	EPA-A
	124号井戸	8-E	EPA-A
	125号井戸	8-E	EPA-A
	126号井戸	8-E	EPA-A
	127号井戸	8-E	EPA-A
	128号井戸	8-E	EPA-A
	129号井戸	8-E	EPA-A
	130号井戸	8-E	EPA-A
	131号井戸	8-E	EPA-A
	132号井戸	8-E	EPA-A
	133号井戸	8-E	EPA-A
	134号井戸	8-E	EPA-A
	135号井戸	8-E	EPA-A
	136号井戸	8-E	EPA-A
	137号井戸	8-E	EPA-A
	138号井戸	8-E	EPA-A
	139号井戸	8-E	EPA-A
	140号井戸	8-E	EPA-A
	141号井戸	C-C	EPB-E
	142号井戸	C-C	EPA-A

小神明第１保護区

区	遺構名	変更箇所	
		旧正面	旧正面
D	2号掘立柱建物	P1	P6
		P2	P1
		P3	P2
		P4	P3
		P5	P4
		P6	P5
		2-A	EPC-C
		2-E	EPB-E
		2-C	EPB-E
	3号掘立柱建物	P1	P6
		P2	P1
		P3	P2
		P4	P3
		P5	P4
		P6	P5
		P7	P6
		3-A	EPC-C
		3-E	EPB-E
	4号掘立柱建物	P1	P6
		P2	P1
		P3	P2
		P4	P3
		P5	P4
		P6	P5
		P7	P6
		4-A	EPC-C
		4-E	EPB-E
		4-C	EPB-E
	2号井戸	8-E	EPA-A
	3号井戸	8-E	EPA-A
	4号井戸	8-E	EPA-A
	5号井戸	8-E	EPA-A
	6号井戸	8-E	EPA-A
	7号井戸	8-E	EPA-A
	8号井戸	8-E	EPA-A
	9号井戸	8-E	EPA-A
	10号井戸	8-E	EPA-A
	11号井戸	8-E	EPA-A
	12号井戸	8-E	EPA-A
	13号井戸	8-E	EPA-A
	14号井戸	8-E	EPA-A
	15号井戸	8-E	EPA-A
	16号井戸	8-E	EPA-A
	17号井戸	8-E	EPA-A
	18号井戸	8-E	EPA-A
	19号井戸	8-E	EPA-A
	20号井戸	8-E	EPA-A
	21号井戸	8-E	EPA-A
	22号井戸	8-E	EPA-A
	23号井戸	8-E	EPA-A
	24号井戸	8-E	EPA-A
	25号井戸	8-E	EPA-A
	26号井戸	8-E	EPA-A
	27号井戸	8-E	EPA-A
	28号井戸	8-E	EPA-A
	29号井戸	8-E	EPA-A
	30号井戸	8-E	EPA-A
	31号井戸	8-E	EPA-A
	32号井戸	C-C	EPA-A
	33号井戸	C-C	EPA-A
	34号井戸	C-C	EPA-A
	35号井戸	8-E	EPA-A
	36号井戸	8-E	EPA-A
	37号井戸	8-E	EPA-A
	38号井戸	8-E	EPA-A
	39号井戸	8-E	EPA-A
	40号井戸	8-E	EPA-A
	41号井戸	C-C	EPA-A
	42号井戸	C-C	EPA-A

第２章　遺跡の地理的、歴史的環境

１．遺跡の自然環境

小神明勝沢境遺跡と小神明富士塚遺跡は、前橋市小神明町から上細井町にかけての赤城火山の南麓(以下、赤城南麓と略す)に位置する複合遺跡である。

赤城火山は那須火山帯に属する第四紀成層火山であり、山頂には外輪山の黒檜山(1,827m)や溶岩ドームの地蔵岳が見られる。山頂のカルデラにはカルデラ湖の大沼が、また、爆裂火口の小沼が見られる。山腹には溶岩ドームの鈴ヶ岳や鍋割山などが存在し、山麓には火砕流堆積物が台地を形成している。また北西麓から南東麓にかけて土石流や泥流堆積物からなる火山麓扇状地が発達し広大な裾野を形成している。

赤城火山の形成史は、守屋(1968)により調べられた。鈴木(1991)や竹本(2008)は赤城火山の噴火史を明らかにした。

第１期古期成層火山は、赤城火山が噴火を開始し、標高が2500mに達する富士山型の成層火山を形成した火山活動期を呼ぶ。古期成層火山の活動は約50万年前に遡るらしい。古期成層火山は400千年前に真岡テフラを噴出したと考えられたが、最近の研究で否定された。古期成層火山の末期には山体崩壊がおこり山頂に馬蹄形カルデラが形成された。この火山活動で南西麓や南～南東麓には大規模な岩なだれ堆積物が堆積した。この山体崩壊は、岩なだれ堆積物を被覆するテフラから200千年前と推定される。

第２期新期成層火山は、馬蹄形カルデラの内部を埋めるように噴出した溶岩からなる、荒山などを形成した成層火山の形成期である。成層火山が形成された後に第３期がはじまる間は火山活動休止が見られる。この時期は、最終間氷期の前にあたる寒冷期で、赤城火山の山腹には浸食谷が、その裾の西麓や南西麓に火山麓扇状地が発達した。

第３期爆発的噴火とカルデラ形成は、馬蹄形カルデラと新期成層火山の間を埋める形で鈴ヶ岳や鍋割山などの溶岩ドームが形成された火山活動期である。鈴ヶ岳西麓の沼尾川沿いには棚下火砕流堆積物などが、鍋割山の南麓には大胡火砕流が堆積し台地を形成した。第３期の末期には山頂から赤城湯の口テフラが噴出し、ガラン石質火砕流堆積物が南東麓に堆積した。この活動で山頂にはカルデラが形成された。第３期の棚下火砕流堆積物は120千年前、大胡火砕流堆積物は75千年前、赤城湯ノ口テフラは50千年前に噴出した。

第４期溶岩ドームの形成期は、45千年前にはカルデラ内から赤城鹿沼テフラが噴出し、その後、カルデラ内に地蔵岳の溶岩ドームや小沼の爆裂火口などが形成された。

赤城火山は広大な裾野を有する火山で、北東部の足尾山地と接する部分を除いて東西約20km、南北30kmの火山麓扇状地が広がる。火山麓扇状地の大部分は成層した凝灰質角礫岩層から構成される扇状地堆積物で、その起源は土石流や泥流堆積物である。

小神明勝沢境遺跡と小神明富士塚遺跡は赤城火山南西部に広がる白川扇状地(守屋1968、新井1971)の扇端に位置する(第６図)。白川扇状地は標高400m付近を扇頂とし、扇央は標高が200 ～ 250m付近で東西に幅が約４km程度、扇端は標高が130 ～ 120m付近で北西から南東に６km程度の幅であり広瀬川低地と浸食崖で接している。

白川扇状地は、赤城白川が形成した火山麓扇状地で、地形の開析が他の火山麓扇状地に比べて少ないので、赤城火山の形成史の中では新しい時期に形成された地形面である。

扇状地の大部分は古期扇状地と呼ばれ、扇状地の前面にあって広瀬川低地と接する浸食崖から張り出す新期の扇状地と複合した合成扇状地である(早田1990)。古期扇状地は土石流堆積物からなる扇状地堆積物が認められ、榛名八崎テフラや(早田1990)、姶良Tnテフラの降下層準以上の上部ローム層に被覆されている。

白川扇状地の上面にはいくつかの小河川が認められ、扇状地面に浅い谷を刻んでいる。谷の堆積物は上部ローム層や古期の扇状地堆積物を浸食して形成された谷を埋めるように堆積しており、完新世の新期扇状地を構成する堆積物からなる。

新期扇状地や古期の扇状地内の谷を埋めた堆積物は、

浅間総社テフラや浅間宮前テフラの上位及び縄文時代中期前半に形成された。これらは後氷期のモンスーンの活動によりもたらされた堆積物であると考えられる。

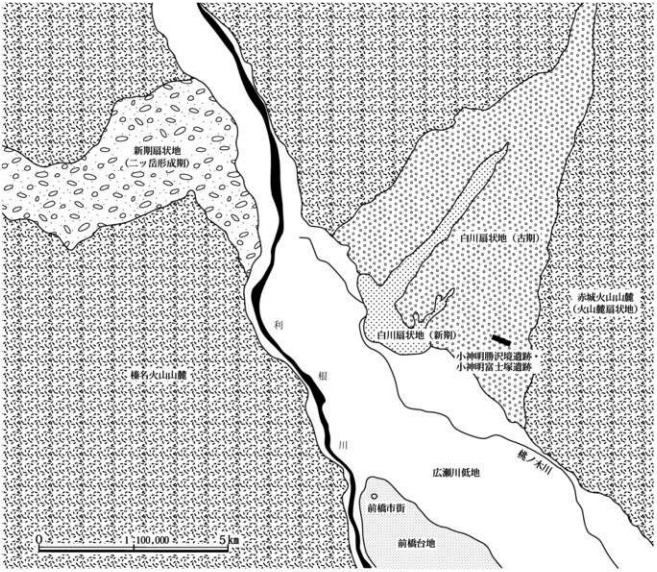
２．遺跡の歴史的環境

群馬県の中央部に位置する赤城南麓は利根川流域に位置し、約３万年前の後期旧石器時代以降、各時代にわたって多数の遺跡が累積して残された場所である。利根川流域の赤城山麓には後期旧石器時代から縄文時代の遺跡が多く、中部日本の内陸地域を代表する遺跡の密集地にあたる（第７図・第２表）。

利根川流域における先史時代の人類は、狩猟採集社会の元で旧石器時代の遊動生活から縄文時代の定住生活へと変化を遂げたと考えられている。それは数千年間の漸移的な変化である可能性があり、その生産や居住の範囲は、低地よりも山麓の台地や森林が中心だったと考えられている。

赤城山麓の遺跡群は、火山が形成した緩斜面に起因する温暖な土地、豊富な水資源、そして様々な動植物を育む森林資源さらに利根川水系が生み出す生物資源を揺りかごにして育まれたものと考えられる。

その歴史的な変遷はそれぞれの時代ごとに様々な変化として明らかにされてきた。遊動生活を行った旧石器人は、石器制作の文化史を考古学的に解明したことで、集団の複雑な移動が明らかになった。また遊動生活から季節的な定住を経て、長期間の定住へ移行した縄文時代の社会は、土器を中心に詳細な時間軸を復元したことで明らかになった。それは集落の立地や竪穴住居の数量変化が物語る、各時期ごとに栄枯盛衰を繰り返す社会変化があった可能性が高い。



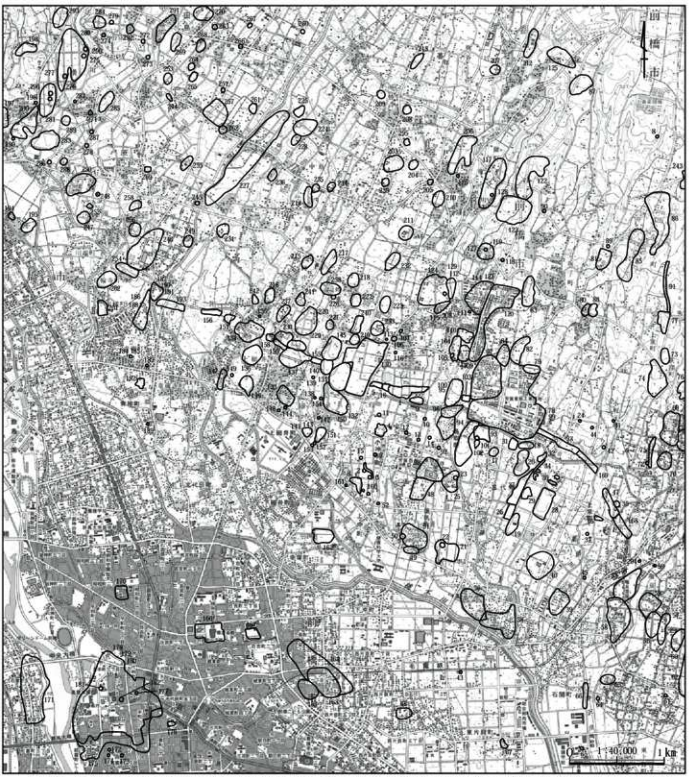
第６図　赤城南西麓縁辺の地形

最近ではこのような歴史的な変遷は、赤城山麓や日本列島だけでなく、汎世界的な変化であることが明らかになりつつある。また、その原動力は地球環境に大きな作用をもたらす大気や海流の循環によって生じる大規模な気候変動であるとされている。

（１）周辺の旧石器時代の遺跡

赤城南麓は、みどり市にある岩宿遺跡の発見を嚆矢として、日本の旧石器時代研究にとって学史的な調査地である。上武道路建設に伴う昭和49年から昭和63年に至る発掘調査では、伊勢崎市の書上本山遺跡など８箇所の旧石器時代の遺跡が発見された。

赤城南麓は、後期更新世に堆積した関東ローム層の中部ローム層や上部ローム層が分布し、中部ローム層上部には暗色帯と呼ばれる埋没土壌帯が認められる。暗色帯



第７図　遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地（1/25000 地形図「渋川」（平成 14 年 10 月 1 日発行）、「前橋」（平成 9 年 10 月 1 日発行）、「鼻毛石」（昭和 56 年 3 月 30 日発行）、「大胡」（平成 8 年 11 月 1 日発行）を使用した。なお、第 8 図から第 12 図は第 7 図を縮小した図であり、出典は第 7 図に同様である。）

第2表　遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地

番号	市町村遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	近代	不明
1	34	塚	●		●	●					
2	35	時宗遺跡									●
3	36	塚跡									●
4	37	小神明宮跡									●
5	402	神明宮上塚	●			●	●	●			●
6	531	谷塚									●
7	634	小神明天明神					●	●			
8	635	月山					●	●			
9	639	小神明宮山				●	●	●			
10	640	小神明久料	●			●		●			
11	641	小神明宮山	●			●		●			
12	642	小神明鼠穴	●			●		●			
13	643	小神明宮本	●								
14	644	小神明西山	●								
15	645	小神明谷河	●								
16	778	小神明勝沢堤									●
17	27	大神	●								
18	28	中原	●								
19	29	本城	●								
20	30	江戸屋敷	●								
21	31	大江	●								
22	32	大江塚	●								
23	33	芳賀33号墳	●								
24	604	古代窯址									●
25	646	高橋古墳群									●
26	728	古代江戸屋敷		●	●	●	●	●			
27	729	古代伊勢宮		●	●	●	●	●			
28	730	古代本城		●	●	●	●	●			
29	731	古代竹花		●	●	●	●	●			
30	732	古代愛鷹		●	●	●	●	●			
31	733	古代中原		●	●	●	●	●			
32	734	古代山田道				●	●	●			
33	772	古代砂崎	●	●		●	●	●			
34	784	古代伊勢宮(2)	●	●	●	●					
35	87	鉄山塚古墳	●								
36	88	西久保	●								
37	89	鶴頭塚	●								
38	90	宮城	●								
39	91	大荒二前	●								
40	92	杉山									
41	315	茶塚									
42	320	神明古墳									
43	426	茶木山									
44	647	松家									
45	648	稲荷33号墳									
46	717	上泉城跡									
47	775	大新田塚									
48	23	塚原									
49	24	鶴丸前							●	●	●
50	25	ホーロ平塚古墳									
51	26	下加輪									
52	398	蔵屋									
53	81	亀宮御屋敷内A									
54	82	亀宮御屋敷内B									
55	83	五ノ原古墳群									
56	84	寺沢山									
57	85	桂宮東小内									
58	86	本郷遺跡	●								
59	350	都田塚古墳									
60	530	宮内遺跡				●	●				
61	649	稲荷73号									
62	712	桂宮下遺跡				●	●				
63	74	三ツ谷古墳									
64	563	堀之下女原									
65	571	石間西窪遺				●	●				
66	765	石間西山窪				●	●				
67	73	桂宮大塚古墳									
68	690	円山									
69	93	西武学園									
70	95	高見									
71	96	東丁									
72	97	桂宮57号									
73	100	鶴塚									
74	101	金塚塚									
75	691	惣の廻									
76	723	長宮倉庫									
77	754	長宮堂ノ原									
78	53	鍛冶屋ノ									
79	54	下殿									
80	55	川口山の谷									
81	56	小女子鷹美城									
82	57	鬼持戸の谷									
83	58	小坂子城									
84	59	四門戸									
85	60	谷町田									
86	61	下人平									
87	62	白鳥									
88	389	川口田									
89	597	小坂子南山									
90	636	小坂子新林									
91	735	小坂子ヶ一木家									
92	38	前原古墳									
93	39	岳原東屋									
94	40	岳原の窪									
95	41	駒城									
96	42	北原									
97	43	荒前									
98	352	芳賀西部団地									
99	357	芳賀東部団地									
100	541	芳賀北原									
101	605	岳原東原									
102	606	岳原高城支									
103	776	岳原低台下									
104	44	東前輪									
105	45	芳賀65号墳									
106	46	オフ塚古墳									
107	47	芳賀67号墳									
108	48	北前輪古墳群									
109	49	岳原西城									
110	50	鶴沢城									
111	51	新矢原									
112	52	高橋									
113	337	オフ塚西古墳									
114	391	芳賀北部団地									
115	493	芳賀北前輪									
116	638	西前輪									
117	63	城跡									
118	64	芳賀59号墳									
119	65	東宮山									
120	66	五反田									
121	67	桂之川									
122	68	大林下									
123	69	大林ヤ・十二原									
124	70	赤之巻									
125	71	八幡山・雀小路									
126	72	鶴見塚									
127	394	東宮山古墳									
128	556	鶴城									
129	637	赤之巻									
130	124	田之口									
131	125	東田之口									
132	126	南田之口									
133	127	塩原駅									
134	128	新田上									
135	129	新田上古墳									
136	130	上間久保									
137	131	大上									
138	132	井ノ塚									
139	133	南橋8号墳									
140	134	井ノ									
141	135	灰塚									
142	136	南橋4号墳									
143	137	南橋6号									
144	138	南橋9号墳									
145	139	安塚									
146	140	南橋11号墳									
147	141	八幡山の谷									
148	142	薬師									
149	143	鳥塚古墳									
150	425	南田之口									
151	464	西風									
152	631	南橋2号墳									
153	632	南橋3号墳									
154	633	南橋10号墳									
155	777	上横田五ノ堀									
156	786	上横田横山									
157	787	上横田中島									
158	794	上久保									
159	796	上									
160	80	上神神田宮									
161	317	上神上ノ山古墳									
162	761	上神石原田									
163	689	石城									
164	752	石城北内									
165	770	石城下南輪									
166	687	清玄寺の滝居									
167	688	一位の滝居									
168	774	上宮原ノ堀									
169	773	上宮武田									
170	686	蛇ノ城									
171	737	石倉城									
172	324	源内氏舊古墳									
173	396	鹿沼福祉病院									
174	580	源内稲荷神社神社跡地									
175	702	姫橋下之城									
176	627	前橋市分寺跡									
177	579	前橋國府代市									
178	308	前橋城									
179	546	前橋城									
180	557	前橋城本丸御殿門									
181	570	前橋城二ノ丸									
182	500	前橋城東橋門									
183	119	神明入									
184	120	神明谷									
185	121	神明古墳									
186	122	切									
187	123	石切窪古墳									
188	325	青柳屋上									
189	414	青柳屋前									
190	434	引馬塚									
191	551	引馬塚									
192	622	青柳屋前									
193	795	山王・柴									
194	145	間稲の窪居									
195	146	間稲窪居									
196	148	天神宮									
197	150	千手堂									
198	151	入田									
199	159	前橋55号墳									
200	160	八幡									
201	757	赤城東原									
202	144	源氏									
203	90039	横塚									
204	90060	小泉西山									
205	90061	小泉遺塚									
206	90062	花畑									
207	90063	小泉受地									
208	90064	小泉中堀									
209	90065	北沖田ノ									
210	90100	谷間									
211	90101	福山									
212	90117	小泉北受地									
213	90131	小泉中原目									
214	90133	時宗墓地遺跡									
215	90047	時宗大角谷戸									
216	90048	時宗前林									
217	90049	時宗西ヶ谷									
218	90050	時宗山王									
219	90051	時宗上堀									
220	90052	時宗宗屋敷									
221	90053	時宗古田									
222	90054	時宗蓮馬									
223	90055	時宗下門馬山									
224	90056	時宗大長人									
225	90057	時宗乙八谷									
226	90058	時宗東源治									
227	90073	時宗中島									
228	90074	時宗西島									
229	90094	東国屋敷									
230	90095	時宗西国屋敷									
231	90096	芝二原									
232	90099	上石倉山									
233	90106	東三本原									
234	90108	時宗中原									
235	90112	時宗									
236	90114	時宗中谷									
237	90120	時宗西高田									
238	90122	時宗東源治									
239	90128	時宗蓮馬									
240	90135	時宗森後									
241	90136	時宗宗東									
242	90137	時宗西蛇林									
243	60003	南宗横之									
244	90025	原之横塚									
245	90000	原之横塚山川									
246	90003	原久保遺跡									
247	90002	原之横塚義方									
248	90003	原之横山ノ後									
249	90004	原之横下谷田									
250	90005	金山遺跡									
251	90006	蒲塚古墳									
252	90037	五ヶ九山古墳									
253	90060	久保田									
254	90107	原久保遺									
255	90111	原之横横尻									
256	90116	原之横東原									
257	90134	原之横前弥生									
258	90140	原之横後原									
259	90141	原之横中子									
260	90008	八幡古墳									
261	90010	小中金沢									
262	90013	小中堀塚									
263	90001	山田清水									
264	90002	山田地蔵									
265	90003	山田上の台									
266	90004	山田鉄砲林									
267	90005	一									
268	90089	石田									
269	90001	高畑									
270	90096	昌梁寺									
271	90031	横宮古墳									
272	90034	森山古墳									
273	90015	道上古墳									
274	90036	屏風古墳									
275	90017	庄司屋古墳									
276	90018	狐塚古墳									
277	90019	神明古墳									
278	90020	荒井古墳									
279	90021	十二台東									
280	90022	上庄司郎内、上庄司郎東上庄司郎北、下庄司郎西下庄司郎東									
281	90023	神明									
282	90024	横宮鼎									
283	90025	山田田									
284	90026	蛇石山									
285	90027	山田									
286	90028	横宮東沢口									
287	90087	南宮									
288	90088	宮之下									
289	90112	横宮中									
290	90129	上庄司郎１号墳									
291	90032	今田高橋									
292	90093	上田									
293	90045	木野下原									
294	77	西久保									
295	90132	小藤八幡									
296	90130	90130									

第８図　旧石器時代の遺跡（使用した地図の出典は第７図に明記）

の上位には広域テフラの姶良Tnテフラが見られ、上部ローム層の最下底に降灰層準が認められる。また中部ローム層には赤城鹿沼テフラや榛名三原田テフラが認められる。

群馬県南部における後期旧石器文化は、Ⅰ～Ⅴ期の文化層に区分される(笠懸野岩宿文化資料館1993)。県内の後期旧石器文化の始まりにあたるⅠ期は、テフラの年代から推定すると37～28千年前と考えられ、この時期はMIS３(酸素同位体ステージ３)と呼ばれる最終氷期の温暖期にあるＨ４(ハインリッヒ・イベント)後の温暖期であると考えられる。

群馬県南部では、姶良Tnテフラ下位の中部ローム層暗色帯から石器群が最も多く出土する。その代表的な遺跡は桐生市の岩宿遺跡岩宿Ⅰ文化層、環状ブロック群が初めて確認された伊勢崎市の下触牛伏遺跡である。

赤城南麓では今井道上Ⅱ遺跡、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡、富田宮下遺跡、富田高石遺跡、富田下大日遺跡、萱野Ⅱ遺跡、堤沼上遺跡、上泉唐ノ堀遺跡、上泉新田塚遺跡で出土例が認められる(第８図)。またこれらの遺跡から出土した旧石器文化は、関口他(2011)のⅠ期後半期からⅡ期前半期に相当する。

なお、今井道上Ⅱ遺跡、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡、亀泉坂上遺跡(ｊ)、上泉唐ノ堀遺跡(ｉ)では中部ローム層のさらに下位の層準から結晶片岩の礫などの出土が認められ、これを旧石器文化層と考える見解もある(津島2008)。同様に駒城遺跡、芳賀東部団地遺跡(ａ)、砂留遺跡(ｆ)、上泉武田遺跡(ｇ)などからも同じ層位から結晶片岩の礫が出土している。

Ⅰ期の石器群は、剥片生産技術の違いやナイフ形石器などの主要な器種における技術的な差異が認められることから、形成時期の異なる石器群として２段階に分けられる可能性が高いという指摘(津島2008)やこの時期を前半期と後半期の２時期に分ける考え方(関口他2011)がある。

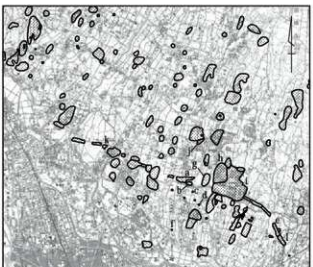
赤城西麓の分郷八崎遺跡では、榛名三原田テフラの上位からⅠ期前半期を特徴づける打製石斧や局部磨製石斧、ペン先形ナイフ形石器、台形様石器などの石器が出土しており、この文化層は、現在の県内最古の旧石器文化である。

Ⅱ期前半期の石器群は、小型のナイフ形石器を主体とする旧石器文化で、この時期に日本列島には西南日本の九州と瀬戸内、東北日本の太平洋岸と日本海側に異なるナイフ形石器の文化圏が形成され、地域差が生まれた。

群馬県南部の後期旧石器文化Ⅱ期後半期に相当する時期は、テフラの年代から28～25千年前と考えられる。この時期は、Ｈ３(ハインリッヒ・イベント)直前の寒冷期であると考えられる。この時期の旧石器文化の特徴は、石刃技法の文化であり良質の石材を基盤に生活していた東北日本北部の旧石器人類が気候悪化の影響を受け遊動範囲を南下させた可能性がある。

県南部における代表的な遺跡は、伊勢崎市の波志江西宿遺跡第２文化層である。赤城南麓では今井道上遺跡、富田漆田遺跡、江木下大日遺跡、萱野Ⅱ遺跡、亀泉坂上遺跡、芳賀東部団地遺跡、上泉新田塚遺跡(ｈ)、上泉武田遺跡などで出土例が認められる。

群馬県南部の後期旧石器文化Ⅲ期は、浅間板鼻褐色テフラの較正年代から推定すると、25～22千年前と考えられる。この時期は、Ｈ３(ハインリッヒ・イベント)後の温暖期であると考えられる。この文化層は、国府系石器群と呼ばれる西南日本の旧石器文化との交流が見られる。赤城西麓縁に位置し利根川の段丘面にある上白井西伊熊遺跡第Ⅱ文化層からは小型ナイフ形石器にガラス質安山岩や黒色頁岩を使用した瀬戸内技法による翼状剥片や国府型ナイフ形石器が出土している。



第９図　縄文時代の遺跡（使用した地図の出典は第７図に明記）

赤城南麓では今井道上遺跡、富田漆田遺跡、江木下大日遺跡、萱野Ⅱ遺跡、亀泉坂上遺跡、上泉武田遺跡、上泉新田塚遺跡で旧石器の出土例が認められる。

群馬県南部の後期旧石器文化Ⅳ期は、テフラ年代から21 ～ 18千年前と考えられる。この時期はMIS２(酸素同位体ステージ２)と呼ばれる最終氷期の最寒冷期に相当しＨ２(ハインリッヒ・イベント)後の温暖期と急激な寒冷期である可能性がある。この時期も旧石器文化の広がりはⅡ期後半期と同様に気候変化の影響を受けた可能性が高い。

この時期には中央高地に起源を持つ槍先型尖頭器を主に組成する石器群が見られる。この石器群は、石刃技法の出現頻度やナイフ形石器の組成割合などを指標にすると、形成時代の異なる石器群に区分されている(関口他2011)。

県内の代表的な遺跡は、武井遺跡Ⅱ文化層、下触牛伏遺跡第１文化層、今井三騎堂遺跡第２文化層であり、石器の出土点数が数千点に及ぶ大規模な石器制作跡が認められる。

赤城南麓は、上泉唐ノ堀遺跡、亀泉坂上遺跡、富田下大日遺跡、萱野Ⅱ遺跡、堤沼上遺跡、上細井中島遺跡(ｃ)、上細井蛸山遺跡(ｄ)、山王・柴遺跡(ｅ)からの出土例が認められる。

群馬県南部の後期旧石器文化Ⅳ期はテフラの年代から、18 ～ 16.5千年前と考えられる。この時期は最終氷期の寒冷期の出口前に相当する時期であると考えられる。この時期の特徴は、細石刃石器群の旧石器文化である。この時期には、赤城山麓に起源を異にする３系統の旧石器が出土する。

県内の代表的な遺跡は、円錐形細石核の石器群に礫器を伴う市野関前田遺跡、船底形細石核の石器群である枡形遺跡、柏倉芳見沢遺跡。湧別技法を使った削片系と呼ばれる細石核を持ち、東北日本北部の石材を使用した石器群が出土した頭無遺跡、八ヶ入遺跡である。

円錐形細石核の石器群を使用した集団は、東アジアを拠点に南回りに日本列島に移動した人類である可能性がある。また、船底形細石核を使用した集団は大陸北部を拠点に北回りで日本列島に移動した人類で、湧別技法の細石核を使用した集団はシベリアやアラスカ、東北日本に共通する「荒屋型彫器」と呼ばれる石器文化を共有し、東北日本北部を拠点として遊動した可能性がある。赤城南麓では、鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡(ｂ)から湧別技法による細石刃石器群の出土例が認められる。

浅間板鼻黄色テフラが堆積した16.5千年前は、気候が急激に温暖化する晩氷期の手前にあたる寒冷期の末期である。旧石器文化から縄文時代草創期の文化への移行期には槍先形尖頭器石器群を主体とする旧石器文化が存在する。赤城南麓は荒砥北三本堂遺跡で槍先形尖頭器が舞台遺跡では薄手で大型の尖頭器の出土例が認められる。

(２)周辺の縄文時代の遺跡

赤城南麓は縄文時代の遺跡が多数発見されている(第９図)が、当地の最古の縄文時代の遺跡は山麓末端に位置する小島田八日市遺跡である。小島田八日市遺跡では縄文時代草創期の隆起線文土器や局部磨製石斧が出土している。これらの遺物の年代は、15.0 ～ 14.0千年前と考えられる。

また赤城南麓の小神明遺跡群渦気遺跡からは縄文時代草創期の尖頭器が、端気遺跡(ｆ)からは有茎尖頭器や爪形文土器の破片が出土している。堤遺跡(ａ)からは槍先形尖頭器の制作跡が見つかっている。これらの遺跡は、古利根川の流路にあたる広瀬川低地帯に近い山麓の台地上に立地している。

縄文時代早期は、県内でも遺跡の数が少ない時代であ

る。赤城南麓の上細井中島遺跡（ｋ）では、縄文時代早期の撚糸文系土器や無文・沈線文系土器、条痕文系土器が出土し、これらの遺物を出土した竪穴住居や配石炉が検出されている。また端気遺跡からも撚糸文系土器が出土している。これらの遺跡も、古利根川の流路にあたる広瀬川低地帯に近い山麓の台地上に立地している。

縄文時代早期撚糸文系の稲荷台式土器は、浅間宮前テフラの年代から10.5千年前の土器と考えられる。この時期は、気候の温暖化により海面が上昇し、冬季モンスーンは日本海側に多雪化をもたらし、また夏季モンスーンが活発化することによって降水量が増加し、日本列島に洪水が多発するようになった可能性が高い。

縄文時代前期は、赤城南麓で竪穴住居の棟数が増加する時代である。白川扇状地扇端の台地上では、約150棟あまりの縄文時代の竪穴住居が検出されている。前期初頭の花積下層式の土器が出土した竪穴住居は芳賀東部団地遺跡（ｉ）で発見されており、前期前半の有尾式や関山式の土器が出土した竪穴住居は小神明遺跡群の西田遺跡（ｄ）、芳賀東部団地遺跡、芳賀西部団地遺跡（ｈ）などで12棟が検出されている。さらに黒浜式の土器が出土した竪穴住居は、芳賀北曲輪遺跡（ｊ）や堤遺跡、上細井五十嵐遺跡を加えて27棟が検出され、この時期が住居棟数のピークとなる。

縄文時代前期前半の竪穴住居は、上泉新田塚遺跡（ｅ）で２棟が検出されている。縄文時代前期後半の竪穴住居は、上泉唐ノ堀遺跡（ｌ）で１棟が検出されている。縄文時代前期の竪穴住居は、五代砂留遺跡で４棟が検出されている。

前期後半の諸磯ａ、ｂ式の土器が出土した竪穴住居は九料南遺跡や芳賀東部団地遺跡、芳賀西部団地遺跡、芳賀北部団地遺跡、芳賀北曲輪遺跡、胴城遺跡（ｇ）で27棟であるが、諸磯ｃ式の土器が出土した竪穴住居は端気遺跡と芳賀東部団地遺跡、上細井蛯山遺跡で14棟が検出され、減少している。以上、縄文時代前期の竪穴住居は89棟に達する。

この後、縄文時代中期後半まで竪穴住居の空白期となる。この期間はボンドサイクル・イベント４と呼ばれる寒冷期で、利根川扇状地では総社砂層と呼ばれる扇状地堆積物が卓越した（矢口2011）。

縄文時代中期は赤城南麓で再び竪穴住居の棟数が増加する時代である。中期後半の加曽利Ｅ式の土器が出土した竪穴住居は小神明下田遺跡（ｂ）（小神明遺跡群Ｃ、Ｄ区）や端気遺跡、九料南遺跡や芳賀東部団地遺跡、芳賀北部団地遺跡、芳賀北曲輪遺跡、上細井中島遺跡などであり40棟が発見されている。

縄文時代後期の称名寺式の土器が出土した竪穴住居は、小神明下田遺跡（小神明遺跡群Ｃ、Ｄ区）、九料遺跡（ｃ）、芳賀東部団地遺跡、堤遺跡であり、20棟が検出されている。

縄文時代中期後半から後期の時期は、竪穴住居の数が第二のピークとなりその数は62棟である、赤城南麓では縄文時代後期後半から晩期までの時期に竪穴住居は発見されていない。この時期はボンドサイクル・イベント３と呼ばれる世界的な寒冷化が進んだ時期である。利根川扇状地では小河川の河刻が進んで谷が形成された。

こうした縄文時代早期の前半、縄文時代前期の前半及び中期後半から後期にかけて竪穴住居が増減することは、すでに榛名山麓でも知られているが、このような傾向は当時の気候変動によりもたらされた降水量の変化と土砂供給に伴う森林や河川環境の悪化が主な原因と考えられる。

（３）周辺の弥生時代の遺跡

赤城南麓は弥生時代の遺跡が少なく、その時期は弥生時代中期後半から後期である。また、大規模な集落遺跡は発見されていない（第10図）。

赤城南麓は、小神明遺跡群倉本遺跡（ｂ）で弥生時代中期から後期の竪穴住居が２棟、同じく湯気遺跡では後期の竪穴住居が１棟検出されている。また、広瀬川低地に近い端気遺跡（ｄ）では弥生時代後期の竪穴住居２棟に古墳時代前期の方形周溝墓が発見されている（第10図）。

荒口前原遺跡では、中期後半の竜見町式土器が出土した竪穴住居が検出された。富田東原遺跡、富田西原遺跡、荒砥上ノ坊遺跡では数棟の竪穴住居や方形周溝墓などが検出されている。

（４）周辺の古墳時代の遺跡

赤城南麓は、古墳時代に遺跡数が増加する。前期、中期、後期の各時代の遺跡が発見され、多数の竪穴住居から構成される集落遺跡や方形周溝墓、古墳などの墓域、水田、畠などの生産域の遺構も数多く発見されている（第11図）。

第10図　弥生時代の遺跡（使用した地図の出典は第7図に明記）

赤城南麓の古墳時代前期の集落遺跡は、荒砥北原遺跡、荒砥諏訪西遺跡などが知られており、上武道路の建設に伴う発掘調査では、富田宮下遺跡、富田西原遺跡、富田高石遺跡などで集落遺跡が見つかっている。

古墳時代初頭の集落は、この地域では河川沿いに立地している。藤沢川岸の芳賀団地遺跡群、寺沢川沿いの堤沼上遺跡、大泉坊川沿いの富田西原遺跡、富田高石遺跡などである。また河川の上流では遺跡の分布密度は薄くなり、また標高150mから上位に古墳時代初頭の集落遺跡は発見されていない。

荒砥諏訪西遺跡や荒砥諏訪遺跡では方形周溝墓が検出され、堤東遺跡、東原Ｂ遺跡、富田高石遺跡では前方後方型の方形周溝墓が発見されている。

赤城南麓の縁に位置し、広瀬川低地帯の入口に立地する田口下田尻遺跡は、古利根川沿いの微高地にある古墳時代前期の集落遺跡である。おなじく石関西梁瀬遺跡や石関西田Ⅱ遺跡、野中天神遺跡も広瀬川低地内の微高地に立地する集落遺跡である。

古墳時代中期は、赤城南麓で群集墳が形成された。この地の農耕開発が本格化したことを示唆している。古墳時代後期６世紀前半には寺沢川左岸の山麓縁に位置する台地上に、この地域で初めて大型前方後円墳である正円寺古墳（ｄ）が築造される。古墳時代後期には赤城南麓では大室古墳群を形成する前方後円墳が造られる。

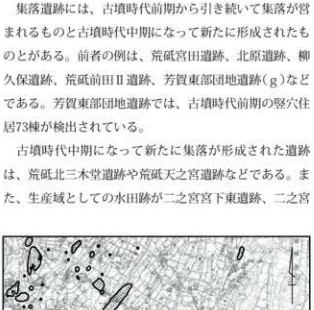
６世紀後半には赤城南麓縁の広瀬川低地帯に桂萱大塚古墳（ｅ）や藤沢川右岸の白川扇状地上にオブ塚古墳（ｈ）やオブ塚西古墳（ｉ）が続いて造られた。

７世紀になると、大日塚古墳（ａ）、新田塚古墳（ｂ）が白川扇状地に造られた。周辺には集落遺跡と20基前後の群集墳が点在している。終末期古墳では、堀越古墳と萱野Ⅱ遺跡１号墳がみられる。

遺跡周辺の古墳の数を見ると『上毛古墳綜覧』による古墳の数は、荒砥川の西にある「桂萱村」に79基、「芳賀村」に64基、「南橘村」に45基、「木瀬村」に19基とある。これに「富士見村」の29基を足しても236基である。この数は、同じ赤城山麓の「荒砥村」に見られる365基の古墳総量の64パーセントに過ぎない。

集落遺跡には、古墳時代前期から引き続いて集落が営まれるものと古墳時代中期になって新たに形成されたものとがある。前者の例は、荒砥宮田遺跡、北原遺跡、柳久保遺跡、荒砥前田Ⅱ遺跡、芳賀東部団地遺跡（ｇ）などである。芳賀東部団地遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居73棟が検出されている。

古墳時代中期になって新たに集落が形成された遺跡は、荒砥北三木堂遺跡や荒砥天之宮遺跡などである。また、生産域としての水田跡が二之宮宮下東遺跡、二之宮



第11図　古墳時代の遺跡（使用した地図の出典は第7図に明記）

千足遺跡、荒砥北三木堂遺跡などで検出されている。

古墳時代後期の集落遺跡は、古墳時代中期から引き続いて営まれている場合が多く、荒砥諏訪西遺跡、荒砥北原遺跡、柳久保遺跡などをはじめ多数の遺跡が検出されている。

このように、赤城南麓では、古墳時代前期以降の集落、墳墓、水田、畠などの様々な種類の遺跡が網羅的に発見されていることに特徴がある。

また、広瀬川低地帯を挟んで赤城南麓に接する前橋台地は、古墳時代前期の水田跡が広い範囲で検出され、集落遺跡と前橋八幡山古墳や前橋天神山古墳などの前期古墳が出現する古墳時代の地域の拠点となった場所である。

（５）周辺の古代の遺跡

赤城南麓では、古墳時代後期に引き続いて古墳時代終末期以降も多くの集落遺跡や水田跡が検出されている（第12図）。赤城南麓は、古代の律令制下では「勢多郡」として編成された地域である。

古代の上野国勢多郡は、もともと赤城山麓の全域にわたる地域であったが、北麓は近代に利根郡に編入された。

平安時代の承平年間（931 ～ 938）に源順の撰によって成立した『和名類聚抄』に勢多郡は、深田（ふかた）、田邑（たむら）、芳賀（はが）、桂萱（かいがや）、真壁（まかべ）、深渠（ふかみぞ）、深澤（ふかさわ）、時沢（ときざわ）の９郷からなる中郡とある。

各郷の比定地候補は以下のようである。深田郷は、前橋市上増田町、下増田町、駒形町、荒口町、荒子町、箱田町等に比定説があるが詳細は不明である。田邑郷は、前橋市粕川町西田面、上東田面、下東田面に比定説があるが詳細は不明である。

芳賀郷は、前橋市端気町、鳥取町付近に比定されている。桂萱郷は、前橋市東片貝町、西片貝町、上泉町、三俣町付近に比定されている。真壁郷は、渋川市北橘町真壁、箱田、上箱田、下箱田、上南室、下南室、富士見村米野、山口付近に比定されている。

深渠郷は、前橋市粕川町深津、女淵から前橋市東大室町、西大室町、下大屋町付近に比定されている。深澤郷は、みどり市大間々町上神梅、下神梅、塩沢、桐生市黒保根町宿廻付近に比定されている。時沢郷は、富士見村時沢を中心とした原之郷、前橋市川端町、日輪寺町付近に比定されている。

昭和60年度に群馬県教育委員会が調査した上西原遺跡では、柵で長方形に区画された大型の建物群が発見され、これを勢多郡家と想定する考え方がある（松田1986）。しかし、方形の基壇建物を中心とした一角は、寺院伽藍中枢部とそれに附属する管理施設とみる考えが有力である。

上西原遺跡は、遺跡から約6.5km南西に離れた場所に位置する。今までに発掘された遺跡の調査成果からは、この遺構群が郡家そのものとは考えにくい。遺構は基壇建物とそれを長方形状に取り囲む回廊状の遺構の状況からみて古代寺院と考えるのが妥当であろう。

しかし遺跡からは「勢」の文字が刻印された上野国分寺造営期の瓦が多数出土しており、勢多郡内の有力豪族が造寺に関与したであろうことは疑いない。郡内の中心の一つが上西原遺跡周辺に存在していた可能性は否定できないが、勢多郡家の比定地は、不明である。

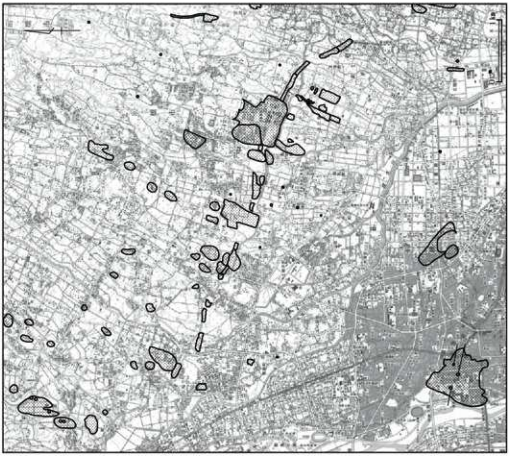
また、二之宮洗橋遺跡から「芳郷」と底部内面に墨書された土器が出土している。しかし資料は１点のみで土器そのものが移動した可能性もあるので、郷名比定の根拠としては難しい。

また、今井道上道下遺跡で検出された柵で囲まれた方形区画は、在地豪族層の居館ではないかとする見方がある（神谷2004）。その周辺では、荒砥洗橋遺跡から底部外面に「大郷長」と墨書された８世紀代の土師器坏や、荒子小学校校庭遺跡からは印面に「識」と記された古代の鉄印が出土している。

９世紀末に成立した歴史書である『類聚国史』の巻171-災異５－「地震」の項には、弘仁九(818)年７月に上野国を含む関東地方一帯に甚大な被害を及ぼした大地震に関する記事がある。荒砥川沿いの今井白山遺跡や柳久保遺跡では大規模な地割れや液状化現象に伴う噴砂脈が発見された。遺跡に残された地震跡と９世紀の年代を示す遺物を出土した遺構との関係から、この地震は弘仁地震に比定される。中宮関遺跡や中原遺跡群ではこの地震による洪水堆積物によって埋没した水田跡が検出されている。

しかし、発掘調査により、遺跡周辺では大地震による災害後も農耕地や集落が拡張していった様子が、桃の木川沿い茶木田遺跡や笂井中屋敷遺跡の発掘調査で明らかになった。

遺跡の周辺における生産遺跡としては、８世紀に製鉄と炭、須恵器生産をおこなった八ヶ峰遺跡、９～ 10世



平安時代

奈良時代

第12図　奈良時代と平安時代の遺跡（使用した地図の出典は第7図に明記）

紀の須恵器生産が確認された富田漆田遺跡などが特筆できる。

遺跡周辺の低地では、浅間Ｂテフラが厚く堆積しており、当時の旧地表面を保存している。浅間Ｂテフラをもたらした噴火は、右大臣藤原宗忠の日記『中右記』に、上野国内壊滅の旨が記されている噴火に比定され、天仁元年(1108年)と考えられた。

周辺の前橋台地では浅間Ｂテフラによって覆われた水田跡が各地で発見される。赤城南麓では、荻窪南田遺跡において、浅間Ｂテフラによって覆われた水田跡が検出されている。

(６)周辺の中世社会の動き

古代末～中世初頭は、赤城南麓を東西に横断する灌漑用水路施設である女堀跡が開削された。女堀は用水としては未完に終わった事業であると理解されている。上武道路の建設に伴う発掘調査では荒砥前田Ⅱ遺跡で女堀の発掘調査が行われた。

中世に赤城南麓の一帯で勢力基盤を形成した武士団は、10世紀の下野国の豪族で平将門の乱を制した藤原秀郷を祖とする集団である。藤原秀郷は乱の後に下野守や武蔵守、鎮守府将軍などに任官し、その勢力基盤を子孫たちに継承した。

赤城南麓で赤堀、桐生、佐貫、大胡、山上、園田などの苗字を名乗る武士団は、こうして誕生した。遺跡の周辺で中世に勢力基盤を形成した氏族は、尊卑分脈によれば藤原姓足利氏の足利成行の庶子、足利重俊を祖とする大胡氏である。

大胡氏の史料上の初見は『平治物語』であり、平治の乱に大胡氏が参加しているのが見える。

治承、寿永の乱で大胡氏は、源氏方についたとみられ、『平家物語』には治承４年(1180年)に源頼朝のもとに参じた関東諸将のなかに「大胡太郎」の名が見られる。また、文治元年(1185年)に頼朝の弟、範頼が平家討伐の軍を編成した際の従軍諸将のなかに「大胡三郎実秀」の名が記載されている。これらの史料から大胡氏は鎌倉幕府の御家人となっていたことがわかる。

大胡氏の『吾妻鏡』での初見は、建久元年(1190年) 11月７日条にみえる「大胡太郎」であり、その後『吾妻鏡』では、暦仁元年(1238年)条に見える「大胡左衛門次郎」、「大胡弥四郎」、寛元４年(1246年)条に見える「大胡五郎光秀」、正嘉２年(1258年)条に見える「大胡太郎跡」や「大胡掃部助太郎」などに複数の人名がみられる。

知恩院蔵『法然上人絵伝』によれば大胡小四郎隆義は、京都滞在中に法然と知り合い、大胡に帰った後も浄土宗に深く帰依し、また子の太郎実秀も浄土宗に帰依したとある。

また、金沢文庫所蔵の『念仏往生伝』第46によると、大胡小四郎秀村は念仏修行を篤く行い、正元元年(1259年)死去の５年前に仏が夢に現れたと伝えている。これらのことから大胡氏は信仰と教養に篤く、この時代の地域と都の文化交流の様子がうかがえる。

南北朝時代の大胡氏は、室町幕府内の覇権を巡って足利尊氏とその弟直義とが争った観応の擾乱に参加した。大胡氏は山上氏とともに足利尊氏方の大嶋義政の下で足利直義側の桃井直常らと笠懸野で戦って敗れたとされた。また、その後も赤城南麓で勢力を維持していた様子が判明している(『太平記』観応元年(1350年)条)。

史料上、大胡氏が赤城山南麓に勢力を有していたことが確認できるのは、14世紀中葉までである。その後大胡氏の名は、関東地方各地で散見できるが、詳細についてはその明な点が多い。

３．発掘地の層序

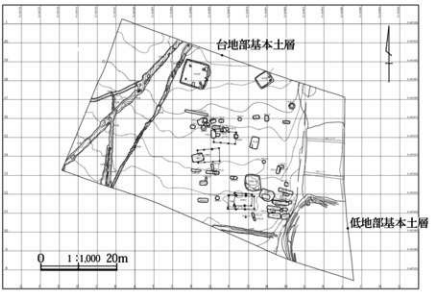
小神明勝沢境遺跡と小神明富士塚遺跡にみられた地層は、白川扇状地を被覆した関東ローム層と黒色土及び谷に堆積した完新世の砕屑性堆積物からなる。前者は扇状地をつくる台地の構成層で後者は扇状地を浸食した谷を埋積した堆積物である。

発掘地の模式的な層序と層相や特徴について述べる(第13図)。

小神明勝沢境遺跡はＡ区の東半分が谷、西半分が台地である。Ｂ区とＤ区は台地、Ｃ区は北東部が台地で西側が谷である。

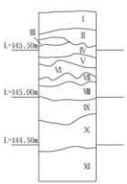
小神明勝沢境Ｃ区は台地から谷間での堆積物が連続しており、遺跡の地層の堆積状態が明らかである。Ⅰ層は暗褐色土層で、耕作土である。層厚は0.2mである。Ⅱ層は暗灰色軽石や火山灰まじりの火山灰土層で、層厚は0.4mである。Ⅱ層は浅間Ｂテフラや榛名二ッ岳伊香保テフラ起源の軽石粒を含む火山灰土である。Ⅲ層Ｕ(上部)は黒色軽石まじりシルト質砂層で、浅間Ｃテフラ起

富士塚D区
D区基本土層

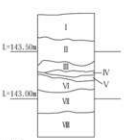


小神明勝沢境遺跡の模式層序（C区）

層序区分	層厚(cm)	地層名	柱状図	層相	テフラ
Mb 0	20	Ⅰ		暗褐色土層	
Mb6b ～ 5a	40	Ⅱ		暗灰色軽石まじり火山灰土層	浅間B 榛名二ッ岳伊香保
Mb10a	50	ⅢU		黒色軽石まじりシルト質砂層	浅間C
Mb12	60	ⅢL		暗灰色砂礫層	
黒色土	50	Ⅳ		黒色～暗灰色細粒火山灰土層	
	20	Ⅴ		暗灰色軽石まじり火山灰土層(漸移帯)	
上部ローム	40	Ⅵ		黄灰褐色風化火山灰土層	
	40＋	Ⅶ		灰褐色風化火山灰土～シルト層	



D区台地部基本土層
1．黄灰色土　表土。軽石混。
Ⅱ．黒褐色土　As-C軽石多混。
Ⅲ．径１～ 10mmのAs-C軽石。
Ⅳ．暗灰黄色土　軽石をごく僅かに混。
Ⅴ．オリーブ褐色土　軽石ごく僅かに混。
Ⅵ．黄褐色ローム
Ⅶ．鈍い黄色ローム　As-Yp混。
Ⅷ．明黄褐色ローム　ハードローム。非常に堅い。As-op僅混。
Ⅸ．浅黄色ローム　ややシルト質。
Ⅹ．浅黄色ローム　シルト質の部分が多い。
Ⅺ．灰黄色砂質シルト　軽石、径5cm小礫をやや多混。堅緻。



D区谷部基本土層
1．茶褐色土　As-A軽石混。耕作土。
Ⅱ．暗褐色土　As-A軽石混。旧耕作土。
Ⅲ．明黄褐色土　少量のAs-B軽石混。
Ⅳ．灰褐色土　少量のAs-B軽石混。
Ⅴ．明灰褐色土　多量のAs-B軽石混。
Ⅵ．青灰色粘質土　Hr-FAに伴う白色軽石を少量混。
Ⅶ．黒灰色粘質土　黄褐色シルト塊混。
Ⅷ．漆黒灰色粘質土

第 13 図　発掘地の層序

源の軽石粒を多く含む。層厚は0.5mである。Ⅲ層Ｌ(下部)は暗灰色砂礫層で、層厚は0.6mである。本層は、扇状地にみられる小河川による谷を埋積した堆積物の一部である。

Ⅳ層は黒色から暗灰色細粒火山灰土層で層厚は0.5mである。Ⅴ層は暗灰色軽石まじり火山灰土層で層厚は0.2mである。本層はローム層と黒色土の漸移帯であり、黒色土の最下部を構成する。

Ⅵ層は黄灰褐色風化火山灰土で層厚は0.4mである。Ⅶ層は灰褐色風化火山灰土からシルト層で層厚は0.4m＋である。

これらの地層の層序区分は以下の通りである。Ⅰ層は表土、Ⅱ層からⅤ層は黒色土層及びそれに相当する水成堆積物である。また、Ⅲ層は前橋台地層(Mb10ａ～Mb12)に対比される可能性が高い。Ⅵ層からⅦ層は上部ローム層である。

小神明富士塚遺跡のＡ区は台地、Ｂ区は浅い谷状の地形を呈する。Ｃ区は台地、Ｄ区は東側が谷で、中央部が台地、西側は浅い谷状地形である。

小神明富士塚遺跡のＤ区は台地から谷間での堆積物が連続しており、遺跡の地層の堆積状態が明らかである。台地部は、Ⅰ層は黄灰褐色火山灰土層で、層厚は0.25～0.3mである。上部の耕作土と下位の火山灰土からなり、下位の火山灰土には浅間Ｂテフラや榛名二ッ岳渋川テフラ起源の軽石粒を含む。Ⅱ層は黒褐色細粒火山灰土層で、層厚は0.2～0.3mである。Ⅱ層は浅間Ｃテフラ起源の軽石粒を含む火山灰土である。Ⅲ層は灰色細粒軽石層で、ブロック状を呈し層厚は0.08mである。Ⅲ層は５～10mm大の軽石からのみ構成され、浅間Ｃテフラに対比される。Ⅳ層は暗灰褐色火山灰土層で層厚は0.12mである。細粒の褐色軽石を少量含む。

Ⅴ層は灰褐色火山灰土層で層厚は0.16mである。本層はローム層と黒色土の漸移帯の上部を構成する。Ⅵ層は黄灰褐色風化火山灰土で層厚は0.12mである。本層はローム層と黒色土の漸移帯の下部を構成する。

Ⅶ層は黄灰色風化火山灰土で軽石を多く含む火山灰土で、層厚は0.1mである。本層に含まれる軽石は浅間板鼻黄色テフラに対比される。なお、Ⅶ層には部分的に黄灰色軽石層が挟在し、層厚は0.15mである。本層は浅間板鼻黄色テフラに対比される。Ⅷ層は黄褐色軽石混じり風化火山灰土層で層厚は0.2mである。本層に含まれる軽石は浅間大窪沢テフラや浅間板鼻褐色テフラである。Ⅸ層は黄灰褐色軽石混じり風化火山灰土層で層厚は0.25mである。本層に含まれる軽石は浅間板鼻褐色テフラである。Ⅹ層は灰褐色軽石混じり風化火山灰土層で層厚は0.25mである。本層に含まれる軽石は浅間板鼻褐色テフラであり、風化が著しい。

Ⅺ層は灰褐色風化火山灰土層で層厚は0.45m＋である。火山灰土の風化が著しく、暗色帯を呈している。

これらの地層の層序区分は以下の通りである。Ⅰ層は表土と黒色土、Ⅱ層からⅣ層は黒色土層、Ⅴ層とⅥ層は黒色土と上部ローム層の漸移帯で、層序はそれぞれ上下の層に帰属する。Ⅶ層からⅩ層は上部ローム層、Ⅺ層は中部ローム層である。なお、台地部分では中部ローム層の上位に灰色の泥流堆積物がみられる。

谷部分の模式的な地層の層序と層相を述べる。

Ⅰ層は褐色火山灰土から褐色土層で、層厚は0.2mである。上部の耕作土と下位の火山灰土からなり、下位の火山灰土には浅間Ａテフラ起源の軽石粒を含む。Ⅱ層は暗褐色土層で、層厚は0.2mである。Ⅱ層は浅間Ａテフラの軽石粒を多く含む火山灰土である。

Ⅲ層は明茶褐色火山灰土層で、層厚は0.15mである。Ⅲ層は浅間Ｂテフラの軽石粒を含む砂質火山灰土である。Ⅳ層は灰褐色火山灰土層で、層厚は0.1mである。Ⅳ層は浅間Ｂテフラの軽石粒を多く含む砂質火山灰土である。Ⅴ層は灰褐色細粒火山灰層で、層厚は0.1mである。Ⅴ層は浅間Ｂテフラに対比される。

Ⅵ層は灰色火山灰質シルトから砂層で、層厚は0.2mである。本層は白色の軽石粒が認められ、榛名二ッ岳渋川テフラに対比される。Ⅶ層は暗灰色火山灰質シルトから砂層で、層厚は0.3mである。黄褐色火山灰質シルトや火山灰土の塊を含有する。Ⅷ層は暗灰褐色細粒火山灰土層で層厚は0.10m＋である。これらの地層の層序区分は以下の通りである。Ⅰ層からⅤ層は前橋台地層(Mb０～Mb５ｃ)に対比され、Ⅵ層よりも下位は前橋台地層(Mb８～Mb９)に対比される水成堆積物である。

第３章　小神明勝沢境遺跡で発見された遺構と遺物

１．調査の概要

調査区は、赤城南麓に形成された白川扇状地に立地し、東側に位置する堤遺跡から続く谷と、西側に位置する小神明富士塚遺跡との間に形成された谷までの台地上に展開しており、標高は146mである。

調査区は南北に横切る前橋市道により東側からＡ～Ｃの３区、また、東西に横切る市道のＢ区の北側をＤ区とした（第５図、第14図）。

小神明勝沢境遺跡で検出された主要な遺構は、縄文時代の埋設土器１基、弥生時代の竪穴住居２棟、古墳時代の竪穴住居７棟、平安時代の溝１条、中世の溝２条である。

Ａ区は、東の堤遺跡から続く谷を経て、次の台地へと移行する傾斜変換点に当たっており、古墳時代後期の竪穴住居４棟、及び南北方向に走向する平安時代の溝１条が検出された。

Ｂ区は、Ａ区の西側に続く台地上にあたるが、近代の土地改良事業によって、大幅な上面の削平を受けており、遺構の残存状況は良くない。縄文時代前期の埋設土器１基、弥生時代後期の竪穴住居２棟、江戸時代の溝１条、時代不明の土坑３基、焼土の塊が出土した土坑が２基、他に古墳時代後期の遺物集中が１箇所検出された。

Ｃ区は、Ｂ区から続く台地で、西側の小神明富士塚遺跡との間には小規模な谷が形成された。台地では地形に沿って、土地を方形に区画するような溝が検出された。何らかの土地利用による区画がなされていた可能性がある。台地上から古墳時代の竪穴住居１棟、中世の溝２条、土坑１基、時代が不明な溝１条や土坑５基が検出された。

Ｄ区は、Ｂ区の北側に東西方向に走る前橋市道に接する調査区で、本遺跡で最小の面積を持つ調査区である。古墳時代後期の竪穴住居２棟と南北方向の時代不明の溝２条が検出された。

なお、これらの遺構の調査が終了した後に、旧石器時代の遺物包含層の確認調査を実施したが、遺物や遺構は検出されなかった。

本遺跡で特筆される遺構はＢ区で検出された弥生時代後期の樽式土器が出土した竪穴住居２棟である。竪穴住居の埋土には浅間Ｃテフラが堆積しており、テフラ降下時の竪穴住居や遺物の状態を検討することができる調査例である。

２．Ａ区の調査概要

Ａ区は小神明勝沢境遺跡の東縁にあたり、遺跡の東側に位置する堤遺跡に隣接する調査区である。Ａ区の東側は３分の１が斜面や低地であり、台地から谷へ地形が変化する場所にある。斜面の大部分は、近代から現代に行われた土地改良事業のために地形が大幅な削剥を受けており、遺構の残存状況は良くない。

台地から東側の谷に向かう斜面の一部では、浅間Ｂテフラの一次堆積が確認できた。この場所はテフラの降下によって埋没した地表面が残されたと認定される。

Ａ区の谷にみられる低地では浅間Ｂテフラ下面を精査したが、水田遺構の状況証拠となる畦畔や水口などの遺構は検出されなかった。また、旧地表面が残された低地には過去に水田が形成されていた可能性があり、浅間Ｂテフラ下位の土壌から花粉や植物珪酸体分析を行った。分析の結果、稲作を行った可能性がある水田土壌の存在は認めることができなかった。

Ａ区の台地上では古墳時代後期の竪穴住居４棟、平安時代の溝１条が検出された（第15図、PL．１）。

３．竪穴住居

１号、２号竪穴住居（第16･17図、PL.2-1 ～ 8･51、189頁）

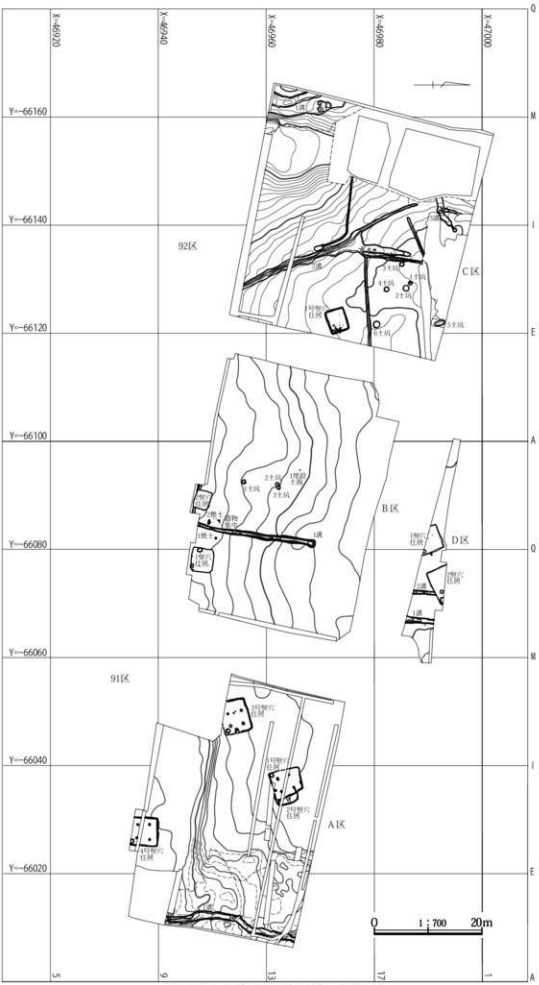
位置　調査区中央北西寄り。

グリッド　91Ｇ・H13・14

主軸方位　１号竪穴住居はＮ16°W、２号竪穴住居はＮ21°Wである。

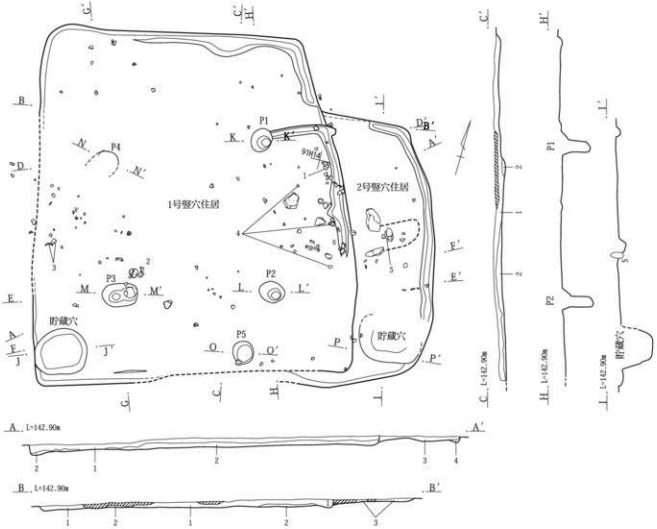
重複　１号竪穴住居は２号竪穴住居よりも新しい。

形状と規模　１号竪穴住居は、ほぼ北北西-南南東方向に長軸を有する長方形を呈する。長径は5.80m、短径5.22m、深さ0.14m、面積19.11㎡である。２号竪穴住居は１号竪穴住居によって西側の大部分が失われ、全体像は不明である。２号竪穴住居の南北は4.42m、東西2.40



第14図　小神明勝沢遺跡の遺構全体図

第 15 図　A区の遺構全体図



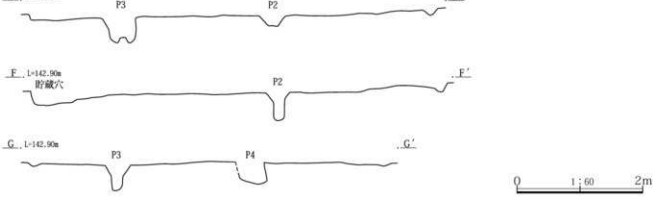
A区１号・２号竪穴住居

1．黒色土　As-C軽石，Hr-FP軽石多混。粘土塊混なし。粘性強。１号竪穴住居埋土。

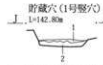
2．黒灰色土　As-C軽石,Hr-FP軽石１層より少ない。粘土塊多量混。粘性１層より強。１号竪穴住居埋土。

3．黒色土　１層よりも軽石を少混。粘土塊混。２号竪穴住居埋土。

4．黒灰褐色土　下部粘土が主体。軽石混入なし。２号竪穴住居埋土。



第16図　A区１号、２号竪穴住居（１）



1．1号竪穴住居埋土1層。
2．黒灰色粘質土　大粒粘土塊混。

1．1号竪穴住居埋土1層。
2．黒灰色粘質土　粘土塊多量混。
3．黒灰色土　2層に近似、粘土塊多混。
4．黒灰色土　粘土塊多量混。

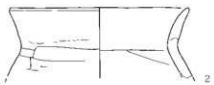
1．1号竪穴住居埋土1層。
2．黒灰色土　粘土塊含まず。粘性上。
3．黒灰色土　大粒粘土塊混。粘性上。

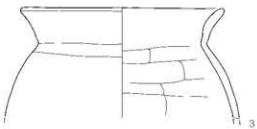
1．1号竪穴住居埋土1層。
2．黒灰色土　粘土塊多量混。粘性上。
3．黒色土　粘土塊少量混。粘性上。
4．黒色粘質土　粘土を含まない。

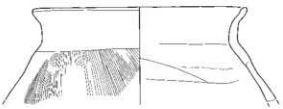
1．1号竪穴住居埋土1層。
2．黒灰色土　小粒の粘土塊を多混。粘性上。
3．黒灰色土　粘土塊が主体の粘性上。

1．黒灰色土　小粒の粘土塊混粘性上。
2．黒灰色土　1層よりも大きな粘土塊混。
3．灰白色土　粘土塊主体。

1．黒色土　As-C軽石、Hr-FP軽石多混。粘土塊混なし。粘性強。
2．黒色土　含有物なし。
3．黒灰色土　粘土塊多量混。







第17図　A区1号、2号竪穴住居（2）と出土遺物

m＋、残存面積は3.17㎡＋である。両竪穴住居とも南辺の一部が試掘調査により失われている。

埋土　黒色細粒火山灰土。浅間Cテフラを含み、床面近くは黒灰色土の薄層がみられる。

床面　上部ローム層を比較的平坦に掘り込んで形成している。

掘り方　両住居ともに床面と掘り方が同一面であり、貼り床等は認められない。

周溝　周溝は1号竪穴住居の北から東の壁際を周回する。また、1号竪穴住居には周溝の可能性のある枝状の

溝が検出されたが、その性格は不明である。周溝は幅0.18m、深さ0.05mである。

２号竪穴住居の周溝は、北東隅から東壁際を周回する。遺構の上幅は0.20m、下幅0.14m、深さ0.03～0.10mである。

竈　１号竪穴住居の壁際には認められない。竪穴住居の南東隅や南壁の中央はトレンチにより失われている。貯蔵穴の位置から見て南壁中央に位置した竈がトレンチで失われた可能性がある。２号竪穴住居は西側の大部分を１号竪穴住居との重複で失われている。東壁と貯蔵穴の一部はトレンチにより失われている。貯蔵穴の位置から見て、東壁中央の床付近にある礫の周辺が竈の位置である可能性があるが、焼土や炭の出土など竈の痕跡を認めることはできなかった。

貯蔵穴　１号竪穴住居は南西隅で１基が検出された。東西にゆがんだ楕円形を呈し、長径は0.85m、短径0.74m、深さ0.15mである。

２号竪穴住居の貯蔵穴は、南東隅で１基が検出された。大半が試掘調査で失われたが、隅が丸い長方形を呈する。長辺は1.05m、短辺の残存する最大の長さは0.42m＋、深さ0.49mである。

柱穴　１号竪穴住居では４基の柱穴が検出された。北東側の柱穴から時計回りにピット１～４とした。ピット３は柱の建て替えの痕跡が見られた。ピット４は試掘調査により失われた。また、南壁際の中央よりにピット５が検出された。

ピット１は長径0.39m、短径0.32m、深さ0.45m。

ピット２は長径0.42m、短径0.33m、深さ0.48m。

ピット３は長径0.56m、短径0.36m、深さ0.40m。

ピット４は長径0.40m、短径0.14m＋、深さ0.36m。

ピット５は長径0.36m、短径0.34m、深さ0.15m。

特徴　重複による削平・攪乱で竈は確認できなかった。

遺物　１号竪穴住居の床面から土師器の甕（２～４）が、また甑（１）が出土した。２号竪穴住居の床面からは土師器の埦（５）が出土した。

時代　１号竪穴住居は古墳時代６世紀前半。２号竪穴住居は１号よりも古く、古墳時代６世紀前半と考えられる。

３号竪穴住居（第18･19･20図、PL.3-1～5-2･51、189頁）

位置　調査区の中央西隅。

グリッド　91Ｊ・Ｋ11・12

主軸方位　N73°E

形状と規模　東北東−西南西方向に長軸を持つ長方形を呈する。南南西辺の半分以上から南西隅、東南東辺の一部が調査区外に及ぶ。長辺は6.43m、短辺5.35m、床面までの深さ0.20m、掘り方までの深さは0.29mである。確認面積は20.20㎡＋である。

埋土　黒色細粒火山灰土。浅間Ｃテフラを多く含み、床面付近には黄黒色土の薄層がみられる。

床面　上部ローム層を掘り込み、黒褐色土塊を使用して床を貼って硬質の面を形成している。掘り方と床面の間は0.07～0.09mである。

掘り方　中央部がやや深く掘られている。

周溝　竈を除いて全体に壁際を周回する。周溝の上幅は0.24m、下幅0.17m、深さ0.08～0.12mである。

竈　東壁の中央に位置し、燃焼部はローム層を削り出して作られている。遺構の上部が削られ、遺構の残存状態が悪く、煙道は確認できなかった。両袖は粘土やシルトによって構築され、大きく張り出している。幅は0.50m、長さ0.50mであり、焚き口の幅は0.25mである。燃焼部は壁より手前側に作られている。

貯蔵穴　南東隅に位置する。楕円形状を呈し、長辺は0.83m、短辺0.78m、深さ0.50mである。底面から0.43mの位置に甕（３）の破片が出土している。

柱穴　床面で４基の柱穴が検出された。南東の柱穴から時計回りにピット１～４とした。掘り方の調査で４基の柱穴はそれぞれが建て替えられていたことが判明した。ほぼ同一位置に建て替えられていたピット２を除いて、少し位置をずらせた場所に作り替えられており、ピット１の建て替え前の旧柱穴がピット５、ピット３の旧柱穴がピット６、ピット４の旧柱穴がピット７に対応する。それ以外に、掘り方面において、南壁寄りの位置で、東西に並列するピット８～11の４基のピットが検出されている。また、掘り方の中央部では東西に長い楕円形状を呈する１号土坑が床下から検出されている。

ピット１は長径0.50m、短径0.47m、深さ0.37m。

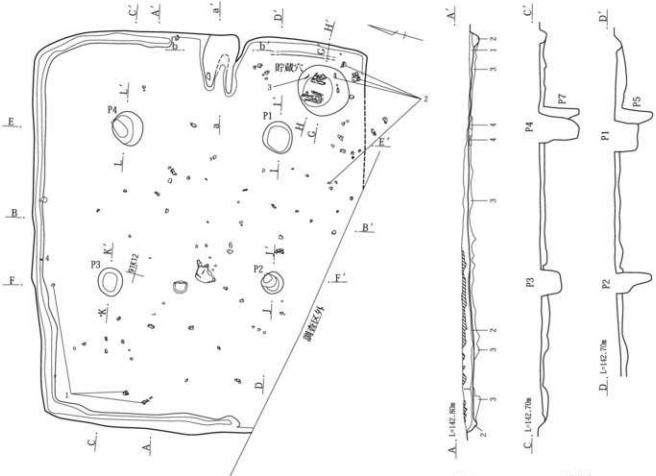
ピット２は径0.34m、深さ0.55m。

ピット３は長径0.42m、短径0.40m、深さ0.33m。

ピット４は長径0.53m、短径0.48m、深さ0.62m。

ピット５は長径0.35m、短径0.33m、深さ0.50m。

ピット６は長径0.32m、短径0.25m、深さ0.14m。

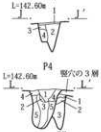


1．黒色土　As-C軽石、Hr-FP軽石多混。粘性強。
2．黒色土　粘土塊混。
3．黒色砂質土　上部にAs-C軽石層混。
4．黒色粘質土　3層との境で鉄分の集積層が厚さ約1cmの帯状に形成。粘性3層よりかなり強い。

1．黒色土　As-C、Hr-FP軽石多混。粘性強。
2．黒色土　粘土塊大量混。軽石混。
3．黒色土　2層に近似するが、粘土塊の混入少。
4．灰色粘質土　軽石混らず。粘性強。

1．黒色土　As-C、Hr-FP軽石多混。粘性強。
2．黒色土　粘土と黒色土の混上。軽石は上部に僅かに混。
3．黒色土　2層と近似。粘土塊は2層よりも少。

1．黒色土　As-C軽石、Hr-FP軽石多混。粘性強。
2．黄黒色土　As-C軽石、Hr-FP軽石少量混。粘土塊混。粘性は1層よりも強。
3．黒灰色土　粘土塊と黒色土塊の混上。
4．黒灰色土　粘土塊主体で褐色土塊混。
5．灰色粘質土　粘土塊主体。黒色土塊若干混。

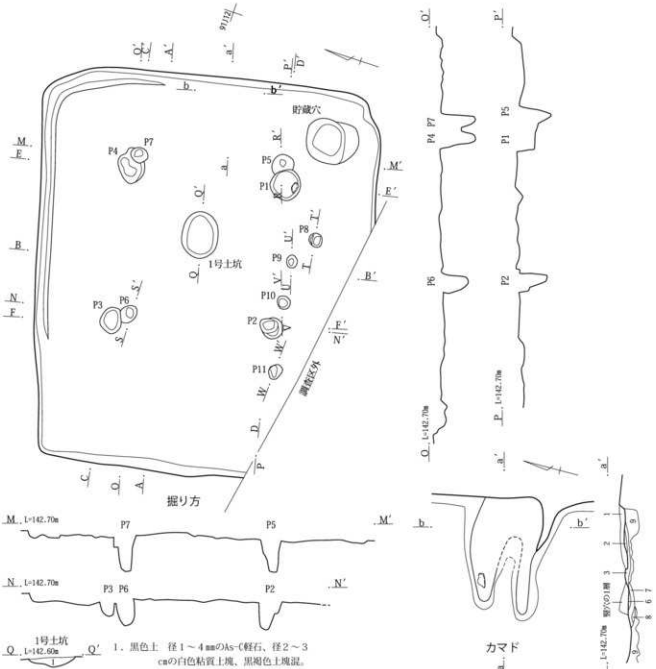


4号ピット
1．黒色土　As-C、Hr-FP軽石多混。粘性強。
2．黒色土　軽石混らず。
3．黒灰色土　小粒の焼土粒混。軽石混らず。
4．黒灰色土　小粒粘土塊多量混。軽石混。
5．黒灰色土　4層に近似。粘土塊の混入が4層より少。

7号ピット
1．黒色土と白色粘質土の混上。白色粘質土約30%。
2．白色粘質土主体で黒色土混。
3．黒色土　緻密。

0　1:60　2m

第18図　A区3号竪穴住居（1）



1号土坑

1．黒色土　径１～４㎜のAs-C軽石、径２～３㎝の白色粘質土塊、黒褐色土塊混。

P5

1．黒色土　径１～３㎜のAs-C軽石全体に混。径１～５㎜の白色粘質土塊多混。
2．黒色土　径１～３㎜のAs-C軽石全体に混。径１～２㎝の白色粘質土塊混。
3．白色粘質土主体で黒色土塊混。

P6

1．黒色土　径１～３㎜のAs-C軽石全体に混。径１～２㎝の白色粘質土塊混。

P8

1．黒色土　径１～３㎜のAs-C軽石全体に混。径１～２㎝の白色粘質土塊混。
2．１層に類似するが白色粘質土混らず。

P11

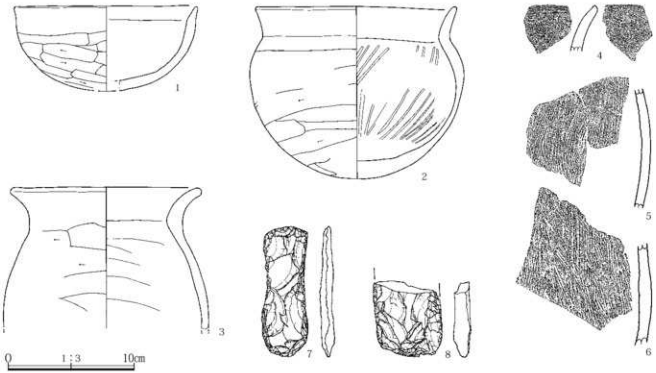
1．白色粘質土主体で黒色土混。
2．黒色土
3．黒色土　径１～３㎜のAs-C軽石混。

P9　P10

9・10号ピット
1．黒色土　径１～３㎜のAs-C軽石全体に混。径１～２㎝の白色粘質土塊混。

1．赤褐色土　焼土粒混。
2．焼土層
3．黒色土　軽石、焼土粒少量混。
4．黒色土　軽石少量混。焼土粒混らず。
5．８層と白色粘質土との混土。
6．褐色土　焼土混。
7．９層主体で８層の土が混。
8．褐灰色土　軽石などの混入ほとんどなし。ややシルト質。
9．黒色粘質土　径１～３㎜のAs-C軽石混。

第19図　A区３号竪穴住居（２）



第20図　A区3号竪穴住居の出土遺物

ピット7は長径0.26m、短径0.20m、深さ0.57m。
ピット8は径0.21m、深さ0.40m。
ピット9は長径0.20m、短径0.16m、深さ0.28m。
ピット10は長径0.21m、短径0.20m、深さ0.25m。
ピット11は長径0.25m、短径0.20m、深さ0.37m。
1号土坑は長径0.74m、短径0.58m、深さ0.15m。

遺物　床面からは土師器の埦（1、2）や貯蔵穴から甕（3）が出土した。

時代　古墳時代6世紀。

4号竪穴住居（第21図、PL.5-2～6-5・51、189頁）

位置　調査区のほぼ中央南端壁際。

グリッド　91F・G7・8

主軸方位　N4°E

重複　なし。

形状と規模　南縁が調査区外にあるため遺構の全体像は不明ながら、ほぼ正方形を呈するものと思われる。北辺は5.47m、東辺の確認された最大の長さは5.18m＋、床面までの深さ0.08m。確認面積18.69㎡＋である。

埋土　黒色細粒火山灰土。浅間Cテフラや榛名二ッ岳伊香保テフラや粘土ブロックを多く含む。

床面　上部ローム層を平坦に掘り込んで床面を形成している。

掘り方　床面と掘り方が同一面であり、貼り床等は認められない。

周溝　検出された壁際全体を周回する。周溝の幅は0.15m、深さ0.03～0.07mである。

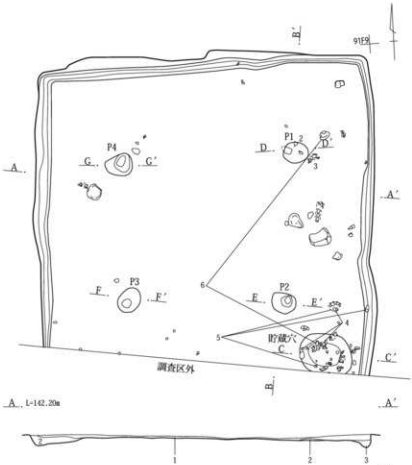
竈　4号竪穴住居の壁際には認められない。南壁は調査区外で、東壁の南東部はトレンチにより失われている。貯蔵穴の位置から見て東壁南東寄りに位置した竈がトレンチで失われた可能性がある。

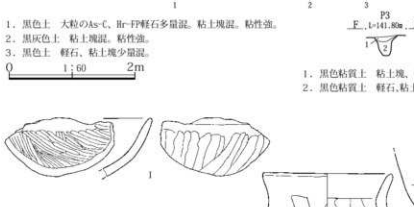
貯蔵穴　南東隅に位置し、南縁は調査区外に及ぶ。東西に長い楕円形を呈する。長径は0.87m、短径0.72m、深さ0.44mである。底面から0.30～0.34mの位置に甕（4～6）の破片が出土している。

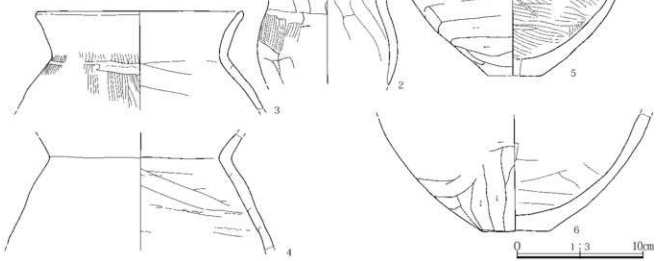
柱穴　床面で4基の柱穴が検出された。北東側の柱穴から時計回りにピット1～4とした。
ピット1は長径0.40m、短径0.33m、深さ0.57m。
ピット2は長径0.39m、短径0.32m、深さ0.52m。
ピット3は長径0.43m、短径0.32m、深さ0.56m。
ピット4は長径0.44m、短径0.36m、深さ0.41m。

遺物　床面や貯蔵穴から土師器の甕（2～6）、貯蔵穴から土師器の鉢（1）が出土している。

時代　古墳時代後期6世紀前半。







第 21 図　A区４号竪穴住居と出土遺物

4．溝

1号溝(第22図、PL.6-6・6-7)

位置　調査区東端。

グリッド　91B・C9～14

主軸方位　91C12グリッド付近より北はN20°E。南はN1°W。

重複　なし。

形状と規模　調査区の東端をわずかに蛇行しながら北から南に走行する。確認された全長は25.00m、最大の上幅は1.60m、最大の底幅0.90m、深さ0.12～0.25mである。断面は浅い皿状を呈する。北端と南端の底面比高差は0.67mであり、南側に向かって緩い勾配が認められる。調査時は水田に伴う水路と考えられたが、低地に水田跡は確認されなかった。また自然科学分析の結果からも水田が存在しなかった可能性が高い。

埋土　成層した浅間Bテフラで埋没している。溝の埋土に水成堆積物は観察されなかった。

遺物　なし。

時代　埋土の状況から、平安時代の12世紀初頭には廃絶したと考えられる。

5．B区の調査概要

B区はD区と小神明勝沢境遺跡の中央にある調査区で、前橋市道を挟んでD区の南側に位置する。

B区はA区の西側から続く台地上に位置し、近現代の土地改良事業によって大規模な地形の削剥を受けており、遺構の残存状況は悪い。

B区の南端では、弥生時代後期の竪穴住居が2棟、その間には北から南に向けて走行する江戸時代の溝が1条、調査区の中央で縄文時代前期の埋設土器が検出された(第23図)。

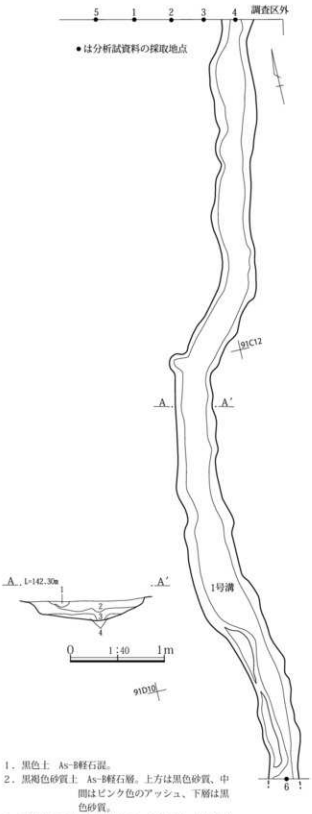
また、調査区の中央南端は、時代不明の土坑3基と焼土の塊を含む土坑2基や古墳時代後期の遺物集中が検出された。

6．竪穴住居

1号竪穴住居(第24図、PL.7-2～8-1・51、189頁)

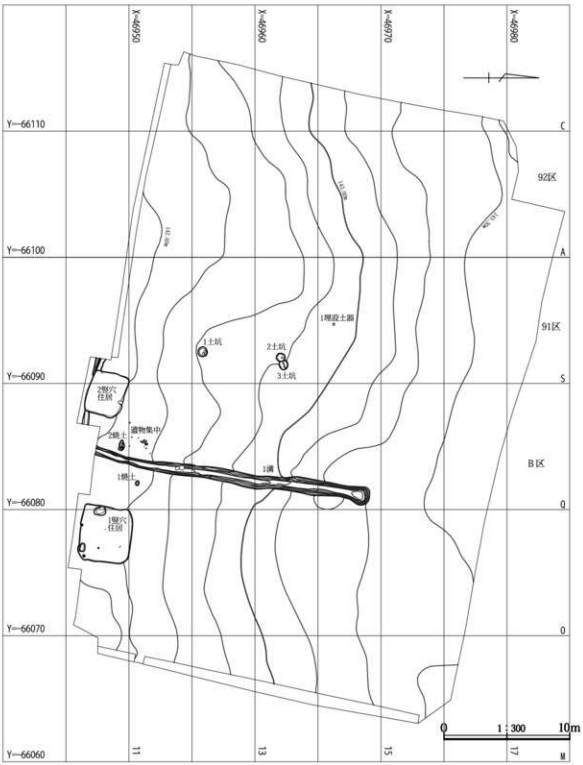
位置　調査区南東端。

グリッド　91P・Q10・11

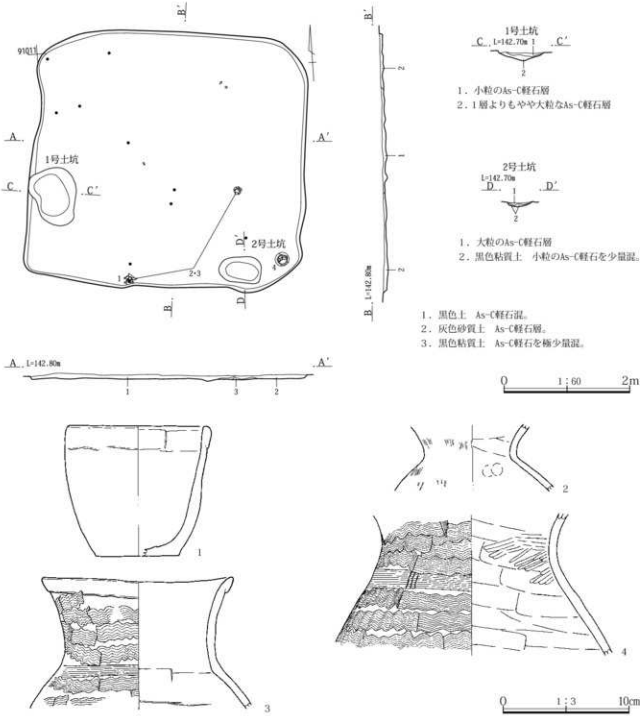


1．黒色土　As-B軽石混。
2．黒褐色砂質土　As-B軽石層。上方は黒色砂質、中間はピンク色のアッシュ、下層は黒色砂質。
3．暗褐色砂質土　やや大粒のAs-B軽石層。上方は明るい黄色、下方は黒色。
4．黒褐色砂質土　3層よりもさらに大粒の砂質土。

第22図　A区1号溝



第23図　B区遺構全体図



第24図　B区1号竪穴住居と出土遺物

主軸方位　N83°E

重複　なし。

形状と規模　遺構は大部分が後世の削剥を受け、残存状況は悪い。東西方向の長方形を呈する。長辺は4.48m、短辺4.17m、床面までの深さ0.06m。面積は14.27㎡である。

埋土　黒色細粒火山灰土。浅間Cテフラを多く含む。

床面　黒色火山灰土を掘り込んで平坦な床面を形成している。床面には浅間Cテフラが見られるが、層相から降下堆積の可能性は極めて低く、移動して堆積したテフラだろう。西壁際中央より南寄りの位置で1号土坑が、また、南東隅付近で2号土坑が検出された。これらは極めて浅い窪み状の遺構である。1号土坑は南北に長い不整楕円形を呈しており、長径は0.94m、短径0.70m、深さ0.12mである。2号土坑は東西に長い楕円形を呈し、長径は0.67m、短径0.43m、深さ0.08mである。

炉　床面に炉の痕跡は認められない。焼土、炭化物なども皆無である。

特徴　竪穴は４m四方で規模は小さく、柱穴や炉が認められないため、竪穴住居に付設した竪穴を有する建物である可能性がある。１号竪穴住居と隣接する２号竪穴住居は、弥生時代後期の樽式土器を出土するが、赤城南麓での発見例は少ない。

遺物　南東隅の壁際で弥生時代後期の樽式土器の甕（４）が正位で検出されているが、甕の上・下部は失われている。甕の上半部（２、３）や鉢（１）も床面から出土している。

時代　弥生時代３世紀。

２号竪穴住居（第25図、PL.8-2～8-8・52、189頁）

位置　調査区の南端。

グリッド　91R・S10

主軸方位　N73°W

重複　なし。

形状と規模　東西方向の長方形を呈する。長辺は3.50m、短辺3.00m深さ0.20mである。面積は6.85㎡である。

埋土　黒色細粒火山灰土。床の一部は浅間Ｃテフラの降下堆積で覆われる。

床面　黒色細粒火山灰土を掘り込み、平坦な床面を形成している。床面の上に浅間Ｃテフラが見られるが、テフラは自然科学分析に伴う地層観察で層相から降下堆積と認定された。

炉　床面に炉の痕跡は認められない。

貯蔵穴　なし。

特徴　２号竪穴住居は隣接する１号竪穴住居に比べてやや小さいが、規格や大きさ、建物の主軸など調和的である。しかし、柱穴や炉が認められないため、竪穴住居に付設した竪穴を有する建物である可能性がある。また、東西の壁際に近い床面で、炭化材がまとまって出土しており、建物の部材と考えられる。これは住居の廃棄後に火災を受けた可能性などが考えられるが、土器や床などに被熱の痕跡を確認できない。

遺物　床面の直上と建物の埋土である浅間Ｃテフラ上位の黒色粘質土から、土器片が出土している。

時代　弥生時代後期３世紀。

７．溝

１号溝（第26図、PL.52、189・190頁）

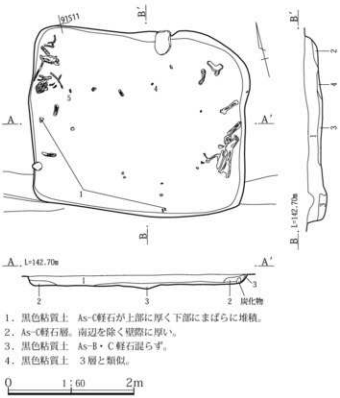
位置　調査区の中央東寄り。

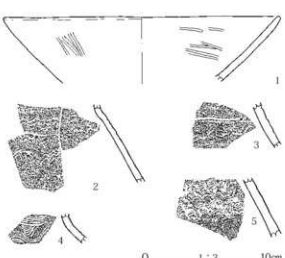
グリッド　91Q10～14

主軸方位　N９°E

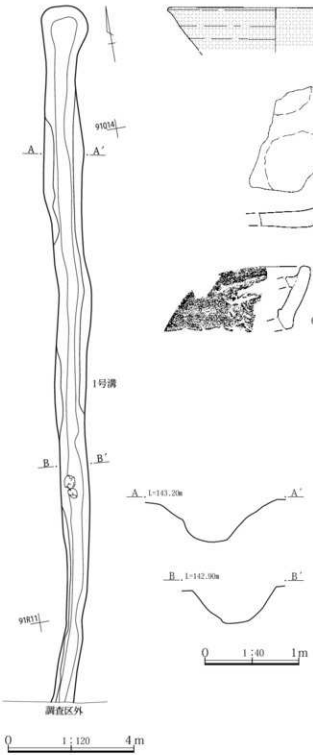
重複　なし。

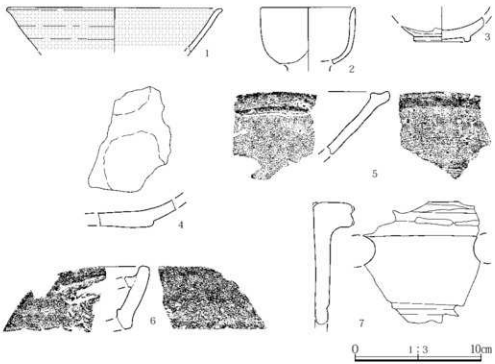
形状と規模　調査区の中央からやや東に寄った位置を北北東から南南西方向にほぼ一直線に走行する水路である。南端は調査区外に延び、北端は調査区の北壁から約12mの位置で分布がとぎれる。確認された全長は22.20





第25図　Ｂ区２号竪穴住居と出土遺物





第26図　B区1号溝と出土遺物

m＋、最大の上幅は1.25m、最大の底幅0.40m、深さ0.22～0.57mである。断面は逆台形を呈し、溝の端部の標高差は22mで-0.83mである。北端と南端の底面比高差は0.38mであり、南側に向かって緩い勾配が認められる。

埋土　黒色土

遺物　9世紀後半の灰釉陶器の埦(1)の破片が出土しているが、その他の遺物は江戸時代の陶磁器(2～6)である。

時代　出土遺物から江戸時代と推定される。

8．土坑

1号土坑(第27図、PL.9-1・9-2・9-3)

位置　調査区の中央南寄り。

グリッド　91S12

重複　なし。

形状と規模　円形を呈する。径は0.78m、深さ0.64mである。断面は筒形を呈する。

埋土　淡暗灰色土の成層した互層で下底に亜円礫がみられ、遺構周辺の土壌が順次堆積したものと考えられる。

遺物　なし。

時代　土坑を埋める上位の砂質土は浅間Bテフラ以降の堆積土である可能性があり、埋土の状況から、中世以降と推定される。

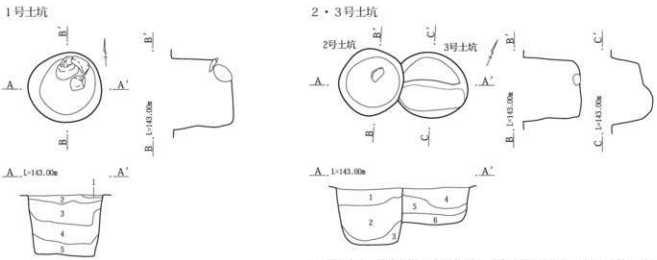
2号、3号土坑(第27図、PL.9-4・9-5)

位置　調査区のほぼ中央。

グリッド　91S13

重複　2号土坑は3号土坑よりも新しい。

形状と規模　土坑は、東西に並んでみられる。2号土坑は円形を呈し、直径は0.70m、深さ0.60mである。3号



1．赤褐色土　鉄分の浸透大。
2．淡黒色砂質土　軽石若干.粘土塊混。
3．淡黒色土　2層よりも粘土塊多混。
4．淡黒色土　2・3層に近似。粘土塊が3層より大きく、多混。
5．黒色土　粘性強く均質。

1．淡黒色土　砂質に富む。軽石若干混。上部に鉄分沈着大。下層は砂質。2号土坑理土。
2．淡黒色土　1層とほぼ同質だが1層よりも暗い色調を呈する。粘土塊若干混。2号土坑理土。
3．黒色土　粘性強く均質。2号土坑理土。
4．黒褐色土　鉄分凝集顕著。粘土塊混。砂質に富む。3号土坑理土。
5．黒色土　4層よりもさらに暗い色調を呈する。鉄分凝集顕著。3号土坑理土。
6．黒灰色土　黒色土と大粒の粘土塊との混土。粘性強。3号土坑理土。

0　1:40　1m

第27図　B区1号、2号、3号土坑

土坑は楕円形を呈し、長径は0.76m、短径0.72m、深さ0.40mである。断面は箱形を呈する。

埋土　2号土坑は淡黒色土、3号土坑は黒色土の互層からなり、土坑を埋める上位の砂質土は浅間Bテフラ以降の堆積土である可能性がある。

遺物　なし。

時代　埋土から中世以降の可能性がある。

9．焼土の塊を含む土坑

1号焼土坑(第28図、PL.9-6・9-7・9-8)

位置　調査区の南東端。

グリッド　91Q11

重複　なし。

形状と規模　東西に長いゆがんだ楕円形を呈しており、極めて浅い。長径は0.38m、短径0.27m、深さ0.07mである。

埋土　径0.02～0.03m大の焼土の塊を含む褐色土。

遺物　なし。

時代　土坑は浅間Cテフラを含むⅢU層を掘り込み、浅間Bテフラを含まないことから古墳時代～古代の可能性がある。

2号焼土坑(第28図、PL.9-9・9-10)

位置　調査区の南東端。

グリッド　91Q・R10

重複　なし。

形状と規模　東西に長いゆがんだ楕円形を呈する。1号焼土坑よりも規模が大きいが、極めて浅い窪みで、底面も凹凸がある。長径は0.83m、短径0.43m、深さ0.06mである。

埋土　焼土の塊が少量含まれる黒色土。

遺物　なし。

時代　土坑は浅間Cテフラを含むⅢU層を掘り込み、浅間Bテフラを含まないことから古墳時代～古代の可能性がある。

10．埋設土器

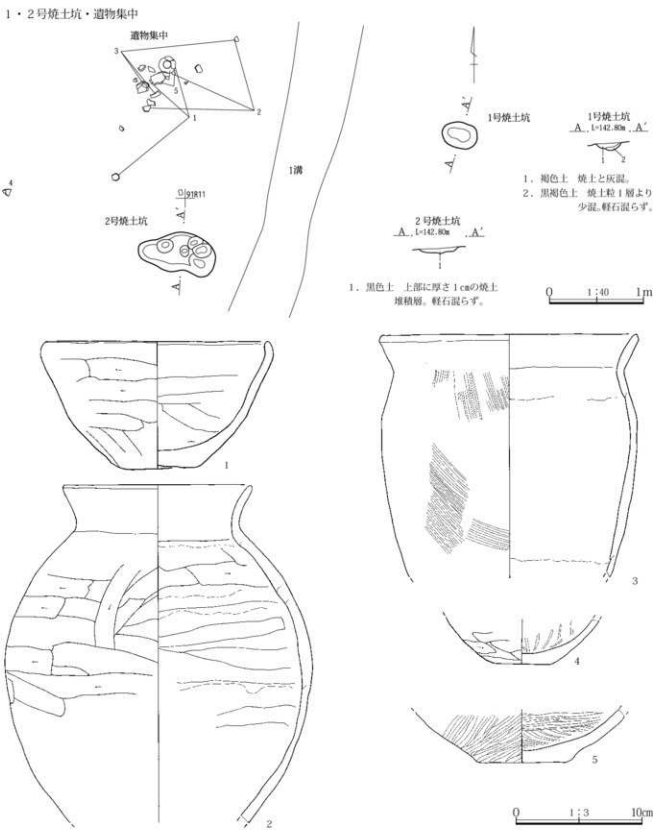
1号埋設土器(第29図、PL.9-13・9-14・9-15・52、190頁)

位置　調査区の中央西寄り。

グリッド　91S14

重複　なし。

形状　口縁部と胴下半部を欠失する縄文時代前期諸磯a式の深鉢(1)が灰褐色火山灰土の中から正位の状態で出



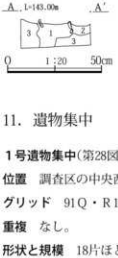
第28図　B区1号焼土坑、2号焼土坑及び1号遺物集中と出土遺物

土した。

胴部の保存状態や堆積の様子から埋設と考えられ、口縁部は後世の攪乱等により失われた可能性が高い。小神明勝沢遺跡の発見された縄文時代の唯一の遺構である。

土器内の埋土　黒灰色火山灰土。土器を埋めた掘り方は見られなかった。

時代　縄文時代前期中葉である。



1．黒灰色土　黒色粘質土,灰色土,粘土等の混土。土器内埋土は外の土と比べて黒色土塊多混。埋設土器東外側埋土は灰色が強い淡黒色土。
2．黒灰色土(Ⅳ層)
3．白色粘質土　粘性強。(Ⅳ層)

第29図　B区１号埋設土器と出土遺物

11. 遺物集中

１号遺物集中(第28図、PL.9-11・9-12・52、190頁)

位置　調査区の中央西寄り。

グリッド　91Q・R11

重複　なし。

形状と規模　18片ほどの土師器破片が長径1.00m、短径0.90mの楕円形状の範囲にまとまって出土した。

埋土　遺物は黒色火山灰土(Ⅱ層)に含まれている。

遺物　保存状態のよい遺物が出土している。遺物群は浅い窪みに堆積した可能性があるが、遺物の年代幅が短いので竪穴住居の貯蔵穴などの遺構に伴う遺物である可能性がある。復元できた遺物は土師器の鉢(１)、甕(２、３、５)である。

時代　遺物は幅のある年代を示すことから、古墳時代６～７世紀と推定される。

12. C区の調査概要

C区は、小神明勝沢遺跡の西端に位置する調査区で、東側の３分の１はB区に続く台地上にある。またC区の西側は小神明富士塚遺跡との間に小さな谷が形成されている。この谷から遺構は検出されなかった。

台地では古墳時代後期の竪穴住居が１棟、台地縁の湧水から流れる年代不明の溝１条、谷を流れる規模の大きな中世の溝１条、台地と谷との縁を画するような溝や谷の斜面を流れる中世の溝(群)２条。さらに台地では中世の井戸可能性がある土坑１基と時代が不明な土坑５基が検出された(第30図)。

13. 竪穴住居

１号竪穴住居(第31・32図、PL.10-1～11-1・53、190頁)

位置　調査区中央の東端。

グリッド　92D・E15・16

主軸方位　N70°E

重複　なし。

形状と規模　東北東–西南西方向に長軸を持つ長方形を呈する。長辺は4.46m、短辺3.70m、床面までの深さ0.32m、掘り方までの深さは0.56mである。確認面積は11.91㎡である。

埋土　住居の西壁側から黒色土、暗褐色土の順で成層して埋没している。

床面　上部ローム層を掘り込み、黒色～黒褐色火山灰土や黒灰色火山灰土を埋めて、平坦な床面を形成している。

掘り方　床面と掘り方との間は0.20～0.24m前後である。掘り方は全体に浅い凹凸があるが、比較的平坦である。

周溝　竈以外の壁際を周回する。最大の上幅は0.15m、最小の底幅0.05m、深さ約0.04～0.06mである。

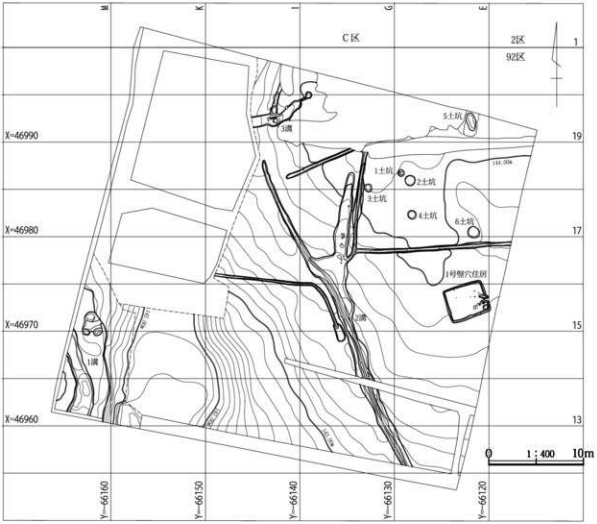
竈　東北東壁のほぼ中央に位置する。燃焼部や両袖は粘土やシルトで構築されている。煙道は火山灰土を直径0.12mのトンネル状に掘り抜き、住居壁外に延伸している。天井の崩落はなく原形のまま検出された。両袖は建物内にやや大きく張り出す。幅は1.05m、長さ0.90mであり、焚き口の幅は0.48mである。燃焼部は壁よりも手前、建物の内部に作られている。

貯蔵穴　南東隅に位置する。ゆがんだ円形を呈し、長辺は0.58m、短辺0.52m、深さ0.40mである。断面は逆台形を呈する。底面から0.36mの位置にほぼ完形の甕(３)が出土している。

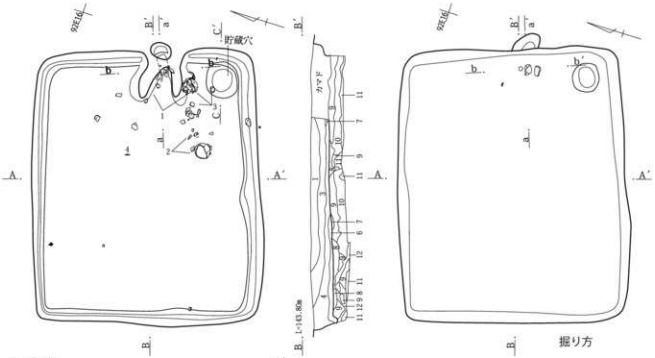
特徴　一辺が４mの竪穴住居であり、床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。

遺物　竈の前の床面や貯蔵穴から保存状態の良好な土師器の甕(１～３)が出土した。

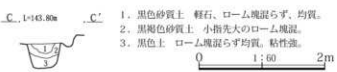
時代　出土した甕には年代に幅があり、古墳時代後期５世紀後半～６世紀前半と考えられる。



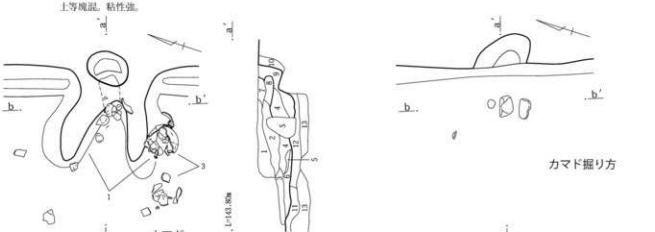
第30図　C区遺構全体図



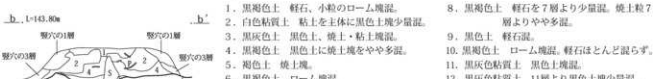
1．淡黒褐色土　大粒の軽石、小粒のローム塊混。
2．黒褐色土　１層より色調が黒く、軽石多混。ローム塊は１層よりも少混。
3．黒褐色土　２層に類似。軽石２層よりも少混。ローム塊１・２層より多混。
4．黒褐色土　３層に類似。ローム塊混らず。
5．黒色土　軽石混らず。粘性強。
6．黄褐色土　南側及び西側に顕著に堆積。白色粘土、ローム、黒色土等塊混。粘性強。
7．灰層　カマド前で検出。
8．黒色土　径３～５㎝の粘土塊混。掘り方埋土。
9．黒灰色土　やや褐色がかる。粘性強。掘り方埋土。
10．黒褐色砂質土　褐色がかったAs-Yp混。黒色土塊多混。掘り方埋土。
11．黒灰色粘質土　白色の粘土層を主体に黒色土塊混。掘り方埋土。
12．褐鉄鉱汚染帯　鉄分凝集。掘り方埋土。



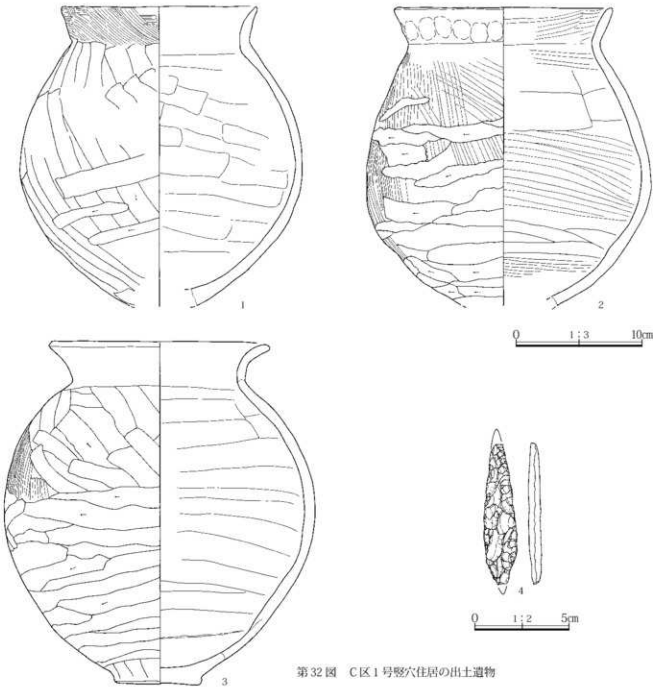
1．黒色砂質土　軽石、ローム塊混らず、均質。
2．黒褐色砂質土　小指先大のローム塊混。
3．黒色土　ローム塊混らず均質。粘性強。



1．黒褐色土　軽石、小粒のローム塊混。
2．白色粘質土　粘土を主体に黒色土塊少量混。
3．黒灰色土　黒色土、焼土・粘土塊混。
4．黒褐色土　黒色土に焼土塊をやや多混。
5．褐色土　焼土塊。
6．黒褐色土　ローム塊混。
7．黒色土　軽石、焼土粒少量混。
8．黒褐色土　軽石を７層より少量混。焼土粒７層よりやや多混。
9．黒色土　軽石混。
10．黒褐色土　ローム塊混。軽石ほとんど混らず。
11．黒灰色粘質土　黒色土塊混。
12．黒灰色粘質土　11層より黒色土塊少量混。
13．淡黒色土　As-Yp混ローム塊と黒色土塊混上。



第31図　C区１号竪穴住居



第32図　C区1号竪穴住居の出土遺物

14. 溝

1号溝(第33図、PL.11-2・11-3)

位置　調査区西南端。

グリッド　92M13～15

主軸方位　91M14グリッド付近より北はN21°W、南はN14°Eである。

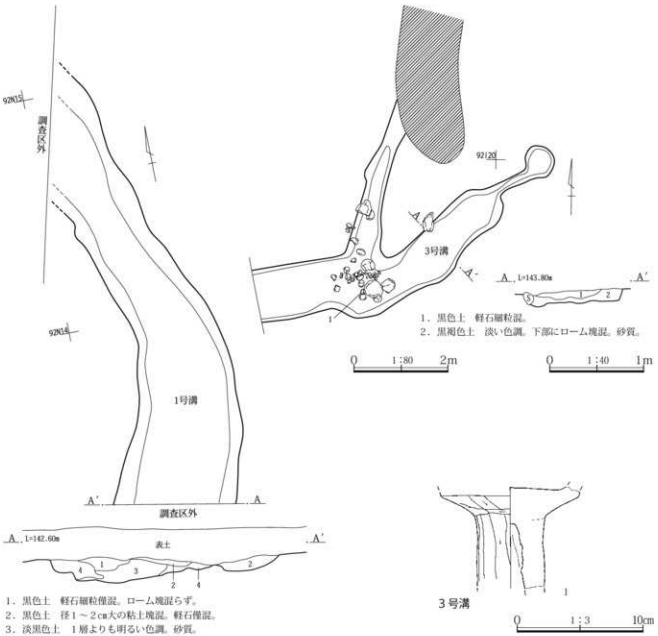
重複　なし。

形状と規模　調査区の西南隅の谷部を北西から南に向けて走行する規模の大きな溝で埋土に水成堆積が認められる水路である。溝の上下は調査区外に及ぶ。確認された全長は7.60m＋、最大の上幅は2.40m、最大の底幅1.80m、深さ0.26～0.42mで、中央と南端の底面比高差は0.21mであり、南側に向かって緩い勾配が認められる。断面は浅い皿状を呈し、溝の検出面はほぼ平坦である。

埋土　黒色土の互層で、水成の浅間Bテフラ起源の砂層が認められる。

遺物　なし。

時代　埋土の状況から平安時代以降であり、中世と推定される。



第33図　C区１号溝及び３号溝と出土遺物

２号溝（第34図、PL.11-4・11-5・52、190頁）

位置　調査区中央。

グリッド　92Ｆ～Ｈ12～18

主軸方位　91Ｈ16グリッド付近より北はＮ７°Ｅ、南はＮ15°Ｗである。

重複　なし。

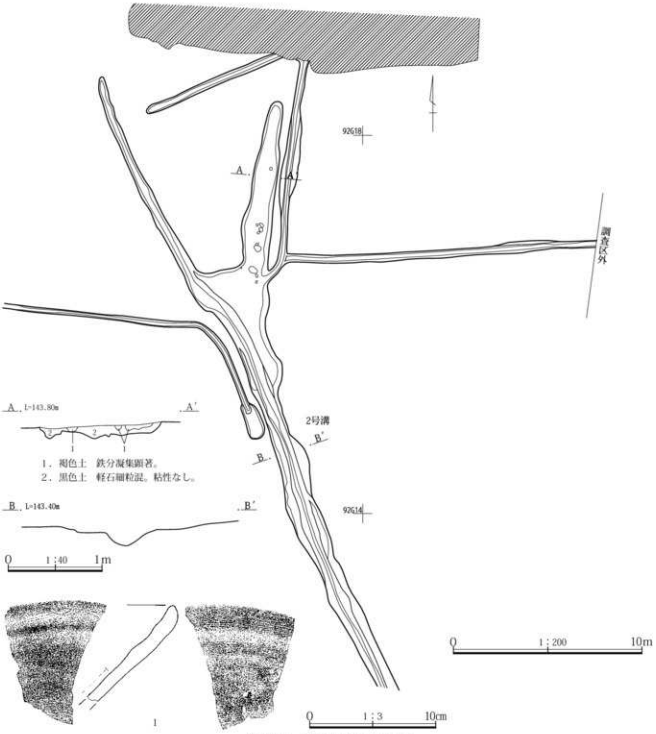
形状と規模　調査区の中央部、西側の谷と東側の台地間にある斜面を北西及から南東方向に走行するＹ字形の溝である。またこれに合流する台地上から西側の谷に向かって直角状に伸びる２条の溝も２号溝に比定した。２号溝の主体は北東及び北からＹ字状に南東方向に走行する溝で、埋土に流水の痕跡が認められないことから台地縁を区画するもの性格を持つ溝と考えられる。

確認された２号溝の全長は36.00m＋、最大の上幅は1.25m、最大の下幅0.50m、深さ0.13～0.29mである。北端と南端の底面比高差は0.92mであり、南側に向かって35mで約１m下がる勾配が認められる。断面は浅い皿状を呈する。

埋土　黒色火山灰土。赤褐色の鉄分の塊を多く含む。

遺物　中世の在地系土器の片口(１)の破片が出土している。

時代　出土した遺物から中世と考えられるが年代は不明である。



第34図　C区２号溝と出土遺物

３号溝（第33図、PL.11-5・11-6・52、190頁）

位置　調査区中央北端。

グリッド　92Ｈ・Ｉ19・20

主軸方位　N55°E

重複　なし。

形状と規模　調査区北端の北壁近くを北東及び北から西南西方向にＹ字形に合流する。溝は不定形の形状を呈し、埋土には地山から洗い出された礫が含まれるので一定量の水流が想定される流路である。Ｙ字形の合流点では、溝に径0.05～0.45mの河川礫が含まれる。確認された溝の全長は7.10m＋、最大の上幅は1.15m、最大の下幅1.00m、深さ0.15mで、北東端と南西端の底面比高差は0.32mであり、南西側に向かって緩い勾配が認められる。断面は浅い皿状を呈する。

埋土　黒褐色土。

遺物　５世紀後半～６世紀前半の土師器の高坏(１)が出土している。

時代　出土した遺物から古墳時代以降と考えられるが、年代は不明である。

15. 土坑

Ｃ区で検出された土坑は、いずれも調査区東側の台地上で、東西に延びる溝で区画された北東隅の範囲に分布する(PL.11-8)。ただし、溝と土坑群との関係や同時性は不明であるが、位置関係が調和的に見える。

１号土坑(第35図、PL.12-1・12-2・52、190頁)

位置　調査区の中央北東寄り。

グリッド　92Ｆ18

重複　なし。

形状と規模　ほぼ円形を呈する。直径0.70m、深さ0.77mである。断面はＵ字形を呈する。直径0.25～0.50m大の亜角～亜円礫で埋められる。

埋土　黒色火山灰土が西側から成層する。

特徴　遺構の形状から廃棄時に礫が埋められた井戸の可能性がある。

遺物　中世の在地系土器(１)の壺底部の可能性がある土器片が出土した。

時代　出土した遺物から中世と考えられるが年代は不明である。

２号土坑(第35図、PL.12-3・12-4)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　92Ｆ18

重複　なし。

形状と規模　ほぼ円形を呈する。長径は1.12m、短径1.07m、深さ0.37mである。断面は箱形を呈する。

埋土　暗灰色火山灰土が漸移的に成層している。

遺物　なし。

時代　不明。

３号土坑(第35図、PL.12-5・12-6)

位置　調査区の中央から北寄り。

グリッド　92Ｇ17・18

重複　なし。

形状と規模　南北に長い楕円形を呈する。長径は0.86m、短径0.80m、深さ0.42mである。断面は逆台形を呈する。埋土は拳大のローム層の塊が大量に見られる。こうした層相は堆積物が人為的な埋積作用によって埋められた可能性を示す。このような特徴を有する土坑の埋土は、本調査区ではこの土坑のみである。

埋土　ローム層の塊を多く含む黒褐色火山灰土で満たされている。

遺物　なし。

時代　浅間Ｃテフラを若干含む埋土の状況から、古墳時代以降である。

４号土坑(第35図、PL.12-7・12-8)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　92Ｆ17

重複　なし。

形状と規模　ほぼ円形を呈する。直径は0.95m、深さ1.20mである。断面は筒形を呈する。

埋土　黒色細粒火山灰土が成層して堆積し、上半部にロームの塊を含む暗灰色土が覆う。

特徴　深さのある土坑であり、井戸の可能性が高い。

遺物　なし。

時代　１号土坑と似た形状から同時代の中世の可能性があるが時代や年代は不明である。

５号土坑(第35図、PL.13-1)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　92Ｅ19

重複　なし。

形状と規模　南北に長い楕円形を呈する。長径は1.90m、短径0.96m、深さ0.35mである。断面はゆがんだ皿状を呈する。遺構ではない可能性がある。

埋土　黒色土の互層で下位ほどローム質の黒灰色土である。

遺物　なし。

時代　不明である。

６号土坑(第35図、PL.13-2・13-3)

位置　調査区の中央から北寄り。

グリッド　92Ｅ16・17

重複　なし。

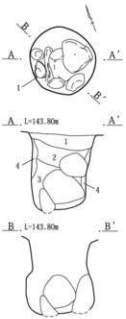
形状と規模　ほぼ円形を呈する。長径は1.30m、短径1.20m、深さ0.47mである。断面は箱形を呈する。

埋土　黒褐色土の互層で漸移的に成層している。

遺物　なし。

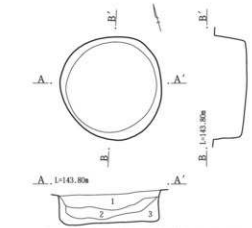
時代　不明である。

1号土坑



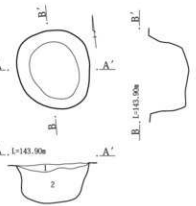
1．黒色砂質土　軽石、鉄分凝集塊僅混。
2．黒色砂質土　1層に類似するがより暗い色調を呈する。軽石混らず。
3．黒色土　粘性あり。
4．黒褐色砂質土　ローム塊混。

2号土坑



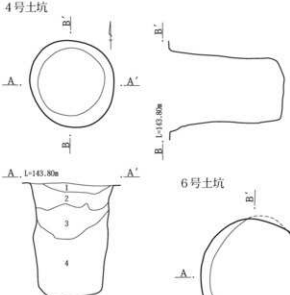
1．黄褐色土　軽石細粒多混。黄色粘土が斑状に混じる黒色土。鉄分凝集顕著。
2．黄褐色土　1層に類似。黄色粘土塊1層より多混。鉄分凝集顕著。
3．黄褐色土　下部粘土塊主体,黒色土塊混。粘性強。

3号土坑



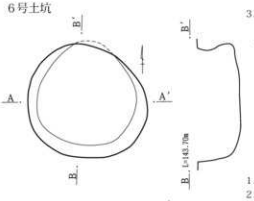
1．黒色砂質土　軽石、小粒のローム塊混。
2．黒褐色土　拳大ローム塊多量混。人為的に一気に埋め戻された痕跡。

4号土坑

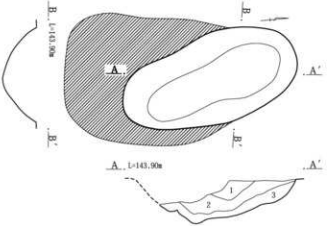


1．淡黒色土　軽石多量混。粘土塊混。
2．黒褐色土　黒色土とローム塊との混土。鉄分凝集顕著。軽石若干混。
3．黒色土　粘土塊多量混。粘性強。
4．黒色土　ローム塊、斑状に混。粘性強。

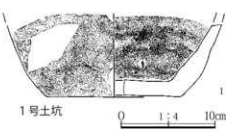
6号土坑



5号土坑



1．淡黒色土　粘土塊斑状に混。均質。粘性なし。
2．淡黒色土　1層に類似。粘土塊1層より多く斑状に混。1層よりもさらに粘性なし。
3．黒灰色土　粘土塊斑状に混。粘性あり。



1号土坑

1．黒色砂質土　軽石細粒極少量混。小粒ローム塊僅混。
2．黒褐色土　小粒のローム塊を多量に混。
3．褐色土　鉄分凝集堅。極めて硬質。
4．黄褐色土　ローム塊多量混。鉄分凝集。
5．黒褐色土　1層同様。軽石細粒を少量混。1層と比べてローム塊の量が多い。が4層ほどではない。色調は1層よりも明るく、4層よりも暗い。部分的に鉄分凝集塊混。
6．黄黒色粘質土　粘土塊多量混。

0　1:40　1m

0　1:4　10cm

第35図　C区1号土坑と出土遺物及び2号～6号土坑

16. Ｄ区の調査概要

Ｄ区は小神明勝沢境遺跡の中央に位置し、調査区の中でもっとも標高の高い台地に立地する。Ｄ区では古墳時代後期の竪穴住居が２棟と北から南へ走行する年代不明の溝２条が検出された(第35図、PL.13)。

古墳時代後期の竪穴住居は、いずれもＡ区やＣ区で検出された竪穴住居もので同様、東北東−西南西方向に主軸を有しており、地形に調和的な方向に揃えられているように見える。

17. 竪穴住居

１号竪穴住居(第37図、PL.13-5 ～ 14-4・53、190頁)

位置　調査区中央。

グリッド　91Ｐ・Ｑ18・19

主軸方位　N67°E

重複　なし。

形状と規模　遺構の南半分が調査区外に及ぶため全体像は不明である。北西辺は4.75m、検出北東辺4.60m＋、床面までの深さ0.51m、掘り方までの深さは0.56mである。検出面積は8.66㎡＋である。

埋土　黒色火山灰土の互層で壁側からおり重なって成層している。上位ほど浅間Cテフラが少ない。

床面　上部ローム層を平坦に掘り込み床面が作られている。

掘り方　床面と掘り方が同一面であり、貼り床等は認められない。

周溝　なし。

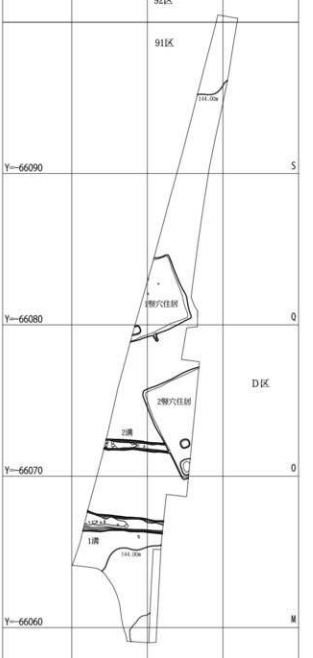
竈　東北東壁のほぼ中央に位置する。燃焼部はローム層を掘り込み形成されている。煙道はローム層を直径0.20mのトンネル状に掘り抜き、住居壁外に延伸している。

貯蔵穴　北東隅に位置する。南北に長い楕円形を呈するものと思われるが、南側半分が調査区外に及ぶため全体像は不明である。検出した最大の長辺は0.65m＋、短辺0.55m、深さ0.36mである。断面は箱形を呈している。

特徴　一辺が５mに及ぶ竪穴住居であるが、床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。

遺物　床面に土器が広く出土しており、土師器の坏(１)や埦(２)、底部が楕円形を呈す甕(５)などが見られる。

時代　古墳時代後期６世紀前半。



第 36 図　Ｄ区遺構全体図

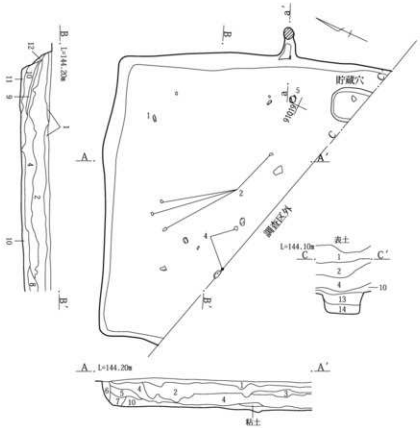
２号竪穴住居(第38･39図、PL.14-5 ～ 15-4･53、190･191頁)

位置　調査区中央。

グリッド　91Ｎ～Ｐ18・19

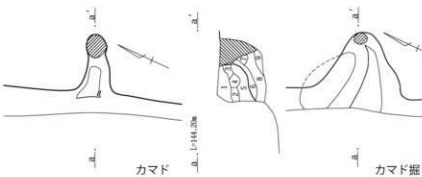
主軸方位　N65°E

重複　２号溝よりも古い。



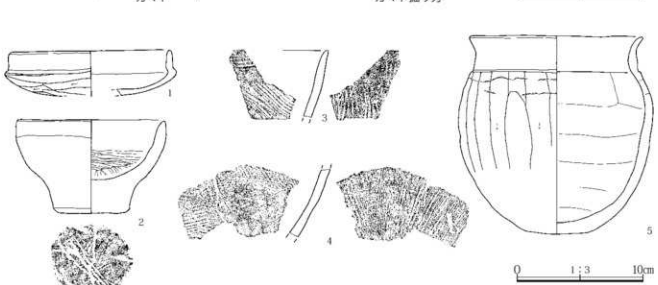
1．黒色砂質土　As-C軽石、Hr-FP多量混。粘性なし。
2．黒褐色土　軽石少量混。鉄分凝集塊混。
3．黒色砂質土　軽石、鉄分凝集混らず。
4．黒褐色土　径1～2cm大の粘土塊多混。黒色土塊混。軽石少量混。カマド周辺では焼土粒混。
5．黒褐色土　基本的には4層と同一であるが、北東隅から竪穴住居内に流入している焼土塊の縁辺部にあたり、下部に焼土粒混。
6．黒色土　軽石混らない均質層。下部に鉄分凝集顔著。
7．黒灰色土　大粒粘土塊多量混。北東隅焼土層下に堆積続く。
8．黒色土　4層と同一層。色調は4層よりも暗い。粘土塊小粒で少量。
9．黒色土　軽石、粘土粒等混らず。
10．黒色土　粘土塊少量混。粘性強。カマド周囲から床面に掛けて堆積。
11．黒色土　粘土塊混らず。粘性強。
12．黒色土　淡い色調を呈し、軽石等混らない均質土。
13．黒色土　小粒As-C軽石、褐色砂粒多量混。締まり弱く粘性なし。貯蔵穴埋土。
14．黒色土　大粒As-C軽石、酸化鉄塊少量混。締まり弱く粘性なし。貯蔵穴埋土。

0　1:60　2m



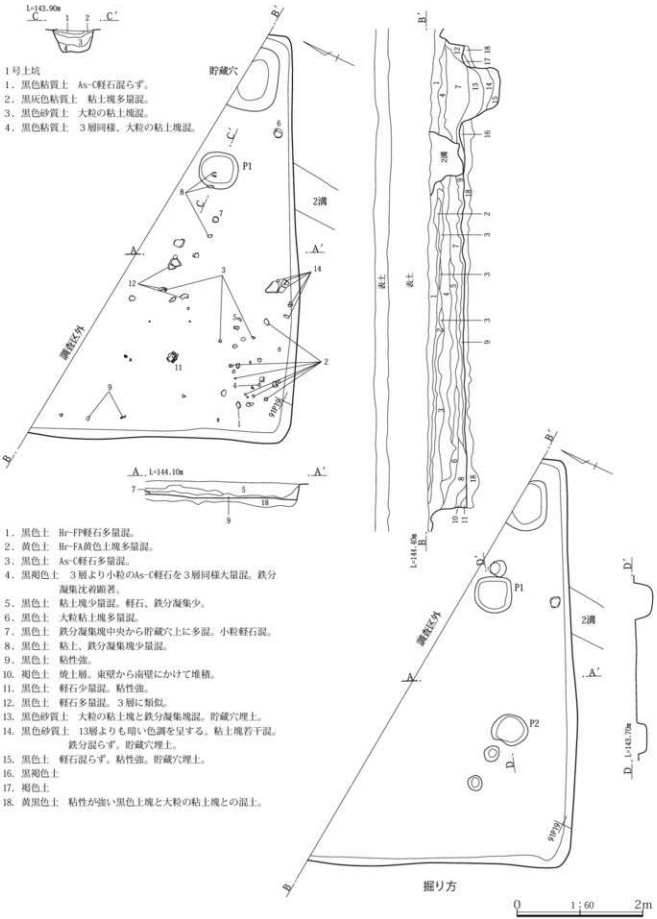
1．赤褐色土　径0.5～20mm大の焼土塊や径5cm大粘土塊、黒色土塊の混上。
2．赤褐色土　焼土塊・黒色土塊混上。
3．黒褐色土　小粒の焼土塊少量混。
4．淡黒色土　焼土塊若干混。ブロック状の堆積。
5．赤褐色土　1層に近似するが粘土塊大量混。
6．褐色土　よく焼けた焼土層。締まり強く堅い。
7．黒褐色土　焼土塊多量混。締まり弱い。
8．黒褐色土　焼土混。締まり弱く、粘性強。
9．黄黒色土　粘土塊混。焼土粒若干混。

0　1:30　1m

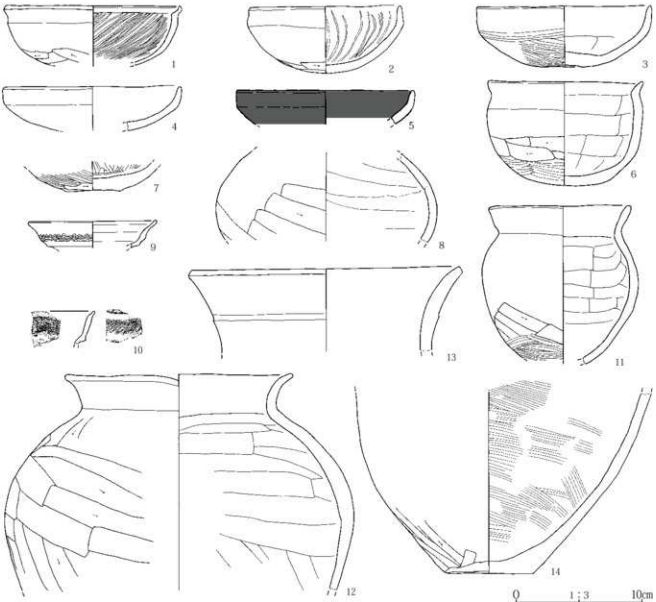


0　1:3　10cm

第37図　D区1号竪穴住居と出土遺物



第38図　D区２号竪穴住居



第39図　D区２号竪穴住居の出土遺物

形状と規模　遺構の北半分が調査区外に及ぶため、遺構の全体像は不明である。南東辺は6.50m、残存する南西辺は4.32m＋、床面までの深さ0.51m、掘り方までの深さは0.56m、検出面積8.78㎡＋である。

埋土　黒色土の互層からなり、上位ほど明るい黒色土で榛名FAやFP起源の白色の軽石粒や黄色火山灰ブロックが多く含まれる。

床面　上部ローム層を掘り込み、黄褐色細粒火山灰土で埋めて平坦な床面を形成している。

掘り方　床面と掘り方の間は、厚さが0.03～0.05mである。掘り方は全体に浅い凹凸があるが、比較的平坦である。

周溝　なし。

竈　検出された範囲には見られない。貯蔵穴の位置から考えて、調査区外に位置する可能性がある。

貯蔵穴　南東隅に位置する。東西に長い楕円形を呈し、長径は1.04m、検出された最大の短径長は0.62m＋、深さ0.60mである。断面は逆台形を呈する。

柱穴　床面で１基の柱穴が、掘り方の調査でさらに１基の柱穴が検出された。東側の柱穴からピット１～２とした。

ピット１は長径0.60m、短径0.58m、深さ0.40m。

ピット２は長径0.60m、短径0.50m、深さ0.30m。

遺物　床面の上に土師器の破片が多く出土し、とくに南西隅付近での出土量が多い。６世紀前半の土師器の坏（２～５）、鉢（６、７）、須恵器の甕（９、10）、土師器の小

型甕(11)や甕(12、14)、壺(８、13)が出土した。５世紀後半の土師器の坏(１)は１点のみが出土している。

時代　古墳時代後期６世紀前半。

18. 溝

１号溝(第40図、PL.15-5・54、191頁)

位置　調査区東寄り。

グリッド　91N18・19

主軸方位　Ｎ６°Ｅ

重複　なし。

形状と規模　調査区の東寄りを北から南に向けて走行する水路である。上下端共に調査区外に延びるが延長方向のＢ区には継続しない。確認された遺構の全長は5.20m＋、最大の上幅は1.25m、最大の底幅1.00m、深さ0.30～0.36mである。北端と南端の底面比高差は0.13mであり、南側に向かって緩い勾配が認められる。断面は口が開いたＶ字形を呈する。

埋土　黒色土の互層で浅間Ｃテフラや榛名二ッ岳伊香保テフラを含む黒色土が見られ下底には地山の礫が洗い出されて堆積している。

遺物　縄文時代の敲石(１)が出土しているが混入した遺物である。

時代　古墳時代の２号竪穴住居よりも新しい２号溝に並行して流れる水路で、埋土に榛名二ッ岳伊香保テフラを含むことから、古墳時代以降と考えられるが年代は不明である。

２号溝(第40図、PL.15-2)

位置　調査区の東寄り。

グリッド　91O18・19

主軸方位　Ｎ５°Ｅ

重複　２号竪穴住居よりも新しい。

形状と規模　調査区の東寄りを１号溝に並行して北から南に走行する水路である。１号溝と同様に上下端とも分布が調査区外に及ぶ。確認された全長は5.70m＋、最大の上幅は0.70m、最大の下幅は0.50m、深さ0.29～0.36mである。北端と南端の底面比高差は0.17mであり、南側に向かって緩い勾配が認められる。断面はＶ字形を呈する。

埋土　黒色細粒火山灰土で埋まっているが下底には地山の礫が洗い出されて、堆積している。

遺物　なし。

時代　古墳時代後期の竪穴住居よりも新しいので、古墳時代以降と考えられる。またＢ区で検出された１号溝と走向や形状が似ており平安時代の溝である可能性はあるが、時代や年代は不明である。

19. 遺構外の出土遺物

(第41～44図、PL.54～56、191～193)

小神明勝沢境遺跡の表土や黒色土層(Ⅲ層)などから出土した土器は、破片からなりＢ区やＣ区からの出土が多い(第41図)。出土した縄文土器片の総点数は82点である。主な遺物は花積下層式(１～４)や黒浜式(12)、諸磯ａ式など、いずれも前期の深鉢の土器片(13～15)である。これらの縄文土器の出土は、赤城南麓の丘陵部において他期を凌駕する前期集落の動向や小神明勝沢境遺跡及び小神明富士塚遺跡の縄文時代の遺構や遺物包含層の時期と調和的である。

Ａ区からは、７世紀末から８世紀初頭の土師器や須恵器の坏(17、18)や６世紀の土師器の小型甕(19)などが出土している。また表土や攪乱からは江戸時代の在地系土器の焙烙や鍋など(23、24)がみられる。

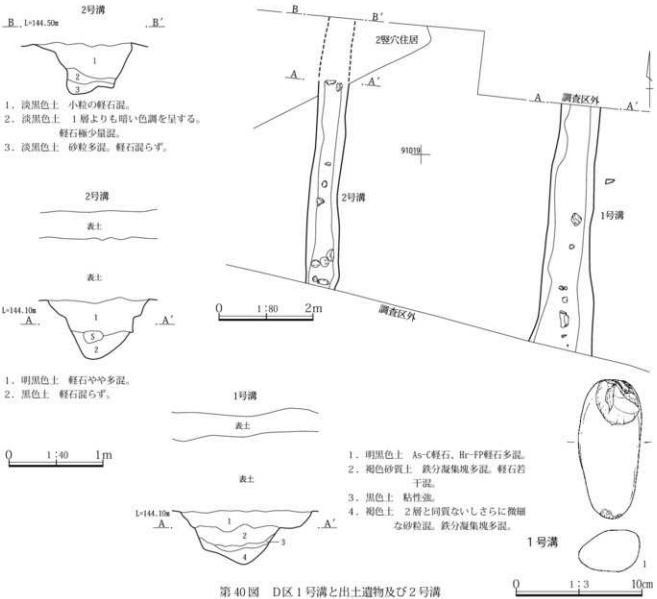
Ｂ区からは、８世紀の土師器の坏(25)、や10世紀前半の須恵器の皿(26)、須恵器の甕(27)などが出土している。また表土からは中世の龍泉窯系青磁碗の破片(31)が出土している。

Ｃ区では谷の土の中から遺物が多く出土した。またＤ区からは５世紀後半の土師器の坏や形象埴輪の破片が出土している。

Ｃ区の谷のから出土した遺物(第42図)は、遺構の時期に符合しない遺物群で、６世紀の土師器の甕(49、50)や９世紀の須恵器埦(46)や灰釉陶器の埦(48)、土師器の甕(51)などである。また口径が23cmの須恵器の大甕(65)も出土しており。これは古墳時代終末期の遺物と考えられる。

また圧倒的に量が多いのは８世紀の土師器の坏や須恵器の蓋、坏(34～44)であり、８世紀前半から後半にわたっている。これらの遺物は古墳時代後期から平安時代に及ぶがＣ区の谷にはこの時代に相当する遺構は存在していない。

Ｃ区の谷の上流部にあたる小神明富士塚遺跡では８～



第40図　D区1号溝と出土遺物及び2号溝

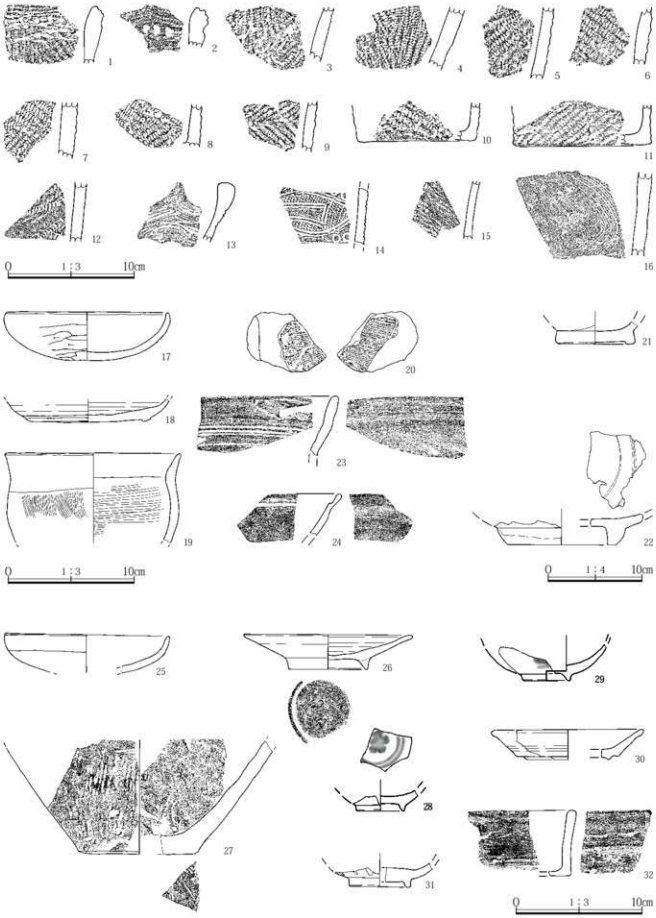
10世紀代の集落を構成する遺構群が認められる。C区の谷から出土した多くの遺物は谷頭にあたる集落から移動した異地性の遺物群である可能性が極めて高い。

またC区から出土した中世から近世にかけての遺物(第42図)は、龍泉窯系青磁碗の破片(54)や常滑窯の甕(64)などが認められる。また在地系の土器で作られた(第43図)中世の片口鉢(74、75)や江戸時代の鍋(69、70)や焙烙(67、68)等もみられた。これらの遺物もC区の谷の上流部にあたる小神明富士塚遺跡A区周辺の遺構群からもたらされた可能性が高い。またD区から(第44図)からも常滑窯の甕(77)が出土しており、中世の遺物は散発的に遺跡の範囲内にみられることがわかる。

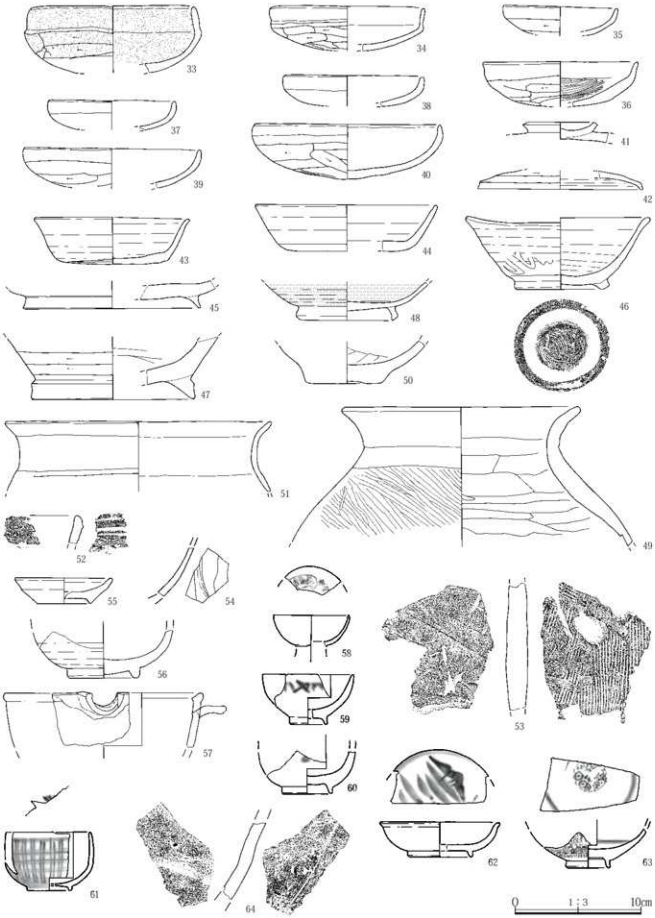
小神明勝沢境遺跡で出土した縄文土器はA区で前期前半と中期末の土器片が2点、B区で前期初頭から後期前半の土器片が41点出土したが、内35点は前期前半である。C区では、前期初頭から後期前半の土器片が30点出土したが、内21点は前期前半である。D区では前期前半の土器片が5点出土している。

小神明勝沢境遺跡で出土した石器(第44図)はすべて縄文時代に属するもので、打製石斧(80、81、87)、石匙(89)などの石器が出土している。また河川礫を利用した凹石や磨石の出土も多くみられる。

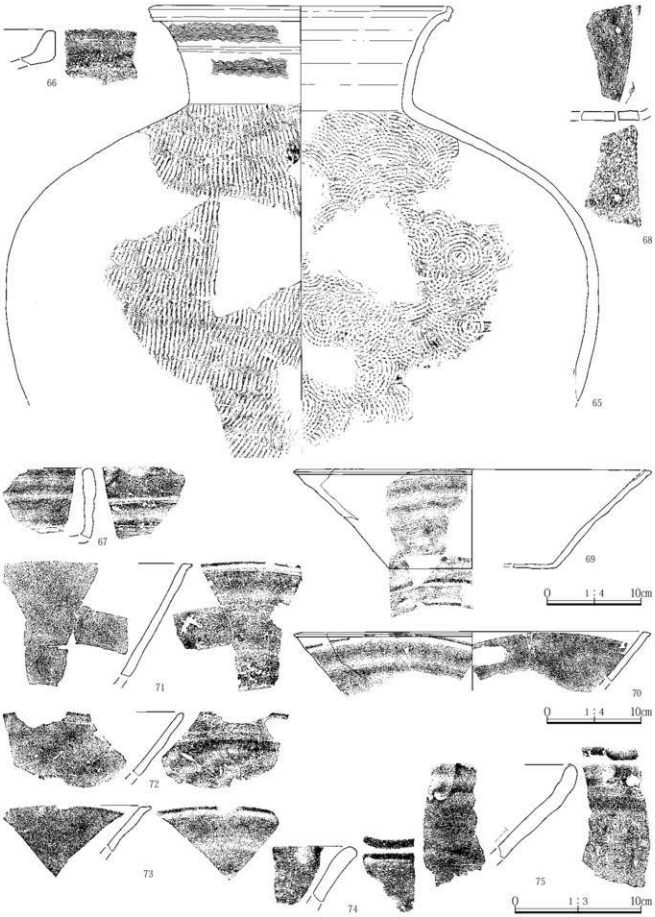
報告書に未掲載の縄文時代の石器類は、A区では黒色頁岩の削器1点や加工痕のある剥片3点が出土している。B区では黒色頁岩の削器1点や打製石斧2点、石核1点、加工痕のある剥片2点が出土している。C区では削器1点や打製石斧1点、加工痕のある剥片5点が出土している。D区では削器2点が出土した。



第41図　小神明勝沢境遺跡の遺構外から出土した縄文土器及びＡ区とＢ区の遺構外から出土した遺物



第42図　C区の遺構外から出土した遺物（1）



第43図　C区の遺構外から出土した遺物（2）

第44図　D区の遺構外から出土した遺物及び小神明勝沢境遺跡の遺構外から出土した石器

第４章　小神明富士塚遺跡で発見された遺構と遺物

１．調査の概要

小神明富士塚遺跡は、赤城南麓に形成された白川扇状地に立地し、東側に位置する小神明勝沢境遺跡とは幅が30mほどの谷を隔て接している。小神明富士塚遺跡の東端は、谷から台地へと移り変わる場所に当たる。また西に隣接する東田之口遺跡まで規模の小さな谷を挟んで緩やかな台地が続いている。

小神明富士塚遺跡の調査区は、遺跡を南北に通る前橋市道により分けられ、東側からＡ～Ｄの４区に区分される（第５・45図）。

小神明富士塚遺跡で検出された主要な遺構は、古墳時代から奈良時代の竪穴住居13棟、中世の竪穴遺構１棟及び年代不明の竪穴遺構３棟。古代の掘立柱建物が６棟、中世の掘立柱建物が１棟、古代の道１条と古墳時代から古代の溝が７条、近世の道１条と中世から近世の溝が７条である。

Ａ区は、東の小神明勝沢境遺跡と谷を隔てて、台地縁から台地に当たっており、古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居10棟、時代不明の竪穴住居１棟及び古墳時代の溝１条、古代の溝６条、近世の溝１条、また古代の道１条と江戸時代の道１条、江戸時代の井戸１基が検出された。土坑はＡ区全体で54基、掘立柱建物に伴わないピットは15基検出された。

Ｂ区は、Ａ区の西側に続く台地上に当たるが、現代の建物によって、大幅な上面の削平を受けており、遺構の残存状況は良くない。縄文時代前期の遺物包含層や中世の溝１条などが検出された。

Ｃ区は、Ｂ区から続く台地の尾根にあたる。土地を方形に区画するような溝が検出されたので、何らかの土地利用による区画がなされていた可能性がある。台地上から中世から近世の溝が14条、中世の土坑１基が検出された。

Ｄ区は、遺跡の西端に位置し、古墳時代後期の竪穴住居２棟と中世以降の方形区画を呈する屋敷跡が検出された。区画内外には掘立柱建物４棟、溝７条、井戸６基、土坑42基が検出された。

なお、これらの遺構の調査が終了した後に、旧石器時代の遺物包含層の確認調査を実施したが、遺物や遺構は検出されなかった。

本遺跡で特筆される遺構はＤ区で検出された中世以降の屋敷跡の可能性がある遺構群である。約50mの方形区画を呈し、溝を境界にした同様の土地の区割りはＣ区に及ぶため、東西南北で区画された中世以降の土地利用の一端を検討することができる資料である。

２．Ａ区の調査概要

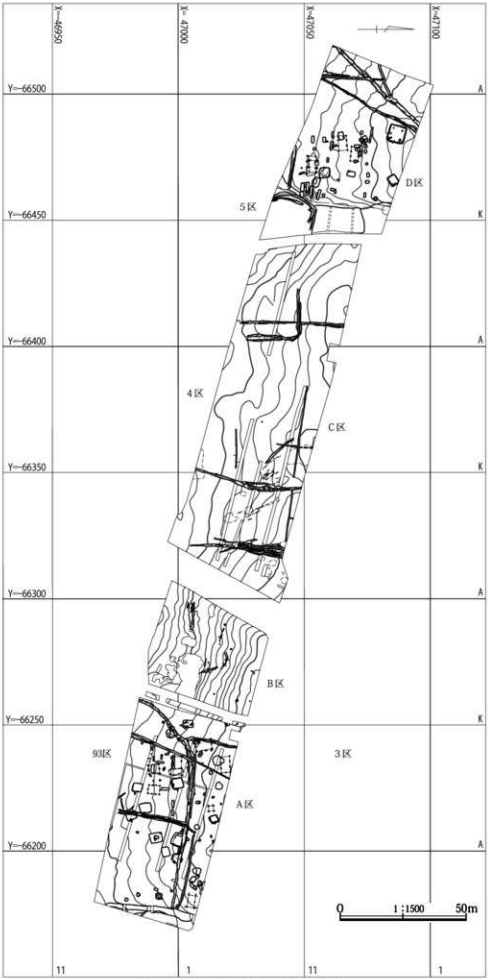
Ａ区は、東に小神明勝沢境遺跡と接する調査地であり、台地上の遺構の密度は比較的高い。検出された主な遺構は、古墳時代の６世紀の竪穴住居４棟、古墳時代の７世紀の竪穴住居が２棟、７世紀末から８世紀初頭及び奈良時代の竪穴住居が４棟、時代不明の竪穴住居１棟である（第46図）。また古代の掘立柱建物は６棟、中世の掘立柱建物が１棟検出された。また古代の墓壙の可能性がある土坑２基が検出され、古墳時代の溝が１条、古代の道が１条、溝が６条、江戸時代の道１条、井戸１基、土坑５基などが検出された。

Ａ区で検出された竪穴住居は、小神明勝沢境遺跡の竪穴住居と同様に、建物の東側に竈を構築している事例が多い。また土坑には埋土に多量の炭化物と焼土塊を含み、平安時代の墓壙に形状や内容が似ているものがみられた。

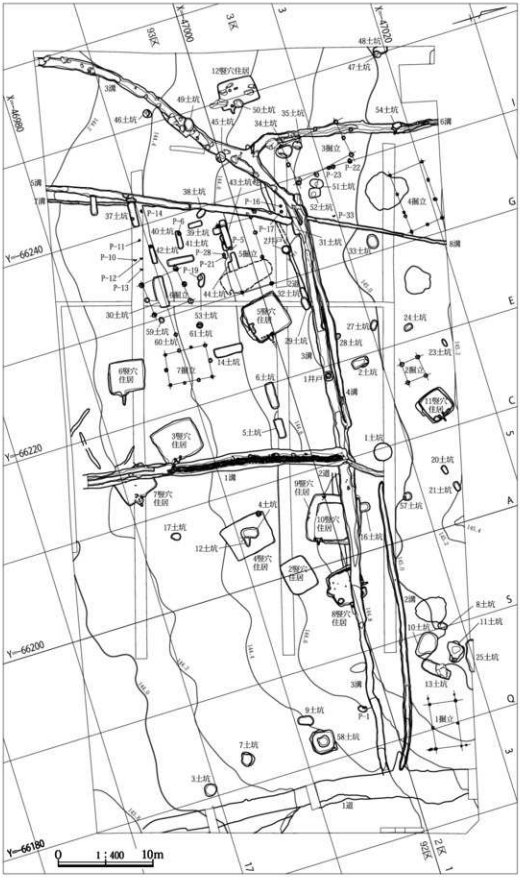
また遺構外からは縄文時代早期の押型文土器や縄文時代前期の土器片などが出土した。

検出された掘立柱建物は、年代を決定する遺物の出土がなく、また他の遺構との重複がみられないために年代を決定することは困難である。しかし、これらの掘立柱建物は、竪穴住居との重なりもみられないことから、竪穴住居と関係をもって計画的に配置された建物の可能性がある。Ａ区の竪穴住居そのほとんどは７世紀から８世紀にかけて造られており、この時期に掘立柱建物建物も造られた可能性がある。

Ａ区の中世の遺構は、調査区東端で検出された１号道に面している。掘立柱建物が１棟、東西に延びる近世の道が１条、井戸１基などが検出された。またウマ１体分



第45図　小神明富士塚遺跡の遺構全体図



第46図　A区の遺構全体図

を埋葬した２号土坑は近世の遺構ではないかと考えられたが動物遺体の観察の結果、時期不明の中型馬であることが判明した。

3．竪穴住居

Ａ区では竪穴住居10棟が検出され、６世紀から８世紀にかけてのものである。１号竪穴住居は、須恵器の埴が埋土から出土しているが調査の結果、竪穴住居と認定できなかった。そのため竪穴住居から除外して１号は欠番とする。Ａ区では竪穴住居が調査区の中央付近にややまとまって検出されたが、竪穴住居相互の重複はほとんど見られない。

２号竪穴住居（第47・49図、PL.17-1 ～ 17-3・57、194頁）

位置　調査区中央からやや東寄り。

グリッド　92Ｔ19・20、93Ａ19・20

主軸方位　N21°W

重複　なし。

形状と規模　東北東－南南西方向に長軸を有する長方形を呈する。長辺は3.76m、短辺3.12m、深さ0.07m、掘り方までの深さ0.18m、面積10.26㎡である。遺構のほとんどが削剥されており、残存状態は良くないが、周辺の竪穴住居の状況や埋土、床面の状況から竪穴住居として認定した。

埋土　浅間Ｃテフラを含む褐色～黒褐色砂質土で黄灰色のロームブロックが多い。

床面　ローム層を凹凸に掘り込んだ上に黒褐色土を厚く貼って平坦面を形成している。厚さは0.05 ～ 0.11mである。

掘り方　壁の周囲から中央にかけて小規模な凹凸が甚だしい。

周溝　なし。

竈　住居全体の残存状況が不良であり、床面や掘り方の調査で確認できなかった。

貯蔵穴　なし。

柱穴　床面や掘り方には見られなかった。

特徴　床面に竈、貯蔵穴、柱穴が認められない。一辺が３mあまりの小型の竪穴住居であり、床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。周辺の竪穴住居の状況や埋土、床面の状況から竪穴住居として認定した。

遺物　埋土から土師器の坏（１）と鉢（２）が出土している。

時代　古墳時代後期６世紀前半

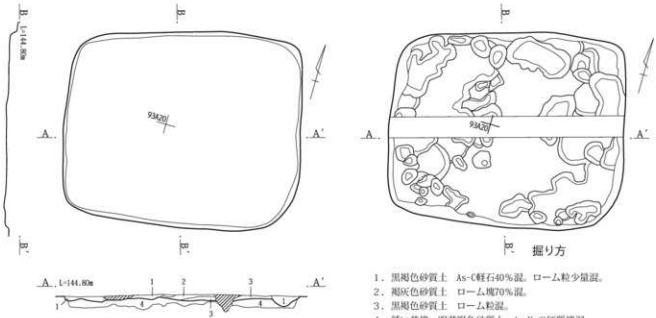
３号竪穴住居（第48・49図、PL.17-4 ～ 17-8・57、194頁）

位置　調査区の中央から南寄り。

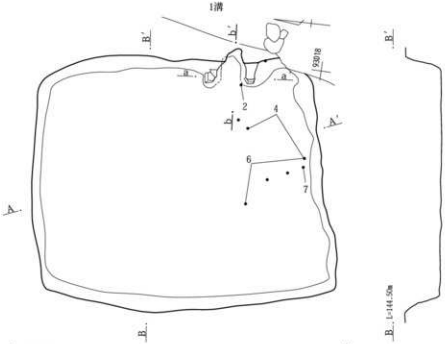
グリッド　93Ｄ17・18

主軸方位　N95°E

重複　南東隅を１号溝がとおる。１号溝よりも古い。

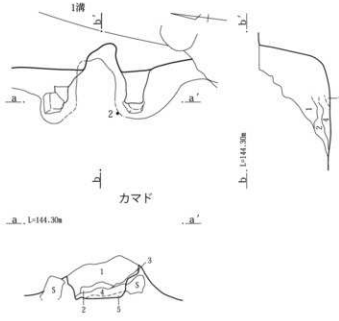


第47図　Ａ区２号竪穴住居



1．黒褐色砂質土　As-C軽石、FP軽石、ローム粒混。緻密。
2．黒褐色砂質土　1層より灰色がかり明るい色調を呈する。As-C軽石、ローム粒１層よりも少量。
3．黄褐色粘質土　ロームの二次堆積土。
4．黒褐色砂質土　均質緻密。
5．黒褐色砂質土　灰白色粘質土、ローム粒混。
6．黒褐色砂質土　４層が鉄分で凝結。
7．純い黄褐色砂質土

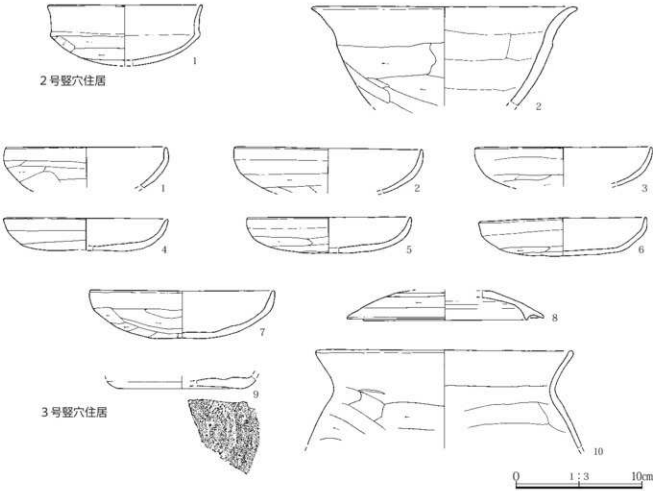
0　1:60　2m



1．褐灰色粘質土　ローム粒10%混。焼土粒少量混。
2．褐灰色粘質土　ローム粒10%混。灰白色粘質土混。焼土粒少量混。
3．明黄褐色砂質土
4．灰白色粘質土　焼土塊混。
5．黒色灰層

0　1:30　1m

第48図　A区３号竪穴住居



第49図　A区２号、３号竪穴住居の出土遺物

形状と規模　北北西－南南東方向に長軸を有する長方形を呈する。長辺は4.85m、短辺4.08m、床面までの深さ0.66m。確認面積は14.89㎡である。

埋土　浅間Ｃテフラや榛名二ッ岳伊香保テフラを含む黒褐色砂質土の互層で南壁から成層し、上位ほど火山灰質の土壌が堆積している。

床面　ローム層を平坦に掘り込んで床面を形成している。

掘り方　床面と掘り方が同一面であり、貼り床等は認められない。

周溝　なし。

竈　東北東壁のやや南寄りに位置する。燃焼部はローム層を掘り込み作られている。幅は0.90m、長さ0.45mであり焚き口の幅は0.30mである。煙道は建物の東側に接する１号溝によって失われている。両袖は河川礫を芯材として粘土やシルトによって構築され、建物内に張り出す。燃焼部は建物の壁とほぼ同位置に作られている。

貯蔵穴　なし。

柱穴　床面や掘り方には見られなかった。

特徴　一辺が４～５mに及ぶ竪穴住居であるが、床面に主柱となる柱穴を持たない構造と想定される。

遺物　８世紀第３四半期の土師器の甕(10)や８世紀後半の土師器の坏(６)が埋土や床から出土した。須恵器の坏(９)や蓋(８)が埋土から出土しており、これらは８世紀前半の年代を示す。

時代　奈良時代８世紀第３四半期。

４号竪穴住居(第50図、PL.18-1・18-2)

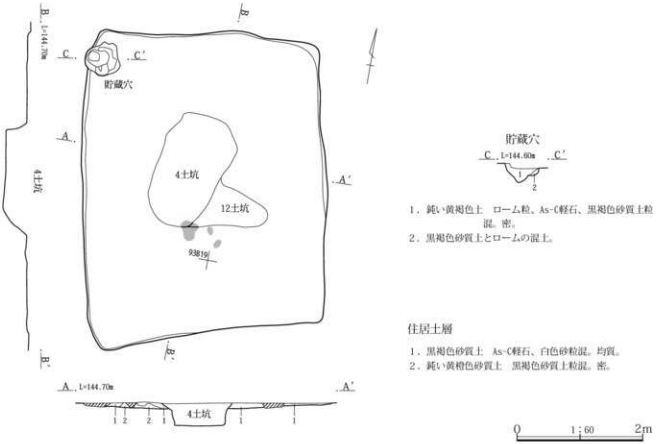
位置　調査区のほぼ中央。

グリッド　93Ａ18・19、93Ｂ18・19

主軸方位　Ｎ11°Ｗ

重複　中央部を４号・12号土坑に掘り込まれる。

形状と規模　北北西－南南東方向に長軸を有する長方形を呈する。遺構上部の大部分を削剥され、残存状態は悪い。長辺は5.10m、短辺3.90m、床面までの深さ0.09m。面積17.73㎡である。



第50図　Ａ区４号竪穴住居

埋土　浅間Ｃテフラを含む黒褐色砂質土で、ロームブロックを多く含む。

床面　ローム層を全体的に平坦に掘り込んで床面を形成しているが、検出した面は、床面より下位の可能性もある。

掘り方　床面と掘り方は同一である。

周溝　なし。

竈　全体的に残存不良で、検出できなかった。また中央よりやや南寄りの位置に焼土の塊が検出されたが、炉とするに積極的な証拠を見出すことができなかった。

貯蔵穴　北西隅に位置する。不整円形を呈し、西辺は壁の外まではみ出して掘り込まれている。長径は0.52m、短径0.47m、深さ0.23mである。

埋土　鈍い黄褐色土。

柱穴　なし。

特徴　一辺が４～５ｍに及ぶ竪穴住居であるが床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。床面に竈や柱穴が認められないが、埋土や壁、床の状況から竪穴住居として認定した。

遺物　なし。

時代　古墳時代と推定されるが年代は不明である。

５号竪穴住居(第51～54図､PL.18-3～19-4･57･58､194頁)

位置　調査区の中央から西寄り。

グリッド　93Ｅ・Ｆ20、３Ｅ・Ｆ１

主軸方位　Ｎ81°Ｅ

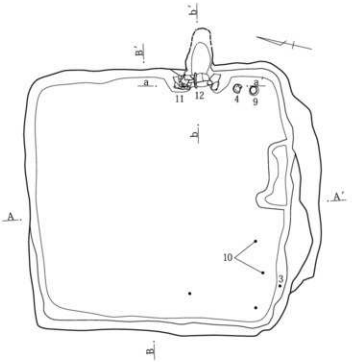
重複　なし。

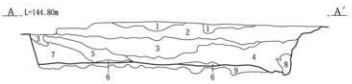
形状と規模　東北東－西南西方向に長軸を有する長方形を呈する。南壁は竪穴住居が埋没する時に上部が崩落したのか、大きく内部に傾斜している。長辺は4.70m、短辺4.27m、床面までの深さ0.64m、掘り方までの深さ0.72m。面積は14.57㎡である。

埋土　浅間Ｃテフラを含む黒褐色砂質土で埋没しているが、基底部は南北の両壁からローム質のブロック土が壁際を埋めるように堆積し、中央部が最後に黒褐色土で埋没している。

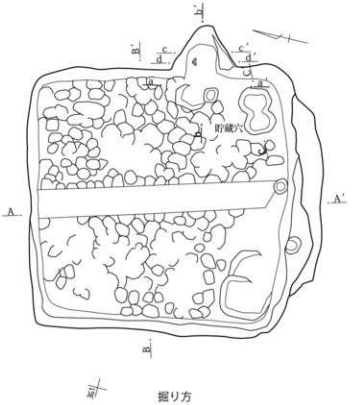
床面　ローム層を小さな窪地状に掘り、上位にローム層の塊と黒褐色砂質土を混ぜて薄く貼ることで床面を形成している。

掘り方　掘削工具痕の可能性がある小規模な凹凸が多数





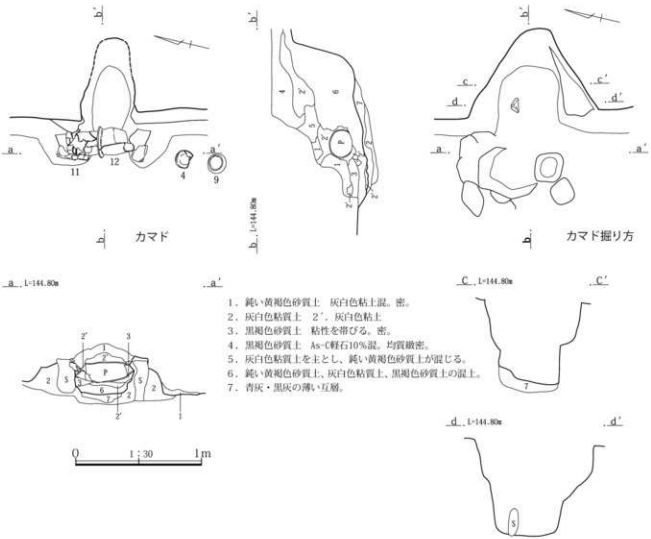
1．黒褐色砂質土　粘性強。硬質緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石10％混。均質。
3．黒褐色砂質土　径１～２cm大のローム粒混。粘土、焼土10％混。
4．暗褐色砂質土　ローム粒混。
5．暗褐色砂質土
6．純い灰黒色砂質土　シルト質。
7．暗褐色砂質土　５層と同質だが、暗褐色砂質土が多く、ローム粒は径１cmまで。
8．黒褐色砂質土　ローム粒少量混。
9．ロームと黒褐色砂質土との混土。径３～５cm斑点状。



掘り方

0　1:60　2m

第51図　A区５号竪穴住居（１）



第52図　A区５号竪穴住居（２）

見られる。

周溝　なし。

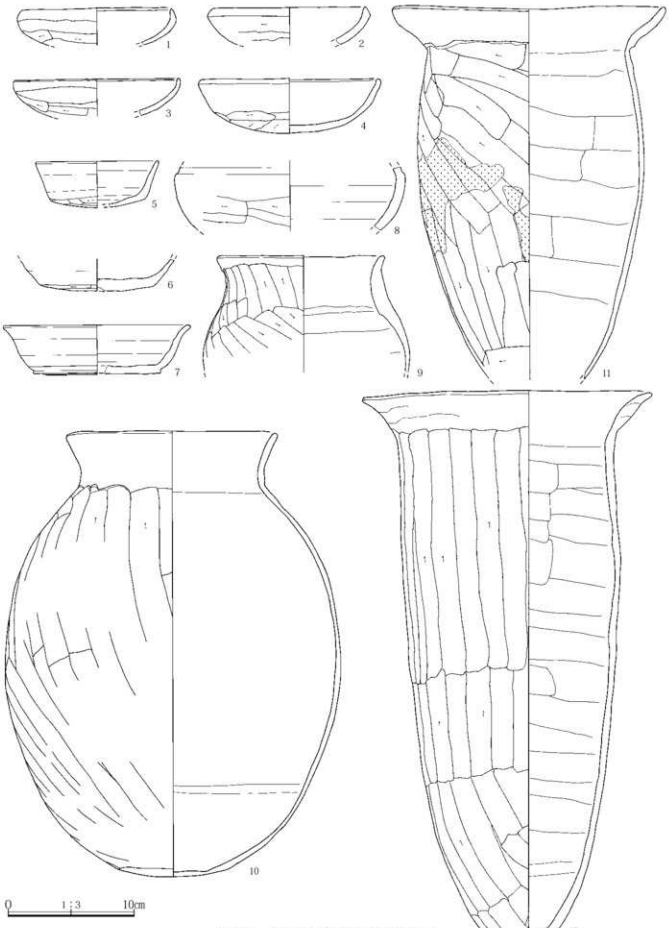
竈　東北東壁のやや南寄りのほぼ中央に位置する。燃焼部はローム層を掘り込んで、形成され、建物の壁よりも内側に構築される。幅は0.90m、長さ0.75mであり焚き口の幅は0.30mである。煙道は竪穴住居の外側に延伸する。両袖は安山岩の亜角礫を芯材として粘土やシルトによって構築され、建物内にやや大きく張り出す。焚口の天井部は土師器の長胴甕を横に２個体連結して渡し、土器を芯材として作られている。支脚は底面中央よりやや北側寄りの位置で、河川礫を立てたままの状態で検出された。このことから、大小の竈の横列２個懸けの可能性がある。

貯蔵穴　掘り方の調査で竈の右側に位置する、ひょうたん形の土坑を貯蔵穴と認定した。長径は0.79m、短径0.48m、深さ0.21mで床の高さに近い場所から土師器の甕と坏が出土している。

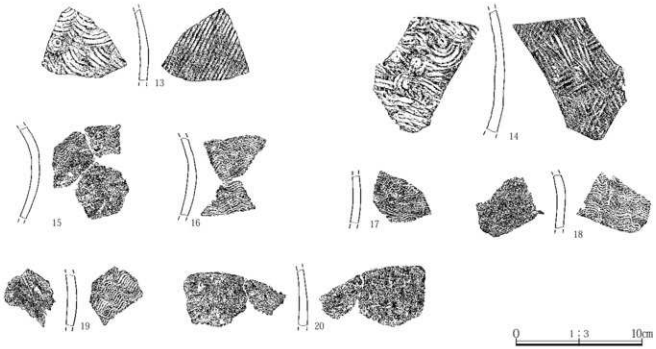
柱穴　床面や掘り方には見られなかった。

特徴　一辺が４～５mに及ぶ竪穴住居であるが、床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。３号や４号竪穴住居と規模及び柱穴を持たない点で共通することから、当調査区の同時期の竪穴住居の特徴と考えられる。

遺物　竈から土師器の長胴甕(11､12)や床面から甕(10)、貯蔵穴付近の床から土師器の甕（９）や坏（４）、埋土から須恵器の甕、坏などが出土している。甕（９）は正立位で出土しており、土器台として転用された可能性がある。また少量の弥生時代後期樽式土器の破片(15～20)が出土したが、これらは埋土の堆積にともなって周辺からもたらされた遺物である。



第53図　A区５号竪穴住居の出土遺物（１）



第54図　A区５号竪穴住居の出土遺物（２）

時代　土師器の坏（１～３）は内部に彎曲が強い、須恵器の坏（５）は小型で土師器の甕(12)の削りが縦方向だけであるなどの点から、土器からは７世紀後半代の様相が強い。しかし竈の焚口架構材とした土師器の甕(11)の胴部上位削りが横方向である点を見ると７世紀第４四半期から８世紀第１四半期とみられる。

６号竪穴住居（第55～57図、PL.19-5～20-3・58、194・195頁）

位置　調査区のほぼ中央から若干南西寄り。

グリッド　93E17・18、93F17・18

主軸方位　N104°E。

重複　なし。

形状と規模　南北に長軸を有する長方形状を呈する。長辺は4.02m、短辺3.47m、床面までの深さ0.71m。掘り方までの深さ0.88m、面積10.91㎡である。

埋土　黒褐色土とロームまじりの黄灰色火山灰土が南北の両壁から基底に堆積し、中央部を黒色土とロームまじりの黄灰色火山灰土の互層が満たしている。

床面　ローム層を全体的に比較的平坦に掘り込んだ上に黒褐砂質色土や淡黄橙色土をやや厚く貼って平坦な床面を形成している。

掘り方　全体的に比較的平坦であるが、北壁の周囲に若干の凹凸が見られる。床面と掘り方との間の厚さは0.15～0.17m前後である。また、北東隅及び北西隅には掘り方の調査段階で下位から同規模の浅い竪穴住居を検出した。しかし６号竪穴住居がこの住居の建て替えなのか、あるいは重複なのかは判別できなかった。なお、竈の周囲には、同様の張り出しが見られるが、これは別の遺構が重複している可能性が高い。

周溝　なし。

竈　東壁の南寄りに位置する。両袖及び燃焼部はローム層を掘り込んで形成され、燃焼部は竪穴住居の壁に形成される。幅は0.53mよりも大きい。長さは1.55mであり焚き口の幅は0.53mである。煙道は緩傾斜で１mほど竪穴壁際から外側に延伸する。両袖はほとんど失われていた。

貯蔵穴　なし。

柱穴　床面や掘り方には見られなかった。

特徴　一辺が４mの小型の竪穴住居であり、床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。

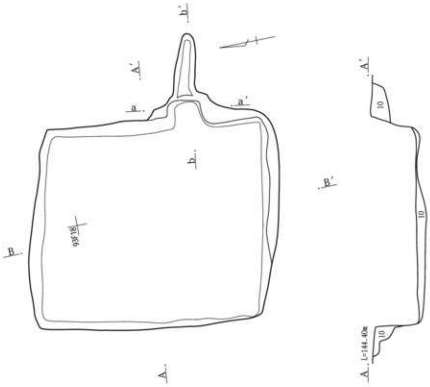
遺物　埋土から土師器の坏（１、２）や甕（８）、須恵器の坏（３～６）、高盤（７）が出土している。

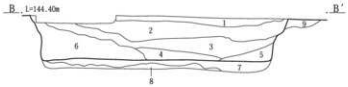
時代　出土遺物から奈良時代８世紀第２四半期と考えられる。

７号竪穴住居（第58～60図、PL.20-4～21-1・58、195頁）

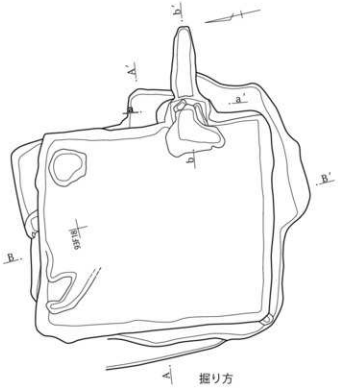
位置　調査区のほぼ中央から南寄端。

グリッド　93C16・17、93D16・17

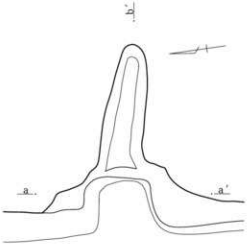




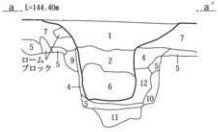
1．暗灰色　As-Cまじり。火山灰上。
2．暗黄灰色　ロームブロックを多く含む。火山灰上。
3．暗灰～黄灰色　ロームまじり。 火山灰と互層。
4．黒色火山灰上
5．暗灰色火山灰上
6．ロームまじり　暗黄灰色火山灰上。
7．黒褐色砂質土　灰黄褐色砂質土と浅黄橙色粘質土の斑状混上。
8．浅黄橙色粘質土　粘性強い。緻密。
9．灰褐色砂質土　ローム粒まじり。
10．黄褐色砂質土　ローム粒まじり。



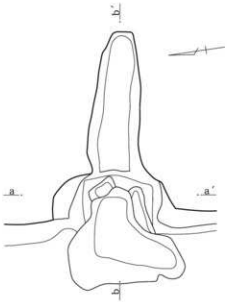
第55図　A区6号竪穴住居（1）



カマド

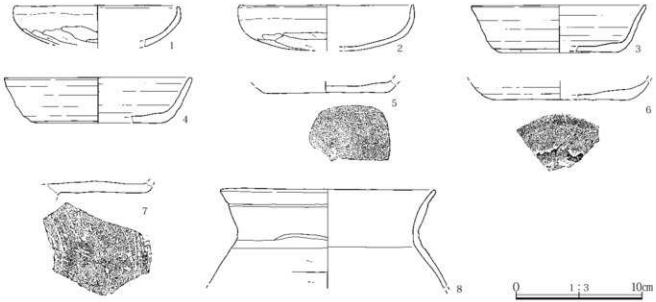


1．黒褐色砂質土　As-C軽石を10%、径１～５㎜のローム粒を５％混。均質。
2．鈍い黄褐色砂質土　黒褐色砂質土との斑状の混土で、全体に鉄分、下位に焼土が混入。
3．暗褐色砂質土
4．鈍い黄橙色粘質土
5．褐灰色粘質土　縞状に焼土が混入。緻密。
6．被熱して赤く変色した鈍い黄橙色粘質土。
7．鈍い黄褐色砂質土と鈍い黄橙色粘質土と褐灰色粘質土と焼土との混土。緻密。
8．鈍い黄褐色砂質土と鈍い黄橙色粘質土と褐灰色粘質土の混土が被熱し、全体に淡い赤色に変色している。
9．黒褐色砂質土
10. 黄白色粘質土
11. 鈍い黄褐色砂質土　径１㎝ローム粒混。
12. 黒灰と焼土粒との混土。



カマド掘り方

第56図　A区６号竪穴住居（２）



第57図　A区６号竪穴住居の出土遺物

主軸方位　N70°E

重複　西半分を１号溝によって切られる。

形状と規模　北北西－南南東方向に長軸を有する長方形を呈する。長辺は4.00m、短辺3.20m、床面までの深さ0.35m。掘り方までの深さ0.43m、面積10.87㎡である。

埋土　黒褐色土の互層に浅間Cテフラの軽石粒がまじり成層している。下位ほど軽石粒が多い。

床面　ローム層を凹凸に掘り込んだ上に明黄褐色土を薄く貼って、平坦な床面を形成している。

掘り方　全体的に凹凸を呈し、大規模に掘り込まれている。床面と掘り方間の厚さは0.02～0.08mである。建物の竈左側の角には浅い床下の土坑が検出されている。

周溝　なし。

竈　東壁の南寄りに位置する。両袖及び燃焼部はローム層を掘り込んで形成され、燃焼部は竪穴住居の壁に形成される幅は1.05m、長さ1.05mであり焚き口の幅は0.53mである。煙道は奥壁と同一傾斜で残っている。両袖は建物の内部に張り出している。竈前には灰や炭化物の薄層がみられ、0.1mの厚さの灰や焼土が互層して燃焼面を構成している。

貯蔵穴　なし。

柱穴　床面や掘り方には見られなかった。

特徴　長辺が４mの小型の竪穴住居であり、床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。

遺物　床面、竈内や竈前庭部からまとまって遺物が出土している。これらは土師器の甕（７、９）や坏（４、３）などである。また建物の中央部付近の床面からは円礫を利用した砥石（11、12）が出土している。

時代　奈良時代８世紀第１四半期。

８号竪穴住居（第61～63図、PL.21-1～22-1・59、195頁）

位置　調査区の中央から北東寄り。

グリッド　92Ｓ・Ｔ20、２Ｓ・Ｔ１

主軸方位　Ｎ２°Ｅ（２号竈による）。

重複　北西隅から北東側にかけて、北側の約三分の一を３号溝及び２号道によって掘り込まれる。

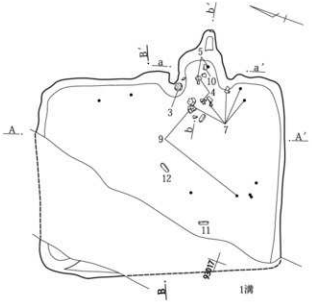
形状と規模　北北西－南南東方向に長軸を有する長方状を呈する。南壁のほぼ中央が外に向かって張り出しており、建物への入口の可能性がある。長辺は3.87m、短辺3.65m、床面までの深さ0.54m。掘り方までの深さ0.60m、面積11.00㎡である。

埋土　黒褐色砂質土の互層で東西の両壁側から住居を埋没している。下位ほどロームブロックや浅間Cテフラの量が多く、上位は薄層が水平に堆積している。

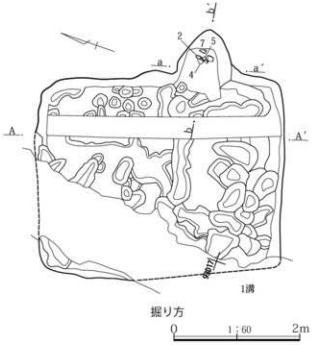
床面　ローム層を凹凸に大規模に掘り込み、明黄褐色土を薄く貼って、平坦な床面を形成している。

掘り方　全体的に凹凸に掘り込まれている。床面と掘り方の間の厚さは0.01～0.06m。壁に沿う形で一段深い窪みがみられる。

周溝　南西隅から北西隅にかけての西壁の全域と北壁の竈までの約三分の二の壁際を周回する。最大の上幅は0.



1．黒褐色土　白色粒混。
2．黒褐色土　白色粒少量混。
3．黒褐色土　白色・黄色・橙色粒少量混。
4．暗褐色土
5．暗褐色土　白色粒や炉多混。
6．褐色土　黄褐色粒多混。
7．明黄褐色土　黄褐色、橙色粒多混。



第58図　Ａ区７号竪穴住居（１）

30m、最大下幅0.05m、深さ0.01mである。この周溝は、建物の建て替えに伴い使用された可能性が高い。

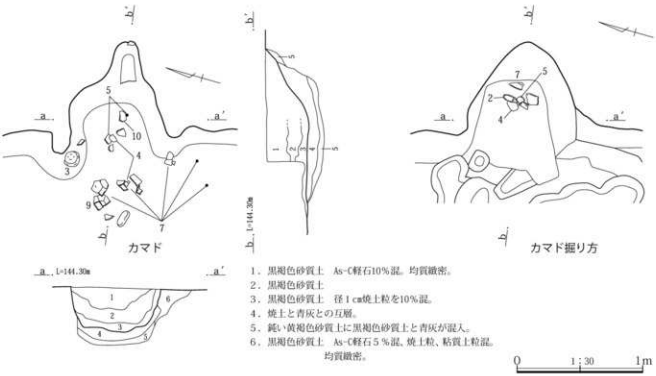
竈　東壁のほぼ中央と、北壁の東寄りに位置する。東壁の竈を１号、北壁の竈を２号竈とした。８号竪穴住居は１号竈を使用して居住した後に、竈を廃棄した。またあらたに２号竈を構築し、竪穴住居も北西に若干拡張を行っている。

１号、２号竈は燃焼部、煙道はローム層を掘り込んで構築され、燃焼部は壁と同じ位置に作られる。煙道は１号竈では少し外側に、２号竈では建物の外側に延伸する。両袖は２号竈では粘土やシルトで作られており、竪穴住居の内側に少しだけ張り出す。１号竈の袖は使用後に失われた。１号竈の幅は0.75mより大きく、長さ0.60mであり焚き口の幅は0.45mである。２号竈の幅は0.90m、長さ0.98mであり焚き口の幅は0.38mである。

貯蔵穴　南東隅及び北東隅に位置する。南東隅の貯蔵穴は１号竈に対応する１号貯蔵穴で、北東隅の貯蔵穴は２号竈に対応する２号貯蔵穴とした。１号貯蔵穴は南北に長い隅が丸い長方形を呈し、長径は0.63m、短径0.56m、深さ0.24mである。２号貯蔵穴は南北に長い楕円形を呈し、長径は0.62m、短径0.53m、深さ0.28mである。

柱穴　なし。

特徴　長辺が４mの小型の竪穴住居であり、床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。本遺構は、竈の作り替えが見られる竪穴住居であり、新たに作られ



第59図　A区７号竪穴住居（２）

た竈は小神明富士塚遺跡や小神明勝沢境遺跡の竪穴住居に検出例が少ない北側に位置する竈である。

遺物　２号竈が使用された床面の全体に分布し、土師器の坏（３～５）甕（８）が出土した。また坏の一部には有稜口縁を呈する特徴がある。また、埋土の中からは縄文時代の加工痕のある剥片が１点出土しているが、埋土に混入した遺物である。

時代　古墳時代７世紀前半。

９号、10号竪穴住居（第64～67図、PL.22-2～23-4・59、195・196頁）

位置　調査区の中央からやや北東寄り。

グリッド　93A・B20、３A・B１

主軸方位　９号竪穴住居はN109°E。10号竪穴住居はN５°Eである。

重複　遺構の上部は北側を３号溝と２号道によって切られる。また９号竪穴住居の北西隅は遺構上面を16号土坑によって掘り込まれている。９号竪穴住居の床面で10号竪穴住居が検出されており、10号竪穴住居は遺構の大部分が９号竪穴住居の構築により失われた。

９号竪穴住居と10号竪穴住居は、大きさや竈の位置が異なるが、建物の形は似ており中心の位置も同一である。このことから９号竪穴住居を意識して10号竪穴住居を作り替えた可能性がある。

形状と規模　９号竪穴住居は北北東－南南西方向に長軸を有する長方形を呈する。長辺は5.77m、短辺5.22m、床面までの深さ0.40m、掘り方までの深さ0.46m、面積25.52㎡である。10号竪穴住居は、掘り方の検出であるが、９号竪穴住居と同一方向に長軸を有する長方形を呈し、長辺は4.08m、短辺3.85m、掘り方までの深さ0.54m、面積13.50㎡である。

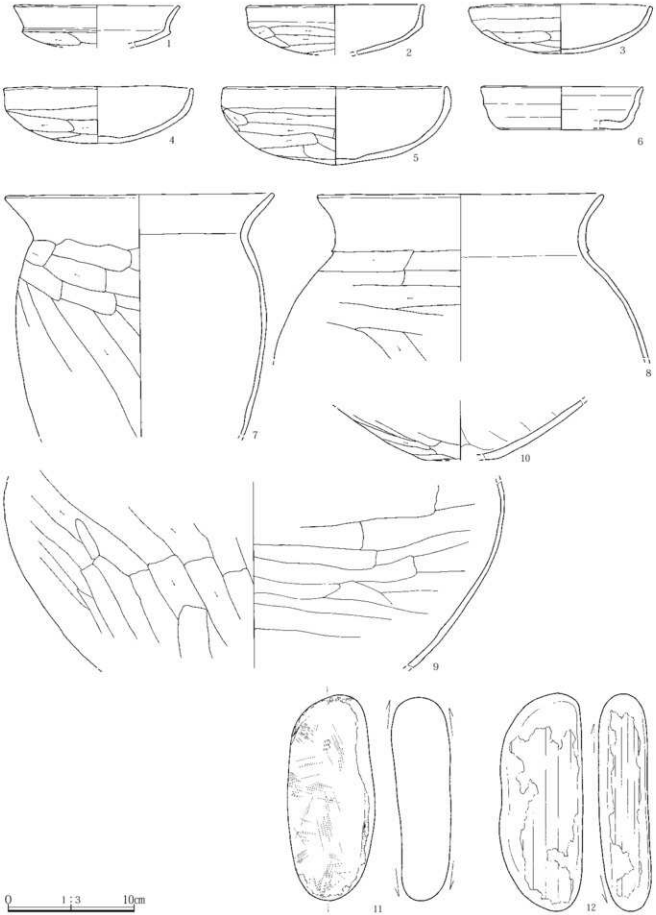
埋土　黒褐色砂質土の互層で緩やかな水平堆積を呈しながら住居を埋めている。暗灰色と黄灰色土の互層になりロームブロックが多く含まれる。

床面　９号、10号竪穴住居ともにローム層を凹凸に大規模に掘り込んで床面を形成している。

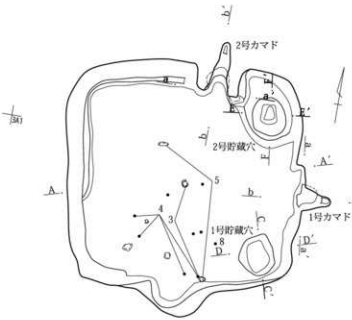
掘り方　10号竪穴住居では全体的に凹凸に大規模な掘り込みが観察され、床面と掘り方の間の厚さは0.01～0.06mである。

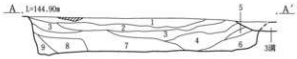
周溝　９号、10号竪穴住居ともなし。

竈　９号竪穴住居では東壁の南東隅寄りに位置する。両袖は粘土やシルトで作られ、燃焼部はローム層を掘り込んで形成され、燃焼部は建物の内側に作られている。幅は推定で0.83m、長さ0.75mであり焚き口の幅は0.60mである。両袖は大部分が失われ、床面に少し痕跡が遺って



第60図　A区７号竪穴住居の出土遺物



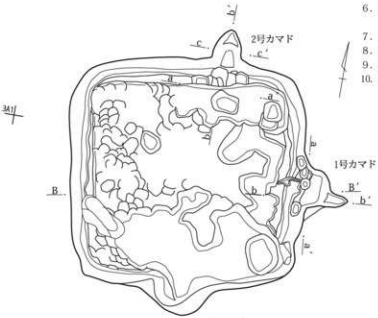


1．黒褐色砂質土　均質緻密。

1．黒褐色砂質土　下位に径１～５mmのローム粒多混。均質緻密。

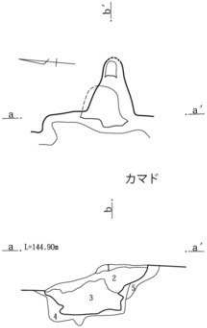
1．黒褐色砂質土　As-C軽石を10％、ローム粒混。均質。
2．黒色砂質土　粘性あり、均質。
3．黒褐色砂質土　As-C軽石、径１～５mmのローム粒混。均質。
4．黒褐色砂質土　As-C軽石、径１～５mmのローム粒混。均質。明るく灰色がかった色調を呈する。
5．黒褐色砂質土　As-C軽石、径１～５mmのローム粒多混。均質。明るく灰色がかった色調を呈する。
6．純い黄褐色砂質土　径１～５mmのローム粒、径１mm以下の焼土粒混。粘性を帯び、密。
7．黒褐色砂質土　As-C軽石、径１～５mmのローム粒混。均質緻密。
8．暗褐色砂質土　径１～10mmのローム粒30％混。均質。
9．黒褐色砂質土　As-C軽石、径１～５mmのローム粒混。均質。
10．暗褐色砂質土　径１cm前後のローム粒・塊10％混。、均質緻密。

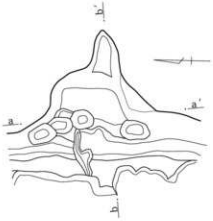
0　1：60　2m



第61図　A区８号竪穴住居（１）

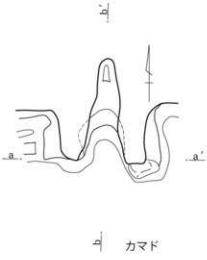
８号竪穴住居１号カマド

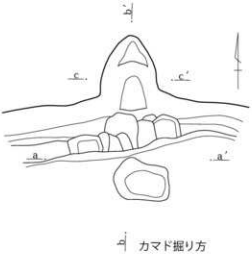




1．黒褐色砂質土　As-C軽石混。緻密。
2．暗褐色砂質土　均質緻密。
3．灰白色粘土　粘性強く、硬質緻密。
4．灰黄褐色砂質土　ローム粒多混。
5．鈍い黄褐色砂質土　均質緻密。

８号竪穴住居２号カマド



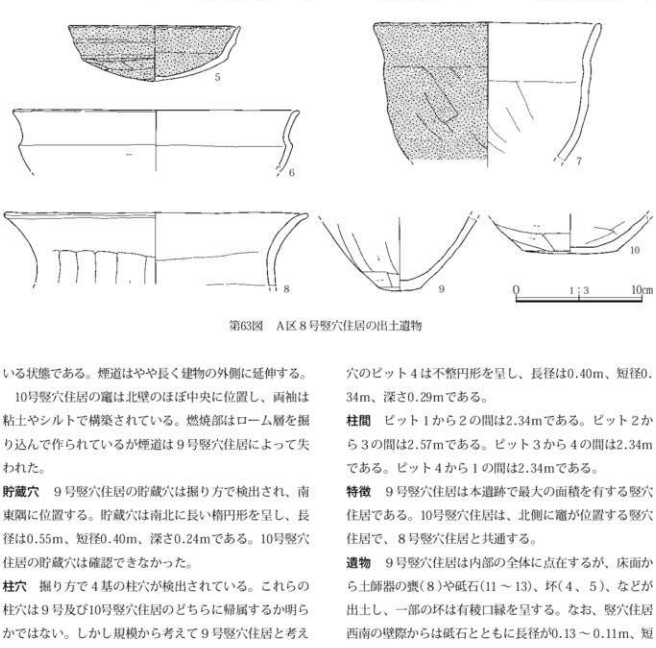


８号竪穴建物２号カマド
1．黒褐色砂質土　粘土粒、ローム粒混。
2．暗灰色粘土　ローム粒混じる粘性強。
3．黒褐色砂質土　粘土粒、ローム粒混。
4．灰白色粘土
5．褐色砂質土　黒灰混。
6．暗灰色粘土　焼土混。全体に赤みを帯びる。
7．黒褐色砂質土　ローム混。
8．青灰色シルト質土
9．青灰色に変色したロームに粘土が混入。
10．鈍い黄褐色土　粘土混。均質緻密。

８号竪穴建物２号カマドc-c'
1．黒褐色砂質土
2．灰褐色砂質土　粘性あり。緻密。
3．灰褐色砂質土　焼土混。
4．鈍い黄橙色砂質土。

0　1:30　1m

第62図　A区８号竪穴住居カマド（２）



第63図　A区８号竪穴住居の出土遺物

いる状態である。煙道はやや長く建物の外側に延伸する。

10号竪穴住居の竈は北壁のほぼ中央に位置し、両袖は粘土やシルトで構築されている。燃焼部はローム層を掘り込んで作られているが煙道は９号竪穴住居によって失われた。

貯蔵穴　９号竪穴住居の貯蔵穴は掘り方で検出され、南東隅に位置する。貯蔵穴は南北に長い楕円形を呈し、長径は0.55m、短径0.40m、深さ0.24mである。10号竪穴住居の貯蔵穴は確認できなかった。

柱穴　掘り方で４基の柱穴が検出されている。これらの柱穴は９号及び10号竪穴住居のどちらに帰属するか明らかではない。しかし規模から考えて９号竪穴住居と考えるのが妥当であろう。

ピット２はピット５を掘り替えたものである。北東に位置する柱穴のピット１は隅が丸い方形状を呈し、長径は0.45m、短径0.43m、深さ0.25mである。南東に位置する柱穴のピット２は南北に長い楕円形を呈し、長径は0.55m、短径0.37m、深さ0.25mである。南東に位置する旧柱穴のピット５は南北に長い楕円形を呈し、長径は0.50m、短径0.26m＋、深さ0.32mである。南西に位置する柱穴のピット３は隅が丸い方形を呈し、長径は0.32m、短径0.31m、深さ0.11mである。北西に位置する柱穴のピット４は不整円形を呈し、長径は0.40m、短径0.34m、深さ0.29mである。

柱間　ピット１から２の間は2.34mである。ピット２から３の間は2.57mである。ピット３から４の間は2.34mである。ピット４から１の間は2.34mである。

特徴　９号竪穴住居は本遺跡で最大の面積を有する竪穴住居である。10号竪穴住居は、北側に竈が位置する竪穴住居で、８号竪穴住居と共通する。

遺物　９号竪穴住居は内部の全体に点在するが、床面から土師器の甕(８)や砥石(11～13)、坏(４、５)、などが出土し、一部の坏は有稜口縁を呈する。なお、竪穴住居西南の壁際からは砥石とともに長径が0.13～0.11m、短径0.05～0.03m程度の安山岩や石英閃緑岩の扁平な亜円礫が７点出土している。これらは重さが660～280gの河川礫からなり、こも編石として利用された可能性が高い。10号竪穴住居の竈からは土師器の甕(２)が出土した。

時代　古墳時代６世紀後半。

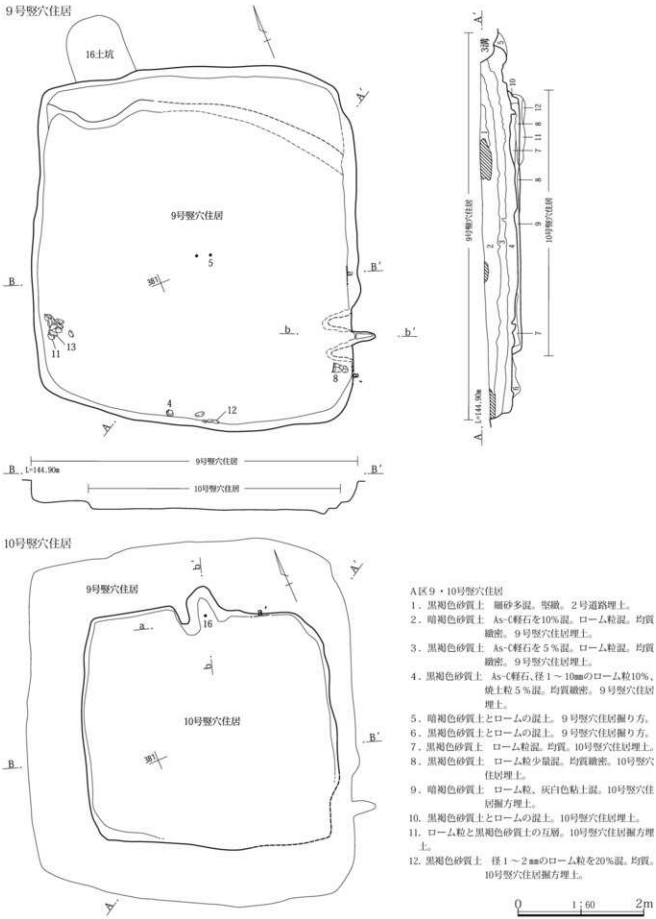
11号竪穴住居(第68・69図、PL.23-5～24-3・59、196頁)

位置　調査区の中央北端。

グリッド　３Ｃ３・４

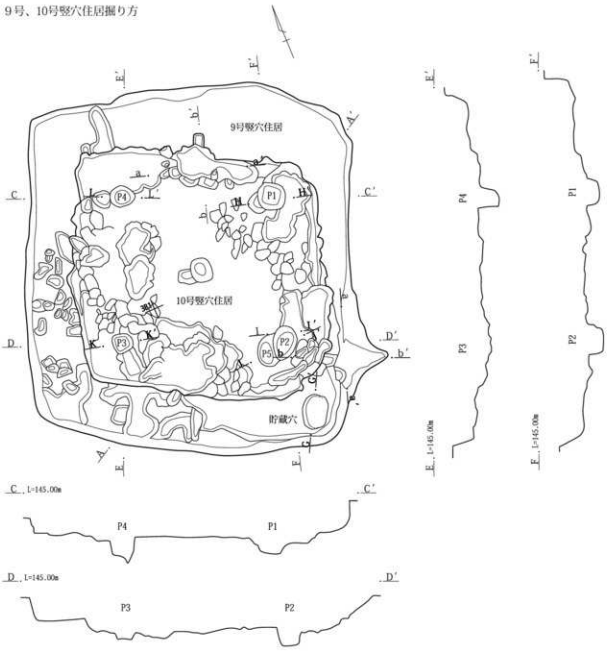
主軸方位　N69°E。

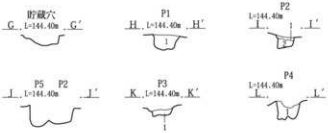
重複　なし。



第64図　A区９号、10号竪穴住居（１）

9号、10号竪穴住居掘り方





9・10号竪穴住居ピット１・３
1．黒褐色砂質土　径５～10mmのローム粒を10%混。
　　均質緻密。

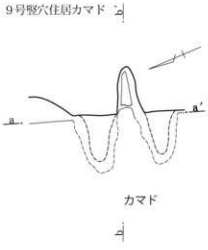
9・10号竪穴住居ピット４
1．黒褐色砂質土　下位に径５～10mmのローム粒を
　　多混。

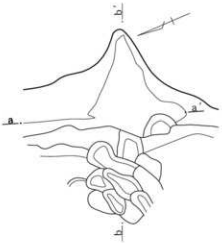
9・10号竪穴住居ピット５・６
1．暗褐色砂質土　径１～10mmのローム粒少混。
2．黒褐色砂質土　均質。

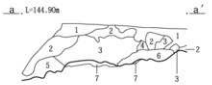
0　1:60　2m

第65図　A区９号、10号竪穴住居（２）

９号竪穴住居カマド

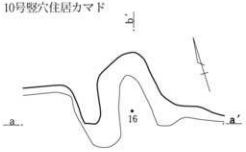


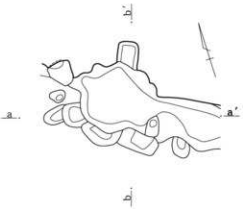




９号竪穴住居カマド
１．黒褐色砂質土　均質緻密。
２．鈍い黄褐色砂質土　褐灰色粘土多混。焼土粒少混。
　　緻密。
３．褐灰色粘土　As-C軽石少混。径１～２mmの焼土粒
　　10%混。緻密硬質。
４．焼土　カマド内壁が剥落堆積したもの。
５．鈍い黄褐色砂質土を主体として褐灰色粘土混。
６．鈍い黄褐色砂質土　粘土、焼土、黒褐色砂質土混。
７．黒褐色砂質土　均質緻密。10号竪穴住居理土。
８．黄白色粘土

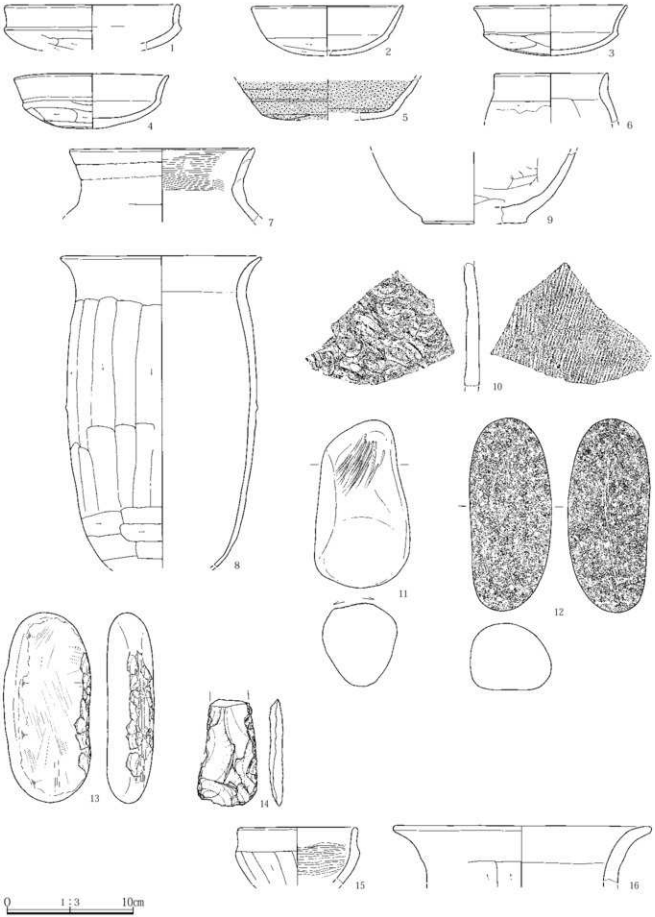
10号竪穴住居カマド



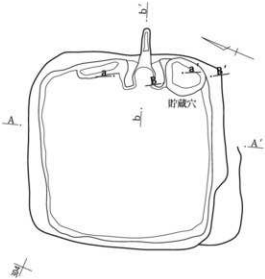


10号竪穴住居カマド
１．褐灰色粘土　黒褐色砂質土との混土。焼土粒混。
２．ローム塊
３．黒灰
４．暗褐色砂質土　最大径３mm程度の焼土粒多混。焚口側に
　　はローム粒混。密。
５．灰黄褐色砂質土　径５～10mmのローム粒10%混。緻密。
６．暗褐色砂質土
７．焼土塊　粘土が被熱赤変。

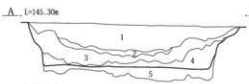
第66図　A区９号、10号竪穴住居（３）



第67図　A区9号、10号竪穴住居の出土遺物



掘り方

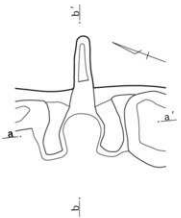


貯蔵穴

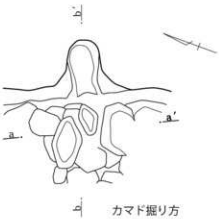
1．黒褐色砂質土　径１～２cmのローム粒10%混。均質緻密。

1．黒褐色砂質土　上位10cmにAs-Cが多い。下位は径１～２mmのローム粒10%混。均質。
2．黒色砂質土　粘性強。均質。
3．黒褐色砂質土　南側は径１mm前後の細砂30%混。北側は２層に近い粘性を帯び、径１～10mmのローム粒まばらに混。緻密。
4．黒褐～純い黄褐色砂質土　北と南とで明暗差あり。北側が明るく径１～２mmのローム粒多混。緻密。
5．ソフトロームと黒褐色砂質土の混土　黄褐色の硬質なローム塊、２～３cmの円礫混。

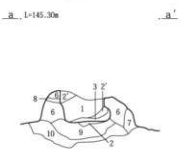
0　1:60　2m



カマド



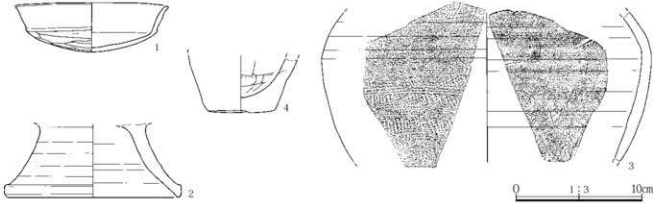
カマド掘り方



1．暗褐色砂質土　径１～５mmの灰白色粘土粒、径１～２mmの焼土粒混。
2．暗褐色砂質土　径１～５mmの灰白色粘土粒、径１～２mmの焼土粒混。１層に比べて灰白色粘土粒多。
3．黒褐色砂質土　灰混。均質。
4．焼けた暗褐色砂質土
5．黒褐色砂質土　As-C軽石、１mm以下のローム粒10%混。均質緻密。
6．褐灰色粘土　緻密。
7．褐灰色粘土と黒褐色砂質土との混土。
8．暗褐色砂質土　均質緻密。
9．黒灰を主に、褐灰色粘土と暗褐色砂質土の混土。
10．暗褐色砂質土　径１～２cmのローム粒多混。
11．純い黄褐色砂質土　焼土粒混。緻密。
12．褐灰色粘土を主体とした黒褐色砂質土との混土。緻密。

0　1:30　1m

第68図　A区11号竪穴住居



第69図　A区11号竪穴住居の出土遺物

形状と規模　東北東－西南西方向に長軸を有する長方形を呈する。長辺は3.17m、短辺3.13m、床面までの深さ0.73m。掘り方までの深さ0.93m、面積6.52㎡である。竈の左には細長い溝状の窪みが見られる。

埋土　黒褐色砂質土の互層で埋没し、南北の両壁際からローム質の暗黄灰色土が基底部の壁際を埋めた後、黒色土が中央部に皿状に堆積している。住居の大部分は火山灰を含む暗灰色土で埋没している。

床面　ローム層を凹凸に大規模に掘り込んだ上にローム層と黒褐色砂質土を厚く貼って、平坦な床面を形成している。

掘り方　全体的に凹凸に大規模に掘り込まれ、床面と掘り方間の厚さは0.07～0.20mである。壁際は一段深い窪みが認められる。

周溝　南西隅から北西隅にかけての西壁の全域と北壁の竈までの約三分の二の壁際を周回する。最大の上幅は0.30m、最大の下幅は0.05m、深さ0.20mである。

竈　東壁のほぼ中央に位置する。両袖や燃焼部は粘土やシルトで作られ、燃焼部は壁よりも内側に作られる。幅は0.68m、長さ0.90mであり焚き口の幅は0.25mである。また煙道は長く延伸し、両袖は内側に大きく張り出している。

貯蔵穴　東隅に位置する。南北に長い楕円形を呈し、長径は0.63m、短径0.60m、深さ0.22mである。

柱穴　床面や掘り方には見られなかった。

特徴　一辺が3mの小型の竪穴住居であり、床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。

遺物　埋土から須恵器の瓶（3）や高盤（2）、土師器の坏（1）が出土している。

時代　古墳時代7世紀前半。

12号竪穴住居（第70図、PL.24-4～25-1）

位置　調査区の中央西端。

グリッド　3J・K1、3J・K2

主軸方位　N92°E

重複　50号土坑に掘り込まれる。

形状と規模　南北に長軸を有する長方形を呈する。遺構の大部分が削剥を受け、残存状態は良くない。長辺は4.17m、短辺2.96m、掘り方までの深さ0.25m、面積10.71㎡である。径0.30～2.00m程度の大きな岩や河川礫が検出されたが、その大きさや位置からみて、竪穴住居に伴うものとは考えられないので、床面は巨礫の上面付近と思われる。

床面　失われている。

掘り方　黒褐色砂質土で埋められ全体的に凹凸に大規模に掘り込まれている。

周溝　なし。

竈　東壁の南寄りに位置する。両袖、燃焼部ともにローム層を掘り込んで形成され、燃焼部は壁よりも外側に作られている。長さは0.60mであり焚き口の幅は0.40m程度である。煙道は外側に延伸する。両袖は失われている

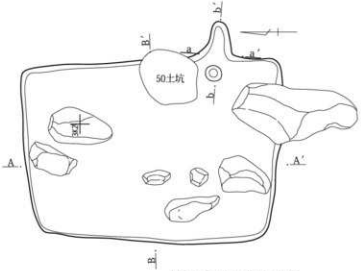
貯蔵穴　なし。

柱穴　掘り方にはみられなかった。

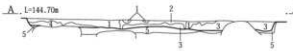
特徴　長辺が4mあまりの小型の竪穴住居であり、床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。

遺物　土師器の細片が少量と結晶片岩の剥片が出土している。結晶片岩の剥片は長さが約0.03m、板状で周縁を打ち欠いているが穿孔はない。

時代　不明であるが古墳時代の可能性が高い。

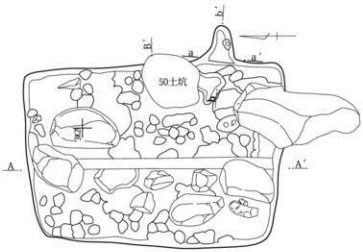


床面から掘り方間の上部

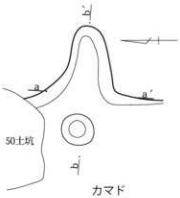


1．黒褐色砂質土　均質緻密。
2．鈍い黄褐色砂質土　均質緻密。
3．黒褐色砂質土　径１～３mmのローム粒混。均質緻密。
4．黒褐色砂質土　ローム粒多混、黄色味を帯びる。均質緻密。
5．鈍い黄褐色砂質土と黒褐色砂質土との混土。

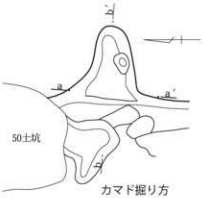
0　1:60　2m



掘り方



カマド



カマド掘り方

1．黒褐色砂質土　均質緻密。
2．鈍い黄褐色砂質土
3．黒褐色砂質土　１・２層とは異質。下位には粗砂・小礫混。均質緻密。

0　1:30　1m

第70図　A区12号竪穴住居

4．掘立柱建物

A区では掘立柱建物７棟が検出されている。調査区の西側にほぼまとまって検出されており、これらの建物群はほとんどが古代の建物と考えられる。

掘立柱建物はいずれも桁行３間、梁間２間程度の小規模な側柱建物か、１～２間、２～３間ほどの側柱建物である。建物の主軸は、東西棟か南北棟が多く、規格性に乏しいことから、計画的に整然と配置されたものとはいえない。

１号掘立柱建物(第71図、PL.25-2、196頁)

位置　調査区北東隅。

グリッド　２ＰＱ１、２ＰＱ２

主軸方位　N80°W

重複　なし。２号溝や３号溝の方向に桁行の方向が近似し、調和的である。

形状と規模　桁２間、梁間１間の東西に長い側柱建物で、長辺は4.78m、短辺2.72m、柱間は約2.20～2.40mである。

柱穴　建物を構成する柱穴はピット１からピット６の６基検出された。いずれもほぼ楕円形を呈し、規模は小さいがしっかりとした掘り方を有する。建物の隅を構成する柱穴には、桁間0.50m程度離れた位置に柱穴を伴い、これらはピット７から11の５基の柱穴である。しっかりした掘り方を持つピット８以外は浅い凹み状のピットである。柱穴に柱痕はいずれも検出できなかった。

ピット１は長径0.19m、短径0.13m、深さ0.08m。

ピット２は長径0.30m、短径0.24m、深さ0.14m。

ピット３は長径0.30m、短径0.25m、深さ0.28m。

ピット４は長径0.25m、短径0.22m、深さ0.26m。

ピット５は長径0.31m、短径0.26m、深さ0.32m。

ピット６は長径0.21m、短径0.19m、深さ0.17m。

ピット７は長径0.17m、短径0.12m、深さ0.04m。

ピット８は長径0.22m、短径0.20m、深さ0.20m。

ピット９は長径0.18m、短径0.17m、深さ0.08m。

ピット10は長径0.15m、短径0.12m、深さ0.04m。

ピット11は長径0.14m、短径0.12m、深さ0.03m。

柱穴の埋土　暗褐色の浅間Ｂテフラを含む砂質土。

遺物　ピット９の埋土より須恵器の坏(１)が出土しており、遺物の年代は８世紀前半である。埋土に含まれるテフラよりも遺物の年代は古いので、柱穴に混入した遺物と考えられる。

時代　埋土の状況から、中世と推定されるが年代は不明である。

２号掘立柱建物(第72図、PL.25-2)

位置　調査区北中央隅。

グリッド　３Ｄ３

主軸方位　N84°E

重複　なし。

形状と規模　桁１間、梁間１間の正方形の建物で、長辺は2.14m、短辺2.02m、柱間は2.00mである。

柱穴　柱穴は４基検出され、形状はＶ字状を呈し、しっかりとした掘り方を有する。柱痕はみられなかった。

ピット１は直径0.36m、深さ0.43m。

ピット２は長径0.37m、短径0.36m、深さ0.46m。

ピット３は長径0.43m、短径0.42m、深さ0.44m。

ピット４は長径0.43m、短径0.36m、深さ0.44m。

柱穴の埋土　断面で黒色系の砂質土が柱痕、黄色系砂質土が掘り方の埋土と考えられる。

時代　浅間Ｂテフラを含まないといった埋土の状況から、古代と推定されるが年代は不明である。

３号掘立柱建物(第73図、PL25-4)

位置　調査区北西隅。

グリッド　３Ｈ・Ｉ２・３

主軸方位　Ｎ８°W

重複　６号溝や34号土抗よりも新しい。

形状と規模　桁３間、梁間２間の長方形の建物で、長辺は6.40m、短辺4.30m、柱間は約2.00～2.20mである。

柱穴　柱穴は９基検出され形状は箱形状を呈し、しっかりとした掘り方を有する。ピット２、３、６の柱穴底には地山に含まれる礫が一部露出している。これは自然の礫をそのまま礎石のように利用した可能性がある。また、ピット６と７の柱間には地山の礫が見られ柱穴は認められないが礎石として利用された可能性がある。

ピット１は長径0.46m、短径0.43m、深さ0.35m。

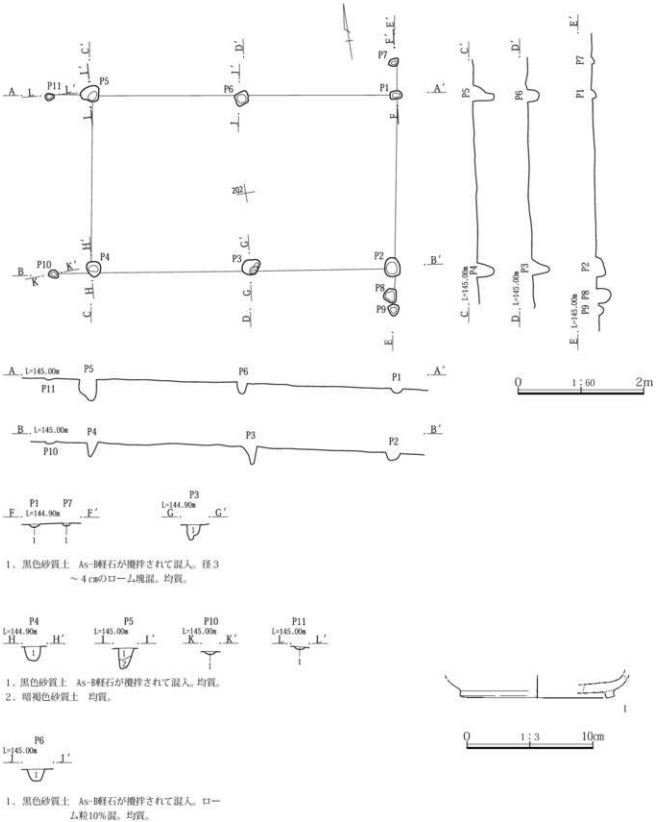
ピット２は直径0.41m、深さ0.17m。

ピット３は長径0.50m、短径0.40m、深さ0.26m。

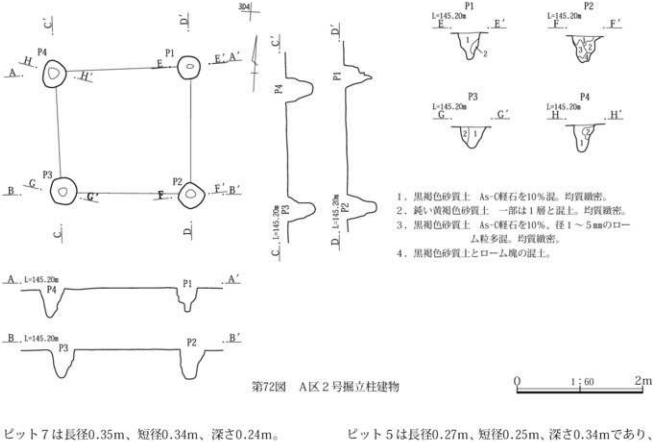
ピット４は長径0.53m、短径0.45m、深さ0.30m。

ピット５は長径0.43m、短径0.39m、深さ0.23m。

ピット６は長径0.37m、短径0.33m、深さ0.18m。



第71図　A区１号掘立柱建物と出土遺物



第72図　A区２号掘立柱建物

ピット７は長径0.35m、短径0.34m、深さ0.24m。

ピット８は長径0.42m、短径0.40m、深さ0.30m。

ピット９は長径0.36m、短径0.32m、深さ0.13m。

柱穴の埋土　断面では浅間Ｃテフラや榛名二ツ岳伊香保テフラを含む黒色系の砂質土や黄色系砂質土が見られる。

時代　遺構との層序関係、埋土が浅間Ｂテフラを含まないといった特徴から古代と推定されるが年代は不明である。

４号掘立柱建物(第74図、PL.25-5)

位置　調査区北西隅。

グリッド　３Ｇ４・５、３Ｈ４・５

主軸方位　N86°E

重複　他の遺構との重複はない。３号掘立柱建物とほぼ主軸が直交方向の位置にあること、桁行の規模が一致するため同時代ないし関連がある建物と推定される。

形状と規模　桁３間、梁間２間の長方形の建物で、長辺は6.36m、短辺3.65m、柱間は約2.00～2.20mである。

柱穴　柱穴は10基検出され断面形状はＶないしＵ字状を呈する。西側の梁間の柱穴は確認できない。また柱穴に明瞭な柱痕はみられなかった。

ピット１は長径0.33m、短径0.29m、深さ0.38m。

ピット２は長径0.30、短径0.27m、深さ0.11m。

ピット３は長径0.34m、短径0.22m、深さ0.25m。

ピット５は長径0.27m、短径0.25m、深さ0.34mであり、ピット５横の柱筋上には同規模のピット４がみられる。

ピット６は長径0.25m、短径0.24m、深さ0.21m。

ピット７は長径0.22m、短径0.20m、深さ0.25m。

ピット８は長径0.27m、短径0.22m、深さ0.24m。

ピット９は長径0.30m、短径0.22m、深さ0.34m。

ピット10は長径0.37m、短径0.25m、深さ0.49m。

柱穴の埋土　断面では浅間Ｃテフラを含む黒褐色砂質土である。

時代　浅間Ｂテフラを含まないといった埋土の状況から古代と推定されるが、年代は不明である。

５号掘立柱建物(第75図、PL.25-6)

位置　調査区西中央。

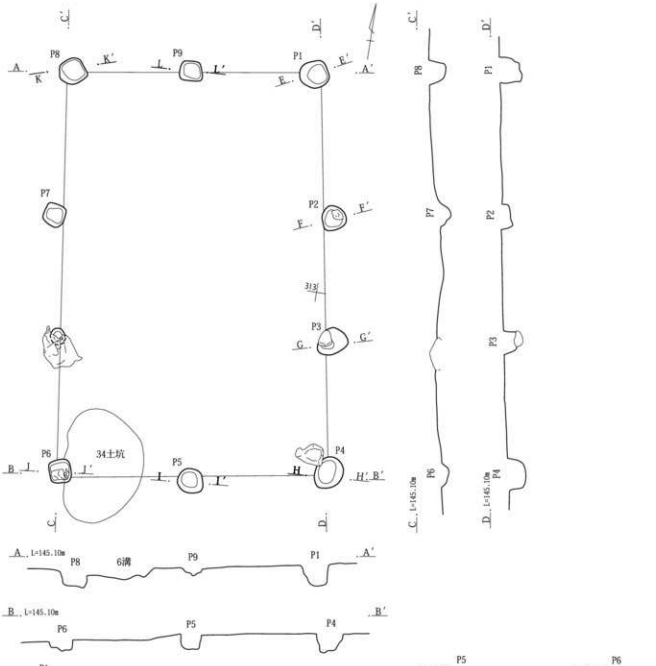
グリッド　93Ｇ・H20、３Ｇ・Ｈ１

主軸方位　ＥＷ

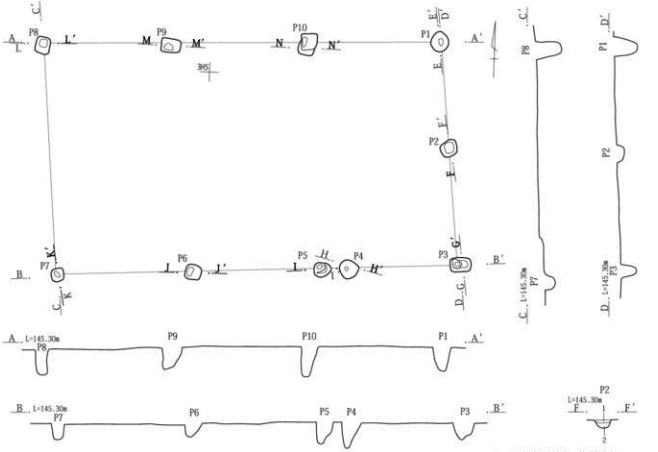
重複　ピット４は５号溝埋土を掘り込むので、５号溝よりも新しい。43、44土坑が内区で重なる。

形状と規模　桁３間、梁間１間の長方形の建物で、長辺は7.43m、短辺3.54m、柱間は約1.70～2.90mである。梁間の倍数は凡そ桁行の長さに相当する。

柱穴　柱穴は７基検出され形状は円筒状を呈し、しっかりした深さを有する。南側の桁行の柱穴は１基しか確認



第73図　A区３号掘立柱建物



1．黒褐色砂質土　均質緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石混。均質緻密。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石、細砂混。緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石、細砂、ローム粒混。
3．黄褐色粘質土　ローム塊。

P1・3・5～10号柱穴
1．黒褐色砂質土　As-C軽石、ローム粒混。均質緻密、硬質。
2．黒褐色砂質土　ローム粒やや多混。

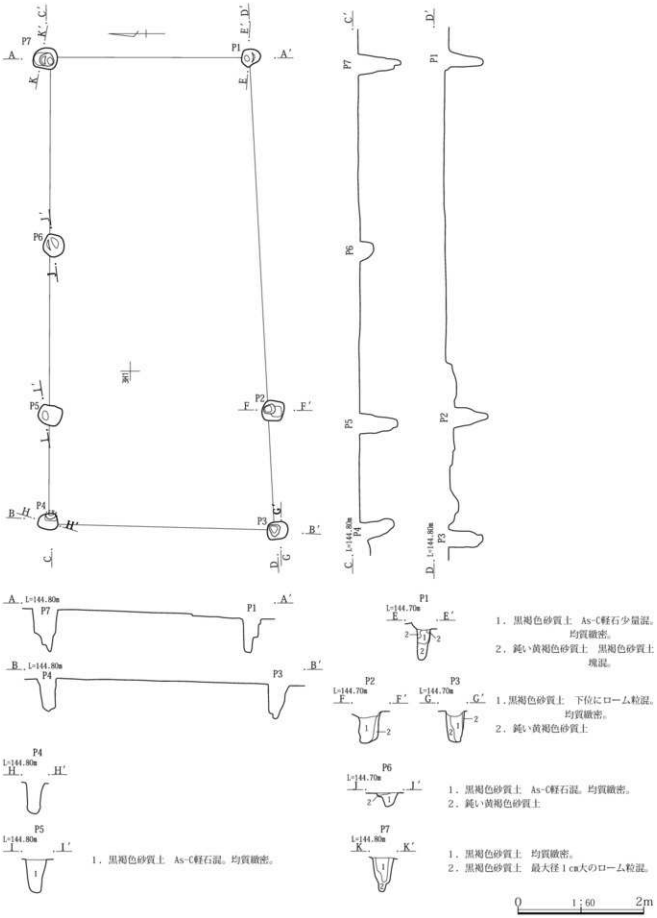
0　1:60　2m

第74図　A区４号掘立柱建物

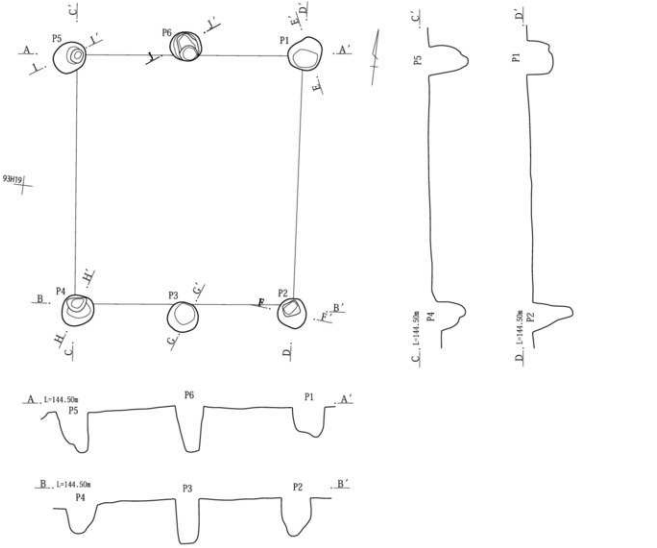
できない。柱穴に明瞭な柱痕はみられなかった。
ピット１は長径0.31m、短径0.26m、深さ0.66m。
ピット２は長径0.49m、短径0.46m、深さ0.66m。
ピット３は長径0.33m、短径0.28m、深さ0.55m。
ピット５は長径0.37m、短径0.31m、深さ0.60m。
ピット６は長径0.37m、短径0.34m、深さ0.21m。
ピット７は長径0.39m、短径0.34m、深さ0.67m。
柱穴の埋土　断面観察では黒褐色砂質土が柱痕、ロームを含む黒褐色砂質土や鈍い黄褐色砂質土が掘り方であると思われる。
時代　浅間Ｂテフラを含まないといった埋土の状況から、古代と推定されるが年代は不明である。

６号掘立柱建物（第76図、PL.25-7）
位置　調査区西中央。
グリッド　93Ｇ18・19
主軸方位　Ｎ６°Ｗ
重複　30号土坑が内区で重なる。
形状と規模　桁１間、梁間２間の長方形の建物で、長辺は3.95m、短辺3.55m、柱間は約1.70～3.95mである。
柱穴　柱穴は６基検出され、形状は箱形状を呈する。柱穴に明瞭な柱痕はみられなかった。
ピット１は長径0.57m、短径0.50m、深さ0.45m。
ピット２は長径0.49m、短径0.46m、深さ0.63m。
ピット３は直径0.48m、深さ0.70m。
ピット５は長径0.54m、短径0.46m、深さ0.64m。
ピット６は長径0.50m、短径0.46m、深さ0.71m。
柱穴の埋土　浅間Ｃテフラを含む黒褐色砂質土を主とする。
時代　浅間Ｂテフラを含まないといった埋土の状況から古代と思われるが、正方形を呈する形状や建物の規模から古墳時代前期の竪穴住居の可能性も考えられる。

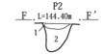
７号掘立柱建物（第77図、PL.25-8）
位置　調査区西中央。
グリッド　93Ｅ18・19
主軸方位　Ｎ６°Ｅ
重複　他の遺構との重複はない。
形状と規模　桁３間、梁間２間の長方形の建物で、長辺は4.53m、短辺3.48m、柱間は約1.30～1.50mである。
柱穴　柱穴は10基検出され形状はＵ字状を呈し、しっかりした深さを有する。柱穴に明瞭な柱痕はみられない。
ピット１は長径0.28m、短径0.26m、深さ0.33m。
ピット２は長径0.34m、短径0.31m、深さ0.21m。
ピット３は長径0.26m、短径0.24m、深さ0.18m。
ピット４は長径0.37m、短径0.31m、深さ0.60m。
ピット５は長径0.37m、短径0.33m、深さ0.33m。
ピット６は長径0.28m、短径0.27m、深さ0.20m。
ピット７は直径0.34m、深さ0.16m。
ピット８は長径0.28m、短径0.24m、深さ0.25m。
ピット９は長径0.34m、短径0.30m、深さ0.12m。
ピット10は長径0.45m、短径0.36m、深さ0.16m。
柱穴の埋土　黄褐色砂質土と黒褐色砂質土からなる。
時代　５号掘立柱建物とほぼ直交軸上の位置にあることや５号、６号掘立柱建物の梁間の規模が一致するから関連がある建物と推定される。浅間Ｂテフラ含まず、浅間Ｃテフラを含む埋土の状況から、古墳時代の可能性もあるが年代は不明である。



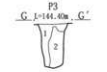
第75図　A区５号掘立柱建物



1．黒褐色砂質土　As-C軽石、ローム粒混。均質緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石、径１cm大のローム粒を斑に20％混。



1．黒褐色砂質土　As-C軽石混。緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石、ローム粒混。緻密。



1．黒褐色砂質土　As-C軽石３％、ローム粒10％混。緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石３％、ローム粒少量混。緻密。

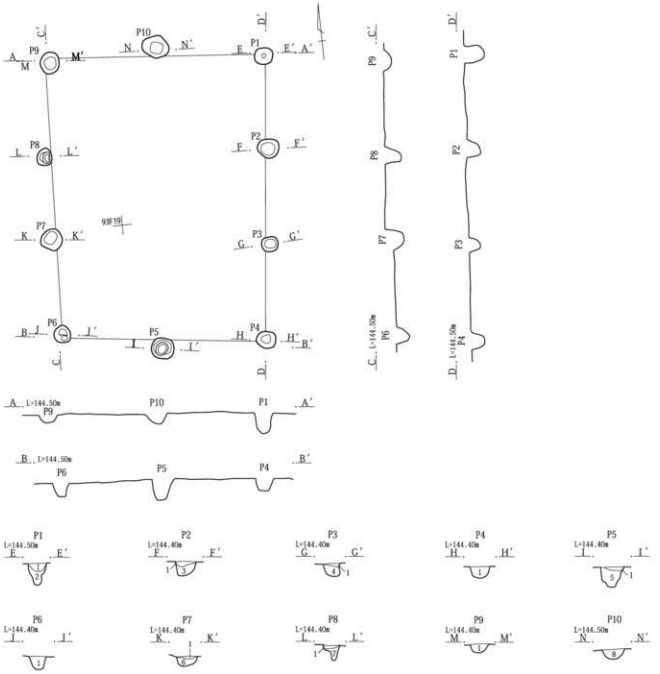
1．黒褐色砂質土　鈍い黄褐色砂質土との混土。
2．黒褐色砂質土　鈍い黄褐色砂質土との混土。径５～10mmのローム粒混。
3．黒褐色砂質土　鈍い黄褐色砂質土との混土。径１cm超大のローム塊混。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石混。緻密。

1．黒褐色砂質土　ローム粒３％混。均質。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石、ローム粒10％混。
3．黒褐色砂質土　径１cm大のローム粒20％混。

0　1:60　2m

第76図　A区６号掘立柱建物



1．黒褐色砂質土　As-C軽石混。均質緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石、ローム粒少量混。緻密。
3．１層と純い黄褐色砂質土の混土。ローム粒少量混。緻密。
4．純い黄褐色砂質土　緻密。
5．１層に径１～２mmのローム粒多混。
6．黒褐色砂質土　As-C軽石混。ローム粒多混。均質緻密。
7．純い黄褐色砂質土
8．黒褐色砂質土　As-C軽石混。径１～２mmのローム粒混。均質緻密。

0　1:60　2m

第77図　A区７号掘立柱建物

５．道

Ａ区では道２条が検出されている。調査区の東端と中央で部分的に検出されており、後述する溝と方向は調和的であることからＡ区の地形を反映した分布状況であると思われる。

１号道（第78図、PL.35-1・35-2・35-3）

位置　調査区東隅。

グリッド　92Ｏ・Ｐ15～20、２Ｏ・Ｐ１・２

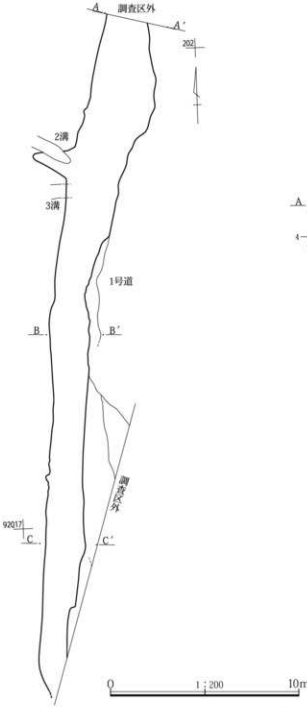
主軸方位　ＮＳ

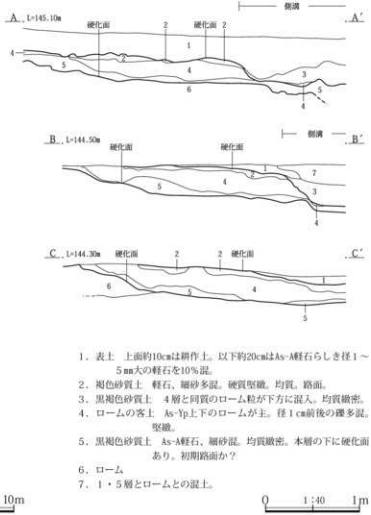
重複　２号溝や３号溝よりも新しい。

規模と形状　全長が25.00mで、検出された幅は2.20m前後の幅を呈す。２面の硬化面を有することから年代差のある遺構群である。下位の硬化面は上部ローム層を削り込み西側が高い。東側は硬化面が道跡と思われる使用面よりも下位に見られることから側溝の機能を有する溝状遺構にあたる可能性がある。

上位の硬化面は下位の道跡を構成する谷状のくぼみを埋めた堆積物の上面に存在し、その形状はほぼ水平を呈するが、北から南への標高差は0.7mであり、その傾斜は2.8％に及んでいる。また、東側は硬化面が使用面よりも下位に見られることから側溝の機能を有する溝の一部と考えられる。

埋土　硬化面の上位や下位には黒褐色砂質土が見られる。下位の硬化面の上位は浅間Ａテフラを含有する土壌





1．表土　上面約10cmは耕作土。以下約20cmはAs-A軽石らしき径１～５mm大の軽石を10％混。
2．褐色砂質土　軽石、細砂多混。硬質堅緻。均質。路面。
3．黒褐色砂質土　４層と同質のローム粒が下方に混入。均質緻密。
4．ロームの客土　As-Yp上下のロームが主。径１cm前後の礫多混。堅緻。
5．黒褐色砂質土　As-A軽石、細砂混。均質緻密。本層の下に硬化面あり。初期路面か？
6．ローム
7．１・５層とロームとの混土。

第78図　Ａ区１号道

である。また、下位の硬化面による道跡を構成した谷を埋めているのはローム層の再堆積物で客土の一種であると思われる。

時代　硬化面を覆う浅間Ａテフラとの層序関係から江戸時代後期には下位の硬化面が埋没していたと推定される。近世と推定されるが年代は18世紀後半以前。

２号道（第79図、PL.35-4）

位置　調査区中央北寄り。

グリッド　92Ｔ20・２Ｔ１・３Ａ・Ｂ１、３Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ１

主軸方位　Ｎ80°Ｗ

重複　３号溝よりも新しい。

規模と形状　全長が45.60ｍで、検出された幅は0.30～0.50ｍ前後である。硬化面を有する浅い皿状の谷地形を呈する遺構である。幅は両側に均等で全長にわたり標高差がなく水平を呈する。

埋土　硬化面の上位には黒褐色砂質土が見られる。

時代　３号溝、４号溝よりも新しく、浅間Ｂテフラを含まないといった埋土の状況から、古代と推定されるが年代は不明である。

６．溝

Ａ区では溝８条が検出されており、東に走行する２号溝を除き、北から南に流れている。調査区の西隅と北隅、中央に検出されており、調査区の区域に調和的である。これはＡ区の地形や地割りを反映した分布状況であると思われる。

１号溝（第80・81図、PL.27-1～27-5・59、196頁）

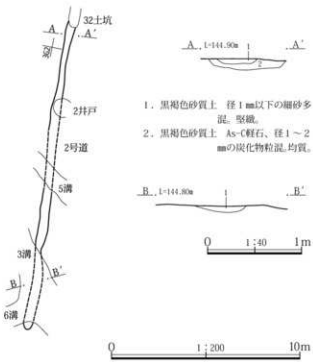
位置　調査区の中央を南北に走る。

グリッド　93Ｃ・Ｄ16～20・３Ｂ・Ｃ１・２

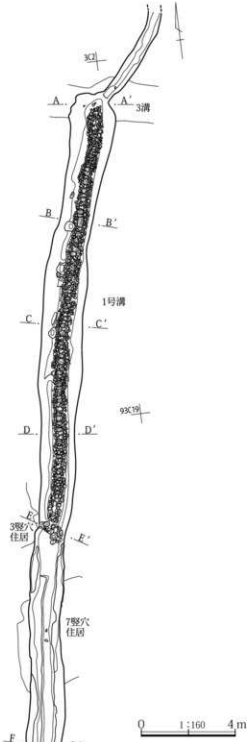
主軸方位　３Ｃ２グリッド付近より北はＮ40°Ｅ。南はＮ９°Ｅである。

重複　３号溝、３号竪穴住居や７号竪穴住居よりも新しい。

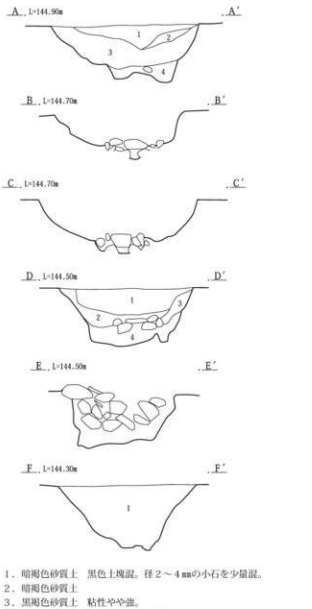
形状と規模　全長は32.0ｍである。検出された幅は1.20～1.85ｍ、深さは0.48～0.70ｍである。また溝北部の狭い部分の検出された幅は0.54～0.60ｍ、深さは0.34～0.40ｍ。北端と南端の底面比高差は0.73ｍであり、南側に向かって勾配が認められる。調査区の中央部に見られる溝であり、溝の底部に河川礫が敷かれ北から南に走行する。石敷きの全長は18.40ｍである。石敷の構造



第79図　Ａ区２号道



第80図　A区１号溝



から暗渠排水の可能性がある。

埋土　灰褐色から黒褐色の砂質土からなる。

遺物　６世紀の土師器の坏（１）や７世紀の須恵器の高盤（２）が出土し、江戸時代の陶器（４～６）が出土している。

時代　出土した最も新しい遺物から江戸時代と考えられるが、年代は不明である。

２号溝（第81・82図、PL59、196頁）

位置　調査区の北東隅を東西に走る。

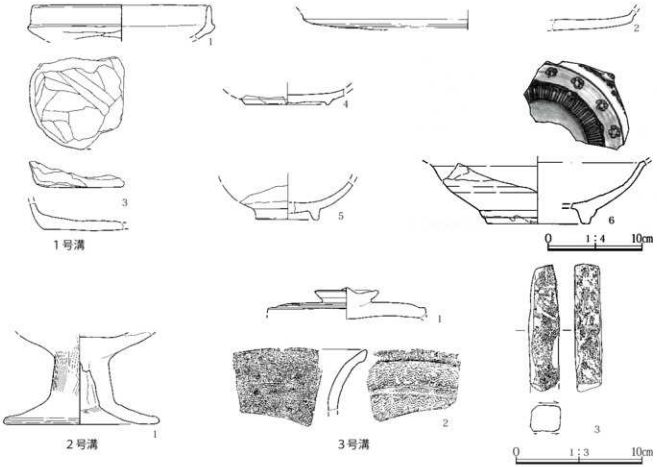
グリッド　92P20・２P～T１、３A・B１・２

主軸方位　N76°W

重複　１号道よりも古い。

形状と規模　全長は31.00mである。検出された幅は0.60～0.90m、深さは0.19～0.38mである。西端と東端の底面比高差は0.51mであり、東側に向かって勾配が認められる。断面は逆台形の形を呈し、下底には掘削痕が良好に見られ、埋土に水成堆積の痕跡もないことから区画を示すための溝であると考えられる。

埋土　灰褐色から黒褐色の砂質土からなる。



第81図　A区１・２・３号溝の出土遺物

遺物　土師器高坏(１)の破片が出土している。

時代　遺物から古墳時代後期の可能性が考えられるが、年代は不明である。

３号溝(第81・82図、PL.27-6・27-7、196頁)

位置　調査区の北東隅から東西に走り西隅で南西に鈍角に屈曲して走行する。

グリッド　92Ｐ～Ｔ20・２Ｓ・Ｔ１・３Ａ～Ｊ１・２、93Ｊ～Ｌ17～20

主軸方位　東部から中央はＮ80°Ｗ。南西部はＮ48°Ｅ

重複　１号溝、５号溝よりも古く、８号住居、９号竪穴住居、10号竪穴住居よりも新しい。4号溝は同時期である。

形状と規模　全長は93.00mである。検出された幅は0.65～1.20m、深さは0.10～0.29mである。東端と中央の底面比高差は0.34mであり、東側に向かって緩く勾配が認められる。中央と南西端の底面比高差は0.70mであり、南側に向かって勾配が認められる。断面は半月形を呈し、下底には掘削痕が良好に見られた。

埋土　黒褐色の砂質土で粗粒砂から細粒砂で構成され、一部には葉理が見られる。水成堆積を示す堆積物を認めるが2号溝と並行しており、側溝の機能を有する区画溝の可能性もある。

遺物　須恵器の短頸壺の蓋(１)や甕(２)が出土している。

時代　遺物から８世紀後半から９世紀と考えられる。

４号溝(第82図、PL.27-7・27-8・28-1)

位置　調査区の中央北隅に走り３号溝に併走する。

グリッド　３Ｃ～Ｊ１・２

主軸方位　Ｎ86°Ｗ

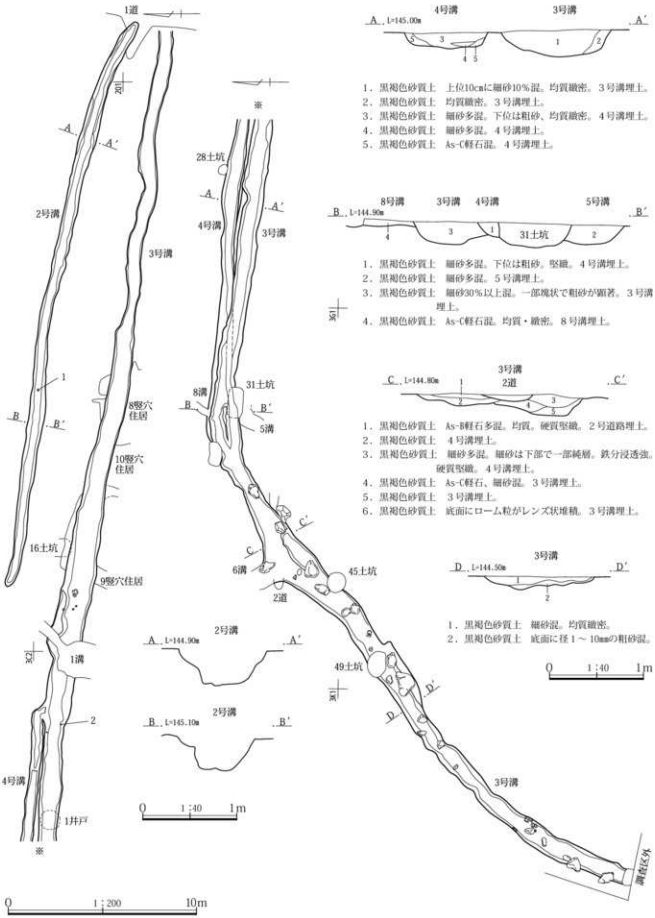
重複　３号溝と同時期である。

形状と規模　全長は24.00mである。検出された幅は0.55～0.90m、深さは0.09～0.23mで底面比高差はほぼ水平である。断面は半月形を呈す。流水の痕跡があり水路と考えられる。

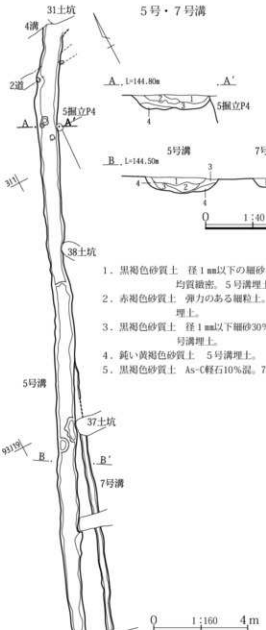
埋土　黒褐色の砂質土で細粒砂から構成される。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含まないといった埋土の状況から、古代と推定されるが、年代は不明である。

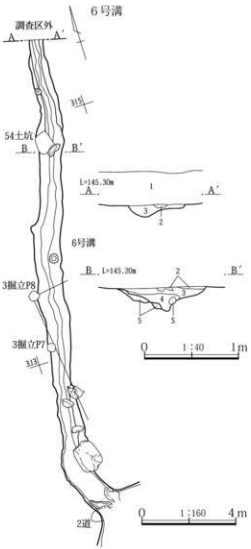


第82図　A区２・３・４号溝



1．黒褐色砂質土　径1mm以下の細砂，As-C軽石10%混。均質緻密。5号溝理土。
2．赤褐色砂質土　弾力のある細粒土。均質緻密。5号溝理土。
3．黒褐色砂質土　径1mm以下細砂30%混。均質緻密。5号溝理土。
4．鈍い黄褐色砂質土　5号溝理土。
5．黒褐色砂質土　As-C軽石10%混。7号溝理土。

第83図　A区5・6・7号溝



1．黒褐色砂質土　軽石ほか砂粒多混。耕作土。
2．黒褐色砂質土　均質。
3．黒褐色砂質土と細砂の混土　厚さ1cm程度の互層，部分的に粗砂，小石が多く，底面に鉄分の凝集が顕著。
4．黒褐色砂質土と細砂の混土　3層よりもさらに鉄分の凝集が顕著。細砂は部分的に大粒となり，ホール状に溜まりがみられる。底面には鉄分の凝集が見られる。
5．黒褐色砂質土と細砂の混土と炭の互層　上位は炭が多く，下位はローム粒多混。54号土坑理土。

5号溝（第83図、PL.27-7・28-2・28-3）

位置　調査区の西隅に走り1号溝に平行する。

グリッド　93H～J17～20、3H1・2

主軸方位　N24°E。

重複　7号溝を切るので7号溝よりも新しく、3号溝よりも古い。5号掘立柱建物よりも古い。

形状と規模　全長は26.50mである。検出された幅は0.52～0.90m、深さは0.11～0.23mである。北端と南端の底面比高差は0.39mであり、南側に向かって緩い勾配が認められる。断面は半月形を呈し、規模は4号溝に似ており水路と考えられる。

埋土　黄褐色から黒褐色の砂質土で構成され、中位に赤褐色砂質土を特徴的に挟む。

遺物　なし。

時代　浅間Bテフラを含まないといった埋土の状況から、古代と推定されるが、年代は不明である。

6号溝（第83図、PL.28-4・28-5）

位置　調査区の北西隅にあり、北から南に走行して3号溝に合流する。

グリッド　3I・J1～5

主軸方位　N13°E。

重複　３号掘立柱建物よりも古い。

形状と規模　全長は20.00mである。検出された幅は0.80～1.10m、深さは0.13～0.16mである。北端と南端の底面比高差は0.48mであり、南側に向かって緩い勾配が認められる。溝は浅い逆三角形を呈しており、水流の痕跡を示す堆積物も顕著であることから水路である。

埋土　黒褐色の砂質土の粗粒砂から細粒砂で構成される。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含まないといった埋土の状況から、古代と推定されるが、年代は不明である。

７号溝（第83図、PL.28-6・28-7）

位置　調査区の南西隅に走り５号溝に併走する。

グリッド　93Ｉ・Ｊ17～19

主軸方位　N13°E。

重複　37号土坑よりも古い。

形状と規模　全長は11.50mである。検出された幅は0.20～0.35m、深さは0.08～0.14mである。北端と南端の底面比高差は0.24mであり、南側に向かって緩い勾配が認められる。断面は浅い半月形を呈しており、流水の痕跡も認められないので区画を示す溝の可能性が高い。

埋土　浅間Ｃテフラを含む黒褐色の砂質土である。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含まないといった埋土の状況から、古代と推定されるが、年代は不明である。

８号溝（第84図、PL.28-8）

位置　調査区の北西隅に走り５号溝と連続するかのように見られる。

グリッド　３Ｆ～Ｈ２～５

主軸方位　N30°E。

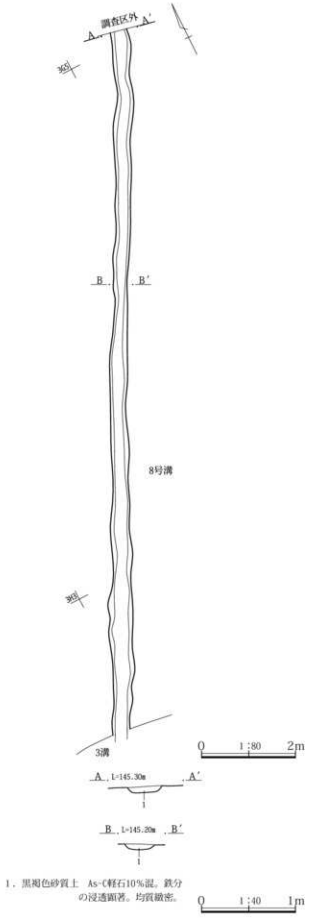
重複　３号溝よりも新しく、４号溝と合流する。

形状と規模　全長は15.00mである。検出された幅は0.30～0.40m、深さは0.06～0.16mである。北端と南端の底面比高差は0.39mであり、南側に向かって緩い勾配が認められる。断面は浅い皿状を呈しており、流水の痕跡も認められないので区画を示す溝の可能性が高い。

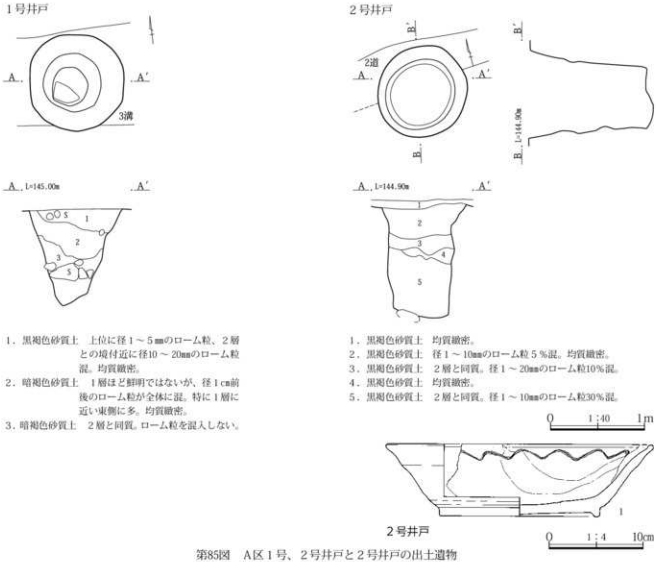
埋土　浅間Ｃテフラを含む黒褐色の砂質土である。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含まないといった埋土の状況から、古代と推定されるが、年代は不明。



第84図　A区８号溝



1．黒褐色砂質土　上位に径１～５mmのローム粒、２層との境付近に径10～20mmのローム粒混。均質緻密。
2．暗褐色砂質土　１層ほど鮮明ではないが、径１cm前後のローム粒が全体に混。特に１層に近い東側に多。均質緻密。
3．暗褐色砂質土　２層と同質。ローム粒を混入しない。

1．黒褐色砂質土　均質緻密。
2．黒褐色砂質土　径１～10mmのローム粒５％混。均質緻密。
3．黒褐色砂質土　２層と同質。径１～20mmのローム粒10％混。
4．黒褐色砂質土　均質緻密。
5．黒褐色砂質土　２層と同質。径１～10mmのローム粒30％混。

第85図　A区１号、２号井戸と２号井戸の出土遺物

7．井戸

A区で検出された井戸は全部で２基であり、すべて３号溝沿いに見られる。

１号井戸（第85図、PL.29-1・29-2）

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　３Ｄ１

重複　３号溝より新しい。

形状と規模　検出平面は円形を呈し、断面方向はＶ字形である。径は1.00m、深さ1.02mである。

埋土　黒褐色の砂質土で埋没し、最上位はロームブロックを含む黒褐色土で埋められている。下底に河川礫が見られた。礫の最大径は0.32m、平均径は0.10mである。河川礫は投棄された可能性がある。

遺物　なし。

時代　遺構の規模が類似する２号井戸と同様に江戸時代の可能性があるが、時代や年代は不明である。

２号井戸（第85図、PL.29-3・29-4・59、196頁）

位置　調査区の中央西隅。

グリッド　３Ｇ１

重複　２号道よりも新しい。

形状と規模　検出平面は円形を呈し，全体形状は円筒形で底面はほぼ水平である。直径は0.98m、深さ1.32mである。

埋土　黒褐色のロームブロックを多く含む砂質土互層で埋められ、上位は黒褐色土で満たされている。下底に河川礫が見られた。礫は投棄された可能性がある。

遺物　瀬戸・美濃陶器の黄瀬戸鉢（１）が出土している。

時代　出土遺物から江戸時代であるが、年代は不明である。

８．土坑

Ａ区で検出された土坑は全部で54基であり、１～61号の番号が付された。このうち15、18、19、22、26、36号は欠番である。

Ａ区で検出された土坑には、中世から近世の遺物が出土したものがみられるが、ほとんどの土坑は出土遺物に乏しいので、時代不明な土坑として扱う。

土坑は、調査区の全域にわたって検出されているが、南端部では少ない。また、土坑の分布に規則性や傾向は全く見られない。いずれも用途や性格は不明の穴である。

１号土坑(第86図、PL.29-5・29-6、196頁)

位置　調査区の中央、北寄り。

グリッド　３Ｂ・Ｃ２

重複　なし。

形状と規模　ほぼ円形を呈する。径1.90m、深さ0.34m、断面は長方形を呈する。南西側が0.20～0.40m程度深くなっている。

埋土　上位は黒褐色砂質土、下位に鈍い色調の黄褐色砂質土が見られ浅間Ａテフラを含む。

特徴　埋土は１号道の埋土に類似する特徴がある。

遺物　中世の常滑窯の片口鉢(１)が出土している。

時代　浅間Ａテフラを含む埋土の状況から、江戸時代天明３年(1783年)以降と推定される。

２号土坑(第86図、PL.29-7)

位置　調査区の中央、やや北西寄り。

グリッド　３Ｄ２

重複　なし。

形状と規模　南北に長い隅が丸い長方形を呈する。長径は1.82m、短径0.92m、深さ0.42m、断面はやや扁平な逆台形を呈する。

埋土　黒褐色砂質土

遺物　ウマの遺体１体分が横に乱れずに出土した。ウマは北頭位で東向きの屈葬である。

時代　ウマの遺体は、歯や中手骨の計測値から計算して1.3m近い中型馬と考えられる。年代を示す遺物が出土していないため時代は不明である(鑑定結果は184頁)。

３号土坑(第86図、PL.29-8)

位置　調査区の南東隅寄り。

グリッド　92Q16・17

重複　なし。

形状と規模　不整円形を呈する。長径は1.42m、短径1.27m、深さ0.45mである。断面は逆台形を呈し、底面は凹凸が著しい。

埋土　黄褐色火山灰土で埋められている。下底に河川礫を含む。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

４号土坑(第87図、PL.29-9)

位置　調査区のほぼ中央。

グリッド　93Ａ・Ｂ19

重複　４号竪穴住居中央部と12号土坑西側を掘り込む。

形状と規模　南北に長い楕円形を呈する。長径は1.86m、短径1.08m、深さ0.34m、断面は扁平な逆台形を呈する。

主軸方位　Ｎ19°Ｅ

埋土　黄褐色のロームブロックを多く含む火山灰土で埋没している。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

５号土坑(第87図、PL.29-11・29-12)

位置　調査区のほぼ中央。

グリッド　93Ｃ・Ｄ20

重複　なし。

形状と規模　東西に長軸を有する細長い長方形を呈する浅い土坑である。この形状のものは、向きや大きさの差異はあるが、他に６号、13号、14号、27号、30号、37号、39号、41号、42号、43号、44号土坑など11基がある。これらの土坑群は長軸方向が東西や南北を意識して掘られたものが多いことから、何らかの生業に関わる遺構である可能性がある。長径2.10m、短径0.88m、深さ0.25m、断面はやや扁平な逆台形を呈する。

主軸方位　ＥＷ

埋土　黒褐色砂質土でロームブロックを多く含む。

遺物　なし。

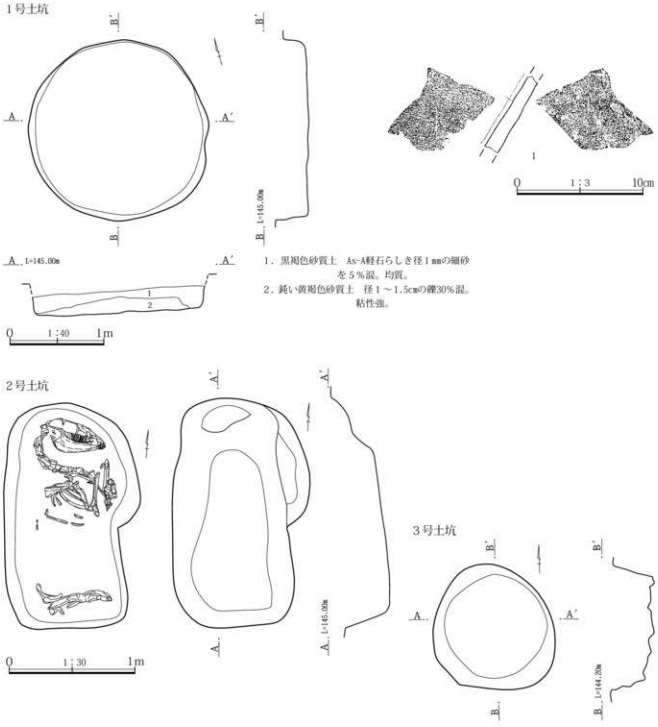
時代　埋土は全体に火山灰質でⅡ層の時代に近いと思われるが年代は不明である。

６号土坑(第87図、PL.29-13・29-14)

位置　調査区のほぼ中央。

グリッド　93Ｄ・Ｅ20

重複　なし。



第86図　A区1・2・3号土坑と1号土坑の出土遺物

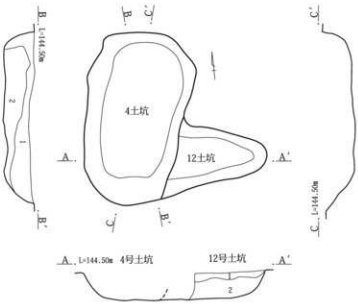
形状と規模　東西に長軸を有する細長い長方形を呈する浅い土坑。長径は2.85m、短径0.95m、深さ0.16mである。断面は扁平な凸レンズ状を呈する。

主軸方位　EW

埋土　黒褐色砂質土で少量の浅間Cテフラの軽石を含む。

遺物　なし。

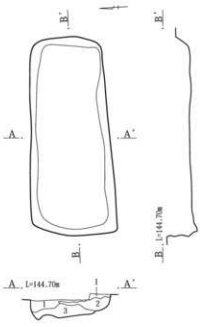
４号、12号土坑



４号土坑
１．純い黄褐色砂質土　径１～３cm大のローム塊30%混。
２．純い黄褐色砂質土　１層と同質。１層よりも僅かに黒みを帯びる。混入するローム粒は径１cm以下で10%以下と少ない。

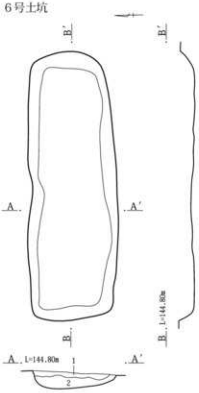
12号土坑
１．黒褐色砂質土と２層の純い黄褐色砂質土との混土。
２．純い黄褐色砂質土　均質緻密。

５号土坑



１．黒褐色砂質土　径１～２mmのローム粒少量混。均質緻密。
２．黒褐色砂質土　１層に径３～５cm大のローム塊50%混。
３．黒褐色砂質土　２層に類似するが、ローム粒が小粒。

６号土坑



１．黒褐色砂質土　As-C軽石を５%混。均質緻密。
２．黒褐色砂質土　As-C軽石多混。ローム粒少量混。

0　1:40　1m

第87図　A区４・５・６号、12号土坑

時代　浅間Bテフラを含まない埋土の状況から、古墳時代から古代の可能性があるが年代は不明である。

７号土坑(第88図、PL.29-15・30-1)

位置　調査区の東端寄り。

グリッド　92Q17

重複　なし。

形状と規模　東西に若干長い楕円形を呈する。長径は1.10m、短径1.05m、深さ0.42mである。断面は逆台形状を呈する。

埋土　暗褐色砂質土がブロック状に堆積し、風倒木の断

面に似る。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

8号土坑(第88図、PL.30-2・30-3)

位置　調査区の北東寄り。

グリッド　2R・S2

重複　なし。

形状と規模　南北に長い楕円形を呈する。長径は0.97m、短径0.62m、深さ0.27mである。断面は逆台形状を呈する。

埋土　黒褐色の浅間Cテフラの軽石を多く含む砂質土。

遺物　なし。

時代　浅間Bテフラを含まない埋土の状況から、古墳時代から古代の可能性があるが年代は不明である。

9号土坑(第88図、PL.30-4・30-5)

位置　調査区の東端寄り。

グリッド　92Q・R19

重複　なし。

形状と規模　北東、南西方向に長い楕円形を呈する。長径は1.66m、短径0.96m、深さ0.27mである。断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N28°E

埋土　黄褐色軟質火山灰土がブロック状に堆積している。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

10号土坑(第88・89図、PL.30-6・60、196頁)

位置　調査区北東端寄り。

グリッド　2R1・2

重複　なし。

形状と規模　東南東－西北西方向にやや長い楕円形を呈する浅い土坑。長径は2.87m、短径1.97m、深さ0.30mである。断面は細長く扁平な浅い皿状を呈する。

埋土　黄褐色砂質土。

遺物　埋土から土師器の椀(1)が、土坑底部から土師器の高坏(2・3)、鉢(4)、甕(5、6)などの遺物が出土した。

時代　遺物から古墳時代後期5世紀後半～6世紀前半である。

11号土坑(第90・89図、PL.30-7・30-8)

位置　調査区北東端寄り。北壁際。

グリッド　2R2

重複　なし。

形状と規模　東西に長い不整円形を呈する。長径は2.22m、短径1.54m、深さ0.59m、断面は深い逆台形を呈する。

埋土　黒褐色砂質土の互層で基底はロームブロックを含む黒色土である。

遺物　土師器の坏(1)や高坏(2)が出土している。

時代　遺物から古墳時代後期5世紀後半～6世紀前半である。

12号土坑(第87図、PL.29-9・29-10)

位置　調査区北東端寄り。

グリッド　93A・B19

重複　4号竪穴住居の中央部を掘り込む。4号土坑に西側を掘り込まれる。

形状と規模　残存する長径は0.94m、短径0.78m、深さ0.28mである。

埋土　暗黄褐色土。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

13号土坑(第90図、PL.30-9・30-10)

位置　調査区北東端寄り。北壁際。

グリッド　2Q・R1・2

重複　なし。

形状と規模　北東－南西方向に細長く大きな長方形を呈する浅い土坑。5号土坑と似た土坑である。北東側に巨大な岩が認められるが、土坑の下位にある堆積物に含まれる巨礫の一部である。長径は3.28m、短径1.22m、深さ0.14m。

主軸方位　N42°E

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

14号土坑(第90図、PL.30-11・30-12)

位置　調査区中央よりやや西寄り。

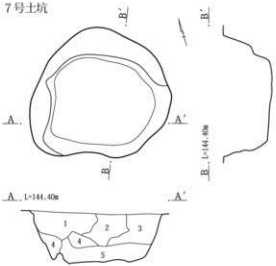
グリッド　93E・F19～20

重複　なし。

形状と規模　南北に細長い大きな長方形を呈する浅い土坑。5号土坑に類似する細長い土坑の一つ。30号、41号土坑と規模が類似する。長径は3.10m、短径1.00m、深さ0.23mである。

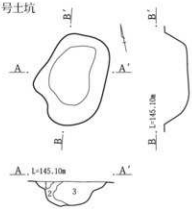
主軸方位　N3°W

7号土坑



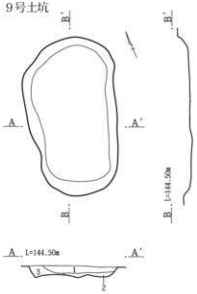
1．鈍い黄褐色砂質土　径１mmの灰白色粒、黄白色粒10％混。焼土粒少混。均質緻密。
2．暗褐色砂質土　１層と同質。径１cm黒褐色砂質土、硬質な淡い黄白色砂質土が斑混。
3．暗褐色砂質土　２層と同質であるが、２層中に見られた黒褐色砂質土と淡い黄白色砂質土の斑状の混じりが少ない。
4．暗褐色砂質土　２層と同質。混入するロームの量が多い。
5．暗褐色砂質土　２層と同質。混入する黒褐色砂質土、黄白色砂質土が20％と多く、より堅緻。

8号土坑



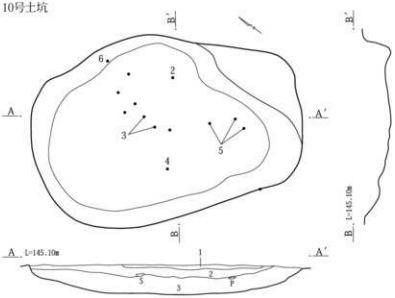
1．鈍い黄褐色砂質土
2．黒褐色砂質土　ローム粒が３層より多い、緻密。
3．黒褐色砂質土　As-C軽石、径１～３mmのローム粒10％混。均質緻密。

9号土坑



1．黒褐色砂質土　As-C軽石を５％、径３～４cm大のローム粒を斑に混。均質緻密。
2．ソフトロームと黒褐色砂質土が斑混。
3．ソフトロームと鈍い黒褐色砂質土が斑混。

10号土坑



1．黒褐色砂質土　均質緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石10％混。均質緻密。
3．２層と鈍い黄褐色砂質土との斑混土。

0　1:40　1m

第88図　A区７号～ 10号土坑

埋土　暗褐色砂質土で浅間Cテフラの軽石を多く含む。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

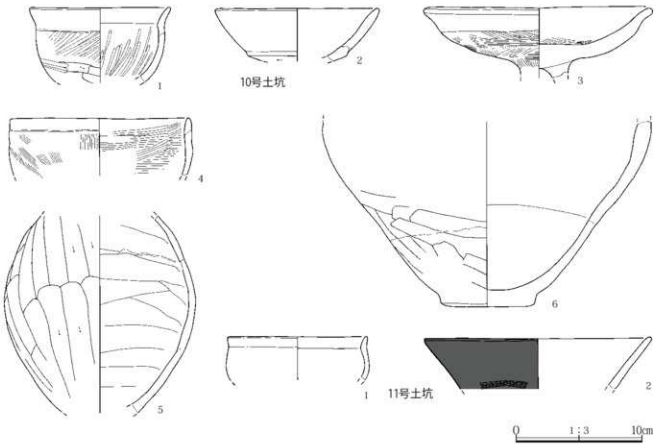
16号土坑（第90図、PL.30-13・30-14）

位置　調査区中央から北東寄り。

グリッド　３A・B１

重複　９号竪穴住居を掘り込む。３号溝に掘り込まれる。

形状と規模　南側を３号溝に掘り込まれているため、遺構の全体像は不明ながら、南北に長い楕円形を呈するものと思われる。残存する長径は1.38m、短径0.92m、深



第89図　A区10号、11号土坑の出土遺物

さ0.20m、断面は浅い皿形状を呈する。

埋土　黒褐色砂質土で炭化物や浅間Cテフラを含む黒色土のブロックからなる。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

17号土坑(第91図)

位置　調査区中央より南東寄り。

グリッド　93Ｂ17

重複　なし。

形状と規模　北東－南西方向に長い楕円形を呈する。長径は0.98m、短径0.75m、深さ0.15mである。断面は薄い逆台形状を呈する。

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

20号土坑(第91図、PL.30-15・31-1)

位置　調査区中央の北壁際。

グリッド　３Ｂ３

重複　なし。

形状と規模　東北東－西南西方向にやや長い楕円形を呈する。長径は0.96m、短径0.58m、深さ0.36mである。断面は深い逆台形状を呈する。

主軸方位　N77°E

埋土　黒褐色砂質土で埋没している。土坑の下底に炭化物を含み、土坑の壁には焼土塊が見られる。

遺物　なし。

時代　古代の墓壙の可能性があるが年代は不明である。

21号土坑(第91図、PL.31-2・31-3)

位置　調査区中央の北壁際。

グリッド　３Ａ３

重複　なし。

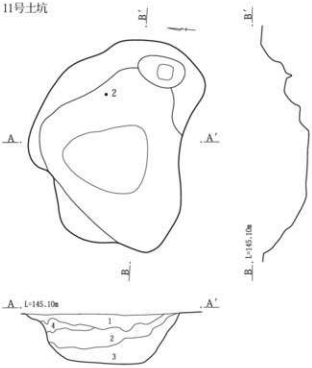
形状と規模　東北東－西南西方向に長い楕円形を呈する。長径は1.35m、短径0.60m、深さ0.33mである。断面は深い逆台形状を呈する。

埋土　黒褐色砂質土である。土坑の下底に炭化物や焼土の塊を多く含む黒色土が見られる。

主軸方位　N78°E

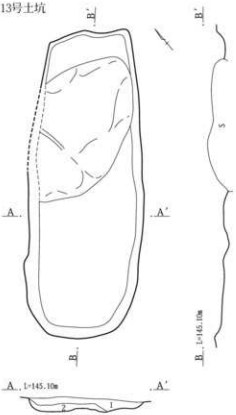
遺物　なし。

11号土坑



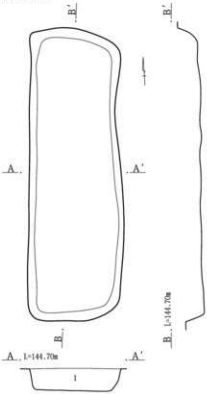
1．黒褐色砂質土　As-C軽石のほか径１～２㎜のローム粒混。緻密。
2．黒褐色砂質土を主に暗褐色砂質土との攪拌土。
3．２層にレンズ状のローム塊が混入。
4．ローム塊。

13号土坑



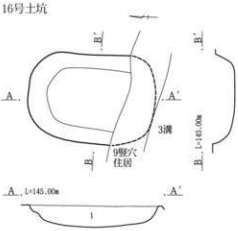
1．As-C軽石混黒褐色砂を主に暗褐色土との斑混。
2．暗褐色土とソフトロームとの斑混土。

14号土坑



1．暗褐色砂質土　ロームの斑混はないが、５・６号土坑の理土に近い。均質緻密。

16号土坑



1．黒褐色砂質土　As-C軽石10%混。下位～底面に長さ５～10cm前後の細片となった炭化物が混入。焼土や焼けた形はないが、炭化物の量は多い。

0　1:40　1m

第90図　A区11号、13号、14号、16号土坑

時代　古代の墓壙の可能性があるが年代は不明である。

23号土坑(第91図)

位置　調査区中央より西寄りの北壁際。

グリッド　３Ｅ３

重複　なし。

形状と規模　東北東－西南西方向に長い楕円形を呈する。長径0.86m、短径0.38m、深さ0.14m。断面は半円形を呈する。

主軸方位　N76°E

埋土　黒褐色土、暗褐色砂質土からなり、浅間Cテフラの軽石を含む。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

24号土坑(第91・92図、PL.31-4・31-5・31-6・59、197頁)

位置　調査区中央より西寄りの北壁近く。

グリッド　３Ｄ４

重複　なし。

形状と規模　北北西－南南東方向に長い楕円形を呈する。長径は0.94m、短径0.62m、深さ0.22m、断面は逆台形状を呈する。遺物は破片が多く、移動して堆積した可能性がある。

埋土　土器や焼土塊を多く含む黒褐色砂質土で、下底に黒色土の薄層がみられる。

遺物　土師器の甕の口縁部破片(１、２)が底面より20cmほど浮いて出土した。

時代　８世紀前半。

25号土坑(第91・92図)

位置　調査区中央から東寄りの北壁際。

グリッド　２Ｑ・Ｒ２・３

重複　なし。

形状と規模　北側が調査区外に出るため遺構の全体像は不明である。確認された長径は3.37m＋、確認された短径0.82m＋、確認された最大深度0.59m＋、底部は凹凸が著しく断面は不整形を呈する。

埋土　黒褐色砂質土の互層でロームブロックを含み水平に堆積して土坑を埋めている。

遺物　土師器の坏(１～３)が出土した。坏(３)のみ８世紀前半の年代である。

時代　奈良時代８世紀後半

27号土坑(第93図、PL.31-7・31-8)

位置　調査区の北西寄り。

グリッド　３Ｅ３

重複　なし。

形状と規模　東南東－西北西方向に長い楕円形を呈する。長径は1.12m、短径0.66m、深さ0.14mである。断面は薄い逆レンズを呈する。

埋土　黒褐色砂質土で炭化物や軽石を含む。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

28号土坑(第93図、PL.31-9・31-10)

位置　調査区の北西寄り。

グリッド　３Ｅ２

重複　４号溝を掘り込む。

形状と規模　東西に若干長い楕円形を呈する。長径は0.57m、短径0.45m、深さ0.29mである。断面は不整逆半円形を呈する。

埋土　黒褐色砂質土で浅間Cテフラの軽石を少し含む。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

29号、32号土坑(第93図、PL.31-11・31-12・31-13)

位置　調査区中央から西寄り。

グリッド　３Ｆ１

重複　29号土坑は、32号土坑より古い。

形状と規模　東西に長い楕円形を呈する。29号土坑は長径が1.36m、短径0.72m、深さ0.35mである。断面は逆台形を呈する。32号土坑は残存する長径は1.15m＋、短径0.56m、深さ0.27m、断面は逆台形を呈する。

埋土　29号土坑は黄褐色砂質土。32号土坑は黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

30号土坑(第93図、PL.31-14・31-15)

位置　調査区中央から南西寄り。

グリッド　93Ｇ18・19

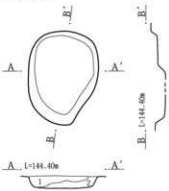
重複　なし。

形状と規模　東西に長軸を有する細長い長方形を呈する浅い土坑。14号、41号土坑と伴に規模の大きな遺構である。長径は3.35m、短径1.20m、深さ0.23m、断面は浅い逆台形を呈する。

主軸方位　N84°W

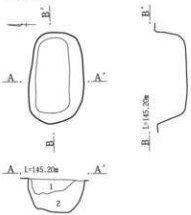
埋土　黒褐色砂質土で均一に埋められている。

17号土坑



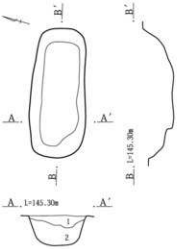
1．黒褐色砂質土　長さ３～５mmの炭化物10％混。緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石10％混。均質緻密。

20号土坑



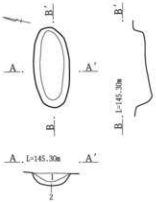
1．黒褐色砂質土　As-C軽石、炭化物混。均質。
2．黒褐色砂質土　炭化物50％以上混。均質。底面が一様に焼けている。

21号土坑



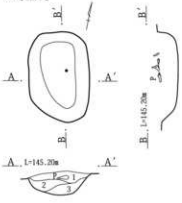
1．黒褐色砂質土　As-C軽石、焼土粒混。均質緻密。
2．黒褐色砂質土　炭化物多混。均質緻密。

23号土坑



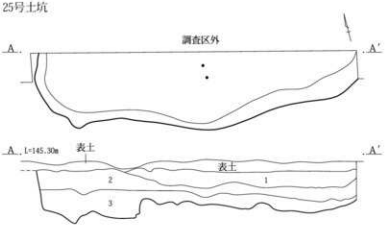
1．黒褐色砂質土　As-C軽石混。壁際に炭化物。均質緻密。
2．暗褐色砂質土　均質緻密。

24号土坑



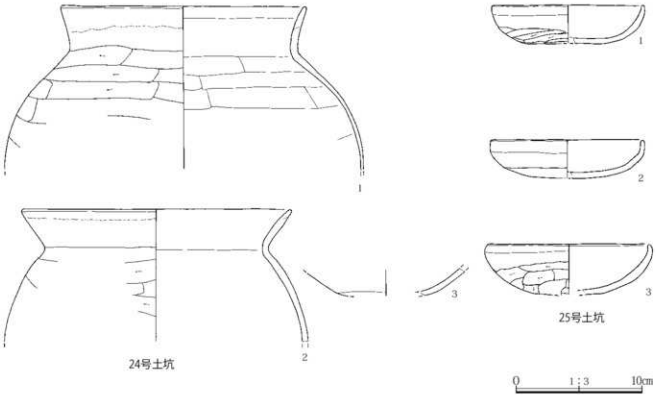
1．黒褐色砂質土　As-C軽石、ローム粒、焼土粒混。均質緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石、ローム粒混。均質緻密。
3．２層にソフトロームが斑混。

25号土坑



1．黒褐色砂質土　径１～２mmのAs-C軽石を10％、ローム粒、炭化物をまばらに混。均質緻密。
2．黒褐色砂質土　１層と同質。１層よりも混入するローム粒が大粒で多い。
3．黒褐色砂質土と径１～10mmのローム粒の混土。

第91図　A区17号、20号、21号、23・24・25号土坑



第92図　A区24号、25号土坑の出土遺物

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

31号土坑(第94図、PL.32-1・60、197頁)

位置　調査区中央から北西寄り。

グリッド　３G・H２

重複　３～５号溝を掘り込む。

形状と規模　５号土坑と似た規模の大きな土坑。４号、５号溝の合流する場所を掘り込んでいる。確認された最大の長径は1.25m＋、短径0.80m、深さ0.24mである。

主軸方位　N87°W

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　江戸時代の陶器の皿(１)が出土している。

時代　埋土の固結が悪く、近代の可能性がある。

33号土坑(第94図、PL.32-2・32-3)

位置　調査区中央から北西寄り。

グリッド　３G３

重複　なし。

形状と規模　東西に長い楕円形を呈する大きな土坑。断面は隅が丸い逆台形を呈する。

埋土　黒褐色土浅間Cテフラを軽石を多く含む砂質土。

遺物　なし。

時代　浅間Bテフラを含まない埋土の状況から、古墳時代から古代の可能性があるが、年代は不明である。

34号土坑(第94図、PL.32-4・32-5)

位置　調査区の西寄り。

グリッド　３I２

重複　なし。

形状と規模　南北に長い楕円形を呈する。長径は1.80m、短径1.25m、深さ0.40mである。断面は底面の凹凸が著しい逆台形を呈する。

埋土　黒褐色火山灰質砂質土。下底はロームのブロックを含む黒色土。

遺物　なし。

時代　軽石を少量含む火山灰質の埋土は、古墳時代～古代の可能性があるが年代は不明である。

35号土坑(第94図、PL.32-6・32-7)

位置　調査区の西寄り。

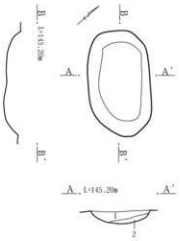
グリッド　３I２

重複　なし。

形状と規模　北東－南西方向に長い不整円形を呈する。長径は1.00m、短径0.75m、深さ0.69m、断面は深い不整逆台形を呈する。

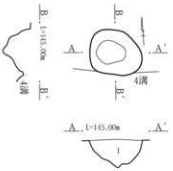
埋土　暗褐色ロームブロックや軽石を含む火山灰土。
遺物　なし。
時代　年代は不明である。
37号土坑(第94図、PL.32-8)
位置　調査区の南西寄り。
グリッド　93 I 18
重複　なし。
形状と規模　東西に長い大きな長方形を呈する。５号土坑と形状が類似した土坑である。30、39～44号土坑など一帯に集中して分布している。長径は2.65m、短径0.73m、深さ0.27mである。断面は隅が丸い長方形状を呈する。
主軸方位　N86°W
埋土　黒褐色土
遺物　なし。
時代　年代は不明である。
38号土坑(第95図、PL.32-9)
位置　調査区の南西寄り。
グリッド　93H20
重複　５号溝を掘り込む。
形状と規模　北西－南東方向に長い楕円形を呈する。長径は1.08m、短径0.67m、深さ0.23mである。断面は隅が丸い長方形状を呈する。
埋土　黒褐色火山灰土の互層で、上位は浅間Cテフラの軽石を多く含む。
遺物　なし。
時代　浅間Bテフラを含まない埋土の状況から、古墳時代から古代の可能性があるが年代は不明である。
39号土坑(第95図、PL.32-10・32-11)
位置　調査区の南西寄り。
グリッド　93H19・20
重複　なし。
形状と規模　南北に長い大きな長方形を呈する。長径は1.47m、短径0.54m、深さ0.13mである。断面は扁平な逆台形を呈する。
主軸方位　ＮＳ
埋土　黒褐色軽石を少量含む火山灰質の砂質土。
遺物　なし。
時代　年代は不明である。
40号土坑(第95図、PL.32-12・32-13)
位置　調査区の南西寄り。
グリッド　93H19
重複　６号ピットに掘り込まれる。
形状と規模　東西に長い大きな長方形を呈する。長径は1.92m、短径0.54m、深さ0.13mである。断面は扁平な逆台形を呈する。
主軸方位　N88°W
埋土　黒褐色砂質土と下位の黄褐色砂質土に分かれる。
遺物　なし。
時代　年代は不明である。
41号土坑(第95図、PL.32-14・32-15)
位置　調査区の南西寄り。
グリッド　93G～H・19
重複　なし。
形状と規模　南北に長い大きな長方形を呈する。14号、30号土坑と並んで規模の大きな土坑である。長径は2.86m、短径0.72m、深さ0.18mである。断面は扁平な逆台形を呈する。
主軸方位　Ｎ４°Ｅ
埋土　黒褐色砂質土で埋没し、均質である。
遺物　なし。
時代　年代は不明である。
42号土坑(第95図、PL.33-1・33-2)
位置　調査区の南西寄り。
グリッド　93H19
重複　なし。
形状と規模　東西に長く大きな長方形を呈する。長径は2.00m、短径0.52m、深さ0.07mである。断面は扁平な逆台形を呈する。
主軸方位　ＥＷ
埋土　黒褐色砂質土
遺物　なし。
時代　年代は不明である。
43号土坑(第96図、PL.33-3・33-4)
位置　調査区の南西寄り。
グリッド　93H20
重複　５号掘立柱建物や５号柱穴に掘り込まれる。
形状と規模　雁行形に並ぶ東西に長軸を有する長方形状の土坑２基と南北に長軸を有する長方形の共に浅い土坑を、東西に長大な長方形を呈する土坑が掘り込んでいる

27号土坑



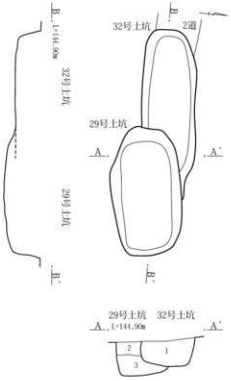
1．黒色砂質土　As-C軽石10%，径１～２㎜のローム粒を３％混。緻密。
2．黒褐色砂質土　１層に炭化物混。

28号土坑



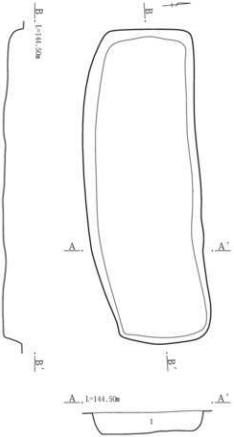
1．黒褐色砂質土　As-C軽石を10%、径１～３㎜のローム粒を上位に多混。均質緻密。

29号、32号土坑



1．黒褐色砂質土　西側に２号溝埋土の拳大塊混。32号土坑埋土。
2．暗褐色砂質土　ソフトローム上位に混。緻密。29号土坑埋土。
3．鈍い黄褐色土　径３～４㎝の黒褐色砂質土を斑混。均質緻密。
　　29号土坑埋土。

30号土坑

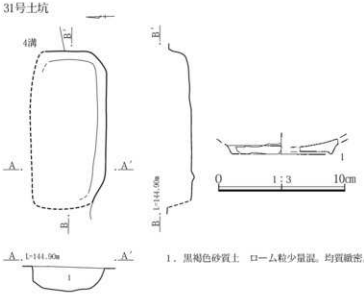


1．黒褐色砂質土　軽石のほか、径１～２㎜の砂粒混。
　均質。

0　1:40　1m

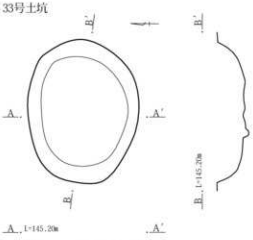
第93図　A区27号～30号、32号土坑

31号土坑



1．黒褐色砂質土　ローム粒少量混。均質緻密。

33号土坑



1．黒褐色砂質土　As-C軽石10％のほか、ローム粒混。ローム粒は下位に多。

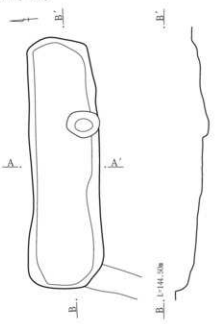
2．暗褐色砂質土

34号土坑

1．黒褐色砂質土　細砂が全体に混入。やや硬。

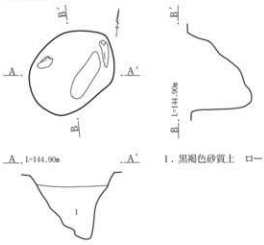
2．黒褐色砂質土　1層に径１～３cmのローム粒混。下位は大粒が多い。

37号土坑



1．黒褐色砂質土　径１～３mmの細砂混。均質。

35号土坑



1．黒褐色砂質土　ローム粒混。均質。

第94図　A区31号、33・34・35号、37号土坑及び31号土坑の出土遺物

状況が観察された。これら一連の土坑群を統合して１基の土坑として認識した。

主体となる東西に長く大きな長方形を呈する土坑は、５号土坑と形状が類似する。長径は2.40m、短径0.70m、深さ0.20mである。断面は扁平な逆台形を呈する。

主軸方位　ＥＷ

埋土　黒褐色砂質土からなり少量の軽石を含む。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

44号土坑(第96図、PL.33-5・33-6)

位置　調査区の南西寄り。

グリッド　３Ｉ１１・93Ｉ20

重複　なし。

形状と規模　東西に長い逆Ｌ字型を呈する。遺構は東辺に地層の攪乱が見られ、遺構の一部が失われている。残存する最大の長径は2.02m、短径1.08m、深さ0.14mである。断面は扁平な逆台形を呈する。

主軸方位　Ｎ88°Ｅ

埋土　黒褐色砂質土

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

45号土坑(第96図、PL.33-7・33-8)

位置　調査区中央の西寄り。

グリッド　３Ｉ１１・93Ｉ20

重複　３号溝を掘り込む。

形状と規模　ほぼ円形を呈する。長径は1.07m、短径1.02m、深さ0.60m、断面は深い逆台形又は上位開いたＵ字形を呈する。46号、50号土坑と形態が類似している。

埋土　黒褐色砂質土で均質である。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

46号土坑(第96図、PL.33-9)

位置　調査区南西寄り。

グリッド　93Ｋ19

重複　なし。

形状と規模　北東－南西方向に長い不整円形を呈する土坑。しっかりとした掘り方を有する。長径は0.94m、短径0.82m、深さ0.49mである。断面は底部の凹凸が著しく上に開いたＵ字形を呈する。45号、50号土坑と類似している。

埋土　黒褐色砂質土と軽石まじりの暗灰色火山灰土で埋没する。

遺物　なし。

時代　埋土の固結が悪く、近代の可能性があるが年代は不明である。

47号、48号土坑(第97図、PL.33-10・33-11)

位置　調査区の北西隅。

グリッド　３Ｊ・Ｋ４・５

重複　47号土坑は48号土坑を掘り込む。

形状と規模　47号土坑は、東北東－西南西方向にやや長い楕円形を呈する。長径は0.80m、短径0.67m、深さ0.30m、断面は三角形を呈する。48号土坑は北西側が調査区外に及ぶが、南北に長軸を有する長方形を呈する浅い土坑である。長径は1.56m、短径0.90m、深さ0.07mである。断面は浅く扁平な逆台形を呈する。

埋土　27号土坑は黒褐色砂質土からなる。28号土坑は灰褐色～黄褐色砂質土である。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

49号土坑(第97図、PL.33-12)

位置　調査区の西端寄り。

グリッド　93Ｊ20

重複　３号溝を掘り込む。

形状と規模　東西に長い楕円形を呈する。長径は1.38m、短径1.00m、深さ0.40mである。断面は底面に凹凸がある逆台形を呈し、しっかりした掘り方を有する。

主軸方位　47号土坑はＮ43°Ｅ、48号土坑はＮ３°Ｅ。

埋土　黒褐色砂質土からなり均質である。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

50号土坑(第97図、PL.33-13・33-14)

位置　調査区西端付近。

グリッド　３Ｊ１

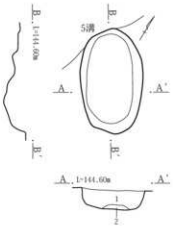
重複　12号竪穴住居を掘り込む。

形状と規模　東西に長い不整円形を呈する。底部は凹凸がある。長径は1.04m、短径0.85m、深さ0.46m、断面は底面に凹凸があり、上部が開いた逆台形を呈する。

埋土　黒褐色砂質土からなり、底面に黄褐色ロームブロックを含む黒色土が張り付くように埋める。

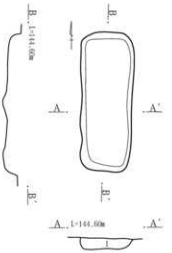
遺物　なし。

38号土坑



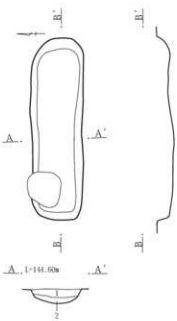
1．黒褐色砂質土　弾力のある細粒土。As-C軽石混。
2．鈍い黄褐色砂質土

39号土坑



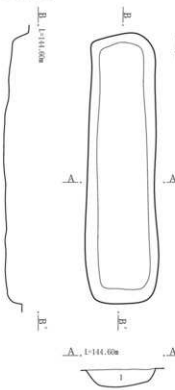
1．黒褐色砂質土　軽石の他、径１～３㎜の細砂混。均質。

40号土坑



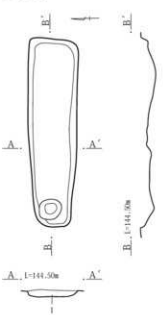
1．黒褐色砂質土
2．鈍い黄褐色砂質土

41号土坑



1．黒褐色砂質土　軽石のほか径１～３㎜の細砂混。均質。

42号土坑



1．黒褐色砂質土

0　1:40　1m

第95図　AE38号～42号土坑

時代　年代は不明である。

51号、52号土坑（第97図、PL.33-15）

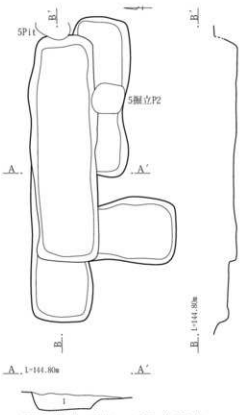
位置　調査区北西隅寄り。

グリッド　３Ｈ２

重複　51号土坑が52号土坑の一部を掘り込む。

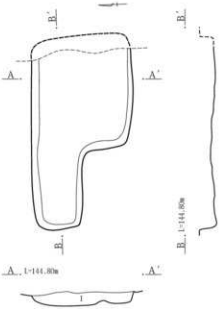
形状と規模　51号土坑は北東－南西に長い楕円形を呈し、断面は逆台形を呈する。長径は1.42m、短径0.90m、深さ0.52mである。52号土坑は南北に長軸を有する長方

43号土坑



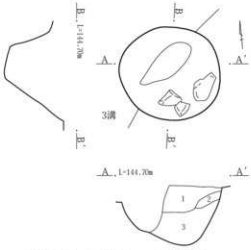
1．黒褐色砂質土　下位にローム混。均質緻密。

44号土坑

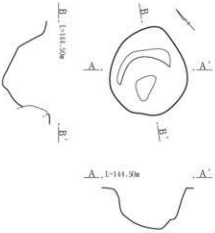


1．黒褐色砂質土　均質緻密。

45号土坑



46号土坑



1．黒褐色砂質土　細砂多混。ローム粒少量混。
2．ロームと１層との混土。
3．黒褐色砂質土　径５～10mmのローム粒５％混。下位には大粒で50％以上混。

0　1:40　1m

第96図　A区43号～46号土坑

形を呈し、しっかりとした掘り方を有する。長径は1.20m、短径1.00m、深さ0.38mである。断面は不整形である。

埋土　黒褐色砂質土の互層で間に黄褐色ロームブロックの薄層がみられる。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

53号土坑（第97図、PL.34-1・34-2）

位置　調査区ほぼ中央やや西寄り。

グリッド　93Ｇ19

重複　19号ピットに南辺を掘り込まれる。

形状と規模　東北東－西南西方向に長い楕円形を呈し、断面は上部が開いたＵ字形を呈する。長径は0.85m、短径0.72m、深さ0.23mである。

主軸方位　Ｎ65°Ｗ

埋土　黒褐色浅間Ｃテフラの軽石を多く含む砂質土。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含まない埋土の状況から、古墳時代から古代の可能性があるが年代は不明である。

54号土坑（第97図、PL.34-3・34-4）

位置　調査区の北西隅寄り。

グリッド　３Ｉ４

重複　６号溝を掘り込む。

形状と規模　南東側を地層による攪乱を受けているので遺構の全体像は不明であるが、不整円形を呈するものと思われる。長径は0.85m、短径0.72m、深さ0.23mである。断面は浅い逆台形を呈する。

埋土　黒褐色炭化物やロームブロックを多く含む砂質土。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

57号土坑（第98図、PL.34-6・34-7）

位置　調査区ほぼ中央の北壁寄り。

グリッド　３Ａ２

重複　なし。

形状と規模　東西にやや長い楕円形を呈する。長径は0.90m、短径0.84m、深さ0.18mである。断面は扁平で不整形の浅い皿状を呈する。

埋土　黒褐色砂質土

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

58号土坑（第98図、PL.34-8・34-9・34-10・60、197頁）

位置　調査区ほぼ中央の東壁寄り。

グリッド　92Ｑ19

重複　なし。

形状と規模　隅が丸い正方形を呈し、中央部が一段深く掘り込まれるが、全体が浅い遺構である。形状から井戸とは考えにくい。しっかりとした掘り方を有する。長径は2.70m、短径2.60m、深さ0.51mである。断面は逆凸字状を呈する。性格不明の遺構であるが中段に配石が認められるので、何らかの機能を持った土坑である可能性が極めて高い。

埋土　下位よりロームブロックを含む灰色土と軽石を含む黒色土が互層している。

遺物　埋土から須恵器の埦（１）が出土している。

時代　遺物から10世紀第１四半期。

59号土坑（第98図、PL.34-11・34-12）

位置　調査区のほぼ中央からやや南西寄り。

グリッド　93Ｆ18

重複　なし。

形状と規模　東西にやや長い楕円形を呈する。長径は0.56m、短径0.53m、深さ0.34mである。断面は逆半円形を呈する。

埋土　黒褐色浅間Ｃテフラの軽石を含む砂質土。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

60号土坑（第98図、PL.34-13）

位置　調査区のほぼ中央からやや南西寄り。

グリッド　93Ｆ18・19

重複　なし。

形状と規模　東西にやや長い楕円形を呈し、しっかりとした掘り方を有する。長径は0.40m、短径0.35m、深さ0.51mである。断面は半円形を呈し、形態は柱穴状のピットの近い。

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　年代は不明である。

61号土坑（第98図、PL.34-14・34-15）

位置　調査区のほぼ中央からやや南西寄り。

グリッド　93Ｆ19

重複　なし。

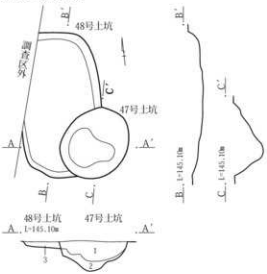
形状と規模　ややいびつな円形を呈する。径0.62m、深さ0.54m、しっかりとした掘り方を有し、断面は逆半円形を呈する。

埋土　黒褐色砂質土を主とするブロック土の互層からなる。

遺物　なし。

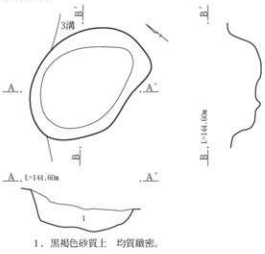
時代　年代は不明である。

47号、48号土坑



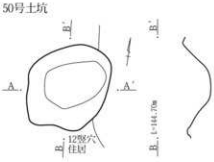
1．黒褐色砂質土　As-C軽石10%混。均質緻密。47号土坑埋土。
2．1層に暗褐色砂質土を斑混。炭化物混。47号土坑埋土。
3．灰黄褐色砂質土　均質緻密。48号土坑埋土。

49号土坑



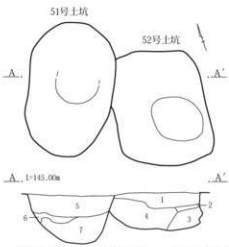
1．黒褐色砂質土　均質緻密。

50号土坑



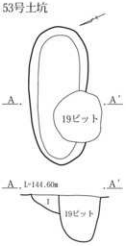
1．黒褐色砂質土　細砂多混。締まり弱い。均質。
2．1層と同質。細砂の混入が1層より多。
3．褐色砂質土を主に1層が混。

51号、52号土坑



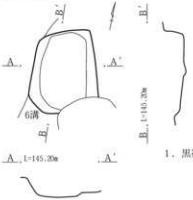
1．黒褐色砂質土　As-C軽石、細砂、ローム粒混。均質。52号土坑埋土。
2．鈍い黄褐色砂質土　灰白色や橙色の砂微粒混。52号土坑埋土。
3．1層とローム塊との混土。上位に1層が多く下位にロームが多い。52号土坑埋土。
4．1層と同質。ロームの混入量多。52号土坑埋土。
5．黒褐色砂質土　As-C軽石、細砂、ローム粒混。均質。51号土坑埋土。
6．鈍い黄褐色砂質土　灰白色や橙色の微細砂混。51号土坑埋土。
7．1層とAs-C軽石が混入する黒褐色砂質土が斑混。底面にレンズ状にロームが混入。51号土坑埋土。

53号土坑



1．黒褐色砂質土

54号土坑

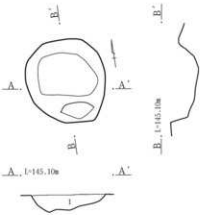


1．黒褐色土　底面から浮上したローム粒混。径5～10mmの炭粒少量混。

0　1:40　1m

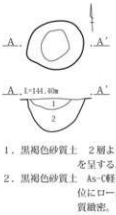
第97図　A区47号～54号土坑

57号土坑



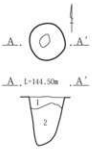
1．黒褐色砂質土　均質緻密。

59号土坑



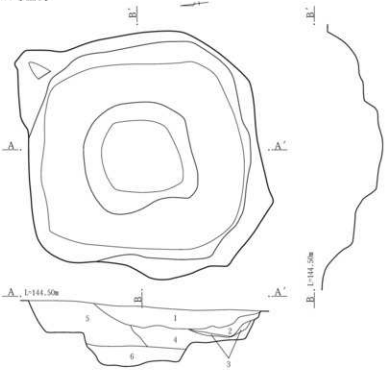
1．黒褐色砂質土　２層よりも明るい色調を呈する。ローム粒混。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石を全体に、下位にローム粒を斑混。均質緻密。

60号土坑



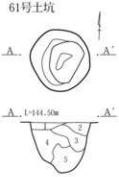
1．黒褐色砂質土　As-C軽石を５％混。均質緻密。
2．１層と同質。１層よりも暗い色調を呈する。As-C軽石10％混。鉄分の染みが多い。

58号土坑



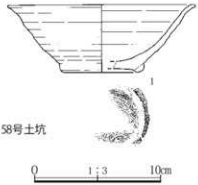
1．黒褐色砂質土　As-C軽石50％混。径５mm程度のローム粒ごく少量混。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石少量混。
3．褐色砂質土　ローム塊混。
4．黒褐色砂質土　As-C軽石50％混。径５mm程度のローム粒ごく少量混。
5．黒褐色砂質土　径５～10mmのローム粒少量混。As-C軽石の他、下方に最大１cmのローム粒５％混。粗粒安山岩の転石が埋没土中に投棄されている。
6．黒褐色砂質土　As-C軽石混の細粒土。５層との区別は僅かに明暗の差が付くくらいである。均質緻密。

61号土坑



1．黒褐色砂質土　As-C軽石少量混。均質緻密。
2．黒褐色砂質土
3．２層に鉄分の染みが見られる。
4．２層と同質。少し黒味を帯びる。
5．純い黄褐色砂質土　ローム粒斑混。

0　1:40　1m



第98図　A区57号～61号土坑及び58号土坑の出土遺物

9．ピット

Ａ区で検出された掘立柱建物を構成する柱穴以外のピットは16基であり、ここで扱うピットの遺構番号の欠番は、掘立柱建物の柱穴として番号を変更したためである。

Ａ区で検出されたピットには、単独に存在するものと掘立柱建物周辺に見られる柱穴群からなり、後者は掘立柱建物に関連する遺構である可能性がある。

１号ピット（第99図）

位置　調査区の北東隅。

グリッド　92Q20

重複　なし。

形状と規模　楕円形を呈する土坑に形状が似た柱穴。３号溝の近くに単独で存在する。長径は0.94m、短径0.60m、深さ0.19mである。断面は箱形を呈し、２カ所に柱痕と思われる窪みが存在する。

埋土　中央に浅間Cテフラを多く含む黒褐色砂質土。周囲はロームブロック土がみられる。

遺物　なし。

時代　遺構の年代は不明であるが、浅間Bテフラを含まない埋土の状況から、古墳時代から古代の可能性がある。

３号掘立柱建物周辺のピット群（第99図）

番号　16号、17号、22号、23号、33号ピット

位置　調査区の北西隅。

重複　なし。

形状と規模　円形を呈する柱穴。断面は23号ピットを除いてＶ字形の穴の形状を呈する。23号ピットは半月形を呈する。柱穴の長径は0.26～0.46m、短径0.22～0.38m、深さ0.27～0.32mである。ピット22号、23号は、３号掘立柱建物東側の桁行軸に近い場所に位置している。

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　遺構の年代は不明である。

３号掘立柱建物、６号掘立柱建物周辺のピット群（第99図）

番号　５号、６号、10号～14号、19号、21号、28号ピット

位置　調査区の中央西。

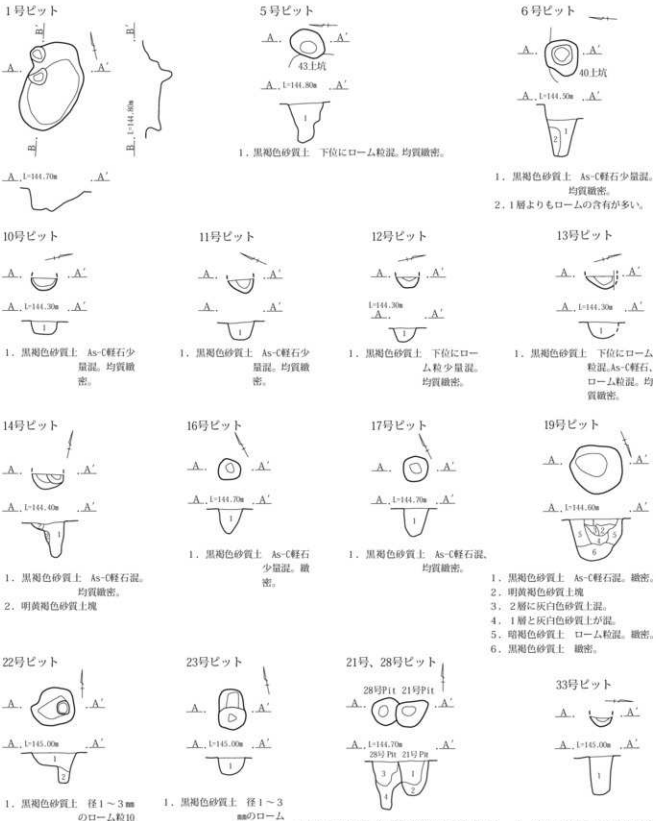
重複　なし。

形状と規模　円形を呈する柱穴。断面はＶ字形から半月形を呈する。柱穴の長径は0.36～0.56m、短径0.30～0.52m、深さ0.14～0.44mである。５号、21号、28号ピットは、５号掘立柱建物南側の桁行軸に近い場所に位置する。10号～13号ピットは、６号掘立柱建物南側の桁行軸の延長線上に近い場所に分布している。

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　遺構の年代は不明である。



1．黒褐色砂質土　下位にローム粒混。均質緻密。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石少量混。均質緻密。
2．１層よりもロームの含有が多い。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石少量混。均質緻密。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石少量混。均質緻密。

1．黒褐色砂質土　下位にローム粒少量混。均質緻密。

1．黒褐色砂質土　下位にローム粒混。As-C軽石、ローム粒混。均質緻密。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石混。均質緻密。
2．明黄褐色砂質土塊

1．黒褐色砂質土　As-C軽石少量混。緻密。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石混。均質緻密。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石混。緻密。
2．明黄褐色砂質土塊
3．２層に灰白色砂質土混。
4．１層と灰白色砂質土が混。
5．暗褐色砂質土　ローム粒混。緻密。
6．黒褐色砂質土　緻密。

1．黒褐色砂質土　径１～３㎜のローム粒10％混。均質緻密。
2．黄褐色砂質土

1．黒褐色砂質土　径１～３㎜のローム粒10％混。均質緻密。

1．黒褐色砂質土　純い黄褐色砂質土との斑混土。As-C軽石の他、細砂多混。緻密。21号ピット理上。
2．１層と同質。細砂少ない。21号ピット理上。
3．黒褐色砂質土　As-C軽石混。均質緻密。28号ピット理上。
4．３層にローム粒が混。28号ピット理上。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石を全体に含み、下位に１～10㎜のローム粒を３％混。緻密。

第99図　A区１・５・６・10号～14・16・17・19・21・22・23・28・33号ピット

10. B区の調査概要

B区では縄文時代前期の遺物包含層、中世の溝1条と年代未詳の溝2条やピット9基が検出された(第101図)。溝は調査区の西南寄りの位置に集中しており、東西方向に延びる3条の溝が南北に並列して検出された。

11. 溝

B区では溝3条が検出されている。調査区の南西隅に並列して検出されており、調査区の地形に調和的である。

1号溝(第100図、PL.35-5・35-6・35-7)

位置　調査区の南西隅に位置し、東西に走る。

グリッド　3R～T2

主軸方位　N85°W

重複　なし。

形状と規模　全長は11.40mである。検出された幅は0.30～0.95m、深さは0.05～0.15mである。西端と東端の底面比高差は0.12mであり、東側に向かって緩い勾配が認められるが、ほぼ平坦である。浅い皿状の溝で、埋土の成層状態から耕作痕ではなく、水路の底部分であると考えられる。

埋土　灰褐色から黒褐色の砂質土からなり、浅間Bテフラを含む。

遺物　なし。

時代　浅間Bテフラが含まれる埋土の状況から、中世以降であるが、年代は不明である。

2号溝(第100図、PL.35-5・35-7)

位置　調査区の南西隅に位置し、東西に走る。

グリッド　3S・T2

主軸方位　N85°W

重複　なし。

形状と規模　全長は3.70mである。検出された幅は0.26～0.33m、深さは0.04～0.05m、底面は平坦である。断面が浅い皿状の溝で、耕作痕の可能性が高い。

埋土　黒褐色の砂質土。

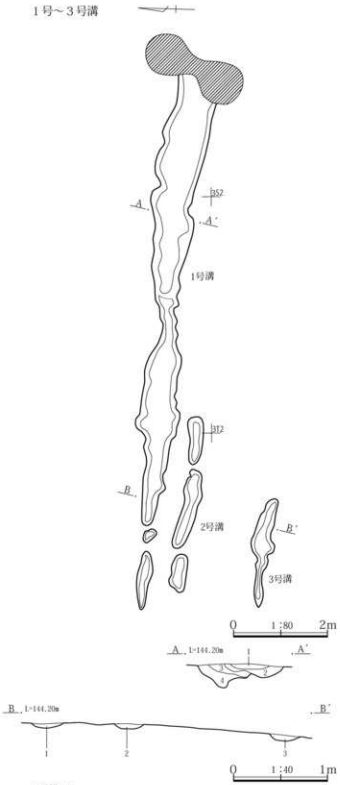
遺物　なし。

時代　遺構の年代は不明である。

3号溝(第101図、PL.35-5)

位置　調査区の南西隅に位置し、東西に走る。

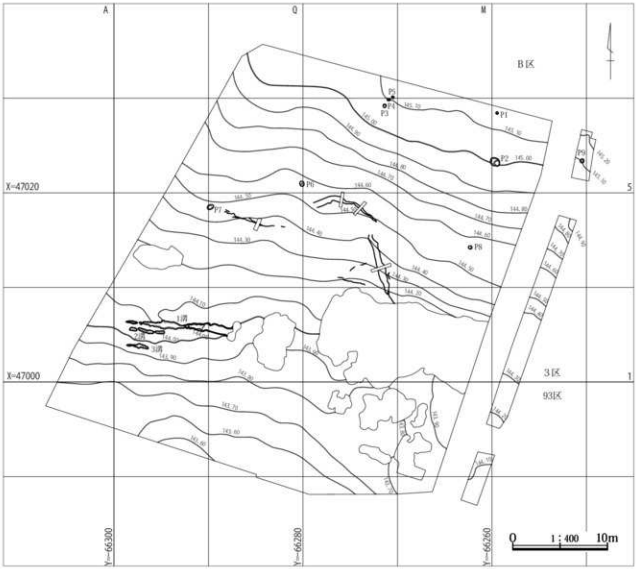
グリッド　3T1



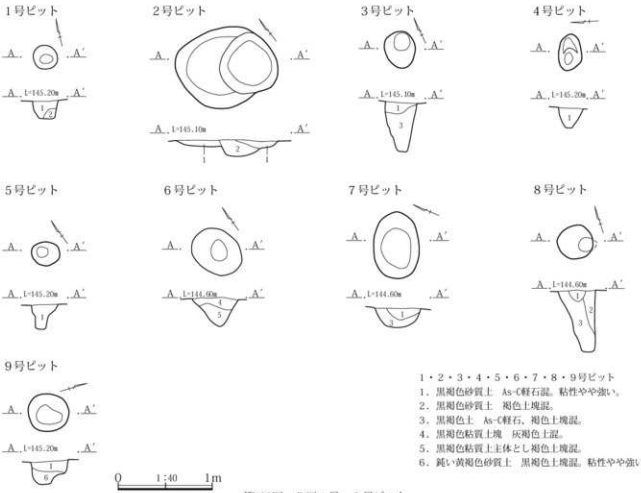
1号溝A-A'
1．灰黄褐色砂質土　As-B軽石混。酸化鉄分沈着。
2．黒褐色砂質土　細砂多量混。
3．褐灰色砂質土
4．2層と同質。

1～3号溝B-B'
1．灰黄褐色砂質土　黒褐色土混。酸化鉄分沈着。1号溝埋土。
2．灰黄褐色砂質土　黒褐色土混。酸化鉄分沈着。2号溝埋土。
3．黒褐色シルト質土　均質。3号溝埋土。

第100図　B区1号～3号溝



第101図　B区遺構全体図



1・2・3・4・5・6・7・8・9号ピット
1．黒褐色砂質土　As-C軽石混。粘性やや強い。
2．黒褐色砂質土　褐色土塊混。
3．黒褐色土　As-C軽石、褐色土塊混。
4．黒褐色粘質土塊　灰褐色土混。
5．黒褐色粘質土主体とし褐色土塊混。
6．鈍い黄褐色砂質土　黒褐色土塊混。粘性やや強い。

第102図　B区１号～９号ピット

主軸方位　N85°W
重複　なし。
形状と規模　全長は2.30mである。検出された幅は0.19～0.34m、深さは0.03～0.06m、底面は平坦である。断面が浅い皿状の溝で、耕作痕の可能性が高い。
埋土　黒褐色の砂質土。
遺物　なし。
時代　遺構の年代は不明である。

12. ピット

B区で検出されたピットは８基である。B区で検出されたピットは、単独に存在するものがほとんどで、遺構検出面の標高144.40m以上の場所に散漫に分布する。これらのピットについて形状にわけて記述する。

３号、４号、５号、８号ピット（第102図、PL.36）
位置　調査区の北東隅。
重複　なし。
形状と規模　円形を呈する柱穴。３～５号ピットは接近して存在する。長径は0.37～0.38m、短径0.24～0.35m、深さ0.22～0.64m、断面はＶ字形を呈し、３号と８号ピットは柱痕と思われる断面が確認できる。
埋土　黒褐色砂質土。
遺物　なし。
時代　遺構の年代は不明である。

１号、２号、６号、７号、９号ピット（第102図、PL.36-1～36-15）
位置　調査区の北半部。
重複　なし。
形状と規模　円形を呈するピット　。それぞれ単独で存在する。長径は0.27～0.56m、短径0.25～0.46m、深さ0.20～0.28m、断面は浅い皿形や半月形、箱形などがある。
埋土　黒褐色砂質土。
遺物　なし。
時代　遺構の年代は不明である。

13. 縄文時代遺物包含層と出土遺物

縄文時代遺物包含層（第103・104図、PL.37-1 ～ 37-4・60、197頁）

位置　調査区の中央北東隅。

形状と規模　遺物は東西9.10m南北6.10mの範囲に粗密を持って分布する。遺物の分布する標高は、おおよそ144.8 ～ 145.0mである。また粗粒輝石安山岩の亜円礫はブロック状に長径0.81m、短径0.30mの範囲に分布しているが、分布範囲の南は風倒木で地層が乱されており、接合資料の分布は全体の一部であると思われる。

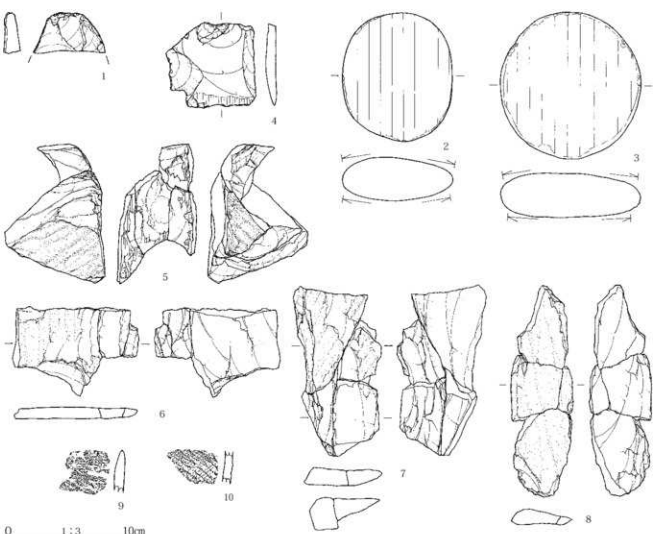
出土した遺物の総数は109点で打製石斧１点、磨石２点、剥片11点、礫や礫の破片が85点、土器片が10点である。出土した石材を岩石別でみると、安山岩類が28点、結晶片岩類が61点、頁岩が９点、石材不明が１点である。

埋土　黒褐色砂質土。

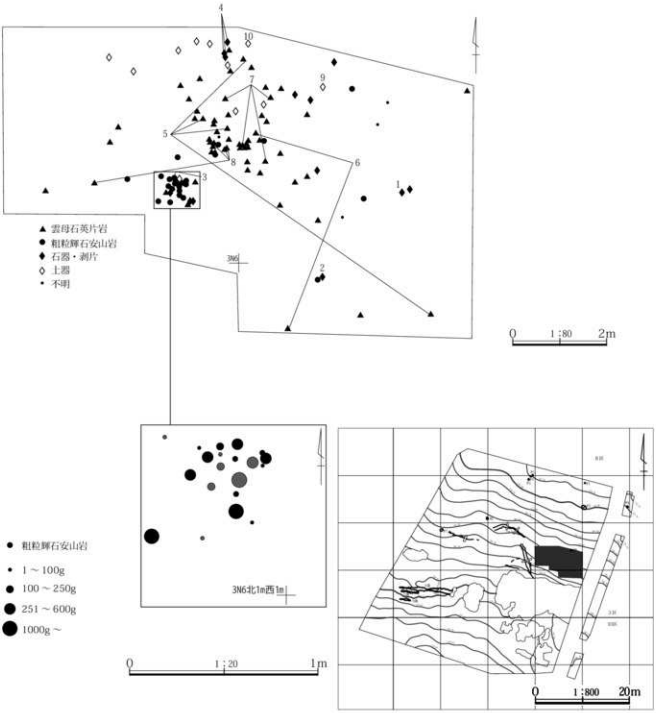
遺物　雲母石英片岩の接合試料（５～８）や輝石安山岩の磨石（２、３）、黒色頁岩の削器（１）や剥片（４）、縄文土器黒浜式の破片（９、10）などが出土している。

輝石安山岩の亜円礫は、表面が淡く赤褐色に酸化した皮膜を呈するものがみられ被熱の跡と思われる。輝石安山岩には普通輝石と紫蘇輝石、斜長石の斑晶がみられ表面は風化した河川礫である。赤城白川水系などにみられる一般的な赤城火山の安山岩類の特徴を有し、おそらくは白川扇状地の構成層である扇状地堆積物に含まれていた礫であると推定される。

時代　遺物包含層の時代は、土器から縄文時代前期と推定される。



第103図　Ｂ区縄文時代遺物包含層の出土遺物



第104図　B区縄文時代遺物包含層

14. Ｃ区の調査概要

Ｃ区は地形的にはＢ区とＤ区の小規模な谷地形に挟まれた尾根に立地するが、その遺構検出面は周囲の調査区と同様であった。Ｃ区では浅間Ｂテフラ下面及びその下位の土壌から水田が発見されることが期待された。しかし検出された遺構から確実な水田遺構を認定するには至らなかった。

Ｃ区では中世から近世の溝14条と中世の土坑１基が検出された。溝は南北方向に９条、東西方向に５条である(第105図)。南北方向の１～５号溝と７号溝は、浅間Ｂテフラの降下以降の溝で台地から低地へ地形が移り変わる傾斜変換点と最も低い場所に作られていた。また、埋土は層相から水成堆積物である観察結果が得られた。１～５号溝は同じ場所で繰り返し作られており、水田にともなう用排水路である可能性が高い。また、東西方向の６、８、13、14号溝は、北から南へと傾斜する地形に直交し、埋土に水成堆積の観察はない。このことからこの溝群は用排水路ではなく、土地を区画するための溝としての性格が考えられる。

15. 溝と土坑

Ｃ区では溝14条が検出されている。これらは調査区の南北を走る溝群である１号溝から５号溝、７号溝、10号溝、11号及び12号溝である。また調査区の東西を走る６号溝、８号溝、東西方向から南北方向に屈曲する13号及び14号溝である。これらの溝群は調査区の地形に調和的である。

１号、２号、３号、４号、５号溝及びその下流にあたる名称未詳の３条の溝群(第106図、PL.38-1～38-4)

位置　調査区の東端に位置し、南北に走る。

グリッド　４Ｄ・Ｅ１～９

主軸方位　Ｎ１～11°Ｅ

重複　１号～５号溝は重複して切り合い、北から南に走行する用水路と思われる溝群であり、最下位の１号溝、１号溝より新しい２号溝、２号溝と４号溝は３号溝よりも古いことが層序関係から確認された。また遺構の平面分布から５号溝は４号溝よりも古いことが確認された。

形状と規模　全長は37.00mである。１号溝の検出された幅は0.60m＋、最大の深さは0.33mである。浅い片側のみ残された溝状遺構で、右岸側の肩は２号溝で失われている。２号溝の検出された幅は0.60m＋、最大の深さは0.39mである。浅い片側のみ残された溝状遺構で、右岸側の肩は３号溝で失われている。３号溝の検出された幅は0.65m、最大の深さは0.37mである。溝の底部が残された遺構で肩は不明瞭ながら確認できる。４号溝の検出された幅は0.70m、最大の深さは0.40mである。溝の底部が残された遺構で肩は不明瞭ながら確認できる。５号溝の検出された幅は0.70m＋、最大の深さは0.41mである。浅い片側のみ残された溝状遺構で、左岸側の肩は４号溝で失われている。これらの溝群の北端と南端の底面比高差は0.82mであり、南側に向かって勾配が認められる。

埋土　灰褐色から黒褐色の砂質土からなり、浅間Ｂテフラを一部に含む。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含む埋土の状況から、中世以降であることが確実である。

６号溝(第107図、PL.38-5・38-6、197頁)

位置　調査区の北端に位置し、東西に走行する。

グリッド　４Ｅ・Ｑ９～11

主軸方位　Ｎ81°Ｗ

重複　７号、10号溝と重複して切り合う溝群であるが、新旧関係は不明である。

形状と規模　全長は62.00mである。６号溝の検出された幅は0.28～0.45m、深さは0.11～0.27mである。西端と東端の底面比高はなく、平坦である。検出面及び溝の底は、ほぼ水平を呈する。埋土にも流水の痕跡が認められないので土地の区画を示す溝であると思われる。

埋土　浅間Ｂテフラを含む暗灰色砂質土。

遺物　渡来銭の天聖元寶(１)が出土している。

時代　浅間Ｂテフラを含む埋土の状況や出土した遺物から、中世以降であることが確実で、７号溝と同時代である。

７号溝(第108図、PL.38-7・38-8・39-1、197頁)

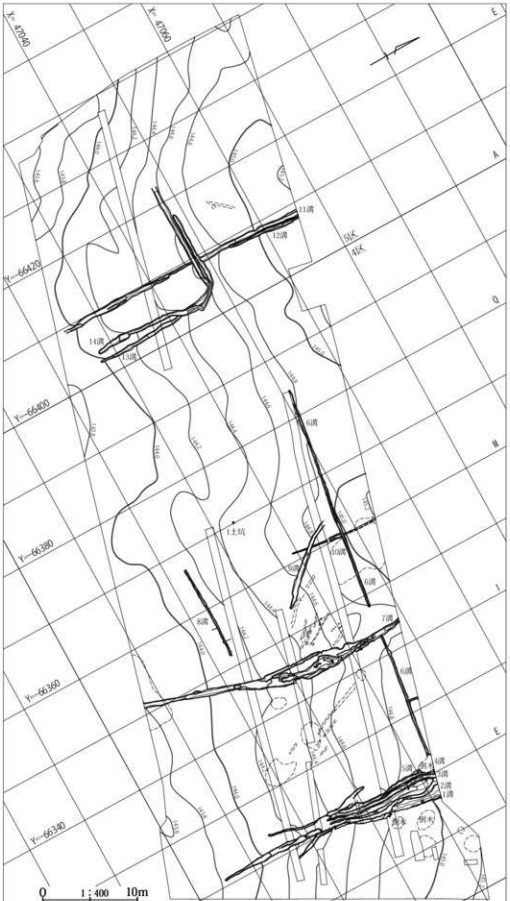
位置　調査区の中央東寄りに位置し、北から南に走行する。

グリッド　４Ｉ・Ｋ２～10

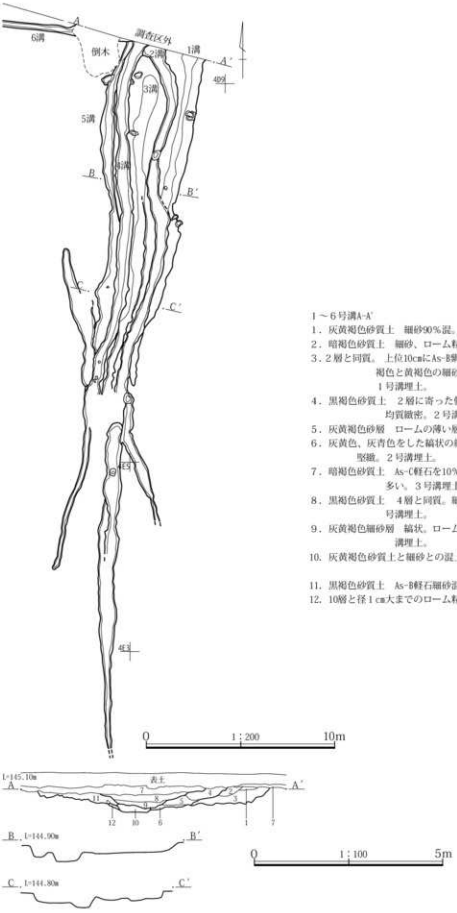
主軸方位　ＮＳ

重複　６号溝と重複して切り合う溝であるが、新旧関係は不明である。

形状と規模　全長は43.20mである。７号溝の検出され



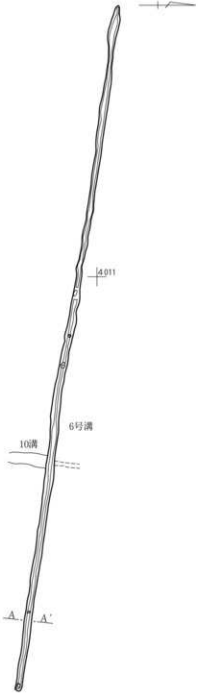
第105図　C区遺構全体図



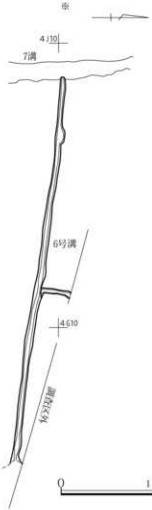
１～６号溝A-A'

1．灰黄褐色砂質土　細砂90％混。硬質緻密。１号溝理土。
2．暗褐色砂質土　細砂、ローム粒混。１号溝理土。
3．２層と同質。上位10cmにAs-B桃色アッシュの小塊、下位に黒褐色と黄褐色の細砂の互層。２層にくらべて堅緻。１号溝理土。
4．黒褐色砂質土　２層に寄った側に黄褐色ロームが塊で混入。均質緻密。２号溝理土。
5．灰黄褐色砂層　ロームの薄い層と互層。堅緻。２号溝理土。
6．灰黄色、灰青色をした縞状の細砂層。最大径５mmの円礫混。堅緻。２号溝理土。
7．暗褐色砂質土　As-C軽石を10％混。均質。８層との境に細砂多い。３号溝理土。
8．黒褐色砂質土　４層と同質。細砂と泥状堆積物との互層。３号溝理土。
9．灰黄褐色細砂層　縞状。ローム粒混。鉄分浸着。堅緻。３号溝理土。
10．灰黄褐色砂質土と細砂との混土。　底面近くにローム多い。堅緻。４号溝理土。
11．黒褐色砂質土　As-B軽石細砂混。均質。６号溝理土。
12．10層と径１cm大までのローム粒との混土。５号溝理土。

第106図　C区１号～５号溝



1．暗褐色砂質土　全体にAs-B軽石細砂を攪拌状に混。均質緻密。

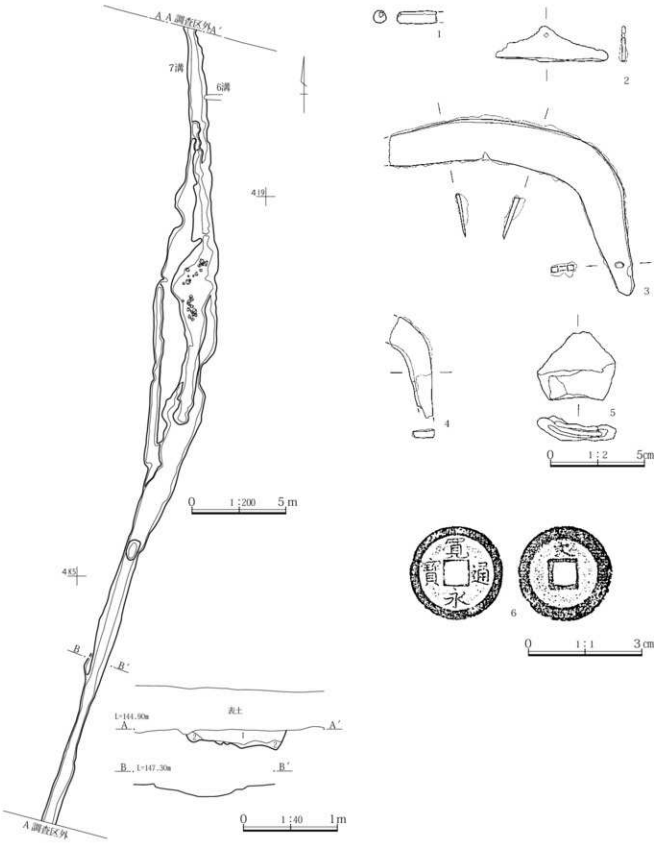


0　1:1　3cm

0　1:40　1m

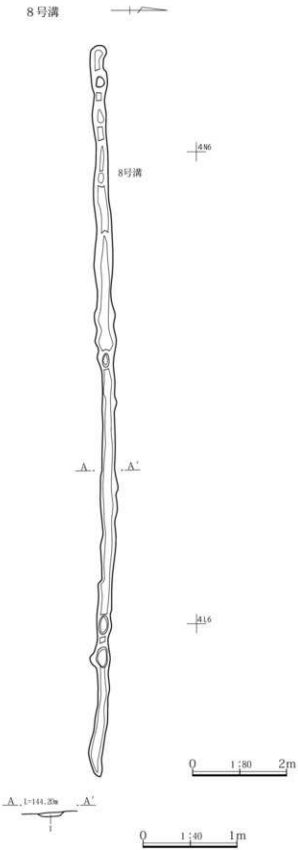
0　1:200　10m

第107図　C区6号溝及び出土遺物



1．ロームと黒褐色砂質土との攪拌土。均質緻密。
2．細砂とロームと黒褐色砂質土との攪拌土の混土。下位に細砂が薄い層状に堆積。

第108図　Ｃ区７号溝及び出土遺物



1．黒褐色砂質土　As-B混じり、As-C軽石10%混。上層からの鉄分の浸透多。

第109図　C区８号溝

た幅は0.70～1.50m、深さは0.07～0.43mである。北端と南端の底面比高差は0.90mであり、南側に向かって43.2mで約１mの２％勾配が認められる。埋土に流水の痕跡や基底に洗い出された地山の礫がみられた用水路である。

埋土　溝の底部に暗灰色細流砂が見られる暗灰色砂質土。調査区の南端で降下堆積した浅間Ｂテフラに覆われる。

遺物　金属器のキセル（１）、火打ち金（２）や鉄製品の鎌（３、４）、寛永通宝（６）が出土している。

時代　出土遺物から近世である。

８号溝（第109図、PL.39-2・39-3）

位置　調査区中央に位置し、東西に走行する。

グリッド　４Ｋ～Ｎ５

主軸方位　ＥＷ

重複　なし。

形状と規模　全長は15.60mである。８号溝の検出された幅は0.24～0.40m、深さは0.05～0.14mである。検出面及び溝の底は、ほぼ水平を呈する。埋土にも流水の痕跡が認められないので土地の区画を示す溝であると思われる。

埋土　浅間Ｂテフラを含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含む埋土の状況から、中世以降であることが確実である。

９号溝（第110図、PL.39-4・39-5）

位置　調査区中央北寄り、北西から南東方向に走行する。

グリッド　４Ｋ・Ｍ７～10

主軸方位　Ｎ40°Ｗ

重複　10号溝と重複して切り合う溝で、10号溝より古い。

形状と規模　全長は15.00mである。９号溝の検出された幅は0.58～0.85m、深さは0.05～0.14mである。北西端と南東端の底面比高差は0.32mであり、南東側に向かって緩い勾配が認められる。地形の垂直方向に走行する水路である。

埋土　浅間Ｃテフラを少量含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　10号溝よりも古いが、規模や形状からみて中世以降の溝であろう。

10号溝（第110図、PL.39-6）

位置　調査区中央に位置し、北から南に走行する。

第110図　C区９号、10号溝

グリッド　４Ｌ・Ｍ８～11

主軸方位　Ｎ７°Ｅ

重複　９号溝と重複して切り合う溝で、９号溝より新しい。

形状と規模　全長は14.40mである。10号溝の検出された幅は0.16～0.70m、深さは0.03～0.24mで、底面はほぼ水平ある。地形の垂直方向に走行する水路である。

埋土　浅間Ｂテフラを含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含む埋土の状況から、中世以降であることが確実である。

11号溝（第111図、PL.39-7・39-8・40-1）

位置　調査区西よりに位置し、北から南に走行する。

グリッド　５Ｂ６～14

主軸方位　ＮＳ

重複　12号～14号溝と重複して切り合う溝で、重複関係は不明である。

形状と規模　全長は41.00mである。11号溝の検出された幅は0.40～0.90m、深さは0.06～0.22mである。北端と南端の底面比高差は0.68mであり、南側に向かって勾配が認められる。埋土には流水の痕跡が認められることから用水路と考えられる。

埋土　浅間Ｂテフラを含む灰褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含む埋土の状況から、中世以降であることが確実である。

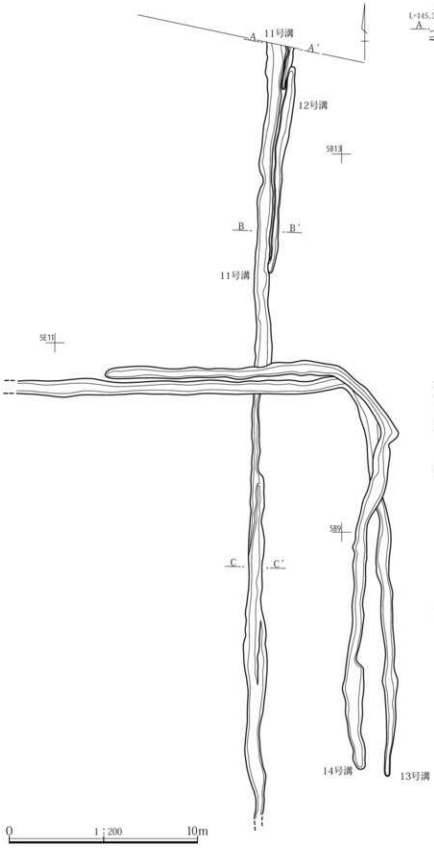
12号溝（第111図、PL.39-7・39-8・40-1）

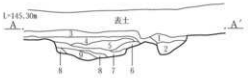
位置　調査区西よりに位置し、北から南に走行する。

グリッド　５Ｂ11～14

主軸方位　Ｎ７°Ｅ

重複　11号溝と併走して一部が重複して切り合う溝で、同時期の用水路である。





11号溝A-A'

1．黒褐色砂質土　As-B軽石を全体に混。黄褐色粒混。均質緻密。
2．1層と同質。1層よりも僅かに黒い。
3．As-B軽石二次堆積。
4．1層と同質。
5．1層と同質。細砂が薄い縞状に堆積。
6．1層と同質。2～6層の中で最も微粒。
7．As-B軽石二次堆積。
8．6層と同質。　6層の様に5層などの混入が無い。
9．細砂層。　As-B軽石の二次堆積。8層を上下に分ける。鉄分の浸透多い。

11・12号溝B-B'

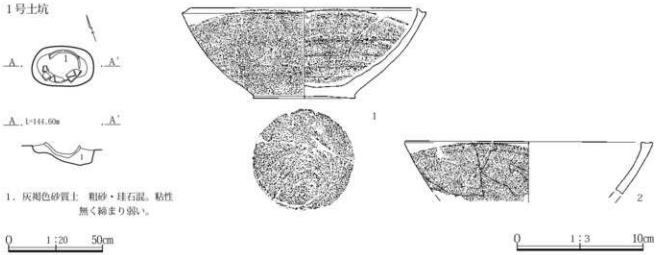
1．褐灰色砂質土　As-BとAs-C軽石らしき細砂が混。均質緻密。11号溝埋土。
2．灰黄褐色砂質土　As-B軽石細砂混。底面に厚さ2～3mmの鉄分凝集。11号溝埋土。
3．1層に類似。　As-C軽石と鉄分の凝集が多い。12号溝埋土。

11号溝C-C'

1．暗褐色砂質土　しまりのない細砂。
2．鈍い黄褐色砂質土　As-B軽石混。均質緻密。

0　1:40　1m

第111図　C区11号～14号溝



第112図　Ｃ区１号土坑と出土遺物

形状と規模　全長は12.00mである。12号溝の検出された幅は0.32～0.60m、深さは0.05～0.13m、底面はほぼ水平である。

埋土　浅間Ｂテフラを含む灰褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含む埋土の状況から、中世以降であることが確実である。

13号溝(第111図、PL.40-2)

位置　調査区中央西よりに位置し、東西方向から南北方向に屈曲する。

グリッド　５Ａ～Ｄ６～10

主軸方位　ＥＷからＮ４°Ｗ

重複　11号～14号溝と重複して切り合う溝で、新旧関係は不明である。

形状と規模　全長は34.00mである。13号溝の検出された幅は0.50～0.90m、深さは0.07～0.10mである。西端と南端の底面比高差は0.72mであり、南側に向かって勾配が認められる。溝は浅く、埋土に流水の痕跡は認められないので区画を示す溝か、排水目的の水路であると考えられる。

埋土　暗灰色砂質土。

遺物　なし。

時代　他の中世以降の溝との重複関係があり、同じ時代の溝であろう。

14号溝(第111図、PL.40-2)

位置　調査区中央西よりに位置し、東西方向から南北方向に屈曲する。

グリッド　５Ａ～Ｄ６～10

主軸方位　ＥＷからＮ３°Ｅ

重複　11号～14号溝と重複して切り合う溝で、新旧関係は不明である。

形状と規模　全長は39.00mである。14号溝の検出された幅は0.60～0.85m、深さは0.06mである。北端と南端の底面比高差は0.63mであり、南側に向かって勾配が認められる。溝は浅く、埋土に流水の痕跡は認められないので区画を示す溝か、排水目的の水路であると考えられる。

埋土　暗灰色砂質土。

遺物　なし。

時代　他の中世以降の溝との重複関係があり、同じ時代の溝であろう。

１号土坑(第112図、PL.40-3・40-4・60、198頁)

位置　調査区の中央に位置し単独で存在する。

グリッド　４Ｏ７

重複　なし。

形状と規模　楕円形の土坑である。長径は0.33m、短径0.21m、深さは0.11mである。底を下にした在地系土器の鉢(１)が土坑底の上位に埋設されているが、鉢の上半部は失われている。

埋土　灰褐色砂質土。

遺物　中世から近世の在地系土器の鉢である。

時代　遺物から中世以降と推定されるが、年代は不明である。

16. D区の調査概要

D区では古墳時代後期の竪穴住居と中世以降と推定される屋敷跡を構成する遺構群を検出した(第113図)。

第113図　D区遺構全体図

竪穴住居は古墳時代後期の集落に伴う２棟で、６世紀後半頃と考えられる。小神明富士塚遺跡の西に位置する東田之口遺跡は、古墳時代後期の大規模な集落遺跡であり、D区で検出された竪穴住居の分布は、その集落の東端の一部を構成している様子がうかがえる。

中世以降の屋敷跡は、東西に約50ｍの規模で方形に区画された範囲にあたる。区画の南西部は調査区外に及ぶが、ほぼ屋敷の中心部分を発掘した。屋敷跡の東側を構成する範囲には一部に溝が見られ、谷地との地形の差が土地の区画となっている。屋敷跡の西側は２号溝、南側は１号溝で区画されている。屋敷内の建物は掘立柱建物４棟が検出され、２棟は重複が認められることから少なくとも２時期以上の変遷があるものと思われる。また、中世の竪穴状遺構１、時代未詳の竪穴状遺構(内１棟は５号土坑)３棟を検出した。

D区で検出された溝は、中世が１条、時代未詳が５条である。土坑は中世が２基、時代未詳が40基みられた。なお、近世から古墳時代の遺構の発掘調査が終了した後に、台地では旧石器時代の遺物包含層の確認調査を実施したが、遺物は検出されなかった。

17. 竪穴住居

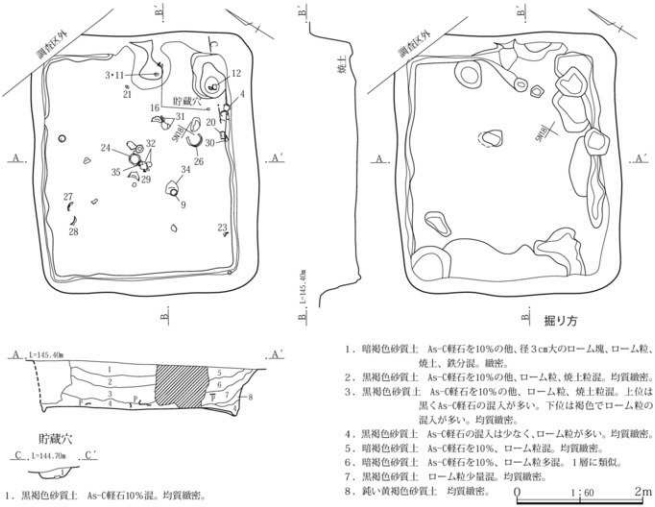
D区では竪穴住居が２棟検出され、これは古墳時代後期のものである。竪穴住居は調査区の北側に分布し、調査区の西側に隣接する東田之口遺跡の住居群に連続するものと思われる。

１号竪穴住居(第114～117図、PL.41-1～42-2・61、198頁)

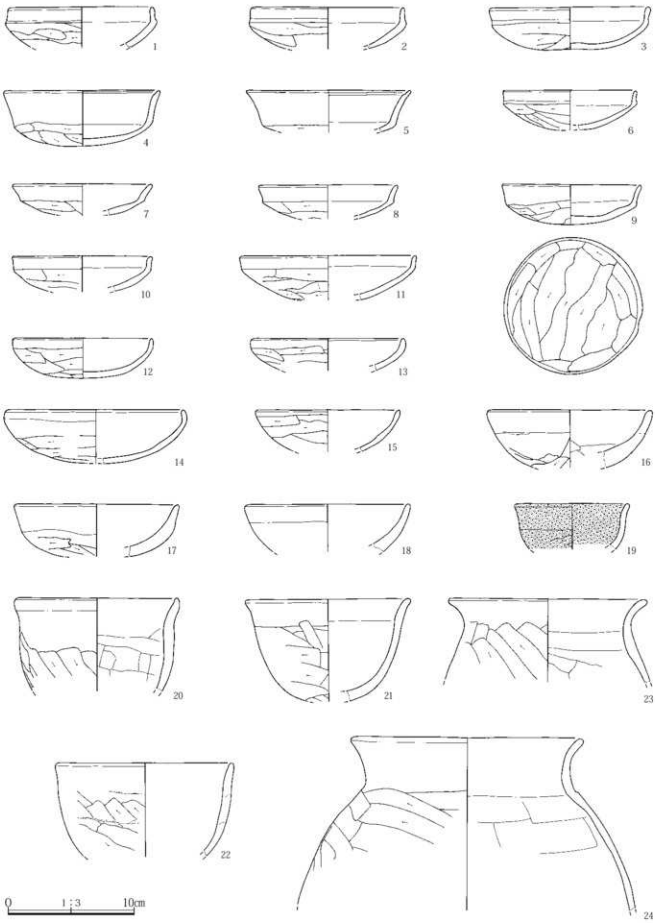
位置　調査区の中央北隅。

グリッド　５M・N17・18

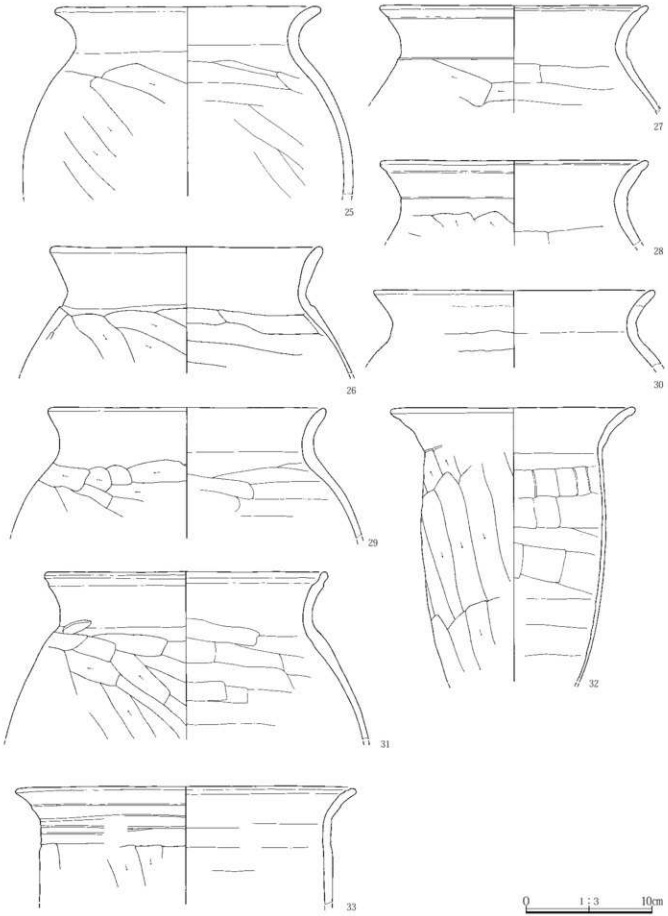
主軸方位　N56°E



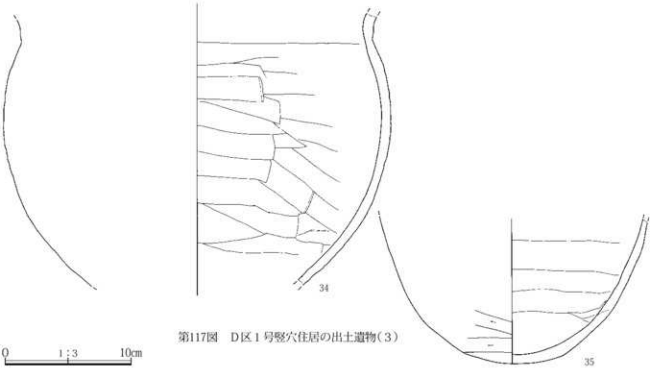
第114図　D区１号竪穴住居



第115図　D区１号竪穴住居の出土遺物（１）



第116図　D区１号竪穴住居の出土遺物（２）



第117図　D区1号竪穴住居の出土遺物(3)

重複　なし。

形状と規模　北東－南西方向に若干長軸を有する長方形を呈する。長辺は4.28m、短辺3.62m、床面までの深さ0.80m、面積11.13㎡である。

埋土　浅間Cテフラを含む黒褐色砂質土の互層で、基底は南東壁際より黒褐色土が堆積している。竪穴は緩く水平に埋没しており、上位ほどロームブロックが多い黄褐色土である。

床面　灰褐色ローム層の上面を床面としている。

掘り方　灰褐色ローム層と黒褐色砂質土による薄層からなり、一部が床面と同一である。

周溝　床面の輪郭に沿って壁際を周回する。深さは0.08mで保存状態は良好である。

竈　北東の短辺壁のほぼ中央に位置したと思われるが、埋土下ではほぼ失われており、床面の一部に焼土の薄層を残すのみであった。

貯蔵穴　東隅に位置する。貯蔵穴は壁際に揃って北東方向に長い隅が丸い長方形を呈し、長径は0.76m、短径0.50m、深さ0.17mである。底面の直上から坏(12)が出土している。

柱穴　床面や掘り方には見られなかった。

特徴　長辺が4mの小型の竪穴住居であり、床面に主柱に相当する柱穴を持たない構造と想定される。

遺物　竪穴住居床面の全体から多量の遺物が出土した。特に床面の中央部に多く出土し、これらは土師器の甕(26～32、34、35)や小型甕(20)、鉢(21)や坏(4、9、12、16)である。

時代　古墳時代7世紀前半

2号竪穴住居(第118～121図、PL.42-3～44-1・61、198・199頁)

位置　調査区の中央北西隅。

グリッド　5Q・R17～19

主軸方位　N108°E

重複　なし。

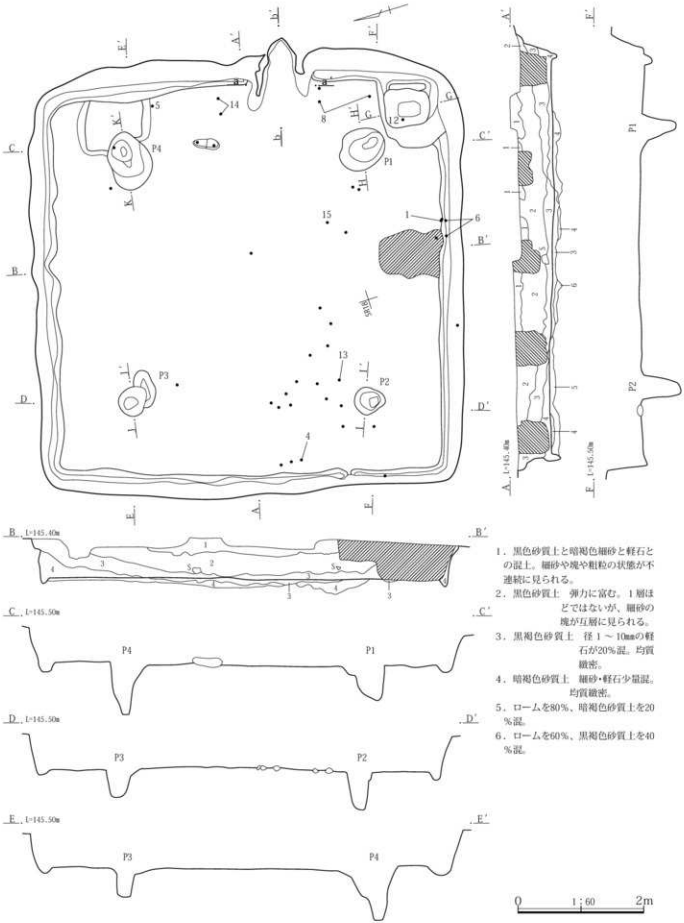
形状と規模　東南東－西北西方向に主軸を持つ正方形を呈する。長辺は7.18m、短辺6.85m、床面までの深さ0.62m。掘り方までの深さ0.78m、面積41.12㎡である。

埋土　浅間Cテフラを含む暗灰色から黒褐色砂質土の互層で、基底は壁際より軽石を含む暗褐色土が堆積している。竪穴は緩く水平に埋没しており、上位ほど黒褐色土の互層が卓越する。

床面　灰褐色ローム層の上面を床面としている。

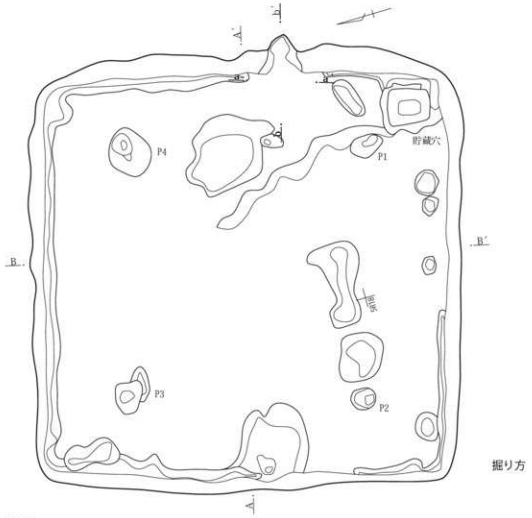
掘り方　灰褐色ローム層の塊を多く含む黒褐色砂質土からなる。

周溝　床面の輪郭に沿って壁際を周回する。深さは0.09～0.12mである。



1．黒色砂質土と暗褐色細砂と軽石との混土。細砂や塊や粗粒の状態が不連続に見られる。
2．黒色砂質土　弾力に富む。１層ほどではないが、細砂の塊が互層に見られる。
3．黒褐色砂質土　径１～10㎜の軽石が20％混。均質緻密。
4．暗褐色砂質土　細砂・軽石少量混。均質緻密。
5．ロームを80％、暗褐色砂質土を20％混。
6．ロームを60％、黒褐色砂質土を40％混。

第118図　D区２号竪穴住居（１）



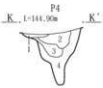
貯蔵穴

1．黒褐色砂質土　As-C軽石10%混。均質緻密。
2．暗褐色砂質土　As-C軽石の他、径1～2mmのローム粒を15%混。均質緻密。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石10%混。均質緻密。
2．鈍い黄褐色砂質土　黒褐色砂質土が斑混。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石の他、径1～5mmのローム粒を5%混。均質。
2．黄褐色砂質土

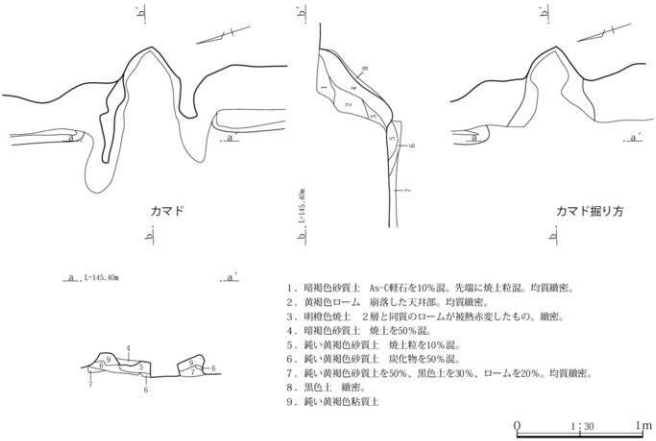
1．黒褐色砂質土　As-C軽石の他、径1～3mmのローム粒を少量混。均質。
2．黄褐色砂質土



1．黒褐色砂質土
2．1層にAs-C軽石を10%、ローム粒少量混。
3．2層と同質。ローム粒10%混。
4．黄褐色砂質土　径1～5mmの礫を全体に混。粘性あり。

0　1:60　2m

第119図　D区2号竪穴住居掘り方



第120図　D区２号竪穴住居(３)

竈　北北東方向の壁に対して若干南よりに位置する。幅は0.90m、長さ1.08mであり焚き口の幅は0.54mである。竈の焚き口から燃焼部の大部分は、現代の耕作機具による土壌攪乱で乱されており、竈の底部が残されるのみであった。竈の底部には灰としっかりした焼土帯が見られた。

貯蔵穴　南東隅に位置する。貯蔵穴は壁際に揃って北北東方向に長い隅が丸い長方形を呈し、長径は0.72m、短径0.60m、深さ0.60mである。底面から0.28mの位置に甕(12)の破片が出土している。

柱穴　２号竪穴住居は４基の柱穴が検出された。南東隅の柱穴から時計回りにピット１～４とした。柱穴からは明瞭な柱痕は確認できなかったが，ピット４は完掘した状況で柱の痕跡と思われる窪みが確認できた。

ピット１～４の大きさは以下の通りである。

ピット１は長径0.60m、短径0.42m、深さ0.56m。

ピット２は長径0.48m、短径0.45m、深さ0.62m。

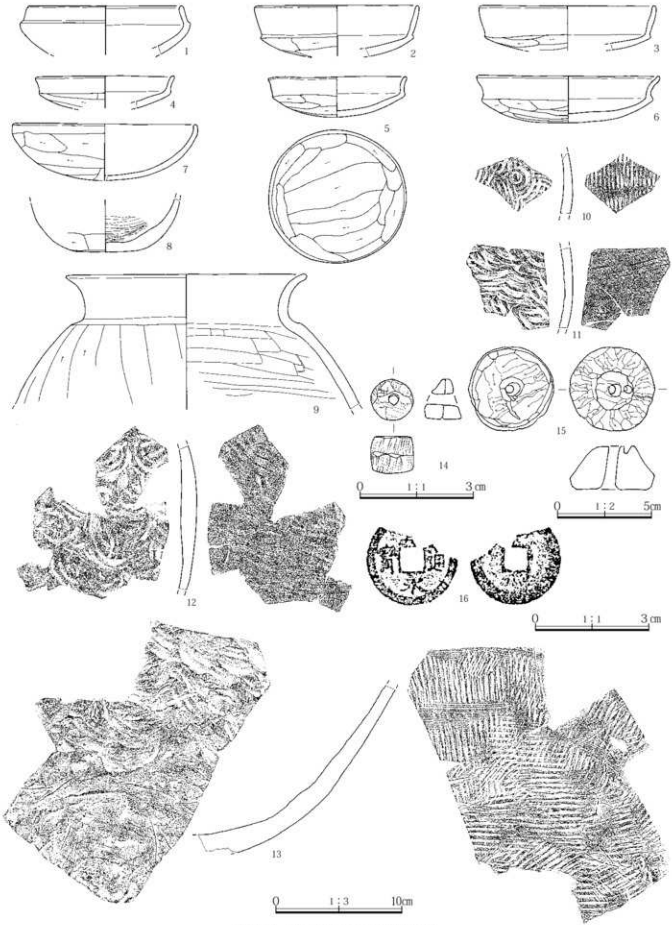
ピット３は長径0.50m、短径0.43m、深さ0.46m。

ピット４は長径0.74m、短径0.52m、深さ0.92m。

特徴　住居内の全域から多数の遺物が出土している。また大きさが0.10m大の細長い河川礫が床面から18点出土している。これらは粗粒輝石安山岩や変質した火山岩類からなり、石英閃緑岩の礫を１点含む。円礫の長径は0.159～0.112m、幅は0.083～0.039mである。重さは794～340gで、こも石として利用するために集められた石材の可能性がある。

遺物　６世紀後半から７世紀前半の年代を示す土師器の甕(９)、鉢(８)、坏(１、４～６)や貯蔵穴付近の床面から須恵器の甕(13)が出土した。埋土から出土した土師器の坏(７)のみ７世紀後半の年代を示す。

時代　古墳時代６世紀後半から７世紀前半



第121図　D区２号竪穴住居の出土遺物

18. 竪穴状遺構

Ｄ区では竪穴状の遺構は３棟検出され、これらは埋土に浅間Ｂテフラを含むことから古代末(12世紀)以降の年代未詳の遺構群である。遺構は調査区の中央に分布し、掘立柱建物や土抗群の分布と極めて調和的である。

１号竪穴状遺構(第122図、PL.44-2・44-3)

位置　調査区の中央。

グリッド　５Q13・14

主軸方位　N77°E

重複　４号掘立柱建物との遺構の層序関係は不明であるが、同時性はない。

形状と規模　東西方向に若干長軸を有する長方形を呈する。長辺は3.14m、短辺2.16m、床面までの深さ0.15m、面積4.40㎡である。

埋土　浅間Ｂテフラを含む黒褐色砂質土でロームブロックを含み均質である。

床面　灰褐色ローム層を床面としている。

掘り方　床面と掘り方が同一面であり、貼り床等は認められない。

周溝　なし。

竈や炉　なし。

土坑　北隅に１基の円形の土坑が検出された。径は0.60m、深さ0.17mで、埋土は炭化物や焼土の塊を含む黒褐色砂質土である。

柱穴　１号竪穴状遺構では壁際に３基の柱穴が検出された。北東隅の柱穴から時計回りにピット１～３とした。柱穴からは明瞭な柱痕は確認できなかったが，ピット２は完掘した状況で柱の痕跡と思われる窪みが確認できた。

ピット１～３の大きさは以下の通りである。

ピット１は直径0.22m、深さ0.21m。

ピット２は長径0.31m、短径0.27m、深さ0.51m。

ピット３は直径0.29m、深さ0.67m。

特徴　竪穴の壁際隅から明瞭な柱穴が見られることから、壁際に柱を持つ上部構造を有した建物と考えることができる。

遺物　なし。

時代　埋土の状況から中世の可能性があるが時代や年代は不明である。

２号竪穴状遺構(第122図、PL.44-4・44-5・60、199頁)

位置　調査区の中央南東隅。

グリッド　５N・O12・13

主軸方位　N７°W

重複　なし。１号及び２号掘立柱建物の北に位置する。

形状と規模　東西－南北方向に揃ってゆがんだ正方形を呈する。長辺は4.30m、短辺4.18m、床面までの深さ0.39m、面積12.42㎡である。

埋土　浅間Ｂテフラを含む黒褐色砂質土が皿状に成層する。

床面　灰褐色ローム層を床面としている。床は水平でなく、浅い皿状の窪みを呈する。

掘り方　なし。しかし、埋土の２が掘り方と床の間の土であった可能性もある。

周溝　なし。

竈や炉　なし。

柱穴　床面や掘り方には見られなかった。

特徴　浅い窪み状の竪穴遺構であり、発掘された状況からこの遺構が建物である可能性は床面としたロームとの境界を見る限り低い。しかし、遺構の床面が失われており、調査では掘り方を床面と考えた可能性がある。

遺物　砥石(１)と渡来銭の開元通宝(２)が出土している

時代　渡来銭の出土から、遺構は中世の時期に属する可能性が極めて高いと考えられる。

３号竪穴状遺構(第123図、PL.44-6・44-7)

位置　調査区の中央南東隅。

グリッド　５M・N11・12

主軸方位　N66°W

重複　なし。１号及び２号掘立柱建物の北東に位置する。

形状と規模　西北西方向に長辺を持ち、ゆがんだ長方形を呈する。長辺は3.87m、短辺3.02m、床面までの深さ0.33m、面積7.20㎡である。

埋土　浅間Ｃテフラを若干含む黒褐色砂質土の互層で下位ほどブロックを含む。

床面　灰褐色ローム層を床面としている。

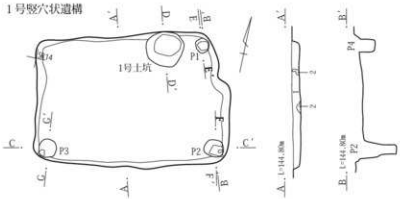
掘り方　なし。

周溝　なし。

竈や炉　なし。

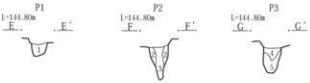
土坑　竪穴状遺構の南半部に土坑状遺構が見られるが時代の異なる別の土坑の可能性もある。長辺は2.23m、短辺1.32m、深さ0.16m。埋土はローム層の塊を含む黒褐

1号竪穴状遺構



1．黒褐色砂質土　As-Bを全体に含み、ローム粒、径1～3㎜の小石混。均質堅緻。
2．ローム塊。

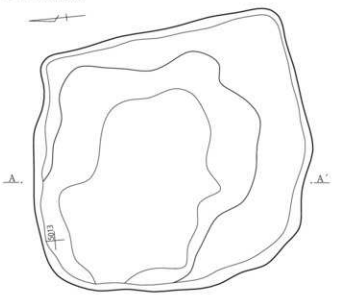
1．黒褐色砂質土
2．灰白色土
3．黒褐色砂質土

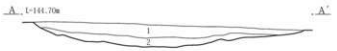


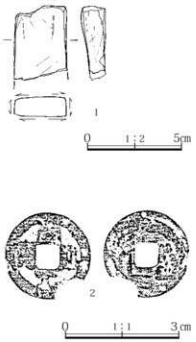
1．褐色粘質土　ローム粒混。
2．褐色土　ローム粒混。
3．暗褐色砂質土　ローム粒30％混。
4．黒褐色砂質土
5．明黄褐色土　ローム粒70％混。

0　1：60　2m

2号竪穴状遺構







0　1：2　5cm

0　1：1　3cm

1．黒褐色砂質土　As-Bを軽石混。上位に多い。As-Cを軽石少量混。均質緻密。
2．黒褐色砂質土　全体にAs-Bを軽石、As-Cを軽石が混。壁寄りでロームが縞状に混。均質緻密。

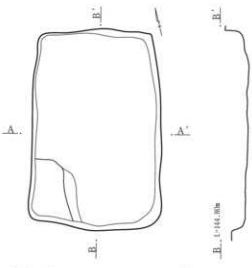
0　1：60　2m

第122図　D区１号、２号竪穴状遺構及び２号竪穴状遺構の出土遺物

３号竪穴状遺構

１．黒褐色砂質土　As-C軽石５％混。下位にローム粒混。均質緻密。
２．１層と径３～５cmのロームの斑混上。緻密、硬質。
３．径１cm大の黒褐色砂質土粒とローム粒との攪拌上。３号竪穴状遺構内上坑埋上。

５号土坑



１．黒褐色砂質土　軽石、ローム粒の攪拌上。一部にAs-B軽石のアッシュの塊を混。

0　1:60　2m

第123図　D区３号竪穴状遺構と５号土坑

色砂質土からなる。

柱穴　床面や掘り方には見られなかった。

特徴　浅い窪み状の竪穴遺構である。柱穴は認められないが１号竪穴住居と大きさは近似しており、建物であった可能性がある。

遺物　なし。

時代　竪穴遺構の形状や規模、埋土などから１号、2号竪穴遺構と同様に中世の可能性があるが時代や年代は不明である。

５号土坑(第123図、PL.47-5・47-6)

位置　調査区の中央。

グリッド　５N14・15

重複　なし。３号掘立柱建物の桁行方向の東延長部に位置する。

形状と規模　長方形を呈する。長径3.18m、短径2.04m、深さ0.30m、断面は箱形を呈する。大きさや規模が１号～３号竪穴状遺構に類似する。

埋土　浅間Ｂテフラの塊を含む黒褐色砂質土で、均質である。

特徴　長方形の浅い土坑として調査がなされたが、１号竪穴遺構と規模や大きさが近似した浅い窪み状の竪穴遺構であると認定できる。

遺物　なし。

時代　埋土の状況から中世以降の時代であるが年代は不明である。

19. 掘立柱建物

D区では掘立柱建物は４棟が検出されている。調査区の中央にほぼまとまって検出されており、中世以降の屋敷跡にある梁間が１間の建物遺構群であると考えられる。

掘立柱建物はいずれも桁行３間、梁間１間程度の小規模な側柱建物である。掘立柱建物群は溝や地形に調和的に配置されており，建物の主軸は、整然と配置されたとみて良い。

１号掘立柱建物(第124図、PL.41-1)

位置　調査区中央南隅。

グリッド　５N～P11

主軸方位　EW

重複　他の遺構との重複はない。建物の範囲が２号掘立柱建物と重なっており同時性はない。

形状と規模　桁行３間、梁間１間の東西に長い側柱建物で、長辺は約6.94m、短辺3.50m、柱間は約2.10～2.50mである。

柱穴　建物を構成する柱穴はピット１からピット８の８基検出され、建て替えで重なる柱穴は２基検出された。柱穴はほぼ円形を呈し、規模は小さいがしっかりとしたU字形から箱形の掘り方を有する。柱穴に柱痕はいずれも明瞭には検出できなかったが、完掘した形状ではピット２、５、８などで柱痕と思われる窪みを検出した。

ピット１は直径0.38m、深さ0.35m。

ピット２は長径0.46m、短径0.40m、深さ0.44m。

ピット３は長径0.45m、短径0.40m、深さ0.58m。

ピット４は長径0.50m、短径0.40m、深さ0.58m。

ピット５は長径0.46m、短径0.30m、深さ0.55m。

ピット６は長径0.45m、短径0.35m、深さ0.60m。

ピット７は長径0.55m、短径0.41m、深さ0.62m。

ピット８は長径0.41m、短径0.37m、深さ0.55m。

柱穴の埋土　暗褐色の砂質土からなり、ピット５の埋土は浅間Ｂテフラを含む黒褐色砂質土からなる。

時代　浅間Ｂテフラを含む埋土の状況から、12世紀以降は確実であり、中世の可能性があるが時代や年代は不明である。

２号掘立柱建物(第125図、PL.41-2)

位置　調査区中央南隅。

グリッド　５N・O11・12

主軸方位　EW

重複　他の遺構との重複はない。建物の範囲が１号掘立柱建物と重なっており同時性はない。

形状と規模　桁行２間、梁間１間の東西に長い側柱建物で、長辺は約4.62m、短辺3.34m、柱間は約1.60mで、長辺は２間であるが３間分の規格である。

柱穴　建物を構成する柱穴はピット１からピット７の７基検出され、作り替えで重なる柱穴はピット４の１基が検出された。柱穴はほぼ円形を呈し、規模は小さいがしっかりとしたV字形から箱形の掘り方を有する。柱穴に柱痕はいずれも明瞭には検出できなかったが、完掘した形状ではピット１で柱痕と思われる窪みを検出した。

ピット１は長径0.45m、短径0.36m、深さ0.49m。

ピット２は長径0.35m、短径0.29m、深さ0.49m。

ピット３は長径0.60m、短径0.44m、深さ0.30m。

ピット４は長径0.46m、短径0.41m、深さ0.46m。

ピット５は長径0.50m、短径0.40m、深さ0.49m。

ピット６は長径0.53m、短径0.37m、深さ0.35m。

ピット７は長径0.43m、短径0.29m、深さ0.56m。

柱穴の埋土　暗褐色砂質土からなり、ピット３の埋土は浅間Ｂテフラを含む黒褐色砂質土からなる。

時代　浅間Ｂテフラを含む埋土の状況から、12世紀以降は確実であり、中世の可能性があるが時代や年代は不明である。

３号掘立柱建物(第126図、PL.41-2)

位置　調査区中央。

５O・P14・15

主軸方位　N87°W

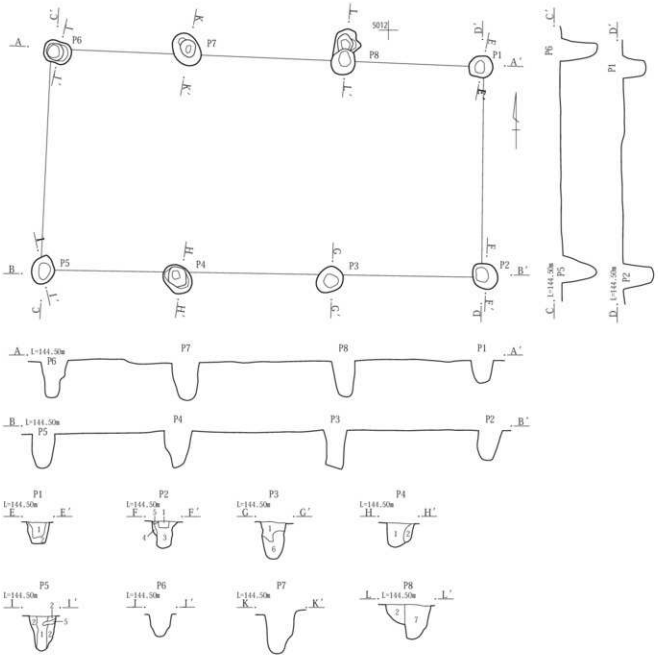
重複　土坑群との重複がある。

形状と規模　桁行３間、梁間１間の東西に長い側柱建物で、長辺は約5.75m、短辺3.07m、柱間は約1.80～2.00mである。

柱穴　建物を構成する柱穴はピット１からピット８の８基検出され、建て替えで重なる柱穴はピット７の１基が検出された。柱穴はほぼ円形を呈し、規模は小さいがしっかりとしたV字形からU字形の掘り方を有する。柱穴に柱痕はいずれも明瞭には検出できなかった。

ピット１は長径0.42m、短径0.34m、深さ0.53m。

ピット２は長径0.35m、短径0.30m、深さ0.50m。



1．黒褐色砂質土　As-C軽石10%混。ローム粒少量混。緻密。
2．１層にローム塊斑混。
3．暗褐色砂質土　As-C軽石の他、径１～10mmのローム粒を30%混。
4．２層と同質。大粒のローム粒50%混。
5．ローム塊。
6．１層と同質。ローム混入なし。
7．黒褐色砂質土と暗褐色砂質土との混土。

0　1:60　2m

第124図　D区１号掘立柱建物

ピット３は長径0.36m、短径0.31m、深さ0.42m。

ピット４は長径0.40m、短径0.35m、深さ0.44m。

ピット５は長径0.40m、短径0.37m、深さ0.44m。

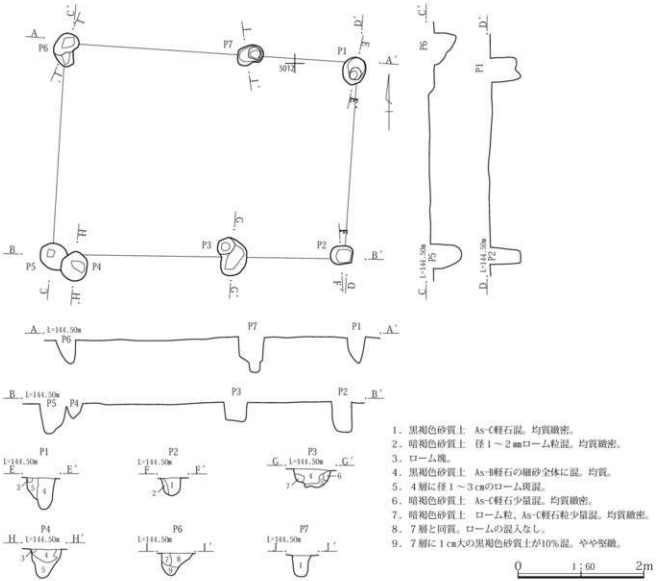
ピット６は直径0.23m、深さ0.47m。

ピット７は長径0.63m、短径0.35m、深さ0.52m。

ピット８は長径0.43m、短径0.35m、深さ0.33m。

柱穴の埋土　ローム層の塊を含む暗褐色から黒褐色砂質土からなる。

時代　方形の区画内の建物であり、中世の可能性があるが時代や年代は不明である。



第125図　D区２号掘立柱建物

４号掘立柱建物(第127図、PL.41-3)

位置　調査区中央。

グリッド　５P・Q13・14

主軸方位　N84°E

重複　なし。１号竪穴状遺構と配置が重なるため同時には存在しない。３号掘立柱建物と規模が似ており関連がある建物の可能性がある。

形状と規模　桁行３間、梁間１間の東西に長い側柱建物で、長辺は5.85m、短辺3.43m、柱間は1.70～2.20mである。

柱穴　建物を構成する柱穴はピット１からピット８の８基検出され、建て替えで重なる柱穴はない。柱穴はほぼ円形を呈し、しっかりとしたU字形の掘り方を有する。柱穴に柱痕はいずれも明瞭には検出できなかった。

ピット１は長径0.29m、短径0.26m、深さ0.56m。

ピット２は長径0.35m、短径0.30m、深さ0.57m。

ピット３は直径0.30m、深さ0.60m。

ピット４は直径0.30m、深さ0.59m。

ピット５は長径0.38m、短径0.33m、深さ0.64m。

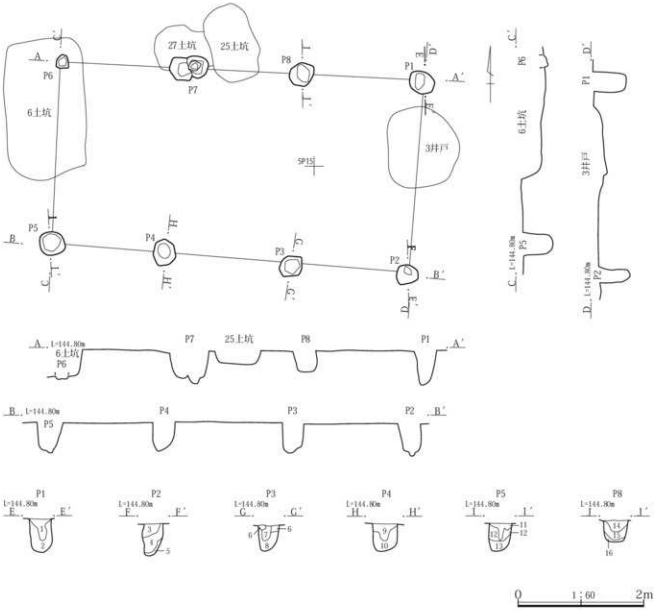
ピット６は長径0.42m、短径0.34m、深さ0.57m。

ピット７は長径0.35m、短径0.32m、深さ0.52m。

ピット８は長径0.46m、短径0.42m、深さ0.46m。

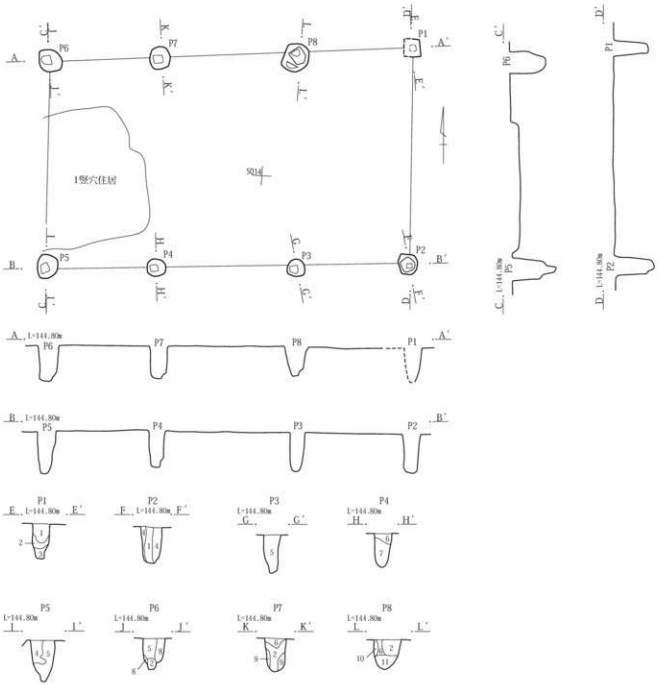
柱穴の埋土　暗褐色から黒褐色砂質土からなる。ピット２、６、７の断面には柱痕を示す埋土が観察できた。

時代　方形の区画内の建物であり、中世の可能性があるが時代や年代は不明である。



1．鈍い黄褐色砂質土　ローム粒10%混。
2．暗褐色砂質土　ローム粒50%混。
3．暗褐色土　ローム粒20%混。
4．黒褐色土　ローム粒10%混。
5．ローム塊
6．鈍い黄褐色砂質土　ローム粒60%混。
7．黒褐色砂質土
8．黒褐色砂質土
9．暗褐色砂質土　ローム粒10%混。
10．暗褐色砂質土　ローム粒80%混。
11．暗褐色砂質土　ローム粒10%混。
12．鈍い黄褐色砂質土　ローム粒60%混。
13．暗褐色砂質土　ローム粒20%混。
14．鈍い黄褐色砂質土　径１cm以下のローム粒20%混。
15．黒褐色土　径15mmのローム粒を10%混。
16．黄褐色砂質土　ローム粒を80%、黒褐色粒を20%混。

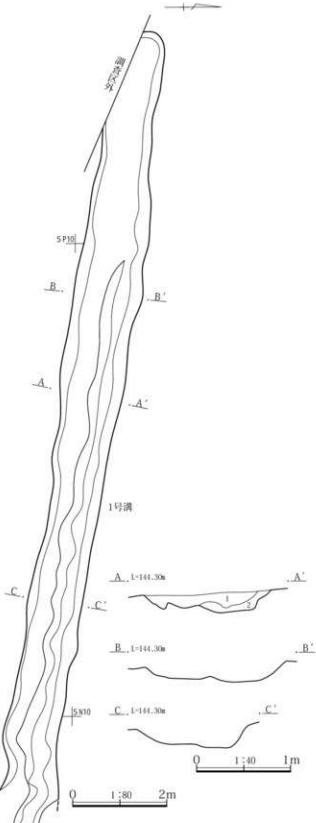
第126図　D区３号掘立柱建物



1．黒褐色砂質土　ローム粒を10％混。
2．黒褐色砂質土
3．極暗褐色砂質土
4．ロームが混じる褐色砂質土80％。黒褐色砂質土20％。
5．暗褐色砂質土　ローム粒30％混。
6．鈍い黄褐色砂質土　径１cmのローム塊混。
7．暗褐色砂質土　径１～３cmローム塊10％混。
8．暗褐色砂質土　ローム粒を50％混。
9．ローム80％、ローム混暗褐色土20％。
10．暗褐色土　ローム粒混。
11．黒褐色砂質土　径１cm以下のローム粒10％混。

0　1:60　2m

第127図　D区４号掘立柱建物



1．黒褐色砂質土　径１～２㎜の褐砂10％混。均質。締まり弱い。
2．暗褐色砂質土　径３～５㎝のローム塊点在。均質緻密。

第128図　D区１号溝

20．溝

D区では溝は６条が検出されている。これらは調査区の南北を走る溝群の１号溝、５号溝、６号溝と北東－南西方向を走る溝群である２号溝、３号溝、４号溝である。また調査区の東側には階段状の地形を呈する谷地と溝群が見られた。

１号溝（第128図、PL.44-8・45-1）

位置　調査区の南端に位置し、西から東に走行する。

グリッド　５M～P９・10

主軸方位　N80°W

重複　なし。溝は調査地東の谷地との境界付近でとぎれる。

形状と規模　全長は17.20mである。検出された幅は1.05～1.45m、深さは0.18～0.25mである。西端と東端の底面比高差は0.25mであり、東側に向かって緩い勾配が認められる。断面は浅い皿状の溝で、幅が広い。

埋土　暗灰色から黒褐色砂質土からなり、埋土の雰囲気は掘立柱建物群の埋土と共通する特徴がある。

遺物　なし。

時代　埋土に浅間Ｂテフラを含まないが検出された遺構は溝の底部のみであり、掘立柱建物群の区画を境する溝と考えられるので、中世の可能性があるが時代や年代は不明である。

２号溝（第129図、PL.45-2・45-3）

位置　調査区の北西部に位置し、北東から南西に走行する。

グリッド　５R～T14～19・６A・B12～14

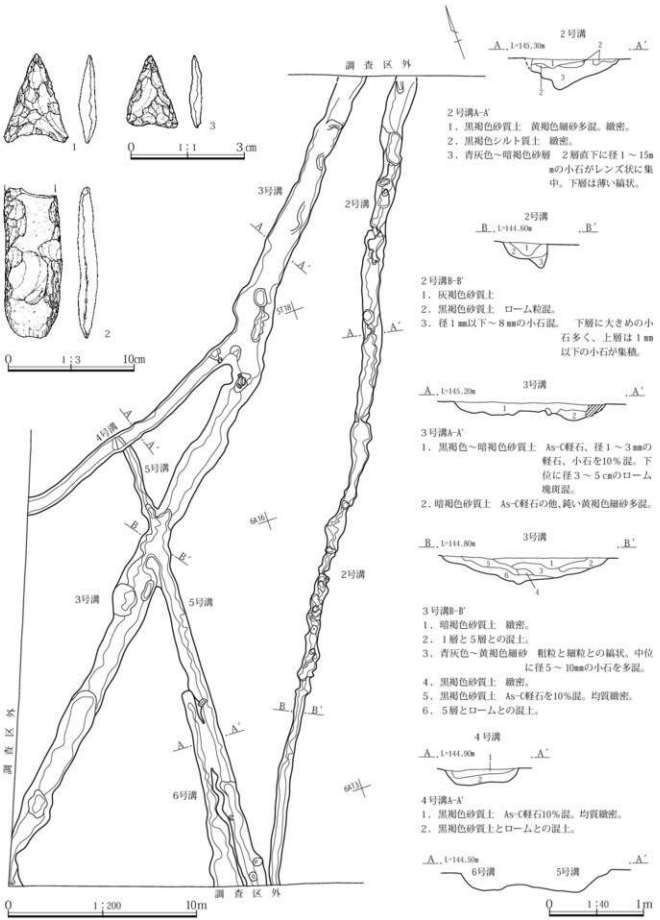
主軸方位　N30°E

重複　なし。溝の走向は２号住居に調和的である。

形状と規模　全長は43.00mである。検出された幅は0.45～1.20m、深さは0.08～0.32mである。北東端と南西端の底面比高差は0.80mであり、南側に向かって勾配が認められる。浅い逆三角形状の溝で、下底は凹凸がある埋土は水成堆積粗が顕著で、用水路として使用された溝である。

埋土　青灰色から暗灰色砂層、極粗粒から細礫ラミナのレンズが見られる。堆積物の特徴から溝は一定の流量を有する堆積物で埋まったことを示す。

遺物　なし。



第129図　D区2号～6号溝及び3号、5号、6号溝の出土遺物

時代　不明である。

３号、４号、５号、６号溝（第129図、PL.45-4 ～ 45-8・60、199頁）

位置　調査区の西部に位置し、北及び北東から南に走行する溝群である。

グリッド　５R～T12 ～ 20、６A～D12 ～ 17

主軸方位　３号溝はN43°E、４号溝はN71°E、５号溝、６号溝はN５°Eの走向を示す。

重複　３号溝と上位の５号・６号溝は埋土の層序関係から、ほぼ同時もしくはかなり接近した時間差の中に存在した溝群である。

形状と規模　３号溝の全長は46.00mである。３号溝の検出された幅は1.20 ～ 1.55m、深さは0.06 ～ 0.30mである。断面が浅い皿状の溝である。北東端と南西端の底面比高差は1.20mであり、南側に向かって2.6％の勾配が認められる。４号溝の全長は14.00mである。検出された幅は0.75 ～ 0.85m、深さは0.19 ～ 0.28mである。北東端と南西端の底面比高差は0.34mであり、南側に向かって緩い勾配が認められる。断面が浅い皿状の溝で底部は平坦である。５号溝の全長は24.00mである。検出された幅は0.40 ～ 1.20m、深さは0.07 ～ 0.27mである。北端と南端の底面比高差は0.75mであり、南側に向かって勾配が認められる。溝の底部が残された遺構で６号溝との境は一部で不明瞭である。６号溝の全長は10.50mである。検出された幅は0.60 ～ 1.50m、深さは0.12 ～ 0.24mである。北端と南端の底面比高差は0.12mであり、南側に向かって緩い勾配が認められるが、ほぼ平坦である。断面の形状は半月形で一部の肩は５号溝で失われている。

埋土　暗灰色から黒褐色の砂質土でロームブロックを含み水流の痕跡が認められない。

遺物　３号溝や５号溝、６号溝から縄文時代の石鏃（１、３）や打製石斧（２）及び加工痕のある剥片１点が出土している。これらの遺物は遺構の年代よりも古く、溝に流れ込んだ遺物群である。

時代　埋土に浅間Ｂテフラを含まないが、掘立柱建物群を境する方形区画を示す溝であり、中世の可能性があるが時代や年代は不明である。

谷地と溝群（第130図、付図２、PL.50-15）

位置　調査区の東部に位置し、北から南に傾斜する緩斜面とその南部に検出された北から南に走行する溝群である。

グリッド　５J～M８～ 17

主軸方位　緩傾斜地は３段の段状地形を呈し、遺構群の分布する集落域との境界はN13°W及びN５°Eを呈する。また段の走向はN78°E及びN80°Wで東西方向の傾向を示す。

段状地形の最下段に見られる溝群は八の字状に広がり、段状地形と集落域の境界及び段状地形の走向に平行する。段状地形はかつて水田として使用された可能性がある。

重複　溝群は５K、L11グリッド付近にある水口状の地形から流れ出しており、ほぼ同時もしくはかなり接近した時間差の中に存在した溝群である。

形状と規模　溝の最大長は19.20mである。溝の検出最大幅は1.60m、最大の深さは0.47mである。北端と南端の底面比高差は0.56mであり、南側に向かって勾配が認められる。溝群はほとんどの断面形が浅い皿状の溝状遺構である。

埋土　褐色から黒褐色の砂質土から構成される低地の水成～半水成堆積の土壌である。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含む埋土の状況から、12世紀以降は確実であり、中世の可能性があるが時代や年代は不明である。

21. 井戸

D区で検出された井戸跡は全部で６基であり１号溝と２号溝に区画された範囲に掘立柱建物や土坑群と共存する。

１号井戸（第131図、PL.46-1・46-2）

位置　調査区の北東隅。

グリッド　５L16

重複　なし。

形状と規模　検出平面は円形を呈し、全体に円筒形で未完掘である。直径は1.65m、深さ1.46m＋である。

埋土　直径0.30m大の亜円～亜角礫で埋められ、基質は黒色砂質土からなる。

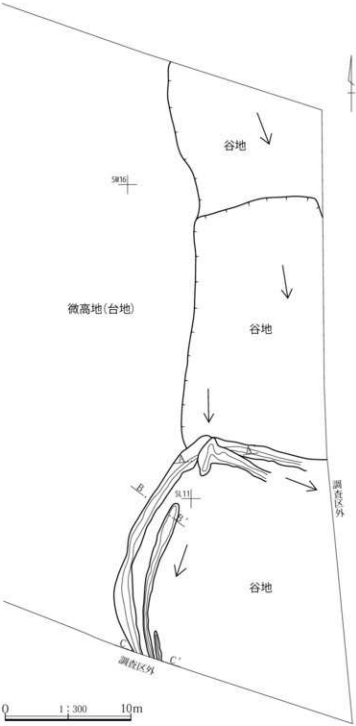
遺物　なし。

時代　不明である。

２号井戸（第131図、PL.46-3・46-4）

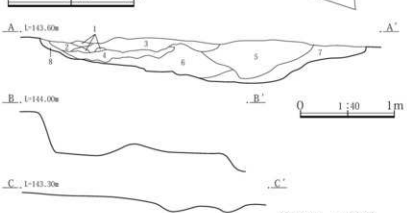
位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　５O15・16

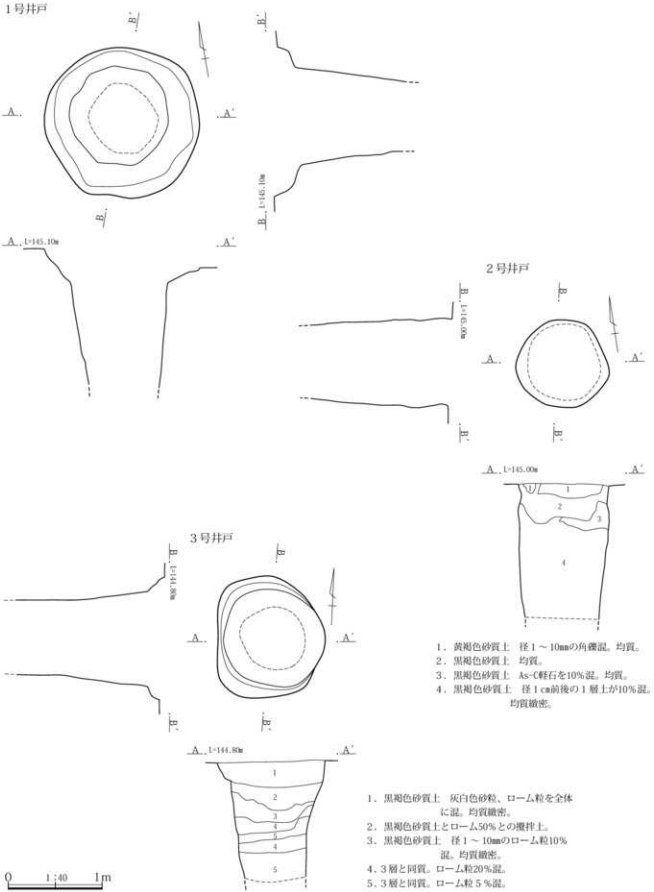


谷地の矢印の方向は、傾斜や水流のおおよその方向を示す。

1．黒褐色砂質土
2．1層と3層の混土。
3．ローム　鉄分浸透。
4．褐灰色砂質土　鉄分凝集が2・3層を境に集中。
5．3層と4層の互層。最下層だけ厚さが5cm。粗粒で青色細砂が縞状に互層。
6．7層と灰白色粘質土のブロック状混土。下位は地山の灰白色粘質土。5層の東側に粗砂のレンズ状堆積が見られる。
7．褐灰色砂質土　4層よりも粗粒。ローム粒混。西側6層との境には地山の灰白色粘質土がレンズ状に混。
8．黄褐色粘質土



第130図　D区谷地



第131図　D区１・２・３号井戸

重複　なし。３号掘立柱建物東側の梁間の延長に位置する。

形状と規模　検出平面は円形を呈し、全体に円筒形で未完掘である。直径は0.99m、深さ1.50m＋である。

埋土　黒褐色砂質土の互層である。

遺物　なし。

時代　不明である。

３号井戸(第131図、PL.46-5・46-6)

位置　調査区の中央。

グリッド　５O14・15

重複　なし。３号掘立柱建物東側の梁間の上に位置し、３号掘立柱建物との同時性はない。また２号井戸の南に位置する。

形状と規模　検出平面は円形を呈し、上面がやや開いた円筒形で未完掘である。直径は1.31m、深さ1.58m＋である。

埋土　ローム層の塊が混じる黄褐色土と黒褐色砂質土の互層で人為的に成層して埋められている。

遺物　なし。

時代　不明である。

４号井戸(第132図、PL.46-7・46-8)

位置　調査区の南端。

グリッド　５P11

重複　なし。１号掘立柱建物の西側に位置する。

形状と規模　検出平面は円形を呈し、全体に円筒形で未完掘である。直径は1.10m、深さ1.00m＋である。

埋土　軽石を含む黒色土で成層して人為的に埋められ、最上位は浅間Ｂテフラを含む黒褐色砂質土に覆われる。

遺物　なし。

時代　浅間Ｂテフラを含む埋土の状況から、12世紀以降は確実であり、中世の可能性があるが時代や年代は不明である。

５号井戸(第132図、PL.46-9・46-10)

位置　調査区の中央北西寄り。

グリッド　５Q15

重複　なし。３号掘立柱建物の北西側に位置する。

形状と規模　検出平面は円形を呈し、上が開いた円筒形で未完掘である。直径は1.45m、深さ1.65m＋である。

埋土　ローム層の塊が混じる黒褐色砂質土の互層で東側から人為的に埋められている。

遺物　なし。

時代　不明である。

６号井戸(第132図、PL.46-11・46-12)

位置　調査区の中央北西寄り。

グリッド　５Q15・16

重複　９号土坑よりも古い。３号掘立柱建物の北西側に位置する。

形状と規模　検出平面は円形を呈し、全体に円筒形で未完掘である。直径1.11m、深さ1.45m＋である。

埋土　ローム層の塊が混じる暗褐色砂質土の互層で埋没し、最上位を暗褐色土が覆う。

遺物　なし。

時代　不明である。

22. 土坑

D区で検出された土坑は全部で43基である。D区で検出された遺構は、古墳時代から中世、近世の時代にわたる。おそらく土坑もこれらに関連する遺構であると思われる。しかし土坑からは出土遺物が少なく、時代が特定できないものがほとんどであるが土坑群はまとまって分布し、方形区画内におさまっていることから中世以降の時期に所属する可能性が高い。

１号土坑(第133図、PL.46-13・46-14)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　５L・M15

重複　なし。

形状と規模　隅の丸まった長方形を呈する。長径は1.93m、短径0.81m、深さ0.20m、断面は半月形状を呈する。

主軸方位　N88°W

埋土　黒褐色砂質土で、下位ほどロームブロックが多い。

遺物　なし。

時代　不明である。

２号土坑(第133図、PL.46-15・47-1)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　５M・N15・16

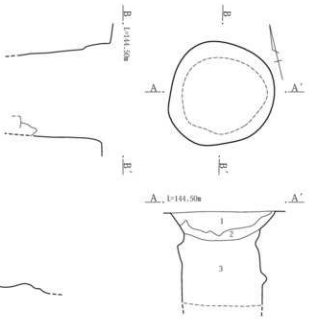
重複　なし。

形状と規模　長方形を呈する。長径は1.59m、短径1.11m、深さ0.22mである。断面は皿状を呈する。

主軸方位　N２°E

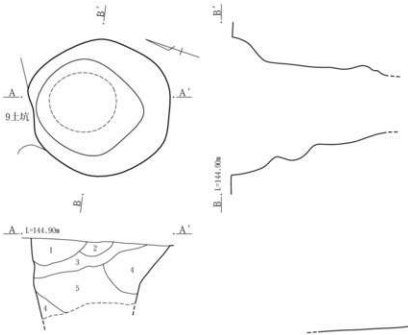
埋土　黒褐色砂質土、ロームブロックを少量含む。

4号井戸



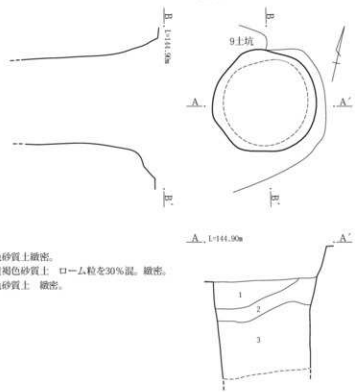
1．黒褐色砂質土　As-B軽石の細砂混。中央部にローム粒少量混。均質緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石混。均質緻密。硬質。
3．黒褐色砂質土　径５cm大の黒褐色土の塊状が２層に、また、ロームの小塊混。

5号井戸



1．暗褐色砂質土　As-C軽石、径１～２mmのローム粒を10%混。均質緻密。
2．暗褐色砂質土　径１～２cmのローム粒を20%混。均質。
3．２層と同質。ロームは大粒が50%混。
4．２層と径３～５cmの黒褐色砂質土との斑混。
5．３層と同質。ローム粒が50%混。

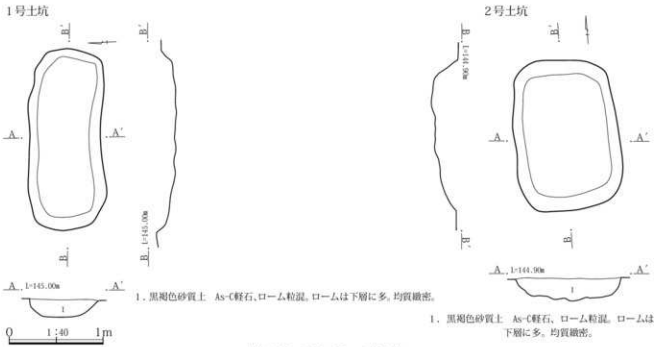
6号井戸



1．暗褐色砂質土緻密。
2．純い黄褐色砂質土　ローム粒を30%混。緻密。
3．暗褐色砂質土　緻密。

0　1:40　1m

第132図　D区４・５・６号井戸



第133図　D区１号、２号土坑

遺物　なし。

時代　不明である。

３号土坑(第134図、PL.47-2)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　５N15・16

重複　なし。１号～３号土坑及び３号井戸は、ほぼ東西に並ぶ。

形状と規模　長方形を呈する。長径は1.75m、短径0.95m、深さ0.36mである。断面は箱形を呈する。

主軸方位　N88°W

埋土　ローム層の塊を含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

４号土坑(第134図、PL.47-3・47-4)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　５P15

重複　なし。３号掘立柱建物の北西に位置する。

形状と規模　長方形を呈する。長径は2.10m、短径0.93m、深さ0.24mであり、断面は箱形を呈する。

主軸方位　N89°E

埋土　浅間Cテフラの軽石とロームブロックを多く含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　浅間Cテフラを含む埋土の状況から、古墳時代以降である可能性があるが、他の土坑群と大きな時間差があるとは思えない。

６号土坑(第135図、PL.47-7・47-8)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　５P14・15

重複　３号掘立柱建物、23号土坑より新しい。

形状と規模　長方形を呈する。長径は2.22m、短径1.28m、深さ0.46mであり、断面は箱形を呈する。土坑の中央には杭跡と思われるピットが見られ、黒褐色土の断面が見られた。

主軸方位　N４°W

埋土　黒色土やロームブロックを多く含む砂質土で埋めたように成層している。しかし、ピットを柱痕とみた場合、掘り方が大きすぎる。

遺物　なし。

時代　不明である。

７号土坑(第135図、PL.47-9・47-10)

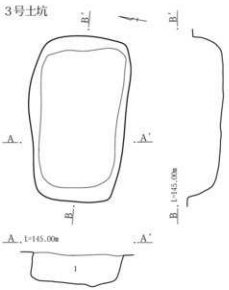
位置　調査区の中央北寄り。

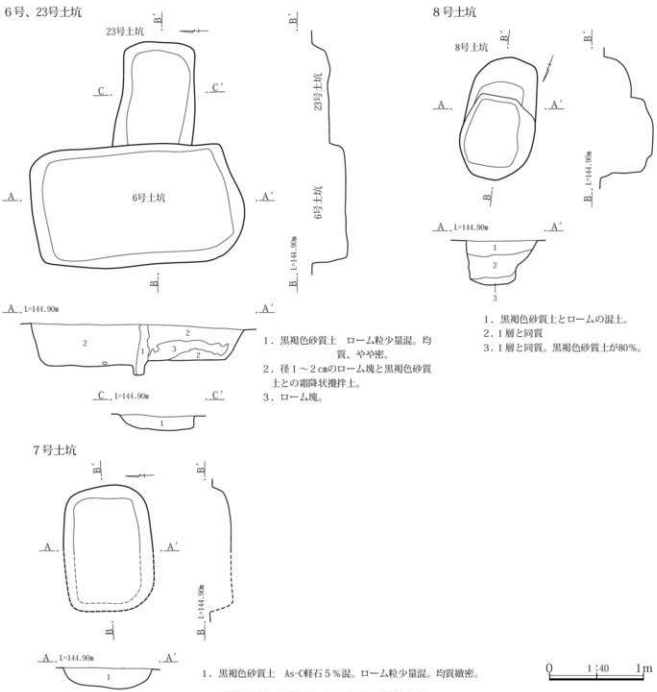
グリッド　５P15

重複　なし。

形状と規模　隅の丸い長方形を呈する。長径は1.34m、短径0.94m、深さ0.21mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N78°E


3号土坑
B'
B'
A
A'
B
B
B



第135図　D区6・7・8号、23号土坑

遺物　なし。

時代　不明である。

12号土坑(第136図、PL.48-2・48-3)

位置　調査区の東寄り。

グリッド　5M13

重複　11号、13号土坑よりも新しい。

形状と規模　長方形の一部が残存する。長径は最大1.20m+、深さ0.10mであり、断面は箱形を呈する。

埋土　黒褐色砂質土で均質である。

特徴　浅い方形土坑群の11～13号土坑の一つである。

遺物　なし。

時代　不明である。

13号土坑(第136図、PL.48-2・48-3)

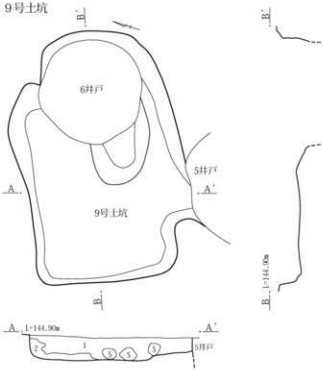
位置　調査区の東寄り。

グリッド　5M13

重複　11号、12号土坑よりも古い。

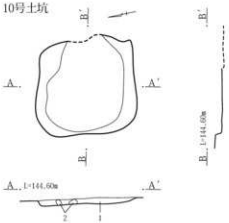
形状と規模　長方形を呈する。長径は2.26m、短径0.78m、深さ0.34mであり、断面は箱形を呈する。

9号土坑



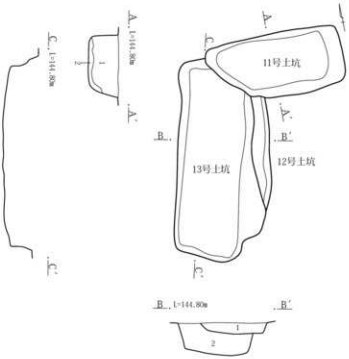
1．黒褐色砂質土　As-B軽石細砂が全体に混。径１cmの青灰色アッシュが斑混。均質緻密。
2．黒褐色砂質土　As-C軽石を５％、ローム粒を全体に混。均質緻密。
3．２層とロームとの混土。壁際に雨降り状に多く、中央は厚さ数ミリの縞状で堅緻。石は径10cm前後で粒揃い。

10号土坑



1．黒褐色砂質土　細砂混。均質緻密。
2．ローム塊。

11号、12号、13号土坑



11号土坑
1．黒褐色砂質土　径１cmのローム粒10％雨降り状に混。
　均質緻密。
2．１層と同質。ローム粒少。やや堅緻。

12・13号土坑
1．黒褐色砂質土　均質緻密。12号土坑埋土。
2．黒褐色砂質土　径１cmのローム粒10％混。均質緻密。13
　号土坑埋土。

0　1:40　1m

第136図　D区９号～ 13号土坑

主軸方位　N15°E
埋土　ロームブロックを少量含む黒褐色砂質土。
遺物　なし。
時代　不明である。

14号土坑(第137図、PL.48-4・48-6)
位置　調査区の中央東南端。
グリッド　5L・M11
重複　15号、29号土坑よりも新しい。
形状と規模　細長軸を有する長方形を呈する。長径は4.35m、短径0.92m、深さ0.58mであり、断面はしっかりした箱形を呈する。
埋土　黒色土やロームブロックからなる暗褐色砂質土で成層し人為的に埋められている。
主軸方位　N83°W
遺物　なし。
時代　不明である。

15号土坑(第137図、PL.48-4・48-6)
位置　調査区の中央東南端。
グリッド　5L・M11
重複　14号、29号土坑よりも古い。
形状と規模　長方形を呈する。長径は3.20m、短径1.50m、深さ0.36mであり、断面は箱形を呈する。
主軸方位　N85°W
埋土　ロームブロックを少量含む暗褐色砂質土。
遺物　なし。
時代　不明である。

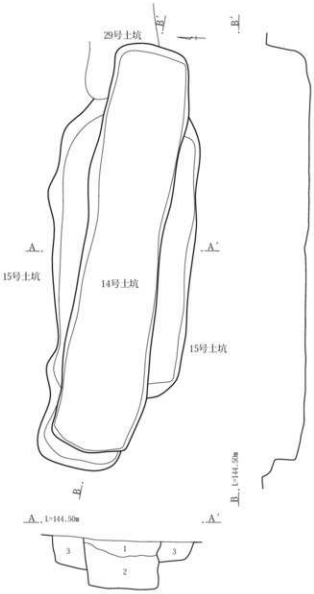
16号土坑(第138図、PL.48-5・48-8)
位置　調査区の中央東南端。
グリッド　5M11
重複　17号土坑よりも古い。
形状と規模　正方形を呈する可能性が高い。長径は2.10m、短径1.90m、深さ0.24mであり、断面は北側に浅い逆三角形を呈する。南壁際にはピットが見られ、黒褐色土の断面が見られた。
主軸方位　N86°E
埋土　ロームブロックを少量含む黒褐色砂質土。
遺物　なし。
時代　不明である。

17号土坑(第138図、PL.48-7・48-8)
位置　調査区の中央東南端。5M11
重複　16号、32号土坑よりも新しい。
形状と規模　長方形を呈する。長径3.36m、短径1.03m、深さ0.40mであり、断面は箱形を呈する。
主軸方位　N83°W
埋土　ロームブロックを少量含む黒褐色砂質土。
遺物　なし。
時代　不明である。

18号土坑(第139図、PL.48-9)
位置　調査区の中央東南端。
グリッド　5M10
重複　なし。
形状と規模　隅の丸い長方形を呈する。長径は3.30m、短径1.44m、深さ0.36mであり、断面は箱形を呈する。
主軸方位　N84°W
埋土　ロームブロックを多く含む黒褐色砂質土。
遺物　なし。
時代　不明である。

19号土坑(第139図)
位置　調査区の中央東南端。
グリッド　5L・M11・12
重複　20号土坑と同時か、かなり近い時期に作られたものである。
形状と規模　隅の丸い長方形を呈する。長径は3.97m、短径0.92m、深さ0.41mであり、断面は箱形を呈する。
主軸方位　N74°W
埋土　ローム層の塊を含む黒褐色砂質土が成層しており、人為的に埋められている。
遺物　なし。
時代　不明である。

20号土坑(第140図、PL.48-10)
位置　調査区の中央東南端。
グリッド　5L・M11・12
重複　19号土坑と同時か、かなり近い時期に作られたものである。
形状と規模　長方形を呈する。長径は1.66m、短径0.63m、深さ0.12mであり、断面は浅い皿状を呈する。
主軸方位　N77°W
埋土　黒褐色砂質土。
遺物　なし。
時代　不明である。



1．暗褐色砂質土と径１～10mmのローム粒の霜降り状攪拌土。14号土坑理土。
2．１層と同質。ローム、暗褐色砂質土ともに１層よりも大粒。14号土坑理土。
3．１層と同質。１層に比べてローム粒は小さく少ない。一部縞状。15号土坑理土。

第137図　D区14号、15号土坑

21号土坑（第140図、PL.48）

位置　調査区の中央北西寄り。

グリッド　５Q・R15

重複　なし。

形状と規模　隅の丸い長方形を呈する。長径は1.36m、短径0.02m、深さ0.30mであり、断面は半月形を呈する。

主軸方位　N80°W

埋土　黒色土やロームブロックを多く含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

22号土坑（第140図、PL.48-13・49-1）

位置　調査区の中央北西寄り。

グリッド　５R・Q15

重複　土坑の形と大きさを変え作り直している可能性がある。

形状と規模　隅の丸い長方形を呈する。長径は1.76m、短径0.10m、深さ0.14mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N74°E

埋土　暗褐色のローム層を母材にした砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

23号土坑（第135図、PL.49-2）

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　５P15

重複　６号土坑より古い。

形状と規模　長方形を呈する。長径は1.07m＋、短径0.83m、深さ0.15mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N89°W

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

24号土坑（第140図、PL.49-3）

位置　調査区の中央南寄り。

グリッド　５O12

重複　なし。

形状と規模　隅が丸く、ゆがんだ長方形を呈する。長径は1.94m、短径0.82m、深さ0.12mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N85°W

埋土　浅間Cテフラの軽石を多く含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

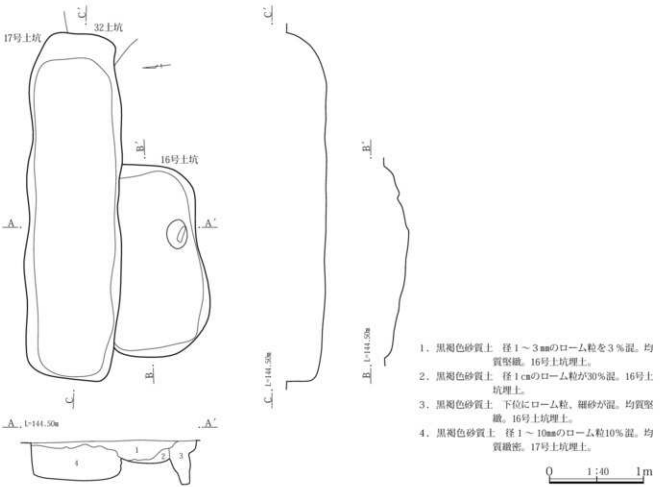
25号土坑（第141図、PL.49-4・49-5）

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　５P15

重複　26号、27号土坑よりも新しい。

形状と規模　隅が丸く、ゆがんだ長方形を呈する。長径は1.63m、短径0.76m、深さ0.18mであり、断面は浅い



第138図　D区16号、17号土坑

皿状を呈する。

主軸方位　N26°W

埋土　浅間Cテフラの軽石を少量含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

26号土坑(第141図、PL.49-4・49-5・49-6)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　5P15

重複　25号よりも古く、27号土坑との層序関係は不明である。

形状と規模　隅が丸く、ゆがんだ長方形を呈し、25号土坑により一部が失われている。長径は0.92m＋、短径0.85m、深さ0.20mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N72°E

埋土　ロームブロックと浅間Cテフラの軽石を含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

27号土坑(第141図、PL.49-4・49-5)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　5P15

重複　25号よりも古く、26号土坑との層序関係は不明である。

形状と規模　隅が丸く、ゆがんだ長方形を呈し、25号土坑により一部が失われている。長径は0.73m＋、短径0.69m、深さ0.24mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　EW

埋土　ローム層の塊を含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

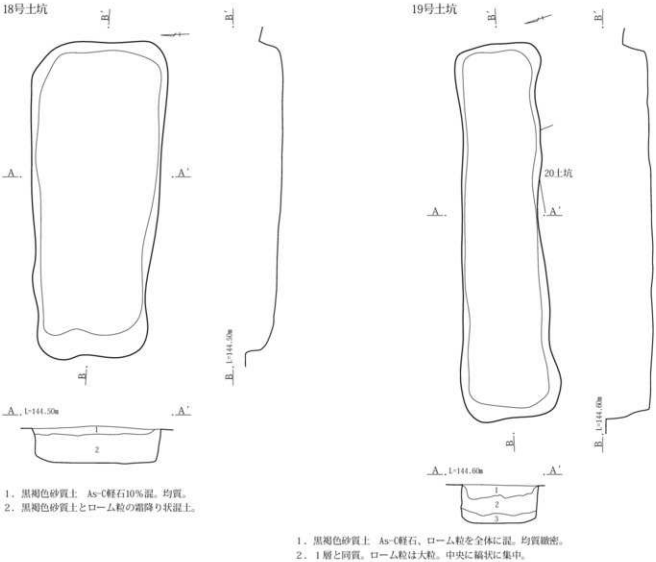
時代　不明である。

28号土坑(第141図、PL.49-7・49-8)

位置　調査区の中央東寄り。

グリッド　5N13

重複　なし。



第139図　D区18号、19号土坑

形状と規模　円形を呈す。直径は0.91m、深さ0.16mであり、断面は浅い皿状を呈する。

埋土　黒褐色砂質土。

特徴　周辺に遺構が見られず単独の土坑である。

遺物　なし。

時代　不明である。

29号土坑(第141図、PL.49-9・49-10)

位置　調査区の中央南東寄り。

グリッド　５L11

重複　14号土坑よりも古い。

形状と規模　隅が丸く、ゆがんだ長方形を呈し、14号土坑により一部が失われている。長径は1.37m、短径0.75m、深さ0.22mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N84°W

埋土　黒色土のブロックを基底に含む黒褐色砂質土の互層。

遺物　なし。

時代　不明である。

30号土坑(第141図、PL.49-11・49-12)

位置　調査区の中央東南寄り。

グリッド　５L・M10

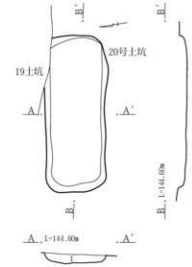
重複　なし。

形状と規模　隅の丸い長方形を呈し、一部が谷地の堆積物により削剥されている。長径は2.15m、短径1.45m、深さ0.33mであり、断面は箱形を呈する。

主軸方位　N87°E

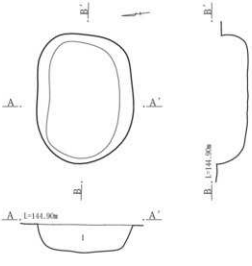
埋土　ロームブロックを多く含む黒褐色砂質土。

20号土坑



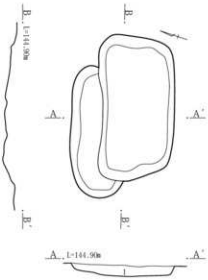
1．黒褐色砂質土　径1～5㎜ローム粒5％混。均質緻密。

21号土坑



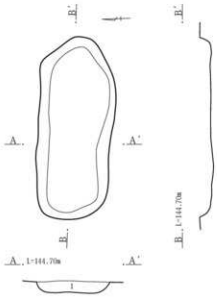
1．黒褐色砂質土　径1～10㎜のローム粒を10％混。均 質緻密。

22号土坑



1．暗褐色砂質土　As-C軽石を全体に混。径1～5㎜のローム粒10％混。
壁際のロームは大粒。均質緻密。

24号土坑



1．黒褐色砂質土　径1～10㎜のローム粒10％混。均質 緻密。

0　1:40　1m

第140図　D区20・21・22号、24号土坑

遺物　なし。

時代　不明である。

31号土坑(第142図、PL.49-13・49-14)

位置　調査区の中央東南寄り。

グリッド　5L・M11

重複　31号と32号土坑は境界が不明瞭で、17号土坑よりも古い。

形状と規模　隅の丸い、ゆがんだ長方形を呈している。31号と32号土坑の最大の長径は2.22m、短径0.78m、深さ0.22mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N85°W

埋土　黒色土とロームブロックを多く含む暗褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

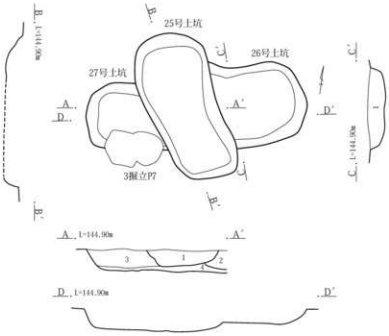
32号土坑(第142図、PL.49-15)

位置　調査区の中央東南寄り。

グリッド　5L・M11

重複　31号と32号土坑は境界が不明瞭で、17号土坑より

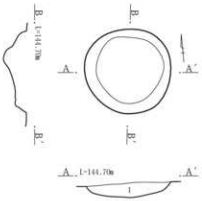
25号、26号、27号土坑



１．黒褐色砂質土　As-C軽石混。均質緻密。25号土坑埋土。
２．１層と同質。径１～10mmのローム粒10%混。26号土坑埋土。
３．１層と同質。径１～10mmのローム粒20%混。27号土坑埋土。
４．黒褐色砂質土　径１～２cm大のローム粒を10%混。均質堅緻。27号土坑埋土。

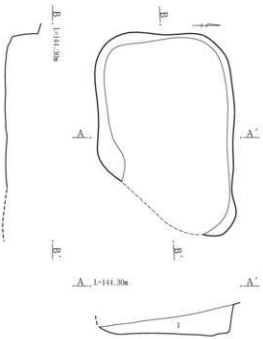
D区26号土坑(C－C')
１．黒褐色砂質土　径３～５cm大のローム塊混。均質。やや軟質。

28号土坑



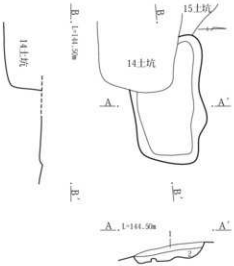
１．黒褐色砂質土と径１cm前後のローム粒との攪拌土。
全体的にAs-C軽石を10%混。

30号土坑



１．黒褐色砂質土　径１～３cmのローム粒30%混。攪拌土。
均質緻密。

29号土坑

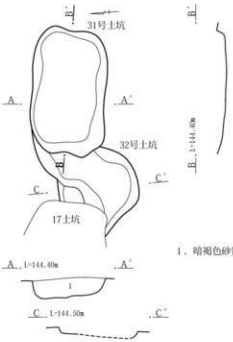


１．黒褐色砂質土　ローム粒少量混。均質緻密。
２．１層と同質。ローム大粒が多。

0　1:40　1m

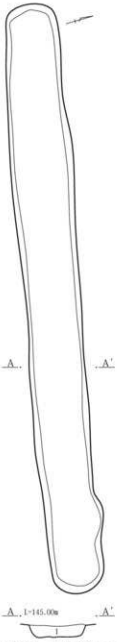
第141図　D区25号～30号土坑

31号、32号土坑



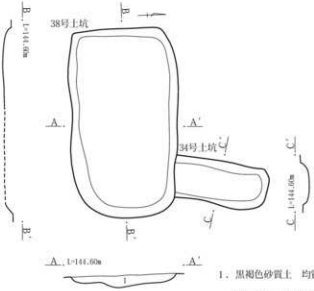
1．暗褐色砂質土　径1～10mmのローム粒混。攪拌土。 均質。

33号土坑



1．黒褐色砂質土　下位に径3～4cmのローム塊混。均質。

34号、38号土坑



1．黒褐色砂質土　均質。

0　1:40　1m

第142図　D区31号～34号、38号土坑

も古い。

形状と規模　31号と同様である。

埋土　暗褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

33号土坑(第142図、PL.50-1・50-2)

位置　調査区の中央北寄り。

グリッド　5Q・R16

重複　なし。

形状と規模　隅が丸く細長い長方形を呈する。長径は6.25m、短径0.66m、深さ0.13mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N78°W

埋土　黒褐色砂質土。

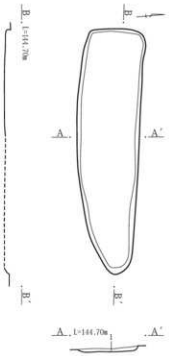
遺物　なし。

時代　不明である。

34号土坑(第142図、PL.50-3)

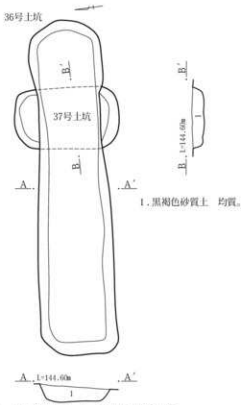
位置　調査区の中央東南寄り。

35号土坑



1．黒褐色砂質土　細砂混。均質緻密。

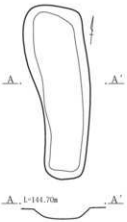
36号、37号土坑



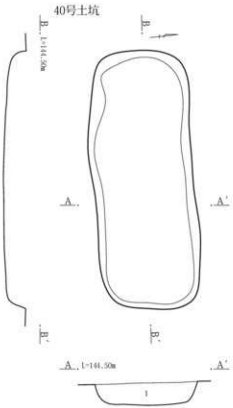
1．黒褐色砂質土　均質。

1．黒褐色砂質土　As-C軽石混。均質緻密。

39号土坑



40号土坑



1．黒褐色砂質土　細砂、ローム粒少量混。均質緻密。

0　1:40　1m

第143図　D区35・36・37号、39号、40号土坑

グリッド　5Q12

重複　38号土坑と同時か、かなり近い時期に作られたものである。

形状と規模　隅の丸い長方形を呈し、一部が38号土坑で失われている。長径1.00m＋、短径0.47m、深さ0.08m、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N9°E

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

35号土坑(第143図、PL.50-4・50-5)

位置　調査区の中央西寄り。

グリッド　5Q13

重複　なし。36号土坑と東西に並ぶ。

形状と規模　隅の丸い鋭角の三角形を呈する。長径は2.58m、短径0.66m、深さ0.06mであり、断面は極めて浅い皿状を呈する。

主軸方位　N88°E

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

36号土坑(第143図、PL.50-6・50-7)

位置　調査区の中央。

グリッド　5P・Q13

重複　37号土坑と同時か、かなり近い時期に作られたものである。

形状と規模　隅の丸い細長軸を有する長方形を呈す。長径は3.55m、短径0.80m、深さ0.19mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N86°W

埋土　ロームブロックを少量含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

37号土坑(第143図、PL.50-6・50-8)

位置　調査区の中央。

グリッド　5P・Q13

重複　36号土坑と同時か、かなり近い時期に作られたものである。

形状と規模　隅の丸い長方形を呈す。長径は1.10m、短径0.65m、深さ0.12mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N7°W

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

38号土坑(第142図)

位置　調査区の中央。

グリッド　5Q12

重複　34号土坑と同時か、かなり近い時期に作られたものである。

形状と規模　長方形を呈す。長径は20.2m、短径1.16m、深さ0.15mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　EW

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

39号土坑(第143図、PL.50-9)

位置　調査区の中央。

グリッド　5P13

重複　なし。3号掘立柱建物の南に位置する。

形状と規模　ゆがんだ長方形を呈す。長径は1.84m、短径0.64m、深さ0.11mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N10°W

埋土　ロームブロックを含む黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

40号土坑(第143図、PL.50-10・50-11)

位置　調査区の中央南寄り。

グリッド　5Q11

重複　なし。1号掘立柱建物の西に位置する。

形状と規模　長方形を呈す。長径は2.74m、短径1.07m、深さ0.24mであり、断面は箱形を呈する。

主軸方位　EW

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

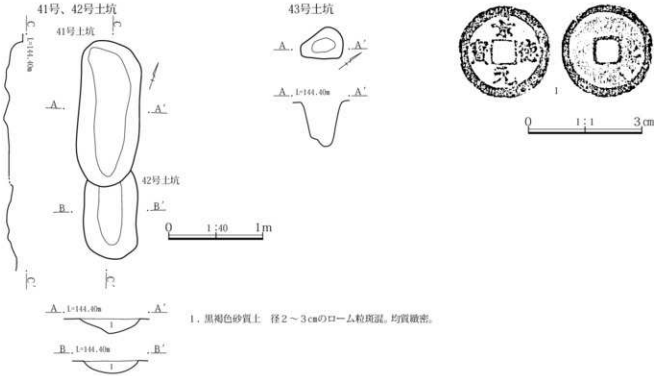
時代　不明である。

41号土坑(第144図、PL.50-12)

位置　調査区の中央南東寄り。

グリッド　5N10・11

重複　42号土坑と同時か、かなり近い時期に作られたものである。



第144図　D区41・42・43号土坑及び43号土坑の出土遺物

形状と規模　隅の丸い長方形を呈す。長径は1.56m、短径0.63m、深さ0.16mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N19°W

埋土　黒褐色砂質土でロームブロックを含むが均質である。

遺物　なし。

時代　不明である。

42号土坑(第144図、PL.50-13)

位置　調査区の中央南東寄り。

グリッド　５N10・11

重複　41号土坑と同時か、かなり近い時期に作られたものである。

形状と規模　隅の丸い長方形を呈し、一部は41号土坑により失われている。長径は0.76m、短径0.56m、深さ0.13mであり、断面は浅い皿状を呈する。

主軸方位　N19°W

埋土　黒褐色砂質土。

遺物　なし。

時代　不明である。

43号土坑(第144図、PL.50-14、199頁)

位置　調査区の中央南東隅。

グリッド　５O10

重複　なし。

形状と規模　楕円形を呈し、断面はV字型で柱穴であろう。長径は0.45m、短径0.35m、深さ0.48mである。

埋土　黒褐色砂質土で軽石を含む灰褐色土ブロックが含まれる。

遺物　渡来銭の景徳元寶(１)が出土している。

時代　出土銭貨から中世である可能性が高い。

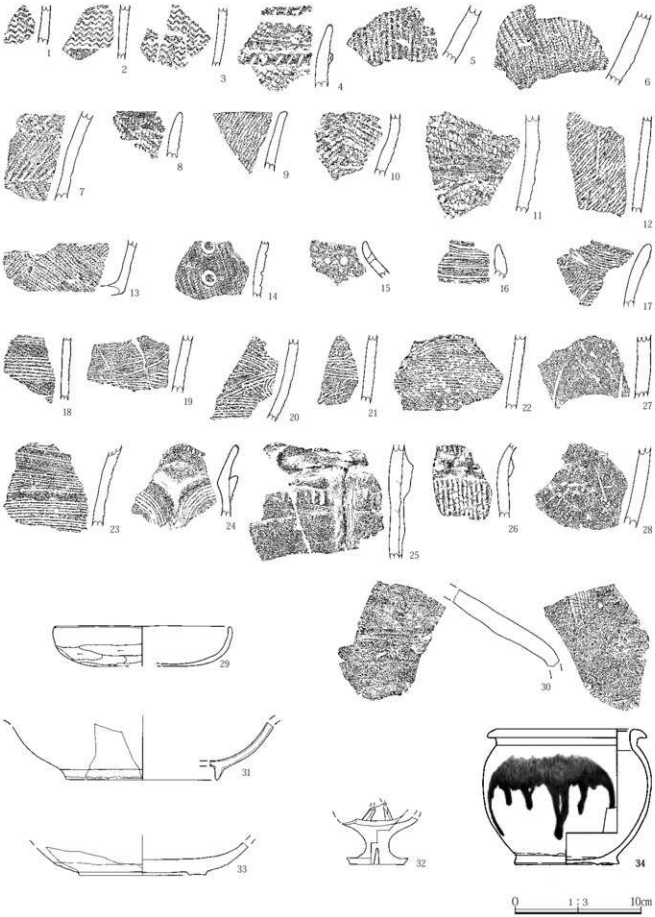
23. 遺構外の出土遺物

(第145・146図、PL.62、199・200頁)

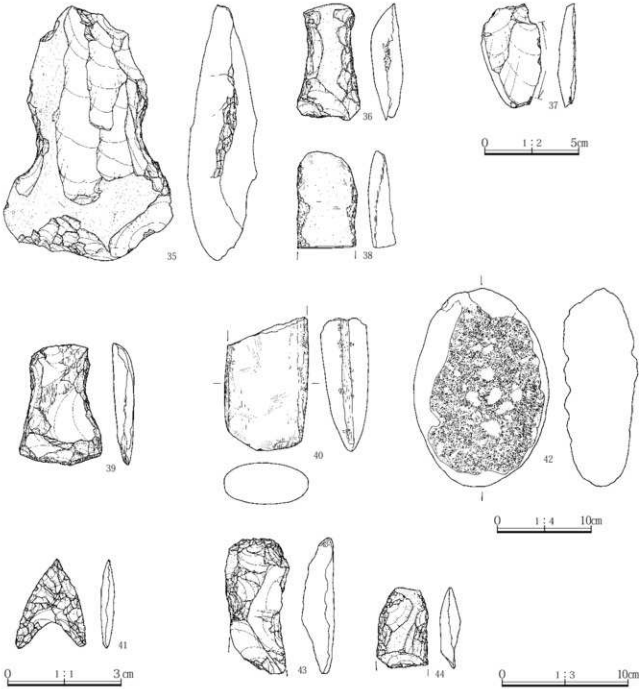
小神明富士塚遺跡の表土から黒色土層(V層)などから出土した縄文土器は、破片からなり(第145図)、遺物の総点数は104点であるが、うち67点はA区からの出土である。

主な遺物は縄文時代早期押型文系土器(１～３)早期花積下層式(４～６)や黒浜式(８～13)、諸磯式の土器片(14～23)、阿玉台式(24、25)、加曽利E式(26)である。これらの縄文土器の出土は、赤城南麓の縄文時代の集落の時期や小神明勝沢境遺跡の遺物包含層の時期と調和的である。

またA区からは、８世紀前半の土師器の坏(29)、や常滑産の甕(30)が出土している。遺構が溝の他あまりみられないC区からは輸入陶磁器の龍泉窯系青磁皿や瀬戸・



第145図　小神明富士塚遺跡の遺構外から出土した縄文土器及びA区とC区の遺構外から出土した遺物



第146図　小神明富士塚遺跡の遺構外から出土した縄文時代の石器

美濃陶器などの中世に属する遺物が出土している。

小神明富士塚遺跡の表土から黒色土層（Ⅴ層）などから出土した縄文時代の石器類（第146図）は、石器の製品や未製品と伴に剥片が102点出土している。剥片の石材は黒色頁岩がもっとも多い。

主な石器は打製石斧（35、36、38、39、44）や磨製石斧（40）、石鏃（41）である。また多孔石（42）もみられる。これらの石器類は遺構外から出土した縄文土器に伴うと考えられ、縄文時代前期から中期にかけての遺物群であると思われる。報告書に未掲載の縄文時代の石器類は、A区では頁岩の石核２点や加工痕のある剥片３点が出土している。B区では黒色頁岩の打製石斧２点が出土している。C区では加工痕のある剥片３点が出土している。D区では打製石斧２点、削器１点、加工痕のある剥片２点が出土した。

第５章　自然科学分析による遺跡の理解

１．小神明勝沢境遺跡Ｂ区の２号竪穴住居で見つかったテフラの同定

（１）はじめに

関東平野北西部に位置する前橋市とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、テフラの層序関係を遺跡で調べることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができる。

小神明勝沢境遺跡Ｂ区から検出されたいくつかの竪穴住居の埋土には火山に由来するテフラが認められ、床面からは弥生時代後期樽式土器の破片が出土している。竪穴住居の埋土に堆積したテフラの検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、地層や遺構の層位や年代に関する資料を基礎的な資料を収集することを目的として調査分析を行った。

なお、小神明勝沢境遺跡Ｂ区の地質調査及び２号竪穴住居の埋土からみつかったテフラの分析は株式会社火山灰考古学研究所に委託して実施した。

（２）Ｂ区２号竪穴住居埋土の層序

弥生時代後期樽式土器を伴う竪穴住居が認められた２号竪穴住居の断面では、下位より黄色土ブロック混じり暗灰褐色土（最大径層厚６㎝）、褐色火山灰土（最大層厚６㎝）、褐色火山灰土ブロック混じり暗灰褐色土（最大層厚４㎝）、炭化物混じり暗灰褐色土（層厚18㎝）が認められた。これらは床面より下位の地層である。

竪穴住居の床面の上位には成層したテフラ層のブロック（層厚9.6㎝）、灰白色軽石混じりで色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚28㎝以上，軽石の最大径６㎜）が認められた。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より正の級化構造をもつ灰白色軽石層（層厚６㎝、軽石の最大径12㎜、石質岩片の最大径３㎜）と桃灰色粗粒火山灰層（層厚0.6㎝）からなり、その上位に暗灰褐色土ブロック混じり灰白色軽石層（層厚３㎝、軽石の最大径７㎜）が認められる（第147図）。

（３）テフラの検出分析

以下に分析試料と分析方法について述べる。２号竪穴住居の埋土と床面下位の地層から採取した土壌試料のうち、５点を対象にテフラ検出分析を行い、軽石や火山ガラスなどテフラ粒子の特徴やその産出状況の把握を行った。分析の手順は次のとおりである。

土壌試料10ｇを秤量して、超音波洗浄器を使用して粒子に付着した泥分を除去する。粒子を80゜Ｃで恒温乾燥器を使用して乾燥させ、実体顕微鏡下で鉱物や火山ガラス、岩片など構成粒子の量や特徴を観察した。

以下に分析結果について述べる。テフラ検出分析の結果を第３表に示す。３号竪穴住居埋土の試料の中では、とくに試料１の成層したテフラ層中に、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石やその細粒物である灰白色軽石型ガラスがとくに多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。また試料５には、スポンジ状に良く発泡した白色軽石や、その細粒物の白色軽石型火山ガラス、さらに灰色や透明の分厚い中間型火山ガラスなどが含まれている。

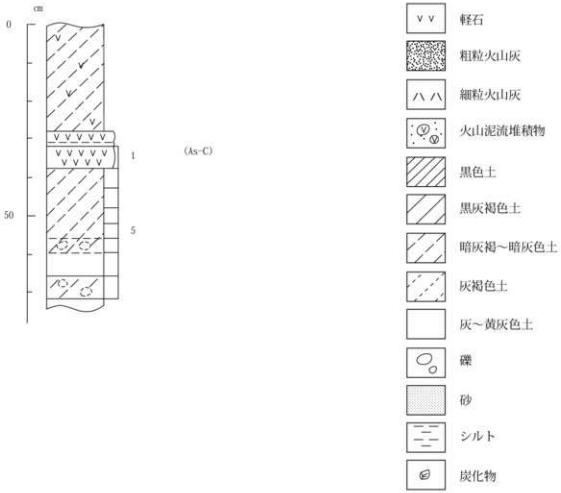
（４）屈折率測定

テフラ検出分析の対象となった試料のうち、３号竪穴住居埋土の試料１と床面下の地層である試料５の２試料に含まれる軽石の火山ガラスについて、実体顕微鏡下でハンドピッキングの後に軽く粉砕して、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製MAIOT）により、火山ガラスの屈折率（ｎ）の測定を実施した。なお、軽石に含まれる斜方輝石の屈折率（ｎ２）は測定しなかった。

屈折率測定の結果を第４表に示す。試料５に含まれる軽石の火山ガラスの屈折率は、ｎ＝1.501-1.504（25粒子）である。また、試料１に含まれる軽石の火山ガラスの屈折率は、ｎ＝1.516-1.518（28粒子）である。

（５）考察とまとめ

２号竪穴住居の試料１にあたるテフラ層は、とくに含まれる軽石の岩相、斑晶鉱物の組み合わせ、火山ガラス



第147図　小神明勝沢境遺跡Ｂ区2号竪穴住居埋土の試料採取柱状図

第３表　テフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			
		量	色調	最大径	量	形態		色調
２号竪穴住居埋土	1	＊＊＊＊	灰白	11.9	＊＊	pm		灰白
	3				＊	pm, md		灰白，灰
	5	＊	白	3.2	＊	pm, md		白，灰，透明
	6				＊	pm, md		白，灰，透明
	8				＊	pm, md		白，透明

＊＊＊＊特に多い　＊＊＊多い　＊＊中程度　＊少ない。最大径の単位は mm。
bw：バブルウォール型　md：中間型　pm：軽石型

第４表　火山ガラスの屈折率測定結果

地点名	試料	火山ガラスの屈折率(ｎ)	
		屈折率(ｎ)	測定粒子数
２号竪穴住居埋土	1	1.516－1.518	28
	5	1.501－1.504	25

屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定装置(MAIOT)による。

の屈折率などから、古墳時代前期に浅間火山から噴出したと推定されている浅間Ｃテフラ(As-C：荒牧1968、新井1979)に同定される。また、試料５に含まれる軽石や火山ガラスは、その特徴から、約17～16.5千年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色テフラ(As-YP：新井,1962)に由来する可能性が高い。

小神明勝沢境遺跡の地質調査と２号竪穴住居埋土に含まれるテフラの検出分析さらに火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、検出されたテフラは浅間Ｃテフラに同定され、遺構内には一次堆積したことが明らかとなった。また、竪穴住居の床に見られた弥生土器の破片は、浅間Ｃテフラより上位から出土したことが明らかになった。

２．小神明勝沢境遺跡Ａ区谷地に分布する堆積物の自然科学分析

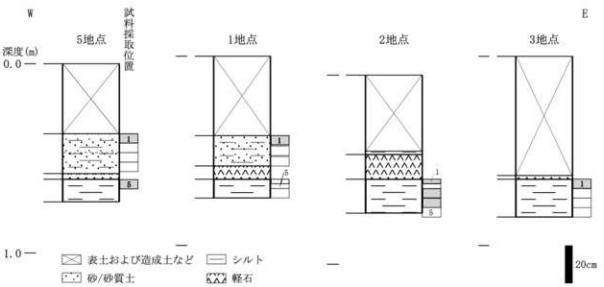
(１)はじめに

群馬県前橋市勝沢町に所在する小神明勝沢境遺跡は、赤城山南西麓裾部に形成された白川扇状地に立地する。調査区内は、沢あるいは小河川等の開析によって形成されたとみられる凹地(小規模な開析谷)と、相対的に高所となる微高地(扇状地面)が認められる。発掘調査では、微高地より弥生時代後期の竪穴住居が検出されており、凹地部からは遺構は検出されていないが、西暦1108年(天仁元年)に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ(As-B：新井1979)と、その下位に黒色を呈する泥質土の堆積物が確認されている。

本自然科学分析では、As-B降灰前後の凹地部の土地利用や、当該期の古植生の検討を目的として行い、自然科学分析と地質調査はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

はじめに試料について述べる。Ａ区東側の谷地の堆積物は、下位より最大径１㎝程度の灰色を呈する軽石混じりの暗褐色シルト、イネ科植物の根茎とみられる植物遺体が発達する黒色シルト、海汰の良好な灰～褐灰色を呈する細礫～細粒砂径の軽石層(As-B)、黒～黒褐色を呈する泥混じり砂質土、暗灰褐色を呈する砂混じり泥質土、造成土および表土(現代の耕作土)からなる。As-Bの層厚は、上位の擾乱の程度によって層厚が異なり、As-B上位の黒褐色泥混じり砂質土、暗灰褐色砂混じり泥質土にはこれらに由来すると考えられる軽石が混じる状況が観察された。

試料は、Ａ区東側の北壁および南壁に認められた堆積物を対象とし、上記した溝状遺構西側より５箇所(１～５地点)、南壁の溝状遺構西側１箇所(６地点)より土壌試料を採取した(第22図)。分析対象試料は、上述した分析目的から、観察された堆積物の最下位に相当する暗褐色シルト(２地点試料番号４)、As-B直下の黒色シルト(２地点試料番号１・３、３地点試料番号１、５地点試料番号５、６地点試料番号１)、As-B上位の黒～黒褐色泥混



第148図　小神明勝沢境遺跡Ａ区谷地の試料採取柱状図

じり砂質土（５地点試料番号３）、暗灰褐色砂混じり泥質土（１地点試料番号１、５地点試料番号１）を選択し、As-B直下の黒色シルト（３地点試料番号１、６地点試料番号１）を対象に花粉分析（イネ属同定含む）、この他の７試料を対象に植物珪酸体分析を実施した。分析対象とした調査地点の模式柱状図を第148図に示す。

（２）分析方法

花粉分析の方法について述べる。土壌試料は約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛を使用した。比重は2.3である）による有機物の分離を行い、フッ化水素酸による鉱物質の除去を行った。またアセトリシス（無水酢酸９と濃硫酸１の混合液を使用した）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理、化学的処理を施して花粉を濃集した。

残渣はグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定、計数した。

検出されたイネ科については、イネ属同定を実施した。イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造、発芽孔の肥厚状況、粒径等を考慮し、中村(1974)を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類した。結果は花粉分析と合わせて図表に示した。

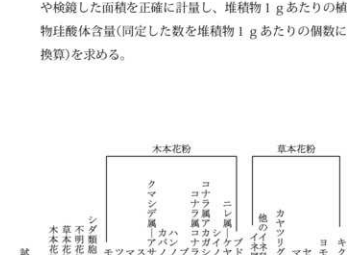
花粉分析の結果は同定、計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉および草本花粉、シダ類胞子の出現率は、総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出し図示した。

植物珪酸体分析の方法について述べる。土壌試料は過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウムを使用した。比重は2.5である）の順に物理、化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集した。得られた粒子はカバーガラス上に滴下、乾燥させた。粒子は乾燥後にプリュウラックスで封入してプレパラートを作製した。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤(2004)の分類に基づいて同定、計数した。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物１ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物１ｇあたりの個数に換算）を求める。

第５表　花粉分析結果

試料名	３地点	６地点
種　類	1	1
木本花粉		
モミ属	5	2
ツガ属	1	－
マツ属単維管束亜属	1	－
マツ属複維管束亜属	1	1
マツ属（不明）	2	－
スギ属	3	3
クマシデ属－アサダ属	2	－
カバノキ属	－	2
ハンノキ属	－	1
ブナ属	2	1
コナラ属コナラ亜属	14	3
コナラ属アカガシ亜属	3	2
シイノキ属	1	－
ニレ属－ケヤキ属	3	－
ヅドウ属	－	5
草本花粉		
イネ属	5	－
他のイネ科	32	12
カヤツリグサ科	25	5
マメ科	1	2
セリ科	1	－
ヨモギ属	22	7
キク亜科	3	10
不明花粉	15	6
シダ類胞子		
シダ類胞子	85	22
合　計		
木本花粉	38	20
草本花粉	89	36
不明花粉	15	6
シダ類胞子	85	22
総計（不明を除く）	212	78



第149図　花粉化石群集

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「＜100」で表示する。各分類群の含量は100単位として表示する。合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に100単位として表示する。各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化を検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

（3）結果

花粉分析の結果を第5表、第149図、PL.63に示す。図表中で複数の種類を「－」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

As-B下位の黒色シルト（3地点試料番号1、6地点試料番号1）は、花粉化石の産出状況は不良であり、また、保存状態も悪く、花粉外膜が破損、溶解しているものが多量に認められた。6地点試料番号1は、花粉化石の検出は少なく、解析に耐え得る個体数は得られなかった。なお、分析残渣中には、微細な植物片が多量確認される。

花粉群集組成は、3地点試料番号1は、草本花粉の割合が高く、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多く認められる。イネ科花粉中には、イネ属花粉もわずかではあるが検出される。木本花粉では、モミ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属等が産出する。また、シダ類胞子も比較的多く検出される。

6地点の試料番号1は、検出された花粉をみると、モミ属、マツ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ブドウ属等の木本花粉、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科等の草本花粉が認められる。

植物珪酸体分析の結果を第6表、第150、151図、PL.64に示す。各試料からはイネ科起源の植物珪酸体が検出されるが、いずれも保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるが、溶解、消失する状況は認められない。以下に、各地点の産状を述べる。

1地点では、As-B上位の暗褐色泥混じり砂質土（試料番号1）は、植物珪酸体含量は約9.4万個/gであり、栽培植物のイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約3,500個/g、機動細胞珪酸体は約4,900個/gである。

この他に、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属等が認められる。植物珪酸体群集を見ると、ネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ。

2地点では、As-B下位の堆積物に相当する3試料（試料番号1、3、4）では、植物珪酸体含量は上位試料で高い値を示し、暗褐色シルト（試料番号4）は約15万個/g、黒色シルト（試料番号3、1）は約21.3～22万個/g前後となる。

3試料からは、いずれもイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、試料番号4はいずれも約1,700個/g、試料番号3はいずれも約1,200個/g、試料番号1は短細胞珪酸体が約2,200個/g、機動細胞珪酸体は約1,100個/gである。また、試料番号4、3では、キビ属の短細胞珪酸体が検出され、その含量は約800～1,200個/g前後である。なお、キビ属は、植物珪酸体の形状からは栽培種か否かの判断が困難である。

この他に、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が認められる。植物珪酸体群集は、試料番号4では、ネザサ節を含むタケ亜科やヨシ属の産出が目立つが、試料番号3、1ではヨシ属やススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ。

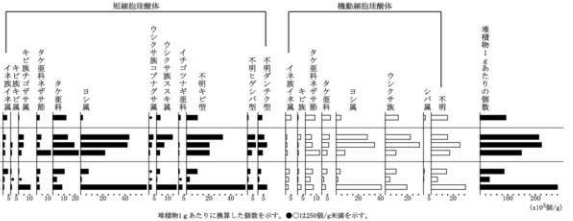
5地点では、As-B下位の黒色シルト（試料番号5）と、As-B上位の黒色泥混じり砂質土（試料番号3）、暗褐色泥質土（試料番号1）では、植物珪酸体含量が大きく異なる。試料番号5は約28万個/gと高い値であるのに対し、試料番号3では約3.4万個/g、試料番号1で約8.8万個/gと低い値を示す。

試料番号5は、イネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約800個/g、機動細胞珪酸体は約2,400個/gである。また、試料番号3、1においてもイネ属が検出され、いずれも試料番号5よりも含量が高い。試料番号3では短細胞珪酸体は約1,100個/g、機動細胞珪酸体は約2,700個/g、試料番号1では短細胞珪酸体は約4,300個/g、機動細胞珪酸体は約3,400個/gである。また、各試料からキビ属の短細胞珪酸体が検出され、その含量は、試料番号5は約800個/g、試料番号3で約200個/g、試料番号1で約500個/gである。

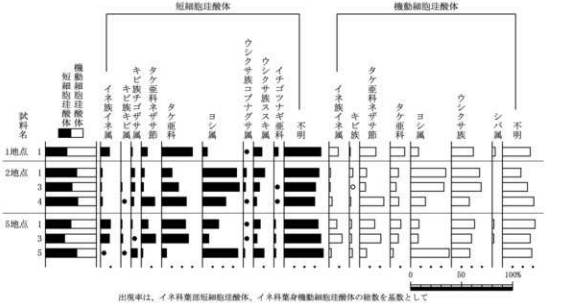
この他に、各試料よりネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出される。植物珪酸体群集では、試料

第６表　植物珪酸体含有量

試料名 / 種　類	１地点	２地点			５地点		
	1	1	3	4	1	3	5
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	3,500	2,200	1,200	1,700	4,300	1,100	800
キビ族キビ属	—	—	1,200	800	500	200	800
キビ族チゴザサ属	500	4,400	4,300	2,500	500	100	10,600
タケ亜科ネザサ節	2,300	3,900	2,500	12,600	2,900	1,800	2,400
タケ亜科	12,000	13,300	19,200	23,100	10,300	3,400	8,200
ヨシ属	1,900	43,700	42,100	21,800	7,000	800	59,600
ウシクサ族コブナグサ属	200	3,900	2,500	800	200	100	2,400
ウシクサ族ススキ属	3,300	14,400	6,800	2,900	2,900	500	18,000
イチゴツナギ亜科	1,600	—	600	400	700	200	3,300
不明キビ型	9,900	32,700	20,400	20,600	9,600	2,700	53,100
不明ヒゲシバ型	700	6,600	7,400	3,800	2,400	800	4,900
不明ダンチク型	3,800	5,500	8,000	4,200	2,600	1,100	8,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	4,900	1,100	1,200	1,700	3,400	2,700	2,400
キビ族	500	2,800	600	800	1,000	500	3,300
タケ亜科ネザサ節	8,700	5,500	6,200	13,000	6,500	4,400	7,300
タケ亜科	7,800	6,600	6,200	4,600	4,600	1,700	3,300
ヨシ属	4,200	28,200	34,700	8,000	3,600	1,600	40,800
ウシクサ族	11,700	22,700	30,900	9,700	9,900	4,200	19,600
シバ属	1,600	—	—	—	700	300	—
不明	14,800	15,000	26,000	16,800	14,000	5,700	31,000
合　計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	39,700	130,700	116,400	95,400	44,000	12,800	172,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	54,300	82,000	105,800	54,600	43,500	21,100	107,800
総　計	94,000	212,600	222,200	150,000	87,600	33,900	280,000



第150図　植物珪酸体含有量の層位的変化



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。●○は１％未満を示す。

第151図　植物珪酸体群集

番号５ではヨシ属が優占するが、試料番号３、１ではヨシ属の優占は認められず、ネザサ節を含むタケ亜科やススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ。

（４）考察

小神明勝沢境遺跡Ａ区の土地利用について述べる。谷地に認められた堆積物のうち、As-B下位の黒色泥質土では、栽培植物のイネ属の花粉や植物珪酸体が検出された。イネ属の植物珪酸体は、調査地点２箇所（２、５地点）の各試料より検出され、短細胞珪酸体は約800 ～ 2,200個/g、機動細胞珪酸体は約1,100 ～ 2,400個/gであった。

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料１ｇ当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている（杉山2000）。これを参考とすると、Ａ区において稲作が行われていた可能性は低いと考えられる。

２地点のAs-B下位に認められた堆積物における植物珪酸体含量および群集の層位的変化をみると、ヨシ属の優占やヨシ属やススキ属を含むウシクサ族の増加、ネザサ節を含むタケ亜科の減少が認められた。後述するように、ススキ属はヨシ属と同様に増加することからオギの可能性が示唆されている。

このことから、Ａ区周辺は明るく開けた景観であり、湿潤な環境を好むヨシ属やススキ属などのイネ科草本が生育したと推定される。

また、As-B上位の堆積物においても、イネ属の植物珪酸体が検出された。イネ属の植物珪酸体は、短細胞珪酸体は約1,100 ～ 4,300個/g、機動細胞珪酸体は約2,700 ～ 4,900個/gであった。As-B上位の堆積物における植物珪酸体含量は、いずれもAs-B下位の堆積物のそれに比べ低いのに対し、イネ属の植物珪酸体含量が高く、また比較的高い割合を示す。今回の分析結果や稲作の検出量（杉山, 2000）を参考とすると、稲作の可能性が示唆される。

小神明勝沢境遺跡が立地する赤城山麓では、河川の開析によって形成された谷理積物を対象に分析調査が実施されている。小神明勝沢境遺跡の南東に位置する前橋市の二之宮千足遺跡では、As-C降灰以降からAs-B降灰時まではヨシ属を含むイネ科やホタルイ属を含むカヤツリグサ科等の繁茂する低湿地であり、これを利用した泥炭地水田の可能性が推定されている（有限会社古環境研究所1992、パリノ・サーヴェイ株式会社1992）。赤城火山南麓では小規模な谷地（谷戸）の利用を検討した調査の事例が少なく、今回分析調査を行ったAs-B下位の堆積物におけるイネ属の産状については、改めて検討する必要がある。

以下に小神明勝沢境遺跡Ａ区周辺の植生について述べる。As-B降灰以前の堆積物である黒色シルトは、花粉化石の産出状況は良好といえず、保存状態も悪いものが多く認められた。

花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性（中村1967、徳永・山内1971、三宅・中越1998）を考慮すると、得られた花粉化石群集は堆積環境や経年変化による分解、消失の影響を受け、分解に強い花粉や相対的に生産量が多いものが選択的に残存したと推定される。

花粉群集組成で高い割合を示した草本類では、開けた明るい場所を好む人里植物を多く含む分類群であるイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科等が検出された。また、As-B下位の堆積物（２地点試料番号１、３、４）における植物珪酸体含量や群集の層位的変化では、上位に向かってヨシ属やススキ属を含むウシクサ族の増加、ネザサ節を含むタケ亜科の減少という特徴が認められた。

ススキ属には湿潤な場所を好むものや乾燥した場所に生育する種類が含まれるが、ヨシ属と同様に推移することから、湿潤な場所に生育するオギの可能性もある。これらの点を考慮すると、As-B降灰以前は、調査地点は比較的湿潤な環境であったと推定され、谷地周辺にはこれらの分類群からなる草本群落が分布したと考えられる。

またAs-B降灰以降も、同様の分類群が検出されたことから、周辺にはAs-B降灰以前と同様のイネ科植物が生育したと考えられる。層位的変化をみると、ネザサ節を含むタケ亜科やヨシ属の割合の変化や、上記した植物珪酸体含量が低くなるという特徴が認められた。

これらの変化は、堆積（水域）環境の変化や、As-B上位の堆積物におけるイネ属の産状から稲作の可能性が示唆されていることから、稲作の影響も推定される。

一方、広域植生を反映する木本類では、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属が比較的多く産出し、この他にモミ属やマツ属、スギ属等の針葉樹、コナラ属アカガシ亜属等の常緑広葉樹、ニレ属－ケヤキ属等の落葉広葉樹の花

粉が検出された。前述した二之宮千足遺跡の分析調査によれば、11千年前から中世の初め頃まで、ナラ類(コナラ亜属)を主体とする落葉広葉樹林が中心であったと推定されている(パリノ・サーヴェイ株式会社1992)。

また、赤城山南麓では、古代の製鉄炉や炭窯が多数確認されているが、これらの遺構から出土した炭化材の調査結果では、クヌギ節が多く、他にコナラ節などが少数混じる組成が確認されている(高橋・鶴原1994、パリノ・サーヴェイ株式会社2005ａ・2005ｂ、植田2005、植田・松葉2005)。

これらの調査事例から、赤城山南麓には、コナラ亜属を主体とする落葉広葉樹林が分布していたことが窺われる。現在の赤城山には、標高700m以上にミズナラ、700m以下にはコナラが分布し、谷沿い等の湿った土地を中心にクヌギ－コナラ林を形成するクヌギも分布することから、今回認められたコナラ亜属はコナラやクヌギに由来すると考えられる。

また常緑広葉樹のアカガシ亜属は、現在の遺跡周辺を分布の北限とし、沖積地に広く分布するシラカシや、太田市金山周辺に分布するアラカシなどがあり(松澤2003)、こうした種類が周辺にも分布していたことが推定される。さらにはニレ属－ケヤキ属やクマシデ属－アサダ属、ハンノキ属には渓谷沿いや河畔等の適湿地に生育する分類群が含まれることから、周辺の河川沿いや谷地周辺に生育していた可能性がある。

３．小神明富士塚遺跡Ａ区２号土坑から出土したウマの遺体について

古生物学者の宮崎重夫氏に委託してウマの遺体について鑑定を実施した。２号土坑からはウマ１頭分の全身の歯や骨が出土しているが、歯以外は完存するものがなく、得られた計測値は少ない。

橈骨の中央幅が33.7mm（同径24.0mm）を計測し、西中川ほか(1991)の体高推定法によればウマの体高は125cmとなる。中手骨の遠位端幅44.2mmを同様に体高の推定を行うと130cm近くになる。いずれにしても日本在来馬の中型馬に相当する体高であると推定される。

犬歯が確認され、牡馬であることがわかる。臼歯の咬耗度による西中川ほか(1991)の年齢推定法によれば９～10歳ほどの壮年馬であると推定される。

第７表　ウマの歯計測値

左上顎臼歯　　単位は mm

		第２前臼歯	第３前臼歯	第４前臼歯	第１後臼歯	第２後臼歯	第３後臼歯
歯冠近遠心径	咬合面	36.5	27.0	25.0	24.2	26.9	27.9
歯冠頰舌径	咬合面	23.2	26.0	25.8	25.3	26.0	21.4
原錐幅	咬合面		11.9	13.3	13.3	11.4	14.9
歯冠高	頰側				41.3	44.5	44.7
中間錐幅	咬合面	5.1	4.4	4.3	3.4	4.4	3.4

左下顎臼歯

		第２前臼歯	第３前臼歯	第４前臼歯	第１後臼歯	第２後臼歯	第３後臼歯
歯冠近遠心径	咬合面	31.6	27.8	26.2	24.5	25.2	32.2
歯冠頰舌径前葉	咬合面	13.5	16.3	16.4	14.4	13.9	
歯冠高	頰側	31	41	44.2	38.2	45.1	
下後錐谷長	咬合面	4.5	9.6	8.3	7.5	7.5	
下内錐谷長	咬合面	17.4	12.7	11.5	8.2	8.9	
下後錐谷長	咬合面	14.2	16.1	15.5	13.7	13.7	
下後錐幅	咬合面	6.3	6.5	6.7	4.5	4.5	

その他の歯

	第１切歯	第２切歯	第３切歯	犬歯			
歯冠長	13.4	15.1	12.6	12.1			
歯冠幅	9.3	8.8	9.2	11.1			

４．自然科学分析の成果と発掘調査からの評価

(１)小神明勝沢境遺跡Ｂ区の２号竪穴住居で見つかったテフラの同定について

株式会社火山灰考古学研究所に委託して小神明勝沢境遺跡の地質調査とＡ区の２号竪穴住居埋土に含まれるテフラの検出分析さらに火山ガラスの屈折率測定を実施した。

遺跡周辺には、すでに前橋市教育委員会によって発掘調査で弥生時代後期の遺構が発掘されている。端気遺跡では弥生時代後期の竪穴住居が１棟検出され、方形周溝墓が発見されている。これらの遺構には埋土に浅間Ｃテフラがみられるが、その堆積状態はどのようなものか、またテフラの堆積時期と遺構面の埋没が開始した時間的な差はどのようなものであったか不明な点が多い。

Ａ区の２号竪穴住居は埋土に白色の軽石粒がみられたことから、肉眼観察と上下のテフラの層位から純度の高い浅間Ｃテフラに比定した。

今回の調査とテフラの分析ではテフラ層の詳細な肉眼観察によって、級化構造が確認された。また軽石粒の相互の粒子は黒色土の混入がみられるものの軽石粒の乱れが少ないことが明らかとなった。これらを総合的に判断すると検出された浅間Ｃテフラは遺構には一次堆積したことが明らかとなり、ほぼ降下堆積の状態に近いと思われる。また、竪穴住居の床に見られた弥生土器の破片は、浅間Ｃテフラの降下以降に大部分が堆積したことが明ら

かになった。

火山ガラスの屈折率は、浅間Ｃテフラの火山ガラスの測定値と一致し、明らかに浅間Ｂテフラのそれとは異なる。また、鉱物組成も榛名火山起源のテフラとは思われないので、テフラの分析は、調査担当者の肉眼観察による浅間Ｃテフラの比定と矛盾しない。

（２）小神明勝沢境遺跡Ａ区谷地に分布する堆積物の自然科学分析について

小神明勝沢境遺跡Ａ区の台地から東側の谷へと向かう斜面は、浅間Ｂテフラの一次堆積が確認できたのでテフラの降下によって埋没した旧地表面と評価した。斜面に連続する低地では、浅間Ｂテフラの直下を精査したが黒色土の上面に水田遺構の状況証拠となる畦畔などの起伏は観察できなかった。

しかし、前橋台地周辺で発掘調査された浅間Ｂテフラ直下の水田跡は、遺構の残存状態に差があり、近年では発掘された水田面が埋没前に水田耕作を行っていたかどうか？が議論になっている。

また、埋没時に農耕地として放棄されていた場所も、過去に水田が形成されていた可能性があることから、浅間Ｂテフラ下位の土壌の花粉や植物珪酸体分析を行い集落遺跡周囲の生産域の復元が必要である。

今回の分析では、花粉や植物珪酸体分析により、浅間Ｂテフラ前後の堆積物を検討したが浅間Ｂテフラ降下前に、この場所で水田による稲作を行った傍証となる水田耕土の認定はできなかった。

このことは、小神明勝沢境遺跡において竪穴住居が弥生時代後期、古墳時代前期及び後期にみられ、奈良時代や平安時代の集落が欠落していることと調和的である。Ａ区で検出された古代の溝は、Ａ区における水田耕作による水路とは考えられないので別の評価が必要である。

また、浅間Ｂテフラ上位の堆積物からは、水田耕作を伺わせる植物珪酸体の含有量が認められたため、小神明勝沢境遺跡Ａ区の谷が開発されるのは中世以降と考えられる。

赤城南麓では、河川の開析によって形成された谷埋積物を対象に調査が実施され、カヤツリグサ科等の繁茂する低湿地が認められることから、これを利用した泥炭地水田の可能性が指摘されている。

花粉分析で得られた遺跡周辺のAs-B降灰以前の植生は比較的湿潤な環境であったと推定され、谷地周辺には開けた明るい場所を好む人里植物を多く含む分類群であるイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科等からなる草本群落が分布したと考えられる。

こうした環境はおそらく弥生時代の後期から古墳時代前期の小規模開発を経て、古墳時代に台地に大規模に展開する農耕集落の拡大に伴って形成された人為的な植生環境の可能性があり評価される。

またAs-B降灰以降の中世から近世の時期でも、同様の分類群が検出されたことから、周辺にはAs-B降灰以前と同様のイネ科植物が生育したと考えられる。層位的変化をみると、ネザサ節を含むタケ亜科やヨシ属の割合の変化や、上記した植物珪酸体含量が低くなるという特徴が認められた。

これらの変化は、堆積(水域)環境の変化や、As-B上位の堆積物におけるイネ属の産状から稲作の可能性が示唆されていることから、谷を利用した稲作の影響が推定される。

こうした山麓の谷間の植生環境の変遷は古墳時代後期以降、中世に至る台地上の遺跡の立地や変遷と比較的に調和していると考えられる。

第６章　調査成果のまとめ

１．縄文時代から弥生時代の遺跡

今回の発掘調査で当遺跡の縄文時代から弥生時代の遺跡に関しては以下の点が明らかになった。

赤城南麓の白川扇状地扇端部に位置する当地は、他の赤城南麓の地域にくらべて縄文時代の遺構密度が低かった。この場所に認められた縄文人の足跡は、縄文時代早期(13.25 ～ 12.25千年前)と縄文時代前期初頭から中葉(7.25 ～ 6.0千年前)であり、遺構や遺物包含層がみられたのは縄文時代前期前半から中葉の黒浜式から諸磯ａ式土器が使用された時期(6.75 ～ 6.25千年前)である。これらの時期は、赤城南麓の火山麓扇状地縁に集落遺跡が

急増する時期であり、遺構及び遺物包含層の時期と周辺の集落遺跡の形成期は調和的である。

なお、当地が縄文時代における竪穴住居の分布範囲外で、土坑などの遺構も極端に少ない理由は、集落形成にとって欠かせない水を確保するための条件が悪かったのだろう。遺跡の近くに比較的大きな谷や湧水がないことや、台地に挟まれた谷に新期扇状地形成期の砂礫層などが堆積し、有用植物採取の場としても不安定な場所だったのではないだろうか。

弥生時代後期に入って当地には初めて竪穴住居がつくられた。また、A区の３号竪穴住居(古墳時代後期)からは、弥生時代中期後半の弥生土器の破片が出土しており、この斜面上に弥生人の痕跡が認められるのは紀元後(2.0千年前)の頃であると考えられる。

竪穴住居がみられた場所は縄文時代前期の埋設土器が検出され、古墳時代以降の遺構がなかった台地上である。小神明勝沢境遺跡Ｂ区は両側に台地を削る谷地形がみられ、竪穴住居は、南向きの緩やかな斜面のほぼ中央につくられていたようである。

弥生時代後期の竪穴住居は２棟が検出されている。１棟は竪穴住居が廃絶された後に火を受けたらしい。そして上屋が失われ、土壌の堆積がはじまる前に古墳時代初頭に降下した浅間Ｃテフラに床面が覆われた。この竪穴住居は、床面からの遺物の出土が極端に少ない。

もう１棟の竪穴住居は器台に転用された可能性がある甕などが床面に残されていた。この竪穴住居に堆積した浅間Ｃテフラは、黒色土を基質に含んでおり降下テフラとしては汚れがみられる。おそらくはテフラ降下後に移動した軽石の粒によって埋積した遺物であろう。このときに竪穴住居の上屋が存在したかは不明であるが、上屋の崩落などによって周辺の土壌と浅間Ｃテフラが徐々に竪穴住居内部の窪みを埋めていった可能性も考えられる。

なお、この竪穴住居に伴う弥生人の生産域や墓域は、今回の発掘調査では検出されていない。

２．古墳時代から奈良時代及び平安時代の遺跡

小神明勝沢境遺跡と小神明富士塚遺跡が位置する赤城南麓の扇状地扇端の台地には、古墳時代から平安時代の集落遺跡が広い範囲に分布し、芳賀団地遺跡群のような大規模な発掘調査によって古代集落の全体像が明らかになった場所もみられる。

上武道路建設に伴う発掘調査は、一定の幅をもって地域を線状に把握ができるといった特性がある。これは、まるで赤城南麓の扇状地縁の台地に等標高線状に大きな試掘溝をいれたようなものであると考えられる。

こうした観点から偶然に設定された調査範囲とはいえ、小神明勝沢境遺跡と小神明富士塚遺跡の集落遺跡の変遷は、この地域の本格的な農耕集落の成立を考える資料となっているものと思われる。

小神明勝沢境遺跡の範囲では、６世紀に近い５世紀後半から竪穴住居がつくられた。それぞれの遺構の推定年代から竪穴住居群の変遷モデルが考えられる。

Ａ区では２号竪穴住居と１号竪穴住居の重複。３号と４号竪穴住居の組み合わせ、Ｃ区の１号竪穴住居とＤ区の１号、２号竪穴住居の組み合わせなどである。これらの竪穴住居群は６世紀の前半までに２～３世代にわたって居住した可能性があることを示唆する。

同様に小神明富士塚遺跡Ａ区では、２号竪穴住居が６世紀前半に造られた。６世紀後半は９号と10号竪穴住居の組み合わせ、７世紀前半は８号と11号竪穴住居の組み合わせが竪穴住居群の経時的な変遷と思われる。また７世紀後半以降は４号、５号、７号、６号、３号竪穴住居へと居住が変遷した可能性がある。

小神明富士塚遺跡Ｄ区では６世紀末から７世紀に１号、２号竪穴住居の組み合わせで同様に１世帯が２世代にわたって居住を継続した可能性がある。

こうした竪穴住居群の変遷理解から、古墳時代後期に開始した小規模集落が、ほぼ間断なく奈良時代まで営続したと考えてよい。このような動向は、遺跡が立地する尾根部分を含めた周辺地域の集落群動向との関係で理解すべきで、今後は拠点的中核集落の盛衰との関連性が注目されよう。

３．小神明富士塚遺跡Ｄ区の中世以降の屋敷遺構群について

小神明富士塚遺跡Ｄ区には、溝と段状地形により造られた方形の区画で囲まれた屋敷跡と思われる遺構群が検出されている。屋敷跡の北縁には地境となる遺構はみられないが、西縁は５号溝、南縁は１号溝、東縁は段状地

形と谷により区画されており、北に開いた「凵の字」状を呈する。

同様の地割りは、段状地形の南にある水口状の遺構と溝を延長した場所に、Ｃ区の13号、14号溝がみられ南に開いた「逆凵字」状を呈している。

それぞれ地割りは東西方向が約50mで、Ｄ区の５号溝とＣ区の12号の間は100mである。このような地割りは地形の傾斜にあわせた部分とそうでない部分がある。また地割りを示す溝は東西南北方向に揃っているため、これらは条里型地割りを意識した計画的なものである可能性が高い。

Ｄ区に分布する土坑は、すべてが方形の地割りに収まり、中世以降の時代に属すると考えられる掘立柱建物や竪穴状遺構群の分布域に調和的である。土坑はこれらの遺構群に関連する蓋然性は極めて高いと考えてよいだろう。

１号～９号土坑及び21号～23号、25号～27号、33号土坑は、１号～３号井戸、５号、６号井戸の分布と調和的で、東西方向に並んでいるように見える。３号掘立柱建物との間に時期差を有する遺構もあるが、３号、４号掘立柱建物と井戸、土坑群がセットになる居住と生業に関わる遺構群と捉えたい。

同様に区画の南東隅に位置する１号及び２号掘立柱建物は、以降の範囲が重なるため時期差のある建物である。建物の北東に位置する竪穴状遺構も２棟が認められるので、掘立柱建物と組み合わせて２時期の建物群であるかも知れない。掘立柱建物と竪穴状遺構の周囲には東西方向に主軸をもつ横長の方形土坑群がみられる。この形状の土坑は３号、４号掘立柱建物の周辺にはみられないので、１号及び２号掘立柱建物との組み合わせで評価できるかも知れない。

残念ながら今回の発掘調査では、これらの遺構から時代や年代を示す遺物がまったく出土しなかった。遺構の重複関係による時系列の変化も、切り合いのある遺構が少ないため復元は困難である。今後の発掘調査で同様の屋敷跡の検出がなされ年代特定のできる事例が増加することを待ちたい。

これらの遺構群は、柱穴の埋土に含まれるテフラから12世紀初頭以降であることは確実である。また竪穴遺構や井戸、土坑からも渡来銭の出土以外に遺構の年代を遺物は出土しなかった。

県内の中世から近世遺跡の発掘調査例を見ると15世紀代の遺構からは瓦質土器やかわらけなどが出土している。また16～17世紀代の遺構はかわらけや陶器類、18世紀以降は有田や波佐見窯の磁器が多量に出土している。

こうした県内の中世から近世遺構の遺物の出土傾向からみると、全く時代の特定できる遺物が皆無なのは逆に特異な印象を受ける。遺物が出土しないことは、土器や陶磁器の生産や流通量が少ない時期か、生活エリアが離れている場合を示す。また、短時間に存在した遺構群の期間幅などの可能性を示唆するかも知れない。

文献

新井房夫　1962　「関東平野北西部の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10　pp．1-79.

新井房夫　1971　「前橋市の地形・地質」『前橋市史』1　pp．8-66.

新井房夫　1979　「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』157　pp.41-52.

荒牧重雄　1968　「浅間火山の地質」『地団研専報』45　65ｐ.

平凡社地方資料センター編　1987　『日本歴史地名大系10 群馬県の地名』平凡社

株式会社古環境研究所　2004　「自然科学分析」『鼻毛石赤坂遺跡一般県道宮城前橋線緊急地方道路整備Ａ事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』宮城村教育委員会編　pp.46-57.

角川日本地名大辞典編纂委員会編　1988　『角川日本地名大辞典10群馬県』角川書店

神谷佳明　2004　「古代上野における富豪層について」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』22

笠懸野岩宿文化資料館編　1993　『群馬の岩宿時代』27.ｐ

近藤錬三　2004　「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48　pp.46-64.

松田猛　1986　「群馬県における文字瓦と墨書土器－前橋市上西原遺跡の文字資料－」『信濃』pp.38-11

松澤篤郎　2003　「群馬の里山の植物」『みやま文庫』171　190ｐ.

三宅尚・中越信和　1998　「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6　pp.15-30.

守屋以智雄　1968 『赤城火山の地形及び地質』前橋営林局　pp. 1-65.
中村純　1967 『花粉分析』古今書院　232ｐ.
中村純　1974 「イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として」『第四紀研究』13　pp.187-193.
パリノ・サーヴェイ株式会社　1992 「二之宮千足遺跡の古環境解析」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集二之宮千足遺跡一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(自然科学、分析編)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編　pp.60-111.
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005ａ 「柏倉芳見沢遺跡の自然科学分析」『柏倉芳見沢遺跡、柏倉落合遺跡』前橋市教育委員会編　pp.127-133.
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005ｂ 「今井見切塚遺跡６区１号炭窯から出土した炭化材の樹種」『多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第４集　今井三騎堂遺跡、今井見切塚遺跡　－歴史時代編－財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第346集』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編　pp.238-241.
関口博幸・早田勉・下岡順直　2011 「群馬の旧石器編年のための基礎研究－関東地方北西部における石器群の出土層位、テフラ層序、数値年代の整理と検討」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』29　pp. 1-20.
早田勉　1990 「群馬県の自然と風土」『群馬県史通史編１、原始古代１』群馬県史編纂委員会編　pp.39-129.
杉山真二　2000 「植物珪酸体(プラント、オパール)」『考古学と自然科学３、考古学と植物学』同成社　pp.189-213.
鈴木毅彦　1991 「テフロクロノロジーからみた赤城火山最近20万年間の噴火史」『地学雑誌』99-２　pp.182－197.
高橋　敦・鶴原　明　1994 「乙西尾引遺跡における製鉄燃料材について」『大胡西北部遺跡群、乙西尾引遺跡、西天神遺跡、柴崎遺跡、県営ほ場整備事業大胡西北部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集』大胡町教育委員会編　pp.41-49.
竹本弘幸　2008 「利根川中－上流域の段丘」『日本地方地質誌３関東地方』日本地質学会編　朝倉書店　pp.352-365.
徳永重元・山内輝子　1971 「花粉、胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社pp.50-73.
津島秀章　2008 『上武道路・旧石器時代遺跡群(１)、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第418集』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編　475.ｐ
植田弥生　2005 「今井見切塚遺跡の炭窯から出土した炭化材樹種同定」『多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第４集今井三騎堂遺跡、今井見切塚遺跡－歴史時代編、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第346集』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編　pp.242-260.
植田弥生・松葉礼子　2005 「今井三騎堂遺跡、今井見切塚遺跡出土炭化材の樹種同定」『多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第４集今井三騎堂遺跡、今井見切塚遺跡－歴史時代編、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第346集』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編　pp.261-290.
矢口裕之　2011 「関東平野北西部、前橋堆積盆地の上部更新統から完新統に関わる諸問題」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』29　pp.21-40.
有限会社古環境研究所　1992 「プラント、オパール分析調査報告」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集二之宮千足遺跡一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(自然科学、分析編)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業編pp.50-60.

A区1号竪穴住居(第17図 PL.51)

番号	種類器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器甕	床面上11cm	底部～下位片	底径8.0	粗粒砂・ガラス質粒子／良好／橙	胴部はヘラ削り後一部ヘラ磨き。内面はヘラナデ。	写真なし
2	土師器甕	床面の直上	口縁部～胴部上位片	口径14.0	粗粒砂・ガラス質粒子／良好／にぶい黄橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
3	土師器甕	床面の直上	口縁部～胴部上位片	口径15.6	粗粒砂・ガラス質粒子／良好／にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ。胴部は縦位のヘラナデ。内面胴部はヘラナデ。	
4	土師器甕	床面の直上	口縁部～胴部上位片	口径16.6	粗粒砂／良好／褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。胴部はハケ目。内面胴部はヘラナデ。	炭、前半

A区2号竪穴住居(第17図 PL.51)

番号	種類器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
5	土師器甕	床面の直上	1/3	口径11.8 底径3.2	器高5.6	粗粒砂・雲母／良好／灰黄	外面体部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ。体部から底部はヘラ削り。内面は横ナデ。体部器面摩滅のため不明瞭。	炭、代か

A区3号竪穴住居(第20図 PL.51)

番号	種類器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器甕	床面の直上	2/3	口径14.2	粗粒砂・粗砂粒／良好／明赤褐	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は器面摩滅のため不明瞭。	
2	土師器甕	床面の直上	1/2	口径15.8	器高15.3	粗粒砂・極粗粒砂・ガラス質粒子・褐色粒子／良好／明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ。胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラ磨き。	
3	土師器甕	貯蔵穴底から44cm上	口縁部～胴部上半片	口径14.4	粗粒砂・極粗粒砂・ガラス質粒子／良好／にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	炭、代か 写真なし

A区3号竪穴住居(第20図 PL.51)

番号	種類器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
4	弥生土器壺	床面の直上	口縁部破片		白色岩片の粗粒砂・輝石類／還元ざみ／器面灰白・器内黒	外面は斜位ハケ目。内面はヘラナデ。	
5	土師器(重)甕	ピット8埋土	胴部破片		白色岩片の粗粒砂・輝石類／還元ざみ／器面灰白・器内黒	内外面とも板状具小口によるナデ。	
6	土師器(重)甕	床面の直上	胴部破片		白色岩片の粗粒砂・輝石類／還元ざみ／器面灰白・器内黒	内面縦かいハケ目、断面黒色	4、5、6遺物は明穴住居埋土への混入遺物である。弥生時代中期後半、同一個体か。

A区3号竪穴住居(第20図 PL.51)

番号	種類器種	出土層位(位置)	石材	計測値	形態・素材	製作・使用状態	摘要
7	石器打製石斧	埋土	黒色頁岩	長さ10.2 幅3.6 重さ47.5	短撥型	完成状態。刃部に近い右側縁下端が弱く摩耗する。他の剥離面・エッジは新鮮に見える。	
8	石器打製石斧	埋土	黒色頁岩	長さ6.0 幅5.4 重さ54.9	短撥型	完成状態。裏面側に刃部から縁辺剥離面がある。使用時の破損か。エッジは弱く摩耗している程度。	7、8遺物は明穴住居埋土への混入遺物である。

A区4号竪穴住居(第21図 PL.51)

番号	種類器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器鉢	貯蔵穴埋土	口縁部～体部小片		粗粒砂・雲母／良好／にぶい黄橙	口縁部横ナデ。体部ヘラナデ。内面は体部から口縁部下半にヘラ磨き。	写真なし
2	土師器小型甕	床面の直上	口縁部～胴部下位片	口径10.0	粗粒砂・ガラス質粒子／良好／褐灰	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ	写真なし
3	土師器甕	床面の直上	口縁部～胴部上位片	口径16.0	粗粒砂／良好／にぶい黄橙	口縁部横ナデ。頸部から胴部はハケ目(5本)。頸部下にナデ。内面胴部はヘラナデ。	
4	土師器甕	床面の直上及び貯蔵穴底から34cm上	胴部～胴部上位片		粗粒砂／良好／橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り後ナデ。内面胴部はヘラナデ。	
5	土師器甕	床面の直上及び貯蔵穴底から30cm上	底部～胴部下位片	底径4.2	粗粒砂・極粗粒砂・ガラス質粒子・褐色粒子／良好／橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラ磨き。	
6	土師器甕	床面の直上及び貯蔵穴底から31cm上	底部～胴部下位片	底径5.4	粗粒砂・角閃石／良好／にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	炭、前半

B区1号竪穴住居(第24図 PL.51)

番号	種類器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	弥生土器小型壺	床面の直上	1/3	(口径11.2)	白色岩片の細粒砂・輝石類・石英／軟質・均質／にぶい褐	内外面とも粗いナデと磨き。器面調整と摩滅がみられる。	
2	弥生土器小型壺か	床面の直上	頸～胴部片		白色岩片の細粒砂・輝石類・石英／普通・黒褐／にぶい褐	外面ハケ目後に横位主体の磨き。内面は頸部が横磨き、胴部ナデ。	
3	弥生土器壺	床面の直上	口縁～胴部片	口径14.9	安山岩片・輝石類・石英の細粒砂／不均質／器面黄褐	口縁は強く反みをもつ折り返しで、無文。頸部は櫛描横帯施文を巡らし、口縁部に4帯、胴部に3帯以上の櫛描波状文を巡らす。内面は全体に横磨き。施文具は6面・11m幅。	櫛式
4	弥生土器壺	床面の直上	胴部		輝石類・石英・軟石の細粒砂／不均質／器面にぶい褐	頸部に3連止め櫛状文(右回り6ヶ)の施文後、頸部上位に3帯以上、胴部に4帯以上の櫛描波状文を巡らす。内面はケズリ～ヘラナデ～粗い磨きで整形・調整。施文具は9面・16m幅の櫛状具目補。	櫛式、下端欠損部がほぼ水平で摩滅することから、横ろ磨きの転用器か

B区2号竪穴住居(第25図 PL.52)

番号	種類器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	弥生土器高坏	床面の直上	口縁～坏部片	(口径22.0)	輝石類・石英・白色岩片・赤色粒子の細粒砂／不均質／にぶい橙	外面は縦位、内面は横位の磨き。	
2	弥生土器壺	埋土	頸部破片		輝石類・石英・白色岩片の細粒砂／軟質・均質／にぶい黄橙	頸部に3連止め櫛状文、頸部に4帯の櫛描波状文を巡らす。内面は横位指ナデ。施文具詳細は不明瞭。	櫛式
3	弥生土器壺か	埋土	頸部破片		安山岩片細粒・輝石類・石英／軟質／黒褐	施文と櫛描波状文を施文していなとおれるが、器面摩滅の度れ著しく、不明瞭。内面磨き か。	櫛式
4	弥生土器壺か	床面の直上	頸部破片		輝石類・石英・白色岩片の細粒砂／普通／黒褐	頸部に3帯以上の櫛描波状文を巡らす。内面は磨きか。施文具は5面・10m幅。	櫛式
5	弥生土器(重)甕	床面の直上	頸部破片		赤色粒の細粒多い／普通・黒褐／器面にぶい橙	3帯以上の櫛描波状文を巡らす。内面は丁寧なナデ。施文具詳細は不明瞭。	櫛式

B区1号遺(第26図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位(位置)	出土位置 残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文時代 深鉢	埋土	口縁部片	口径16.2	緻密・水縞／還元／灰白	ロクロ整形。回転右回りか。施釉方法はハケ塗り。	光ケ丘1号窯式期区、後半 写真なし
2	須恵器 平瓶	埋土	1/3	(口径7.4)	／／白	残存部無文。	近現代
3	瀬戸・美濃陶器 碗	埋土	2/3	(底径4.4)	／／灰白	内面から高台脇炭輪。	江戸時代
4	瀬戸・美濃陶器 鉢	埋土	底部片		／／淡黄	内面から高台脇炭輪。輪に粗い貫入入る。底部内面目痕とカ所。	江戸時代
5	瀬戸・美濃陶器 すり鉢	埋土	口縁部片		／／淡黄	内外面鐵釉。残存部に擦り目ない。口縁端部内面凸帯めくる。	大窯4段階か
6	在地系土器 皿 焙烙	埋土	口縁部片		／／にぶい橙	外面とロ縁部器表黒灰色。器表不揃によると推測される。摩滅著しい。	江戸時代
7	在地系土器 鍋か	埋土	口縁部片か		／／にぶい橙	内面器表赤茶部と黒変部がある。口縁端部内外面擦れと細かい調整多い。折り返し下に凹孔2カ所残存。	近現代か

B区1号遺物集中(第28図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 鉢	遺物包含層	1/3	口径17.2 底径10.7	粗和砂・極粗和砂・角閃石・ガラス質粒子／良好／明赤褐	口縁部以横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部がヘラナデ。	底部中ほどに圧痕あり。6C ～7C
2	土師器 甕	遺物包含層	口縁部～胴部	口径14.4 胴径24.3	粗和砂・極粗和砂・ガラス質粒子／良好／にぶい黄橙	内面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部は一部器面摩滅。	外面胴部は一部器面摩滅。
3	土師器 甕	遺物包含層	口縁部～胴部	口径20.0	粗和砂・極粗和砂・角閃石／良好／にぶい黄橙	口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はハケ目が残るが、器面摩滅で不明瞭。	
4	土師器 鉢	遺物包含層	底部～体部下位	底径4.4	粗和砂・極粗和砂・ガラス質粒子／良好／にぶい黄橙	底部から体部は手持ちヘラ削り。内面は2段の頂敷状痕文。	
5	土師器 土製品	遺物包含層	底部～胴部	底径7.3	粗和砂・雲母／良好／にぶい黄橙	底部はヘラ削り。胴部はヘラ削り後ヘラ磨き。内面はヘボ。	ラ磨き。

B区1号埋土器(第29図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢		胴部破片		粗和砂・細礫・結晶片岩片／良好／明赤褐	胴中位の部位、径13/4ほど周回しない。粗を横位施文する。	諸磯ａ式

C区1号壁穴住居(第32図 PL.53)

番号	種類 器種	出土層位(位置)	出土位置 残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部下位	口径15.3 胴径22.3	粗和砂・極粗和砂・ガラス質粒子・凝灰／良好／にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り(ヘラナデに近い)。内面は胴部がヘラナデ。	
2	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部下位	口径17.0 胴径22.4	粗和砂・極粗和砂・ガラス質粒子・凝灰／良好／褐灰	口縁部は横ナデ、指頭痕が残る。胴部は平、胴部は磨行後下半にヘラ削り。内面は口縁部から胴部に磨行。胴部はヘラナデと磨行。	
3	土師器 甕	床面の直上及び覆穴底から36cm上	胴部1/5	口径17.0 胴径27.1 底径6.7 胴径24.6	粗和砂・極粗和砂・凝灰／良好／褐灰	口縁部から胴部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。胴部は、後半～6C、前半の一部にヘラ磨き。内面は底部から胴部にヘラナデ。	ラ磨き。

C区1号壁穴住居(第32図 PL.53)

番号	種類 器種	出土層位(位置)	石材	計測値	形態・素材	製作・使用状態	摘要
4	石器 有茎尖頭器	床面	黒色頁岩	長さ7.4 幅1.8 厚さ0.2	柳刃形	基部の茎状突起は未発達。先端は鋭角から破損。風化が激しく、調整面構成は不明瞭。	遺物は壁穴住居埋土への混入遺物である。

C区2号遺(第34図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	在地系土器 片口鉢	埋土	口縁部片		／／灰	内面櫛状目痕。口縁部内周突端に立ち上がり、端部丸みを帯びる。体部内面中位使用により平滑となる。	中世

C区3号遺(第33図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 鉢	底面の直上	坏身底部～高坏		粗和砂・ガラス質粒子／良好／にぶい黄橙	脚部は貼付。坏身底部から脚部はヘラ削り。内面は坏身底部からヘラナデ。脚部はナデ。	坏身底部、後半～6C、前半

C区4号土坑(第35図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	在地系土器 鍋か	底面から15cm上	1/4	(底径14.0)	緻密な結晶片岩片／／灰黄	内面撫で。体部外面撫で。体部外面下端面所り。体部外面下位から底部外面器表調整面所多い。胎土中に微細な結晶片岩片ア多く含む。	中世

D区1号壁穴住居(第37図 PL.53)

番号	種類 器種	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 鉢	床面から10cm上	口縁部～底部片	口径12.4 幅13.4	粗和砂／良好／にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(検下)から底部は手持ちヘラ削り。	
2	土師器 鉢	床面から6cm上	1/3	口径11.6 器高7.6	粗和砂・ガラス質粒子／良好／にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から右部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部下半にヘラ磨き。	
3	土師器 鉢(ロ)	床面から15cm上	口縁部～体部上位片		粗和砂・粗砂粒／良好／にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部は横目、内面は口縁部横位、体部ヘラ状なし斜めの擦目。	写真なし
4	土師器 甕	床面から15cm上	胴部下位片		粗和砂／良好／にぶい赤褐	外面は縦位のハケ目、内面は斜めから横位のハケ目。	写真なし
5	土師器 甕	床面から12cm上	2/3	口径13.4 器高15.6 底径5.0	粗和砂・極粗和砂・角閃石／良好／にぶい橙	口縁部から胴部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部はヘラナデ。	底部平底は相円形状を呈す。6C、前半

DK2号壁穴住居(第39図 PL.53)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
1	図版						
1	土師器	床面から7cm上	床部～底	口径13.6	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部補ナデ、体部ナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面に、後半	
	坏		部片			は底部から体部に昇曲材状ヘラ磨き。	写真なし
2	土師器	床面の直上	3/4	口径11.7	器高5.2	粗粒砂・極粗粒砂・凝灰・褐色粒子/良好/赤橙	口縁部は補ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
	坏			糟径4.4			内面は放射状ヘラ磨き(加文痕)。
3	土師器	床面の直上	1/3	口径13.6	器高4.8	粗粒砂・極粗粒砂・褐色粒子/良好/赤橙	口縁部補ナデ、体部から底部はヘラ磨き。内面は底部から体部のヘラナデ。
4	土師器	床面の直上	床部～底	口径13.8	粗粒砂・極粗粒砂・ガラス質粒子・白色粒子/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削りか、指	写真なし
	坏		部片			面整減のため単位不明。	
5	土師器	床面の直上	口縁部～体	口径13.8	粗粒砂/良好/浅黄橙	内外面とも本造摩彩。口縁部補ナデ、体部ヘラ削りか。	写真なし
	坏		部片			彩色で詳細不明。	
6	土師器	床面の直上	ほぼ完形	口径12.2	器高8.2	粗粒砂/良好/灰褐	口縁部は横ナデ、体部上位はナデ、中位はヘラ削り、下
	坏						位はヘラ磨き。底部はヘラ削り。内面は底部から体部はヘラナデ。
7	土師器	床面から25cm上	底部～体部	底径4.3	粗粒砂/良好/にぶい橙	底部と体部の底部周囲は手持ちヘラ削り。体部はヘラ磨	写真なし
	鉢		下位			き。内面はヘラ磨き。	
8	須恵器	床面の直上	胴部片		粗粒砂・角閃石・ガラス質粒子/良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。外面はヘラ削り後上半にナデ。内面はヘラナデ。	写真なし
	壺						
9	須恵器	床面の直上	口縁部片	口径10.0	粗粒砂/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。口縁部に1段の波状文が認	写真なし
	ハソウ					る。	
10	須恵器	埋土	口縁部片		粗粒砂/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。口縁部に2段の波状文が認	写真なし
	ハソウ					る。	
11	土師器	床面の直上	口縁部～胴	口径11.2	粗粒砂・ガラス質粒子/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後上位から中位にナデ、底部周辺はヘラ磨き。内面胴部はヘラナデ。	
	甕		部中位片				
12	土師器	床面の直上	口縁部～胴	口径17.6	胴径27.3	粗粒砂・極粗粒砂・角閃石・ガラス質粒子/良好/褐灰	口縁部は横ナデ、胴部は上位ナデ、中位がヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
	甕		部中位片				
13	土師器	埋土	口縁部片	口径21.0	粗粒砂・褐色粒子/良好/にぶい黄橙	口縁部は内外面とも横ナデ。外面中位に段を巡う。	
	壺						
14	土師器	床面から10cm上	底部～胴部	底径7.0	粗粒砂・極粗粒砂・ガラス質粒子/良好/赤褐	底部から胴部はヘラ削り。内面はハケ目、器面摩滅や剥離で不明瞭。	2号壁穴住居は1土師器坏(内斜口縁部)を除けば、前半

DK1号溝(第40図 PL.54)

番号	種類	出土層位(位置)	石材	計測値	形態・素材	製作・使用状態	描要
1	図版						
1	石器	埋土	ホルンフェルス	長さ10.9 幅5.0 重さ267.7	棒状礫	上下両端の小口部に機能部を有する。上端部は敲打による撥撥剥離痕がある。	
	敲石						

遺構外から出土した縄文土器(第41図 PL.54)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
1	縄文土器	1号壁穴住居	口縁部片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・石英・繊維/良好/にぶい橙	口縁肥厚。口唇部に燃料圧痕を3条施し、直下に刺突列を巡らす。地文に0段多条RLを施文。	縄文早期末～中期。B区
	深鉢						
2	縄文土器	表土	口縁部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・石英・繊維/良好/にぶい橙	小波状口縁で、波頂部肥厚。口唇部に燃料圧痕を3条施し、直下に刺突列を巡らす。3a、1と同一個体か。	縄文早期末。C区
	深鉢						
3	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・黒色粒子・繊維/良好/にぶい橙	0段多条RLを縦位施文後ミガキ。	縄文早期末。B区
	深鉢						
4	縄文土器	O-14グリッド	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・繊維/良好/にぶい黄橙	0段多条RLを縦位施文後ミガキ。	縄文早期末。B区
	深鉢	III層					
5	縄文土器	Q-10グリッド	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・石英・繊維/普通/にぶい橙	0段多条LRを横位施文する。	縄期前葉～中葉。B区
	深鉢	III層					
6	縄文土器	III層	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・石英・繊維/普通/にぶい赤褐	0段多条RL、LRを羽状施文する。	縄期前葉～中葉。B区
	深鉢						
7	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・石英・繊維/普通/にぶい赤褐	0段多条RL、LRを羽状施文する。	縄期前葉～中葉。C区
	深鉢						
8	縄文土器	表土	底部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・繊維/普通/にぶい橙	0段多条RL、LRを羽状施文する。	縄期前葉～中葉。B区
	深鉢						
9	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・繊維/普通/浅黄橙	0段多条RL、LRを羽状施文する。	縄期前葉～中葉。C区
	深鉢						
10	縄文土器	表土	底部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・繊維/普通/にぶい橙	推定底径9.0cm。0段多条RL、LRを横位施文する。	縄期前葉～中葉。C区
	深鉢						
11	縄文土器	P-13グリッド	底部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・繊維/普通/にぶい橙	推定底径10.0cm。0段多条LRを横位施文する。	縄期前葉～中葉。B区
	深鉢	III層					
12	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・繊維/良好/にぶい橙	連結爪形文によりモチーフを描く。地文は縦位施文。	縄前式。D区
	深鉢						
13	縄文土器	2号壁穴住居	口縁部破片		粗粒砂・白色粒子・石英/普通/にぶい橙	口縁に突起を付す。平行沈線を横位、弧状に施す。	諸磯a式。B区
	深鉢	埋土					
14	縄文土器	1号壁穴住居	胴部破片		細粒砂・白色粒子・黒色粒子・石英/良好/浅黄橙	平縄状作による平行沈線で米の字状にモチーフを描き、L	諸磯a式。C区
	深鉢	埋土				を充填施文。間隙に円形刺突を施す。	
15	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・石英/普通/明赤褐	縦を横位施文する。	諸磯a式。D区
	深鉢						
16	縄文土器	撹乱	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子/良好/にぶい赤褐	蛇行する条線を垂下させる。	後期前葉。C区
	深鉢						

A区遺構外(第41図 PL.54)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
1	図版						
17	土師器	遺構検出面	1/4	口径12.8	器高3.8	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部補ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。
	坏						写真なし
18	須恵器	遺構検出面	底部～体部	底径9.9	台径8.6	粗粒砂/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は削り出し、底部は輪ヘラ削り。
	坏		下半片				
19	土師器	遺構検出面	口縁部～胴	口径13.8	粗粒砂/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はハケ目、器面摩滅のため	
	小型壺		部上半片			不明瞭。内面胴部は横位のハケ目。	
20	形象埴輪	遺構検出面	一部片		粗粒砂・角閃石・褐色粒子/良好/赤褐	表面全ともハケ目(8本)。	写真なし
	盾か						

A区遺構外(第41図 PL.54)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
21	瀬戸・美濃陶器	表土	底部	底径6.2	／／淡黄	内面施釉。	江戸時代
	不明						
22	肥前陶器	撹乱	1/4	(底径11.6)	／／赤褐	高台外面下半削り。内面白土掛け後漏釉。体部外面に	江戸時代
	皿					高台から体面上半鉄足。	
23	在地系土器	撹乱	破片		／／黒	断面中央から黒色。器表付近灰白色。器表異灰色。魂存	江戸時代
	鉢					部内耳貼り付け痕残。	
	焙烙						

A区遺構外(第41図 PL.54)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
号	器種						
24	在地系土器	撹乱	破片		／にぶい橙	外面器表の凹凸状色。口縁部外面浅み、内面は稜をなして浅む。口縁端部摩耗。	江戸時代

B区遺構外(第41図 PL.54)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
号	器種						
25	土師器 坏	遺構検出面	口縁部～体部片	口径12.6	粗砂砂／良好／明赤褐	口縁部は緩ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削りか。体部は器壁摩耗のため不明。	写真なし
26	須恵器 皿	遺構検出面	1/2	口径13.0 器高2.3 底径6.2	粗砂砂・極粗砂砂・角閃石／灰白	ロクロ整形。回転右回り。底部は回転糸切り。	SC. 前半
27	須恵器 甕	遺構検出面	底部～胴部下位片	底径9.4	粗砂砂・凝灰／還元焼／灰白	底部はヘラナデ。胴部は平行叩きがかすかに残り、部分的ヘラ削り。内面はヘラナデかン、アテ具痕が残る。	写真なし

B区遺構外(第41図 PL.54)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
号	器種						
28	縄文系土器 胴	表土	1/3	(底径3.7)	／灰白	青磁染付。底部内面の2重圏線内にコンニャク印刷による五弁花。	江戸時代
29	瀬戸・美濃系陶器 碗	表土	1/4	(底径3.6)	／白	外面に色の濃い呈抽による染付。	江戸時代末から近代
30	瓦質陶器 鍋	表土	1/6	口径31.8 底径6.5 器高2.4	／灰白	口縁部端くの字反。高台端削り込む。内外面研磨。	江戸時代
31	瀬安窯系 青磁 碗	表土	1/3	(底径4.5)	／灰	底部器壁厚く、高台内無釉。体部外面に蓮弁文を施すが、中世下部のため不明瞭。蘭蓮弁文碗であろう。	中世
32	在地系土器 鉢状	表土	口縁部から底部片		／にぶい黄橙	器表暗灰黄色。割れ口と器表わずかに摩滅。表面が滑らかで水流による摩滅の可能性高い。内面耳上部貼り付け部残る。	写真なし

C区遺構外(第42図 PL.54)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
号	器種						
33	土師器 坏	遺構検出面	口縁部～底部片	口径12.9 幅14.0	粗砂砂／良好／明赤褐	口縁部緩ナデ、体部(縁下)から底部は手持ちヘラ削り。	外面口縁部から体部、内面横に漆塗り。
34	土師器 坏	遺構検出面	口縁部～底部片	口径12.0 幅14.0	粗砂砂・角閃石／良好／橙	口縁部緩ナデ、体部(縁下)から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
35	土師器 坏	遺構検出面	口縁部～体部片	口径8.8	粗砂砂／良好／明赤褐	口縁部緩ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	SC. 前半 写真なし
36	土師器 坏	遺構検出面	口縁部～底部片	口径12.0 幅11.6	粗砂砂／灰褐	内外面とも風化処理。口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラ削り痕さ。	SC. 前半 写真なし
37	土師器 坏	遺構検出面	口縁部～体部片	口径9.8	粗砂砂／良好／橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削りか。器面摩滅のため単位不明。	SC. 前半 写真なし
38	土師器 坏	遺構検出面	口縁部～体部片	口径10.8	粗砂砂／良好／橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。器面摩滅のため単位不明。	SC. 前半 写真なし
39	土師器 坏	遺構検出面	口縁部～体部片	口径13.8	粗砂砂・ガラス質粒子／良好／明赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	SC. 前半
40	土師器 坏蓋か	遺構検出面	3/4	口径14.6 器高4.1	粗砂砂・粗砂砂／良好／にぶい橙	口縁部上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	SC. 前半
41	須恵器 坏蓋か	遺構検出面	摘み片	幅6.2	粗砂砂／還元焼／灰	ロクロ整形。回転右回り。摘み付近は、摘み端部はヘラ削り。	SC. 後半 写真なし
42	須恵器 坏蓋	遺構検出面	口縁部片	口径12.6	粗砂砂／還元焼／灰	ロクロ整形。回転方向不明。天井部ロはどまでは回転ヘラ削り。	SC. 後半 写真なし
43	須恵器 坏	遺構検出面	4/5	口径11.8 器高3.1 底径6.5	粗砂砂／還元焼／灰	ロクロ整形。回転右回り。底部は回転ヘラ削り。	SC. 前半
44	須恵器 坏	遺構検出面	1/6	口径14.0 器高3.8 底径9.6	粗砂砂／還元焼／灰	ロクロ整形。回転右回り。底部から体部端下位は回転ヘラ削り。	SC. 前半 写真なし
45	須恵器 鉢	遺構検出面	底部片	底径15.6 台径13.8	粗砂砂／還元焼／灰白	ロクロ整形。回転方向不明。高台は貼付。底部は回転ヘラナデ。	
46	須恵器 甕	遺構検出面	3/4	口径13.8 器高5.6 底径7.2 台径6.4	粗砂砂／還元焼／灰	ロクロ整形。回転右回り。高台は貼付。底部は回転糸切り。	胴体部に墨書、内面底部に墨付着。SC. 後半
47	須恵器 甕	遺構検出面	底部～胴部下位片	底径12.2 台径12.8	粗砂砂／還元焼／灰	ロクロ整形。回転方向不明。高台は貼付。胴部下位は回転ヘラ削り。	胴部または短頸壺。写真なし
48	灰釉陶器 碗	遺構検出面	底部～体部片	底径7.2 台径7.6	中粒砂以下の砂粒／還元焼／灰白	ロクロ整形。回転右回り。高台は貼付。底部は回転ヘラ削り。胴部に重焼き痕が残る。ヘラ状工具痕。	内面に重焼き痕が残る。SC. 後半
49	土師器 壺	遺構検出面	口縁部～胴部上位片	口径18.3	粗砂砂・極粗砂砂・ガラス質粒子／良好／灰黄	口縁部から胴部は横ナデ。胴部はヘラ磨き。内面胴部はヘラナデ。	
50	土師器 甕	遺構検出面	底部～胴部下位	底径6.0	粗砂砂・極粗砂砂・ガラス質粒子・角閃石／良好／灰黄	底部はヘラ削り。胴部はヘラ削り後ナデ。内面はヘラナデ。	SC.
51	土師器 甕	遺構検出面	口縁部～胴部片	口径20.8	粗砂砂／良好／にぶい黄橙	口縁部から胴部は横ナデ。胴部はヘラナデ。内面胴部はヘラナデ。	SC. 前半
52	須恵器 甕	遺構検出面	口縁部小片		粗砂砂／酸化焼／にぶい橙	口縁部に凹線、その下位に小凸帯。口縁部波状文か巡る。	写真なし
53	須輪 不明	遺構検出面	胴部片		粗砂砂／良好／にぶい黄橙	外面は縦位のハケ目(2cmあたり10本)。内面はヘラナデ。	写真なし

C区遺構外(第42図 PL.55)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
号	器種						
54	縄文系 青磁 碗	H14グリッド	体部片		／灰白	焼成不良で細かい貫入入り、部分的に白濁する。蘭蓮弁文碗。	中世
55	瀬戸・美濃系 陶器 小皿	撹乱	1/4	(口径7.6 底径4.1) 器高2.0	／灰白	口縁部小さく外反し、口縁部外面以下回転箆削り。底部は外面を削り込み、高台状となる。内面から口縁部外面箆磨。	江戸時代
56	瓦質陶器 碗	撹乱	2/3	底径5.4	／浅黄	体部外面回転箆削り。内面から高台端部磨。高台端から江戸時代
57	瀬戸・美濃系 灯口碗	撹乱	片口部片		／灰白	口縁端部内面内側に突き出る。内外面磨。	江戸時代
58	瀬戸・美濃系 皿	撹乱	1/4	(口径6.0)	／白	内面に青色顔料による上絵で「酒」などの文字や絵を描く。	江戸時代末～近現代
59	肥前磁器 碗	撹乱	1/8～1/4	(口径7.0 底径3.0) 器高3.9	／灰白	外面に雅状の染付。器壁厚く、見込の発色悪い。	波佐見系。江戸時代。

C区遺構外(第42図 PL.55)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
59	図版						
60	瀬戸・美濃?磁器 碗	搬乱	1/2	(底径4.0)	／/白	外面に染付。	江戸時代末から近代
61	肥前磁器 小丸碗	搬乱	1/4～1/2	(口径6.7 底径3.4) 器高4.6	／/白	外面に二重格子目。底部内面に不明文様。	江戸時代
62	瀬戸・美濃磁器 小皿	搬乱	1/2	(口径9.4 底径4.8) 器高2.7	／/白	内面に山水文。口縁、底面の色は薄い。	近現代
63	瀬戸・美濃磁器 碗	搬乱	2/3	(底径3.3)	／/白	内外面型紙刷り。	近現代
64	常滑陶器 壺か	搬乱	体部片		／/にぶい黄橙	内面横位撫で、外面縦位撫で。体部下位片であろう。	中世

C区遺構外(第43図 PL.55)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
65	図版						
66	須恵器 壺	遺構検出面	口縁部～胴部上半片	(口径23.1 胴径46.6)	粗粒砂/灰白/灰	口縁部はロクロ整形。小凸帯で2段に区画。上下に波状文、～ 元。文が巡る。胴部は外面が平行叩を後1～2cm間隔で輪。5cmほどの横位のナデ。内面は同心円アテ具痕が残る。	8C、～ 元。

C区遺構外(第43図 PL.55)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
66	佐地系土器	搬乱	口縁部片		／/橙	割れ口と器表摩滅。器高低く厚い。丸底。	近現代
67	佐地系土器	搬乱	口縁部片		／/褐灰	断面明瞭に黒色。器表付近黄褐色。器表褐灰色。内面は横撫目顕著。	江戸時代
68	佐地系土器	搬乱	底部片		／/黒	断面中央黒色。器表付近灰白色。器表褐灰色から暗灰色。江戸時代 底部周縁に補修孔1カ所。
69	佐地系土器	搬乱	1/4	(口径37.1 底径17.8) 器高10.4	／/灰	断面中央灰色。器表付近灰白色。器表黒色。体部薄かに外反して開く。口縁端部平坦で外方に突き出る。体部外面横位撫で痕残る。外面底部から口縁部煤付着。	江戸時代
70	佐地系土器	搬乱	1/5	(口径36.3)	／/灰	断面中央灰色。器表付近灰白色。器表黒色。器壁やや厚く、直線的に開く。口縁端部上面平坦で外方に突き出る。内面調整は丁寧。口縁部横撫で。外面撫で痕やかに残る。	江戸時代
71	佐地系土器	搬乱	口縁部片		／/黒褐	断面黒褐色。器表付近灰白色。器表黒色。口縁端部上面平坦で端部外面に突き出る。体部外面煤付着。	江戸時代
72	佐地系土器	搬乱	口縁部片		／/黒褐	断面黒褐色。器表付近灰白色。内面器表灰色。外面器表褐灰色。口縁端部丸くおさめる。外面煤付着。	江戸時代
73	佐地系土器	搬乱	口縁部片		／/暗灰黄	断面暗灰黄色。器表付近黄灰色。器表灰色。口縁端部水平に近く屈曲する。	江戸時代
74	佐地系土器 片口鉢	搬乱	口縁部片		／/灰黄	器表と割れ口。水煙により摩滅。片口部片。口縁端部丸みを帯び、端部外面突き出る。	中世
75	佐地系土器 片口鉢	k14グリッド	口縁部片		／/灰	還元焼成。片口部片。口縁部内湾し端部丸る。片口部内面指押さえ痕。外面片口部両端指押さえ痕。	中世

D区遺構外(第44図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
76	図版						
77	土錘器 紡	遺構検出面	口縁部～体部片	(口径13.0	粗粒砂・ガラス質粒子/浅紫/にぶい橙	口縁部は横ナデ。口縁部から体部体部上半はナデ。下半反。後半はヘラ削り。内面は放射状ヘラ磨き。	写真なし

D区遺構外(第44図 PL.56)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
77	常滑陶器	表土	口縁部片		／/褐灰	口縁部"N"字状。断面内面黒色物付着。	中世

遺構外石器(第44図 PL.56)

番号	種類	出土層位(位置)	石材	計測値	形態・素材	製作・使用状態	備考
78	石器 石棒	遺物包含層	黒色頁岩	長6.4 幅4.2 厚1.2 重77.6	楕円礫	上面の礫面を打面に打点を振り、幅広剥片を剥離。	
79	石器 凹石	遺物包含層	粗粒輝石安山岩	長9.2 幅6.6 厚3.7 重337.4	偏平楕円礫	表裏面とも摩耗。集合打痕が長軸上に連続する。	
80	石器 刃製石斧	遺物包含層	黒色頁岩	長15.3 幅7.3 厚3.2 重490.2	短冊型	未製品。加工は粗く、剥離面は鈍角。	
81	石器 刃製石斧	遺物包含層	黒色頁岩	長9.9 幅4.9 厚2.0 重120.0	短冊型	完成状態。左辺および右辺断表裏面、鋭角部付近が摩耗。右辺のエッジは丸くなっ。を受け、剥離。	
82	石器 刃製石斧	遺物包含層	黒色頁岩	長9.9 幅5.7 厚3.0 重59.5	短冊型	完成状態。背面側平坦面の摩耗が著しい。刃部のにはやや刃部が開き気味で、最終的刃部側が磨耗したものと推。また、磨耗側摩耗は刃部の刃部をが残。	
83	石器 石鏃	遺物包含層	チャート	長1.5 幅1.3 厚0.5 重0.5	平基無茎鏃	完成状態。先端部欠損する。	
84	石器 凹石	遺物包含層	粗粒輝石安山岩	長11.5 幅9.2 厚1.0 重381.8	偏平楕円礫	表裏面にロート状の凹部・集合打痕。側縁を最打使用、機がが残る。	
85	石器 凹石	遺物包含層	粗粒輝石安山岩	長8.8 幅7.2 厚1.0 重361.9	偏平楕円礫	表裏面とも摩耗。ロート状の凹部2を有する。側縁最打痕が著しい。	
86	石器 磨石	遺物包含層	粗粒輝石安山岩	長9.6 幅5.4 厚1.0 重360.1	偏平楕円礫	表裏面とも摩耗。摩耗度は弱い。	
87	石器 刃製石斧	表土	黒色頁岩	長9.9 幅5.4 厚3.2 重165.6	短冊型?	未製品。剥離は粗く、粗削段階のそれである。最終刃には下端側面撫でされて形状を造し、製作を放棄。	
88	石器 側面?	表土	黒色頁岩	長8.7 幅5.4 厚2.8 重78.4	幅広剥片	完成状態。内側面にはた冷特有の剥離状剥離と異なる通常剥離。刃部は弧状を呈し、加工量は少ない。	
89	石器 石匙	表土	黒色頁岩	長3.4 幅(2.2) 厚3.4 重33.4	幅広剥片?	幅広剥片の打面側に縦方部を作出、頭部加工を施し、石器形状を整える。器体中央付近で裏面整から破損。	
90	石器 磨石	遺物包含層	粗粒輝石安山岩	長12.8 幅10.0 厚10.2 重905.3	偏平楕円礫	表裏面とも摩耗。上端側小凸部に打痕あり。	

A区2号壁穴住居(第49図 PL.57)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	粘土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器	埋土	2/5	口径11.8 器高4.7	粗粒砂/良好/橙	口縁部横ナデ、体部横ヘラ削り。底部は平持ちヘラ削り。	KC、前平代
2	土師器	埋土	口縁部～体部片	口径19.6	粗粒砂/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部は平持ちヘラ削り。	写真なし

A区3号壁穴住居(第49図 PL.57)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	粘土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器	埋土	口縁部～体部片	口径12.4	粗粒砂/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は平持ちヘラ削り。	写真なし
2	土師器	床面から20cm上	口縁部～体部片	口径14.5	粗粒砂/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は平持ちヘラ削り。	写真なし
3	土師器	埋土	口縁部～体部片	口径13.8	粗粒砂/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は平持ちヘラ削り。	写真なし
4	土師器	床面の直上	1/4	口径12.8 器高2.5	粗粒砂/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は平持ちヘラ削り。	
5	土師器	埋土	1/4	口径12.8 器高2.8	粗粒砂/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は平持ちヘラ削り。	
6	土師器	床面の直上	3/4	口径13.1 器高3.8	粗粒砂/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、底部は平持ちヘラ削り。	KC、後平
7	土師器	床面の直上	2/5	口径14.2 器高3.8	粗粒砂/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は平持ちヘラ削り。	
8	須恵器	埋土	天井部～口縁部片	口径15.2	粗粒砂・褐色粒子/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。天井部は両辺まで回転ヘラ削り。	I 写真なし
9	須恵器	埋土	底部片	底径10.0	粗粒砂/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部はヘラ起し、体部最下位は回転ヘラ削り。	KC、前平 写真なし
10	土師器	埋土	口縁部～胴部上位片	口径19.4	粗粒砂/良好/赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部は3号壁穴住居に、III 写真なし	

A区5号壁穴住居(第53 PL.57)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	粘土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器	埋土	口縁部～体部片	口径11.8	粗粒砂・褐色粒子/良好/橙	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は平持ちヘラ削り。	KC、後平
2	土師器	埋土	口縁部～体部片	口径12.0	粗粒砂/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、口縁部から体部は平持ちヘラ削り。	写真なし
3	土師器	床面から43cm上	口縁部～底部片	口径13.0	粗粒砂/良好/橙	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は平持ちヘラ削り。	
4	土師器	床面の直上	完形	口径14.0 器高4.3	粗粒砂/良好/橙	口縁部は横ナデ、口縁部から体部上半はナデ、下半から底部は平持ちヘラ削り。	
5	須恵器	埋土	7/8	口径9.5 器高3.7 底径7.5	粗粒砂・中粒砂以下/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は平持ちヘラ削り。	FC、IC、後平
6	須恵器	埋土	底部～体部最下位片	底径9.0	粗粒砂/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は平持ちヘラ削り。	写真なし
7	須恵器	埋土	1/4	口径14.4 器高3.5 底径10.0	粗粒砂/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は削り出し。底部はヘラ切り。IV～VC、I ナデ。	
8	須恵器	埋土	胴部片	胴径18.2	粗粒砂・白色粒子/還元焔/灰	ロクロ整形、回転方向不明。胴部下位は手持ちヘラ削り。胴部上位は平行に沓脱が巡る。	写真なし
9	土師器	埋土	口縁部～胴部上位片	口径12.9	粗粒砂・ガラス質粒子/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、口縁部から、頸部・胴部はヘラ削り。内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はヘラナデ。	
10	土師器	床面から10cm上	1/3	口径6.2 器高35.0 底径8.6	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
11	土師器	床面から5cm上	口縁部～胴部下位片	口径21.0	粗粒砂・褐色粒子/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部にはヘラナデ。	胴部中位に沓脱痕跡が密あり。

A区5号壁穴住居(第54図 PL.58)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	粘土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
12	土師器	床面から12cm上	口縁～胴上半1/2欠	口径22.8 器高43.8 底径4.8	粗粒砂・雲母粒子/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	写真なし
13	土師器	埋土	胴部片		粗粒砂/還元焔/灰	外面は平行叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。外面に隙間が著く付着。	写真なし
14	須恵器	埋土	胴部片		粗粒砂・雲母粒子・角閃石/還元焔/灰	外面は平行叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	須恵器(杯又は甕)は小型、12土師器甕の削りが縦方向だけであるなどの点から5C、後半代の様相が強いが、11土師器甕の胴部上位削り方横方向である点を見るとIC、IV～VC、Iとみられる。写真なし

A区5号壁穴住居(第54図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	粘土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
15	弥生土器	埋土	胴部片		粗粒砂/良好/浅黄橙	胴部は外面に2段の波状文(7～8本)が巡る。内面はヘラ磨明代の住居から出土した混入遺物である。写真なし	古墳時代の住居から出土した混入遺物である。写真なし
16	弥生土器	埋土	胴部片		粗粒砂/良好/浅黄橙	胴部は外面に3段以上の波状文(不明)が巡る。内面はヘラナデ。	写真なし
17	弥生土器	埋土	胴部片		粗粒砂/良好/浅黄橙	胴部は外面に3段以上の波状文(5～6本)が巡る。内面はヘラナデ。	写真なし
18	弥生土器	埋土	胴部片		粗粒砂/良好/浅黄橙	胴部は外面に3段以上の波状文(7本)が巡る。内面はヘラナデ。	写真なし
19	弥生土器	埋土	胴部片		粗粒砂/良好/浅黄橙	胴部は外面に3段以上の波状文(7本)が巡る。内面はヘラナデ。	写真なし
20	弥生土器	埋土	胴部片		粗粒砂/良好/浅黄橙	胴部外面に波状文が巡る。詳細不明。内面はヘラナデ。	写真なし

A区6号壁穴住居(第57図 PL.58)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	粘土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器	埋土	口縁部～体部片	口径13.0	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は平持ちヘラ削り。	
2	土師器	埋土	1/2	口径13.8	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は平持ちヘラ削り。	
3	須恵器	埋土	1/4	口径13.8 器高5.7 底径9.2	粗粒砂/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部から体部最下位は回転ヘラ削り。	
4	須恵器	埋土	1/6	口径14.6 器高5.8 底径10.8	粗粒砂/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り。	

A区6号壁穴住居(第57図 Pl.58)

番号 種類 図版	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
5 須恵器 坏	理土	底部片	底径9.8	粗粒砂/還元臭/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り。	写真なし
6 須恵器 坏	理土	底部片	底径11.0	粗粒砂/還元臭/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ起し後ヘラ削り。	写真なし
7 須恵器 高盤	理土	底部片		粗粒砂・極粗粒砂・角閃石/還元臭/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	写真なし
8 土師器 甕	理土	口縁部～胴部片	口径17.0	粗粒砂/良好/赤褐	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	図、Ⅱ 写真なし

A区7号壁穴住居(第60図 Pl.58)

番号 種類 図版	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
1 土師器 坏	理土	口縁部～体部片	口径12.9 稜11.6	粗粒砂/やや軟質/赤褐	口縁部横ナデ、体部横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
2 土師器 坏	覆土	離脱用面下 削り方10cm上	1/4	口径13.8	粗粒砂・角閃石/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
3 土師器 坏	床面から7cm上	3/4	口径14.2 器高3.9	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
4 土師器 坏	床面の直上及び離脱り方から11cm上	3/4	口径14.7 器高4.4	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
5 土師器 坏	床面の直上及び離脱り方から6cm上	1/2	口径17.5 器高6.1	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
6 須恵器 坏	理土	口縁部～底部片	口径12.6 器高3.4 底径10.0	粗粒砂/還元臭/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	写真なし
7 土師器 甕	床面の直上及び離脱り方から6cm上	口縁部～胴部片	口径21.0	粗粒砂/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
8 土師器 甕	理土	口縁部～胴部片	口径22.3	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
9 土師器 甕	床面の直上	胴部下半片		粗粒砂多/良好/にぶい橙	胴部は外面がヘラ削り、内面がヘラナデ。	写真なし
10 土師器 甕	床面の直上	底部～胴部下位片	底径6.0	粗粒砂/良好/橙	底部と体部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	図、Ⅰ 写真なし

A区7号壁穴住居(第60図 Pl.58)

番号 種類 図版	出土層位(位置)	石材	計測値	形態・素材	製作・使用状態	描要
11 石製品 紡石	床面の直上	細粒輝石安山岩	長さ16.2 幅6.9 重さ881.1	礫或石	表裏面とも光沢面あり。特に、背面側の光沢面は広く、擦条痕を伴う。上端小孔に打痕あり。	
12 石製品 紡石	床面の直上	粗粒輝石安山岩	長さ17.2 幅6.6 重さ812.4	礫或石	背面側・右側面に弱い光沢面が生じている。	

A区8号壁穴住居(第63図 Pl.59)

番号 種類 図版	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
1 土師器 坏	理土	口縁部～体部片	口径10.7 稜12.0	粗粒砂/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	写真なし
2 土師器 坏	理土	1/3	口径11.7 器高4.0 稜10.6	粗粒砂・褐色粒子/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
3 土師器 坏	床面の直上	3/4	口径12.0 器高4.0 稜11.0	粗粒砂・褐色粒子/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部坏
4 土師器 坏	床面の直上	3/4	口径12.3 器高4.2 稜11.8	粗粒砂/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。外面口押部に1条の凹線が巡る。	有段口縁部坏
5 土師器 坏	床面の直上	3/4	口径13.4 器高4.3 稜11.6	粗粒砂/良好・焼/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部坏
6 土師器 大型坏	理土	口縁部～体部片	口径22.4 稜21.6	粗粒砂/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	写真なし
7 土師器 小型甕	理土	口縁部～胴部片	口径17.5	粗粒砂/良好・外面焼/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
8 土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部片	口径23.8	粗粒砂/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
9 土師器 甕	理土	底部～胴部下位片	底径3.4	粗粒砂/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	8号壁穴住居は完、前半
10 土師器 甕	理土	底部～胴部下位片	底径7.4	粗粒砂・白色粒子/良好/橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	写真なし

A区9号壁穴住居(第67図 Pl.59)

番号 種類 図版	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
1 土師器 坏	理土	口縁部～体部片	口径13.4 稜14.0	粗粒砂/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	写真なし
2 土師器 坏	理土	1/5	口径11.6 器高3.9 稜9.7	粗粒砂/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
3 土師器 坏	理土	1/4	口径11.8 器高3.9 稜10.6	粗粒砂/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
4 土師器 坏	床面の直上	3/4	口径12.1 器高4.3 稜10.9	粗粒砂・褐色粒子/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
5 土師器 坏	床面から9cm上	口縁部～底部片	底径(10.4)	粗粒砂/良好・焼/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、底部(稜下)は手持ちヘラ削り。	有段口縁部坏 写真なし
6 土師器 小型甕	理土	口縁部～胴部片	口径8.8	粗粒砂/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	外面胴部に煤が付着。 写真なし
7 土師器 甕	理土	口縁部～胴部片	口径14.4	中粗砂以下砂粒/良好/にぶい黄橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、内面は口縁部からハケ目、胴部はヘラナデ。	
8 土師器 甕	床面から6cm上	口縁部～胴部下位片	口径15.8	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部は丸、後半ヘラナデか。	
9 土師器 甕	理土	底部～胴部下位片	底径7.8	粗粒砂・褐色粒子・角閃石/良好/にぶい黄橙	底部はヘラ削り。胴部はヘラ削り後ナデか。内面はヘラナデ。	写真なし
10 須恵器 甕	理土	胴部片		粗粒砂・極粗粒砂・角閃石/還元臭/灰	外面は平行叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	写真なし

A区9号壁穴住居(第67図 Pl.59)

番号 種類 図版	出土層位(位置)	石材	計測値	形態・素材	製作・使用状態	描要
11 石製品 紡石	床面の直上	粗粒輝石安山岩	長さ13.2 幅7.5 重さ902.8	礫或石	背面側上端側に斜位の粗い刃なしキズ様の線条痕。	

A区9号壁穴住居(第67図 PL.59)

番号	種類	出土層位(位置)	石材	計測値	形態・素材	製作・使用状態	備考
10	器種	本面の直上	石英閃緑岩	長さ15.2　幅6.5 重さ908.8	礫成石	表裏面に刃なしし様の線条痕を伴う光沢面がある。石側面にも弱い光沢面が生じている。	表面に線状の線条痕が生じている。
11	石製品 紡石	本面の直上	粗粒輝石安山岩	長さ14.9　幅6.9 重さ521.8	礫成石	作業側に粗い線条痕を伴う研磨痕。右側縁は表裏面を粗く加工。これにより生じた被部を使用。	作業側に粗い線条痕を伴う研磨痕。右側縁は表裏面を粗く加工。これにより生じた被部を使用。
14	縄文時代 の石器 打製石斧	埋土	黒色頁岩	長さ(8.4)　幅4.7 重さ44.2	短冊形	完成状態。頭部側を欠損後、再加工して使用。	完成状態。頭部側を欠損後、再加工して使用。

A区10号壁穴住居(第67図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
15	土師器 甕	埋土	口縁部～体部片	口径9.0	粗粒砂・ガラス質粒子／良好／にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部ヘラ削り。内面は体部に横位のヘラ磨き。	写真なし
16	土師器 甕	本面の直上	口縁部～胴部上位片	口径20.0	粗粒砂／良好／灰黄	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部にヘラナデ。	1区、後半代か　写真なし

A区11号壁穴住居(第68図 PL.59)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 坏	埋土	1/2	口径12.0　器高3.5	粗粒砂／良好／橙 橙10.4	口縁部横ナデ、体部(縁下)から底部は手持ちヘラ削り。	10号壁穴住居C、前半
2	須恵器 高盤	埋土	脚部片	脚13.6	粗粒砂・角閃石／還元／灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付に依存。	写真なし
3	須恵器 甕	埋土	胴部片	胴径26.0	粗粒砂／還元／灰	胴部の成形は外面平行叩き、内面同心円状アテ具による。整形はロクロ、外面下半には問隔を あけたカキ目。	写真なし
4	土師器 甕	埋土	底部～胴部下位	底径5.2	粗粒砂／良好／にぶい橙	内面に輪積み痕が残る。底部と胴部はヘラ削り後ナデ。内面はヘラナデ。	写真なし

A区1号掘立柱建物ピット9(第71図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
1	須恵器 坏	ピット9埋土	底部片	底径11.0 台径10.5	粗粒砂／還元／灰	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付。底部は回転ヘラ削り。	1号建物C、前半　写真なし

A区1号溝(第81図 PL.59)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 坏	埋土	口縁部～体部片	口径13.8　稜14.6	粗粒砂／良好／にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	内外面とも漆塗りか。6C。
2	須恵器 高盤?	埋土	坏身部底部片		粗粒砂／還元／灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部中心ほどはヘラナデか。	5C、後半　写真なし
3	土師器 鉢か	埋土	底部片		粗粒砂・白色粒子／良好／浅黄橙	体部と底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	?　写真なし

A区1号溝(第81図 PL.59)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
4	瀬戸・美濃陶器 皿	埋土	1/4	(底径6.6)	／／灰白	内面から高台外端近石輪。底部内面目痕1カ所残存。貫入入る。	江戸時代
5	美濃陶器 碗	埋土	1/4	(底径5.0)	／／淡黄	内面から高台輪郭輪。高台端から高台内底化粧。底部内面に薄く釉中央盛灰釉?による現状に白くなる。尾呂系碗であろう。	江戸**時代**　写真なし
6	肥前陶器 鉢	埋土	1/4	(底径10.8)	／／橙	いわゆる三島手。外面下位以下回転箆削り。高台外周下位平面まで削り。内面押印後白土かけ。内面から体部上位外面漆塗痕。体部外面下位から高台外面上平箆足。	江戸時代

A区2号溝(第81図 PL.59)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 高坏	底から12cm上	脚部～坏身底部	脚15.0	粗粒砂・輪郭粒砂・角閃石・ガラス質粒子／良好／橙	坏底部から脚部は粗いハケ目、脚部は横ナデ。内面脚部底はナデ。	6C

A区3号溝(第81図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
1	須恵器 短頸壺	埋土	天井部片		粗粒砂／還元／灰白	ロクロ整形、回転右回り。編みは貼付。天井部は回転ヘラ削り。	口縁部は打ち欠きか。6C、後半～6C、写真なし
2	須恵器 甕	底から12cm上	口縁部片		粗粒砂／還元／灰白	口縁部ロクロ整形。外面は問隔によって区画。区画の上下に波状文が巡る。	江戸時代

A区3号溝(第81図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
3	石製品 紡石	埋土	デイサイト	長さ(10.0)　幅2.3 重さ79.3	手持ち紡石	上下両面を使用。両側縁はブコモリ状の擦痕が残る。	写真なし

A区2号井戸(第83図 PL.59)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
1	瀬戸・美濃陶器 長瀬戸碗	埋土	1/2	口径8.2　底径5.8 器高7.7	／／灰白	全面灰釉施釉後高台端部から高台内周縁の端を拭う。口縁部内面櫛状工具による波状文。体部内面釉縁を面状にかける。底部内面3条の円形沈線を廻らすが、押印文はない。高台内周縁圧平状目痕2カ所残存。	江戸時代

A区1号土坑(第86図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
1	陶器陶器 片口鉢	埋土	体部下位片		／／にぶい赤褐	片口鉢Ⅱ類。体部内面下位使用による器表摩滅し平滑と中央なる。中位は使用により平滑となるが、器表は残る。	中世　写真なし

A区10号土坑(第88図 PL.60)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土／焼成／色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 鉢	埋土	口縁部～体部片	口径11.0	粗粒砂／良好／にぶい赤褐	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、体部はヘラ削り後ヘラ撫き。内面体部は雑な放射状ヘラ撫き。	10号**土坑**　5C、後半～6C、前半　写真なし
2	土師器 高坏	底から10cm上	口縁部～体部片	口径12.4　稜7.8	粗粒砂・輪郭粒砂・褐色粒子／良好／褐灰	口縁部は横ナデ、体部稜下はヘラ削り、内面はヘラナデか。単位不都明。	写真なし
3	土師器 高坏	底から17cm上	坏身	口径18.0	粗粒砂／良好／にぶい黄橙	脚部は貼付、坏身底は口縁部が横ナデ、底部は櫛描き(4本)。内面底部も櫛描き。	

A区10号土坑(第89図 PL.59)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	陶器	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器	底から64cm上	口縁部～体部片	口径14.0	粗粒砂・極粗粒砂・長石/良好/にぶい黄橙	内外面の口縁部に輪積み痕が残る。口唇部は横ナデ、口縁部から体部はハケ目後ナデ、内面は口縁部から体部に横位のハケ目。	写真なし
2	土師器	底から13cm上	胴部	胴径15.0	粗粒砂・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。	写真なし
6	土師器	底から2cm上	底部～胴部下半片	底径7.4	粗粒砂・粗砂粒/良好/にぶい赤褐	外面胴部に輪積み痕が残る。底部ヘラ削り、胴部はヘラ削り後ナデ。内面はヘラナデ。	写真なし

A区11号土坑(第89図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器	埋土	口縁部～体部片	口径11.0	粗粒砂/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部はヘラ削りか。	11号土坑 5C 後半～6C 前半 写真なし
2	土師器	底から46cm上	口縁部片	口径18.0	粗粒砂/良好/にぶい黄橙	外面は赤色塗彩。口縁部横ナデ、体部はハケ目。	写真なし

A区24号土坑(第92図 PL.59)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器	埋土	口縁部～胴部上半片	口径19.0	粗粒砂/良好/赤褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	24号土坑 7C ～8C 前半
2	土師器	埋土	口縁部～胴部上半片	口径21.2	粗粒砂/良好/赤褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
3	土師器	埋土	底部片	底径8.0	粗粒砂/良好/にぶい赤褐	底部と胴部はヘラ削り、単位不明瞭。内面はヘラナデ。	写真なし

A区25号土坑(第92図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器	埋土	1/4	口径11.8	粗粒砂/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	8C 後半 写真なし
2	土師器	底から2cm上	口縁部～底部片	口径12.0	粗粒砂/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	8C 後半 写真なし
3	土師器	埋土	1/3	口径12.8	粗粒砂/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、口縁部はナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	8C 前半 写真なし

A区31号土坑(第94図 PL.60)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	瀬戸・美濃焼系皿	埋土	1/6	(底径8.0)	／／/灰白	内面から高台外面近傍、貫入入る。輪辺断面にやや近く、江戸時代 底部内面の1部に墨状輪の ような白斑輪かかる。	

A区58号土坑(第98図 PL.60)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	須恵器	埋土	1/3	口径14.2 器高5.3	粗粒砂・極粗粒砂・角閃石/還元焼/灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付。底部は回転糸切り。	8C. I

B区調文時代遺物包含層(第103図 PL.60)

番号	種類	出土層位(位置)	石材	計測値	形態・素材	製作・使用状態	備考
1	石器 剥片	遺物包含層	黒色百灰岩	長さ(3.2) 幅5.8 重さ24.1	幅広剥片	打面・右側縁の表裏面に微細剥離を施す。	
2	石器 磨石	遺物包含層	粗粒輝石安山岩	長さ10.2 幅8.6 重さ486.5	偏平楕円礫	表裏面とも摩耗。側縁・小口部の打痕は見られない。	
3	石製品 磨石	遺物包含層	粗粒輝石安山岩	長さ11.5 幅11.0 重さ557.0	偏平円礫	表裏面とも摩耗。表裏面とも被熱してスス付着	
4	石器 使用痕のある剥片	遺物包含層	黒色百灰岩	長さ6.8 幅7.1 重さ56.6	幅広剥片	腹行形状を呈する剥片の端部に不剥離痕が連続する。平坦な剥離面打面より剥離。	
5	礫片 接合資料 2	遺物包含層	雲母石英片岩	重さ320.5		4点の礫片が接合。個々の礫片は打点が不明瞭。剥離面には同心円状リングがあり、意図的剥離とは異なる。	
6	礫片 接合資料 3	遺物包含層	雲母石英片岩	重さ28.0		3点の礫片が接合。折れ面で接合しているが、折り取り意図は不明。個々の剥片は打点が不明瞭。	
7	礫片 接合資料 4	遺物包含層	雲母石英片岩	重さ58.5		3点の礫片が接合。個々の剥片は打点が不明瞭。	
8	礫片 接合資料 5	遺物包含層	雲母石英片岩	重さ40.0		4点の礫片が接合。個々の剥片は打点が不明瞭。	

B区調文時代遺物包含層(第103図 PL.60)

番号	種類	出土層位(位置)	石材	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
9	縄文土器 深鉢	遺物包含層	口縁部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・石英・雲母/普通/明赤褐	紐を横位施文する。	黒浜式。
10	縄文土器 深鉢	遺物包含層	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子・鱗雲/普通/赤褐	紐を横位施文する。	黒浜式。

C区6号溝(第107図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	特徴	備考
1	銭貨 天聖元寶	埋土	完形	表径 25.14 裏径 24.94 厚 1.38～1.86 重さ 2.49	北宋(1023年)初鋳。、銭付着。	中世？ 写真なし

C区7号溝(第108図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	成形・整形の特徴	備考
1	金属器 小セル	埋土	残い口側1/2	長さ (2.1) 幅 0.6×0.4 厚 0.1 重さ (1.2g)	刻型品。残いこ側0.3cm、重ね合わせ箇所が明瞭に残る。刻化が進んでいる。	中世 写真なし
2	金属器 火打ち金	埋土	4/5	長さ 6.38 幅 0.5～1.9 厚 0.2 重さ (14.1g)	武装品。左側上部は四凸が観察されて作りが粗い状態。刻化が進んでいる。	中世 写真なし
3	武器 鐔	埋土	刃部先端欠損	長さ (18.0) 幅 刃部 2.3 柄部 2.2 幅 刃部 0.3 重さ (79.5g)	武装品。柄下部に目釘穴(径0.4cm)がのこるが、裏面は鏡でふさがれている。刻化が進んでいる。	中世 写真なし

C区7号溝(第108図)

種類 図版	出土層位(位置)	残存率	計測値	成形・整形の特徴	備考
4 鉄器 図版	理土	柄1平部片	長さ 6.3 幅 1.7 厚 0.6 重さ (22.2g)	鉄製品、刃部、柄下半を欠損。錆化が進んでいる。	中世 写真なし
5 鉄器 図版	理土	完形か	長さ 3.6 幅 4.1 厚 0.9 重さ 11.0	鉄製品、器厚1.0.1～0.2cm、板状のものを折り曲げてかたち作っている。錆化が著しい。	中世 写真なし

C区7号溝(第108図)

種類 図版	出土層位(位置)	残存率	計測値	特徴	備考
6 鉄器 図版	理土	完形	長径 25.13 重径 25.26 厚 1.05～1.14 重さ 2.83	1文銭、背文。	江戸時代 写真なし

C区1号土坑(第112図 PL.60)

番号	種類 図版	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	在地系土器 図版	底から7cm上	3/4	口径8.0 器高7.1 底径8.0	／／黄橙	口縁端部上面やや凹み。内面に突き出る。器表黄褐色か黒褐色。輪積方向転換明瞭で、内面輪積目残る。口縁部内外面1cmほどのみ横撫で。輪積調整箇所と横撫で箇所で横の線都方向異なる。底部外是方向転用切り無調整であるが無撫で工具による切り離し。	中世以降 写真なし
2	在地系土器 図版	理土	1/4	(口径18.8)	／／灰黄褐	口縁部断面中央部色、断面灰黄褐色、器表黒褐色。輪積方向転換明。口縁部内外面1cmほどは横撫で。口縁端部上面浅く。	中世以降 写真なし

D区1号壁穴住居(第115図 PL.61)

番号	種類 図版	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
1	土師器 図版	理土	口縁部～体部片	口径11.2	粗粒砂／良好／にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
2	土師器 図版	理土	口縁部～体部片	口径12.0	粗粒砂／良好／にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
3	土師器 図版	床面から6cm上	1/4	口径12.3 器高3.4 底径2.2	粗粒砂／良好／明赤褐	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)から底部は手持ちヘラ削り。	
4	土師器 図版	床面の直上	3/4	口径12.1 器高4.4 底径10.8	粗粒砂・白色粒子／良好／橙	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
5	土師器 図版	理土	口縁部～体部片	口径12.8 稜12.4	粗粒砂／良好／明赤褐	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)は手持ちヘラ削り。	写真なし
6	土師器 図版	理土	1/4	口径10.4 稜10.5	粗粒砂／良好／にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)から底部は手持ちヘラ削り。	
7	土師器 図版	理土	口縁部～底部片	口径10.8 稜9.8	粗粒砂／良好／にぶい黄褐	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)から底部は手持ちヘラ削り。	
8	土師器 図版	理土	口縁部～底部片	口径10.7 稜10.4	粗粒砂・粗砂粒／良好／明赤褐	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)から底部は手持ちヘラ削り。	
9	土師器 図版	床面の直上	完形	口径10.7 器高3.3 稜10.2	粗粒砂・ガラス質粒子／良好／褐灰	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)から底部は手持ちヘラ削り。	
10	土師器 図版	理土	口縁部～体部片	口径10.8 稜10.4	粗粒砂／良好／橙	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
11	土師器 図版	床面から6cm上	口縁部～底部片	口径13.8	粗粒砂／良好／橙	口縁部横ナデ、体部(縦ヘラ)から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
12	土師器 図版	貯蔵穴 底面の直上	1/2	口径10.8 器高3.2	粗粒砂／良好／明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
13	土師器 図版	理土	口縁部～体部片	口径12.0	粗粒砂／良好／橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
14	土師器 図版	理土	1/3	口径13.8	粗粒砂／良好／にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
15	土師器 図版	理土	口縁部～体部片	口径11.0	粗粒砂／良好／にぶい橙	口縁部は横ナデ、口縁部から体部は手持ちヘラ削り。	写真なし
16	土師器 図版	床面の直上	口縁部～体部片	口径12.6	粗粒砂／良好／褐灰	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	写真なし
17	土師器 図版	理土	口縁部～底部片	口径12.7	粗粒砂／良好／褐灰	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
18	土師器 図版	理土	口縁部～体部片	口径12.8	粗粒砂／良好／灰黄褐	口縁部は横ナデ、体部は不ナデ。	写真なし
19	土師器 図版	理土	口縁部～体部片	口径8.8	粗粒砂／良好・焼／灰褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	写真なし
20	土師器 小型甕	床面から29cm上	口縁部～底部片	口径12.6	粗粒砂／良好／にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
21	土師器 図版	床面の直上	口縁部～底部片	口径12.8	粗粒砂／良好／にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	写真なし
22	土師器 図版	理土	口縁部～底部片	口径13.7	粗粒砂・輪粗粒砂・ガラス質粒子／良好／にぶい赤褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。	
23	土師器 図版	床面から18cm上	口縁部～底部片	口径15.0	粗粒砂・ガラス質粒子／良好／にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
24	土師器 図版	床面の直上	口縁部～胴部上位片	口径17.6	粗粒砂／良好／にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	1号壁穴住居は床、前半

D区1号壁穴住居(第116図 PL.61)

番号	種類 図版	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
25	土師器 図版	理土	口縁部～胴部上位片	口径20.4	粗粒砂・極粗粒砂・ガラス質粒子／良好／にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
26	土師器 図版	床面の直上	口縁部～胴部上位片	口径20.8	粗粒砂／良好／にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	24・26は断土同種
27	土師器 図版	床面から5cm上	口縁部～胴部上位片	口径20.8	粗粒砂・粗砂粒／良好／橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
28	土師器 図版	床面から10cm上	口縁部～胴部上位片	口径21.0	粗粒砂／良好／橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
29	土師器 図版	床面の直上	口縁部～胴部上位片	口径21.6	粗粒砂多／良好／褐灰	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
30	土師器 図版	床面から25cm上	口縁部～胴部上位片	口径22.0	粗粒砂・粗／良好／にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。器面剥落のためか不鮮明。	写真なし
31	土師器 図版	床面の直上	口縁部～胴部上位片	口径22.0	細多・粗／良好／にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
32	土師器 図版	床面の直上	口縁部～胴部下位	口径19.0	粗粒砂／良好／褐灰	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

D区1号壁穴住居(第116図 PL.61)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
図版							
1	土師器	埋土	口縁部～胴部	口径26.6	粗粒砂/好/にぶい橙	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部は	1号壁穴住居は区、前平 写真なし
図	甕		底上位片			ヘラナデ。	

D区1号壁穴住居(第117図 PL.61)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
図版							
1	土師器	床面の直上	胴部～胴部	底径8.0	粗粒砂/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。胴部は器面剥落のため不明。内面はヘラナデ。	1号壁穴住居は区、前平 写真なし
図	甕		下位片				
35	土師器	床面の直上	底部～胴部	底径8.0	粗粒砂/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。胴部は器面剥落部分が多く不明。内面はヘラナデ。	1号壁穴住居は区、前平 写真なし
図	甕		下位片				

D区2号壁穴住居(第121図 PL.61)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
図版							
1	土師器	床面の直上	口縁部～体部片	口径12.0 器高13.4	粗粒砂・褐色粒子/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。体部器面剥離のため不明。	写真なし
2	土師器	埋土	1/5	口径12.8 器高12.1	粗粒砂/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
3	土師器	埋土	口縁部～底部片	口径13.8 器高13.0	粗粒砂・極粗粒砂・褐色粒子・ガラス質粒子/良好/灰褐	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
4	土師器	床面の直上	口縁部～体部片	口径10.8 器高10.4	粗粒砂/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
5	土師器	床面から6cm上	完形	口径10.8 器高3.6	粗粒砂・ガラス質粒子/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちヘラ削り。	
6	土師器	床面の直上	7/8	口径14.2 器高3.8	粗粒砂・褐色粒子・ガラス質粒子/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
7	土師器	埋土	1/3	口径14.3 器高4.3	粗粒砂・褐色粒子/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
8	土師器	床面の直上	底部～体部	底径5.0	粗粒砂/良好/にぶい橙	底部と体部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。	
9	土師器	貯蔵穴	口縁部～胴部	口径18.7	粗粒砂・極粗粒砂・褐色粒子/良好/浅黄橙	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	写真なし
甕		底から28cm上	底上位片				
10	須恵器	埋土	胴部片		粗粒砂/還元焔/灰白	外面は平行叩き痕が、内面は同心円状アテ具痕が残る。	写真なし
甕							
11	須恵器	埋土	胴部片		粗粒砂/還元焔/灰白	外面はかすかに斜格子状叩き痕が、内面は同心円状アテ具痕が残る。	写真なし
甕							
12	須恵器	埋土	胴部片		粗粒砂・白色粒子/還元焔/灰白	外面は平行叩き痕が、内面は同心円状アテ具痕がかすかに残る。外面は部分的にカキ目か。	写真なし
甕							
13	須恵器	床面から16cm上	胴部片		粗粒砂/還元焔/灰白	外面は平行叩き痕後部分的にカキ目、内面は同心円状アテ具痕が残る。	2号壁穴住居は区、後平～工C、前平代、7土師器F4は区、後平 写真なし
甕							

D区2号壁穴住居(第121図 PL.61)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	形態・素材	製作・使用状態	備考
図版							
14	石製品	床面の直上	滑石	長さ0.9 幅1.4 重さ(1.7)	平1L	上下両面は折断後、研磨。上面の研摩は丁寧だが、下面は研摩は弱い。側面には縦位の粗い整形痕が残る。	写真なし
石製模造品							
15	石製品	床面の直上	滑石	径4.5 高さ2.3 重さ52.6	厚型分形状	孔は両面穿孔。上面側の孔周辺には刀子様刃部による線部形、下面側平坦面には未穿孔の孔(径2.5mm・深さ4.5mm)がある。	写真なし
紡錘車							

D区2号壁穴住居(第121図 PL.61)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	特徴	備考
図版						
16	銭貨	埋土	2/3	径 24.45 厚 1.19～1.42	新寛永、1文銭。	写真なし
現永通貨						

D区2号壁穴状遺構(第122図 PL.60)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	形態・素材	製作・使用状態	備考
図版							
1	石製品	埋土	破片石	長さ(3.8) 幅3.0 重さ19.4	平扁平石	両面使用。上端の折れ面は破損後の摩耗がある。右側面に粗い線条痕。下端部を破損。	写真なし
砥石							

D区2号壁穴状遺構(第122図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	特徴	備考
図版						
2	銭貨	埋土	2/3	表径 23.33 裏径 23.15 厚 0.98～1.24	初鋳銭、845年。背銭、縁出。	中世ア 写真なし
開元通寶						

D区3号溝(第125図 PL.60)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	形態・素材	製作・使用状態	備考
図版							
1	石器	埋土	黒色安山岩	長さ2.4 幅1.7 重さ1.3	円基無茎鏃	完成状態。やや厚い断面形状を呈する。	溝の埋土に混入した縄文時代の石器である。 写真なし
石鏃							

D区5号溝(第129図 PL.60)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	形態・素材	製作・使用状態	備考
図版							
1	石器	埋土	黒色安山岩	長さ(11.9) 幅(4.5) 重さ107.9	短冊型	完成状態。刃部は表裏面とも摩耗。筋線痕は確認できない。上半部欠損。	溝の埋土に混入した縄文時代の石器である。 写真なし
打製石斧							

D区6号溝(第129図 PL.60)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	形態・素材	製作・使用状態	備考
図版							
1	石器	埋土	黒色頁岩	長さ1.9 幅1.4 重さ0.7	円基無茎鏃	未製品?左辺近く部が丸味を持ち、変形。	溝の埋土に混入した縄文時代の石器である。 写真なし
石鏃							

D区43号土坑(第144図)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
図版							
1	銭貨	埋土	一部欠	表径 24.30 裏径 24.85 厚 1.19～1.47	元宋(1004年)初鋳。		中世ア 写真なし
景德元寶							

遺構外から出土した縄文土器(第145図 PL.62)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
図版							
1	縄文土器	49号土坑	胴部破片		粗粒砂/良好/橙	山形押型文を横位施文する。	早期押型文系、A区。
深鉢							
2	縄文土器	3号溝	胴部破片		粗粒砂/良好/赤褐	山形押型文を横位帯状施紋する。	早期押型文系、A区。
深鉢							

小神明富士塚遺跡遺物観察表

遺構外から出土した縄文土器(第145図 PL.62)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
1図版							
3	縄文土器	遺物包含層	胴部破片		粗粒砂・結晶片岩/良好/にぶい黄	口縁押型文を横位密接施文する。	早期押型文系。A区。
図版							
4	縄文土器	5号溝	口縁部破片		粗粒砂・繊維/普通/橙	口段多条結束を施文した、口縁下に斜位の刻みを付した後、横位撚糸を施文する。口四部に刻みを付す。	花積下層式。A区。
図版							
5	縄文土器	遺物包含層	胴部破片			No.6と同一個体。	花積下層式。A区。
図版							
6	縄文土器	遺物包含層	胴部破片		細粒砂・黒色粒子・繊維/普通/明赤褐	口段多条結束を斜位施文する。	花積下層式。A区。
図版							
7	縄文土器	遺物包含層	胴部破片		細粒砂・白色粒子・黒色粒子・石英・繊維/良好/にぶい褐	口段多条結束、LRを羽状施文する。	前期前葉~中葉。A区。
図版							
8	縄文土器	遺物包含層	口縁部破片		細粒砂・白色粒子・繊維/普通/明赤褐	結束LRを横位施文する。	黒浜式。A区。
図版							
9	縄文土器	表土	口縁部破片		粗粒砂・繊維/普通/橙	無節Lrを横位施文する。	黒浜式。D区。
図版							
10	縄文土器	19号土坑	胴部破片		細粒砂・白色粒子・繊維/普通/明赤褐	附加条1種R+L、Lr+Lを羽状施文する。	黒浜式。D区。
図版							
11	縄文土器	遺物包含層	胴部破片		細粒砂・白色粒子・黒色粒子・石英・繊維/普通/	附加条1種R+L、LRを羽状施文する。	黒浜式。C区。
図版							
12	縄文土器	表土	胴部破片			No.9と同一個体。	黒浜式。D区。
図版							
13	縄文土器	遺物包含層	底部破片		細粒砂・石英・繊維/普通/灰黄褐	附加条1種R+L、LR+Rを羽状施文する。	黒浜式。A区。
図版							
14	縄文土器	遺物包含層	胴部破片		細粒砂・黒色粒子/普通/明赤褐	結束を横位施文し、円形刺突を縦位に配す。	諸磯a式。C区。
図版							
15	縄文土器	表土	胴部破片		細粒砂・白色粒子/普通/橙	口縁が緩く外反。口縁下に円孔を配す。	前期後葉。A区。
図版							
16	縄文土器	遺物包含層	口縁部破片		粗粒砂・繊維・白色粒子/良好/にぶい黄橙	くの字状に口縁が内折。横位集合沈線を施す。	諸磯b式。A区。
図版							
17	縄文土器	遺物包含層	口縁部破片		粗粒砂・繊維・黒色粒子・石英/良好/赤褐	波状口縁。口縁に沿って、また斜位に集合沈線を施す。地文に無節Lrを施文。	諸磯b式。A区。
図版							
18	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子/普通/明赤褐	集合沈線による横帯構成。地文に縦位施文。	諸磯b式。B区。
図版							
19	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子/良好/にぶい赤褐	集合沈線による横帯構成。横帯間に弧状の集合沈線を施す。	諸磯b式。A区。
図版							
20	縄文土器	5号溝穴住居跡	胴部破片		粗粒砂・繊維・白色粒子・黒色粒子/良好/明赤褐	集合沈線による横帯構成。地文に反撚LR縦位施文。	諸磯b式。A区。
図版							
21	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子/普通/橙	集合沈線による横帯構成。横帯間に弧状の集合沈線を施す。地文に結束縦位施文。	諸磯b式。A区。
図版							
22	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・繊維・白色粒子・黒色粒子/普通/明赤褐	集合沈線による横帯構成。横帯間に斜位、円状の集合沈線を施す。	諸磯b式。A区。
図版							
23	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・繊維・白色粒子・黒色粒子/普通/明赤褐	集合沈線による横帯構成。	諸磯b式。A区。
図版							
24	縄文土器	8号溝	口縁部破片		粗粒砂・白色粒子/にぶい赤褐	波状口縁。枠状の隆帯を貼付し、装飾を沿わせる。	阿玉台式。C区。
図版							
25	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・繊維・石英・雲母/良好/橙	結節枠状の隆帯を貼付し、さらに垂下させる。枠状文下に刺突列をめぐらす。	阿玉台式。B区。
図版							
26	縄文土器	5号溝	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子/良好/明赤褐	隆直する器形。撚糸文を施し、隆直部に形潰押捺を施す。	加曽利E1式。D区。
図版							
27	縄文土器	遺物包含層	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子/良好/にぶい褐	沿位の沈線を施す。	後期前葉。C区。
図版							
28	縄文土器	表土	胴部破片		粗粒砂・白色粒子・黒色粒子/普通/にぶい褐	沈線によるモチーフ、LRを施す。	後期前葉。D区。
図版							

遺構外から出土した遺物(第145図 PL.62)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
1図版							
29	土師器	遺構検出面	2/5	口径13.7	粗粒砂/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	杯。前半。A区。
図版							

遺構外から出土した遺物(第145図 PL.62)

番号	種類	出土層位(位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	描要
1図版							
30	陶質陶器	1層	胴部片		／/灰	器表付近から器表にぶい赤褐色。押印状の叩き目。	中世。A区。写真なし
図版							
31	電気絶縁陶器	表土	1/8	(底径11.8)	／/灰	高台端部を除き青磁釉やや厚く、体部内外面の厚い箇所では1mm。貫入はない。外面上端はやや外反しており、口縁部が外反するようである。残存部内外面無文。	中世。C区。 写真なし
図版							
32	瀬戸・美濃陶器	遺構検出面	上部欠	底径4.4	／/灰白	灯芯支え下と上端部欠損。内面から胴部外面釉無。胴部外面から胴底部外面無釉。胴底部外面右回転糸切無調整。	江戸時代。C区。
ひょうそう							
図版							
33	瀬戸・美濃陶器	遺構検出面	1/6	(底径10.0)	／/灰白	高台低くやや幅広。内面から高台脇広石釉。粗い貫入入る。	江戸時代。C区。
図版							
34	製作地不詳陶器	遺構検出面	口径完形	口径11.2 器高10.6 底径8.2	／/灰	口縁部外反し、断面形は薄鉢状。高台低くやや幅広。内面から高台脇釉無。胴部外面2方所に釉を掛け流し、黒色を呈する。底部内面円形の目痕4方所。	近現代。C区。
小型壺							
図版							

遺構外から出土した縄文時代の石器(第146図 PL.62)

番号	種類	出土層位(位置)	石材	計測値	形態・素材	製作・使用状態	描要
1図版							
35	石鏃	55号土坑	黒色頁岩	長さ20.0 幅13.3 厚2.1 重1186.7	石鏃？	未製品。やや幅広の装着部に大きく広がる体部を持つ石鏃様のタイプ。加工は粗く、剥離面の縁も断続的。	
剥製石斧							
36	石器	搬乱	黒色頁岩	長さ9.1 幅5.0 厚1.1 重109.4	短冊型	完成状態。刃部断面大きく欠損後、欠損面を再加工。断面は著しく潰れている。側縁は潰き気味。	
剥製石斧							
37	石器	竪穴住居跡	黒色変質頁岩	長さ5.5 幅3.2 厚2.1 重35.1	礫長剥片	石斧加工か剥離面が連続する。打面部は剥離時に潰れている。	
使用痕のある剥片							
図版							
38	石器	搬乱	粗粒輝石安山岩	長さ7.6 幅4.7 厚1.9 重90.2	短冊型	完成状態。表裏面とも刃部摩耗が著しい。主平部欠損。	
剥製石斧							
39	石器	遺物包含層	黒色頁岩	長さ9.5 幅6.6 厚1.3 重113.3	短冊型	完成状態。刃部摩耗・擦痕能が明らか。剥離面横成から為て、刃部西生も確実。やや間を空端の断面形状。	
剥製石斧							
40	石器	遺物包含層	安山岩	長さ(10.6) 幅6.6 厚4.4 重34.1	扁平礫状	両側縁はフラットに研摩。表裏面とも刃部側が変色しているが、その指摘は不明。	
磨製石斧							
41	石器	遺物包含層	チャート	長さ2.4 幅1.8 厚1.3 重2656.2	凹基無茎鏃	完成状態。加工が丁寧な鏃品。基部を深く抉り、比較的長い返し部を作出。	
石鏃							
42	石器	表土	細粒輝石安山岩	長さ20.8 幅14.3 厚10.7 重2656.2	楕円礫	表裏面に礼多数を穿つ。	
多孔石							
43	石器	表土	黒色頁岩	長さ(11.9 幅 5.0 厚1.2 重125.5	短冊型	未製品。剥離面の縁は断断で、摩耗は見られない。刃部側を大きく破損後、裏面側を加工。側面に転用か。	
剥製石斧							
44	石器	表土	黒色頁岩	長さ(6.8) 幅(3.5) 厚1.1 重37.9	短冊型	未製品？剥離面の縁は断断。裏面縁片。	
剥製石斧							

写 真 図 版

1　A区全景(北東)

2　A区全景(北西)

1　A区１号、２号竪穴住居全景(北)

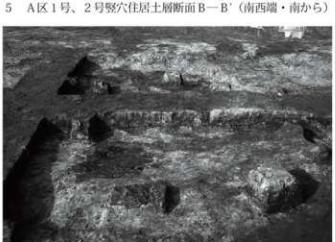
2　A区１号、２号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（南西端・南東から）

3　A区１号、２号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（中央・南東から）

4　A区１号、２号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（北東端・南東から）

5　A区１号、２号竪穴住居土層断面Ｂ―Ｂ'（南西端・南から）

6　A区１号、２号竪穴住居土層断面Ｂ―Ｂ'（中央・南から）



7　A区１号、２号竪穴住居土層断面Ｂ―Ｂ'（北東端・南から）

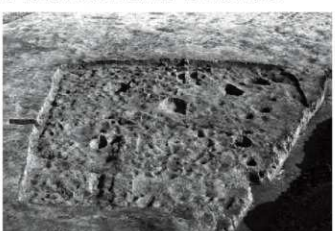
8　A区１号、２号竪穴住居土層断面Ｃ―Ｃ'（東）

1　A区３号竪穴住居全景(西)

2　A区３号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（西端・南から）

3　A区３号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（中央・南から）

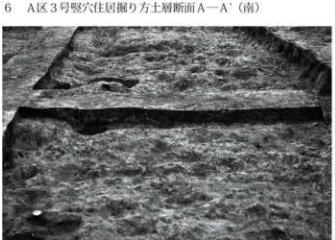
4　A区３号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（東端・南から）



5　A区３号竪穴住居掘り方全景(西)

6　A区３号竪穴住居掘り方土層断面Ａ―Ａ'（南）

7　A区３号竪穴住居掘り方土層断面Ｂ―Ｂ'（南端・東から）



8　A区３号竪穴住居掘り方土層断面Ｂ―Ｂ'（北端・東から）

1　A区３号竪穴住居竈土層断面ａ―ａ′（南）

2　A区３号竪穴住居竈土層断面ｂ―ｂ′（西）

3　A区３号竪穴住居貯蔵穴全景（西）

4　A区３号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状況（西）

5　A区３号竪穴住居内１号土坑土層断面（西）

6　A区３号竪穴住居ピット１土層断面（南）

7　A区３号竪穴住居ピット２土層断面（南）

8　A区３号竪穴住居ピット３土層断面（東）

1　A区３号竪穴住居ピット５土層断面(南)

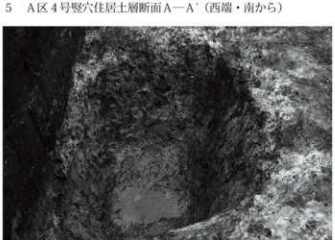
2　A区３号竪穴住居ピット６土層断面(南)

3　A区４号竪穴住居全景(西)

4　A区４号竪穴住居遺物出土状況(西)

5　A区４号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（西端・南から）

6　A区４号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（東端・南から）



7　A区４号竪穴住居貯蔵穴全景(東)

8　A区４号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状況(東)

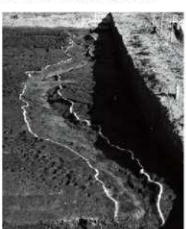
1　A区４号竪穴住居貯蔵穴土層断面(西)

2　A区４号竪穴住居ピット１土層断面(南)

3　A区４号竪穴住居ピット２土層断面(南)

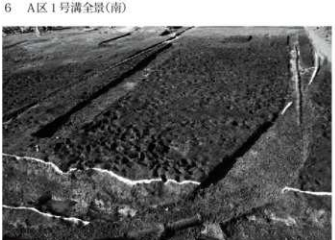
4　A区４号竪穴住居ピット３土層断面(南)

5　A区４号竪穴住居ピット４土層断面(南)



6　A区１号溝全景(南)

7　A区１号溝土層断面A－A'(南)



8　A区As－B軽石下全景(東)

1　A区北東壁断面(南)

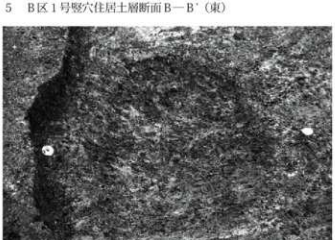
2　B区１号竪穴住居全景(北)

3　B区１号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（西端・南から）

4　B区１号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（東端・南から）

5　B区１号竪穴住居土層断面Ｂ―Ｂ'（東）

6　B区１号竪穴住居１号土坑土層断面(南)Ａs-Ｃテフラの堆積



7　B区１号竪穴住居２号土坑全景(東)

8　B区１号竪穴住居遺物出土状況(弥生土器)

1　B区１号竪穴住居遺物出土状況(南)

2　B区２号竪穴住居遺物出土状況全景(南)

3　B区２号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（西端・南から）

4　B区２号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（東端・南から）

5　B区２号竪穴住居土層断面Ｂ―Ｂ'（南端・東から）

6　B区２号竪穴住居土層断面Ｂ―Ｂ'（北端・東から）

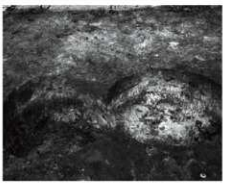
7　B区２号竪穴住居外側南壁の基本土層断面

8　B区２号竪穴住居炭化物検出状況(北)

1　B区１号土坑全景(完掘・北から)

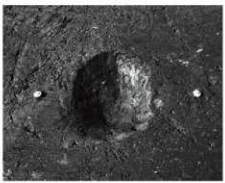
2　B区１号土坑全景(北)

3　B区１号土坑土層断面(南)

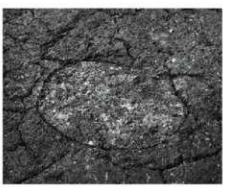


4　B区２号(左)、３号土坑全景(右)(南)

5　B区２号(左)、３号土坑土層断面(右)(南)



6　B区１号焼土坑全景(東)



7　B区１号焼土坑検出状況(北西)

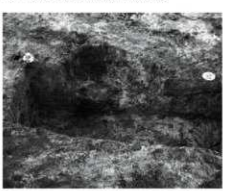
8　B区１号焼土坑土層断面(東)

9　B区２号焼土坑全景(東)

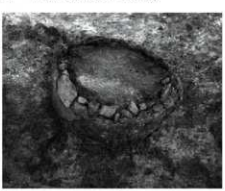
10　B区２号焼土坑検出状況(東)

11　B区１号遺物集中全景(東)

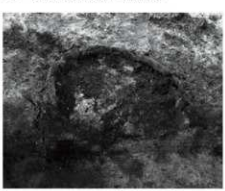
12　B区１号遺物集中全景(北)



13　B区１号埋設土器掘り方断面(南)



14　B区１号埋設土器全景



15　B区１号埋設土器土層断面(南)

1　C区１号竪穴住居全景(西)

2　C区１号竪穴住居遺物出土状況(西)

3　C区１号竪穴住居掘り方全景(西)

4　C区１号竪穴住居掘り方土層断面Ｂ―Ｂ'（南）

5　C区１号竪穴住居竈全景(西)

6　C区１号竪穴住居竈土層断面ａ―ａ'（南）

7　C区１号竪穴住居竈掘り方全景(西)

8　C区１号竪穴住居竈掘り方土層断面ｂ―ｂ'（西）

1　C区１号竪穴住居貯蔵穴全景(南)

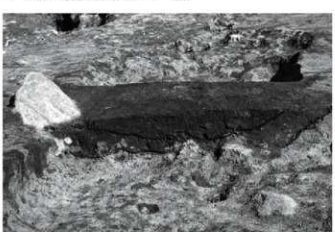
2　C区１号溝全景(北)

3　C区１号溝土層断面Ａ―Ａ'(北)

4　C区２号溝全景(南)

5　C区２号溝土層断面Ａ―Ａ'(南)

6　C区３号溝全景(西)



7　C区３号溝土層断面Ａ―Ａ'(西)

8　C区土坑群全景(南)

1　C区1号土坑全景(東)

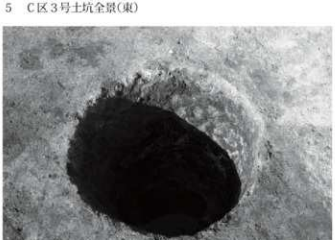
2　C区1号土坑土層断面(南西)

3　C区2号土坑全景(東)

4　C区2号土坑土層断面(南)

5　C区3号土坑全景(東)

6　C区3号土坑土層断面(南)



7　C区4号土坑全景(東)

8　C区4号土坑土層断面(南)

1　C区5号土坑土層断面(東)

2　C区6号土坑全景(東)

3　C区6号土坑土層断面(南)

4　C区南壁土層断面(北)

5　D区全景(東)

6　D区1号竪穴住居全景(西)

7　D区1号竪穴住居土層断面B－B'(北)

1　D区１号竪穴住居掘り方全景(南)

2　D区１号竪穴住居竈土層断面(南)

3　D区１号竪穴住居竈掘り方全景(西)

4　D区１号竪穴住居貯蔵穴土層断面(北)

5　D区２号竪穴住居全景(西)

6　D区２号竪穴住居土層断面Ｂ－Ｂ'(南)

7　D区２号竪穴住居掘り方全景(西)

8　D区２号竪穴住居掘り方土層断面Ａ－Ａ'(西)

1　D区２号竪穴住居貯蔵穴土層断面(南)

2　D区２号竪穴住居ピット１全景(南)

3　D区２号竪穴住居遺物出土状況

4　D区２号竪穴住居遺物出土状況(甕)

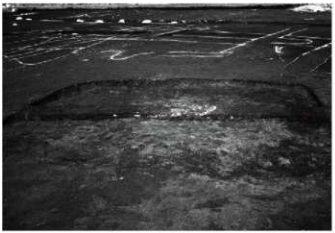
5　D区１号溝全景(南)

6　D区２号溝全景(南)

1　A区全景　地山の巨礫が検出面に露出する。

2　A区全景(東)　手前は12号竪穴住居

1　A区２号竪穴住居全景(南)



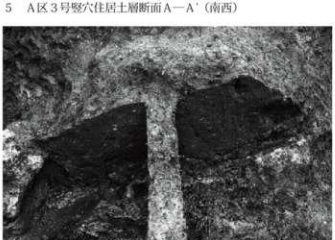
2　A区２号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（南）

3　A区２号竪穴住居掘り方全景(南)

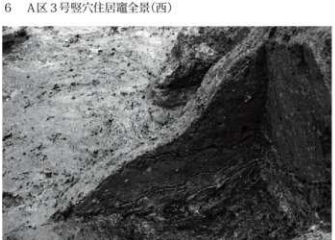
4　A区３号竪穴住居全景(南西)

5　A区３号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（南西）

6　A区３号竪穴住居竈全景(西)



7　A区３号竪穴住居竈土層断面ａ―ａ'（西）



8　A区３号竪穴住居竈土層断面ｂ―ｂ'（南）

1　A区4号竪穴住居全景(南)

2　A区4号竪穴住居土層断面A－A'(南)

3　A区5号竪穴住居全景(西)

4　A区5号竪穴住居土層断面A－A'(南西)

5　A区5号竪穴住居掘り方全景(西)

6　A区5号竪穴住居竈全景(西)

7　A区5号竪穴住居竈土層断面a－a'(西)

8　A区5号竪穴住居竈土層断面b－b'(南)

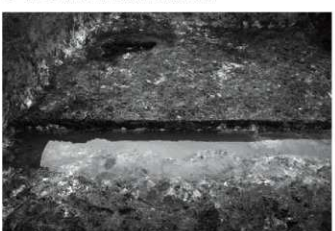
1　A区５号竪穴住居竈掘り方全景(西)

2　A区５号竪穴住居竈掘り方土層断面ａ－ａ'（西）

3　A区５号竪穴住居竈掘り方土層断面ｂ－ｂ'（南）

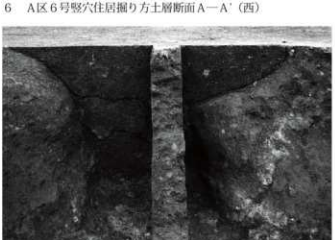
4　A区５号竪穴住居遺物出土状況(南西)

5　A区６号竪穴住居全景(西)



6　A区６号竪穴住居掘り方土層断面Ａ－Ａ'（西）

7　A区６号竪穴住居竈全景(西)



8　A区６号竪穴住居竈土層断面ａ－ａ'（西）

1　A区６号竪穴住居竈掘り方全景(西)

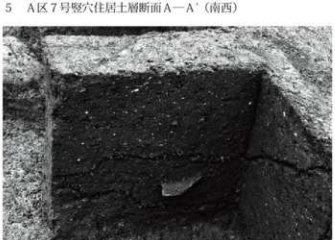
2　A区６号竪穴住居竈掘り方土層断面ａ－ａ'（西）

3　A区６号竪穴住居竈掘り方土層断面ｂ－ｂ'（南西）

4　A区７号竪穴住居全景(南西)

5　A区７号竪穴住居土層断面Ａ－Ａ'（南西）

6　A区７号竪穴住居竈土層断面ａ－ａ'（西）



7　A区７号竪穴住居竈土層断面ｂ－ｂ'（南）

8　A区７号竪穴住居竈掘り方土層断面ａ－ａ'（西）

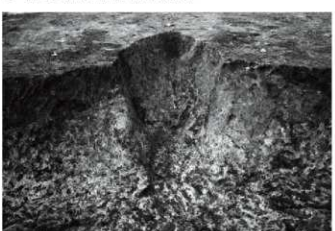
1　A区７号竪穴住居竈掘り方土層断面ｂ－ｂ'（南）

2　A区８号竪穴住居全景(南)

3　A区８号竪穴住居掘り方全景(南)

4　A区８号竪穴住居２号竈全景(南)

5　A区８号竪穴住居２号竈土層断面ｂ－ｂ'（東）



6　A区８号竪穴住居２号竈掘り方全景(南)

7　A区８号竪穴住居２号竈掘り方土層断面ａ－ａ'（南）

8　A区８号竪穴住居２号竈掘り方土層断面ｃ－ｃ'（南）

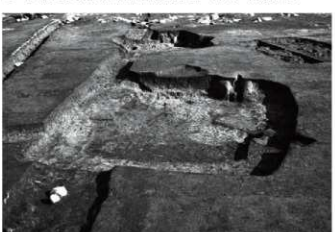
1　A区８号竪穴住居２号貯蔵穴土層断面(南)

2　A区９号、10号竪穴住居全景(西)

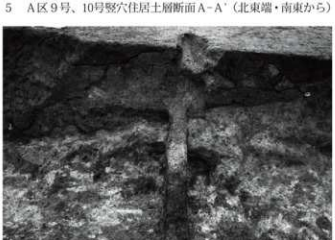
3　A区９号、10号竪穴住居土層断面A-A'（南西端・南東から）

4　９号、10号竪穴住居土層断面A-A'（中央・南東から）

5　A区９号、10号竪穴住居土層断面A-A'（北東端・南東から）



6　A区９号、10号竪穴住居掘り方全景(西)



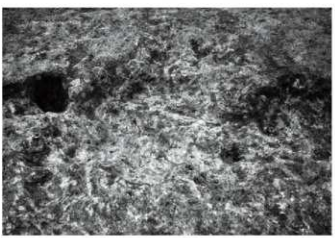
7　A区９号竪穴住居竈土層断面ａ－ａ'（西）

8　A区９号竪穴住居竈土層断面ｂ－ｂ'（南）

1　A区９号竪穴住居竈掘り方全景(西)

2　A区９号竪穴住居竈掘り方土層断面ｂ―ｂ'（南）

3　A区９号竪穴住居貯蔵穴土層断面(西)



4　A区10号竪穴住居竈掘り方全景(南)

5　A区11号竪穴住居全景(西)

6　A区11号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（西）

7　A区11号竪穴住居竈土層断面ａ―ａ'（西）

8　A区11号竪穴住居竈掘り方全景(西)

1　A区11号竪穴住居竈掘り方土層断面a－a'（西）

2　A区11号竪穴住居竈掘り方土層断面b－b'（南）

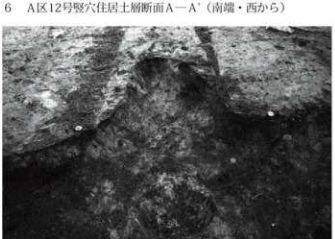
3　A区11号竪穴住居貯蔵穴土層断面(西)

4　A区12号竪穴住居全景(西)

5　A区12号竪穴住居土層断面A－A'（北端・西から）

6　A区12号竪穴住居土層断面A－A'（南端・西から）

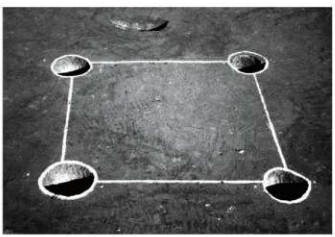
7　A区12号竪穴住居掘り方全景(西)



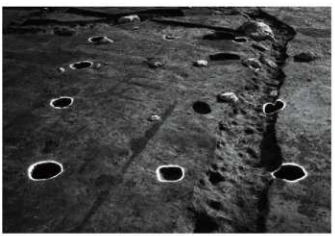
8　A区12号竪穴住居竈全景(西)

1　A区12号竪穴住居跡土層断面 a ― a ′（西）

2　A区１号掘立柱建物全景（東）

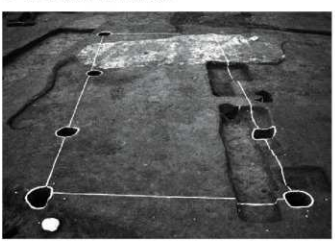


3　A区２号掘立柱建物全景（南）

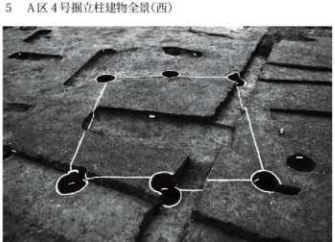


4　A区３号掘立柱建物全景（北）

5　A区４号掘立柱建物全景（西）



6　A区５号掘立柱建物全景（西）

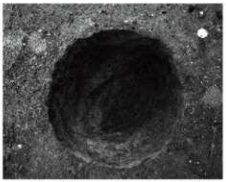


7　A区６号掘立柱建物全景（南）

8　A区７号掘立柱建物全景（南）

1　A区3号掘立柱建物8号柱穴土層断面(南東)

2　A区5号掘立柱建物4号柱穴全景(西)



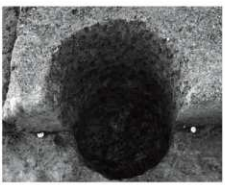
3　A区5号掘立柱建物6号柱穴全景(西)

4　A区5号掘立柱建物6号柱穴土層断面(南)

5　A区5号掘立柱建物7号柱穴全景(南)

6　A区6号掘立柱建物1号柱穴全景(南東)

7　A区6号掘立柱建物2号柱穴全景(南)



8　A区6号掘立柱建物3号柱穴全景(東)

9　A区6号掘立柱建物3号柱穴土層断面(東)

10　A区6号掘立柱建物4号柱穴全景(南東)

11　A区6号掘立柱建物5号柱穴土層断面(南東)

12　A区6号掘立柱建物6号柱穴全景(北西)

13　A区6号掘立柱建物6号柱穴土層断面(南東)

14　A区7号掘立柱建物1号柱穴土層断面(南)

15　A区7号掘立柱建物8号柱穴土層断面(南)

1　A区１号溝底部石敷検出状況(北)

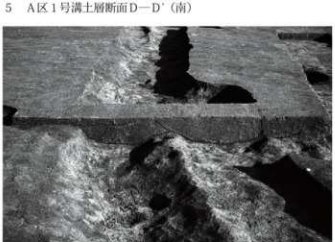
2　A区１号溝全景(北)

3　A区１号溝底部石敷検出状況(北)

4　A区１号溝土層断面Ａ―Ａ'（南）

5　A区１号溝土層断面Ｄ―Ｄ'（南）

6　A区３号溝土層断面Ａ―Ａ'（東）



7　A区３・４・５・８号溝、31号土坑土層断面Ｂ－Ｂ'（西）

8　A区４号溝全景(東)

1　A区４号溝土層断面Ａ―Ａ'（東）

2　A区５号溝全景（北）

3　A区５号溝、５号掘立柱建物４号柱穴土層断面Ａ―Ａ'（南）

4　A区６号溝全景（南）

5　A区６号溝土層断面Ｂ―Ｂ'（南）

6　A区７号溝全景（北）

7　A区７号溝土層断面Ｂ―Ｂ'（南）

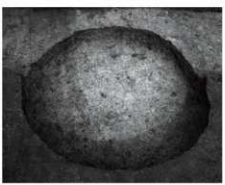
8　A区８号溝土層断面Ｂ―Ｂ'（南）

1　A区１号井戸全景(南)

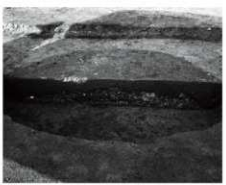
2　A区１号井戸土層断面(南)

3　A区２号井戸全景(北)

4　A区２号井戸土層断面(南)



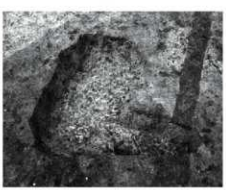
5　A区１号土坑全景(南)



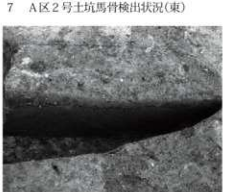
6　A区１号土坑土層断面(南)

7　A区２号土坑馬骨検出状況(東)

8　A区３号土坑土層断面(南)

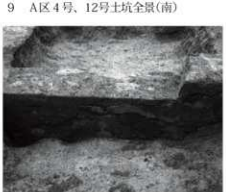


9　A区４号、12号土坑全景(南)



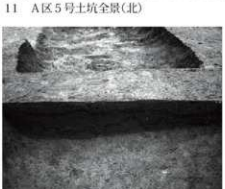
10　A区12号土坑土層断面(南)

11　A区５号土坑全景(北)



12　A区５号土坑土層断面(西)

13　A区６号土坑全景(北)



14　A区６号土坑土層断面(西)

15　A区７号土坑全景(西)

1　A区7号土坑土層断面(南)

2　A区8号土坑全景(南西)

3　A区8号土坑土層断面(南)

4　A区9号土坑全景(西)

5　A区9号土坑土層断面(南)

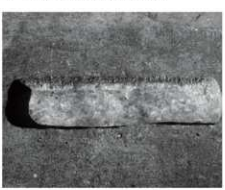
6　A区10号土坑全景(南西)

7　A区11号土坑全景(西)

8　A区11号土坑土層断面(西)

9　A区13号土坑全景(北西)

10　A区13号土坑土層断面(南西)



11　A区14号土坑全景(東)

12　A区14号土坑土層断面(南)

13　A区16号土坑全景(西)

14　A区16号土坑土層断面(西)

15　A区20号土坑全景(南)

1　A区20号土坑土層断面(西)

2　A区21号土坑全景(南)

3　A区21号土坑土層断面(西)

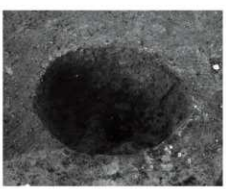
4　A区24号土坑全景(南)

5　A区24号土坑遺物出土状況(西)

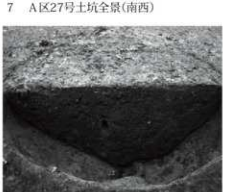
6　A区24号土坑土層断面(南)

7　A区27号土坑全景(南西)

8　A区27号土坑土層断面(南東)



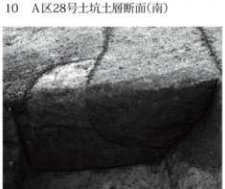
9　A区28号土坑全景(南)



10　A区28号土坑土層断面(南)

11　A区29号土坑全景(東)

12　A区32号土坑全景(東)



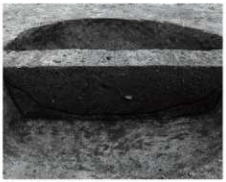
13　A区29号、32号土坑土層断面(東)

14　A区30号土坑全景(東)

15　A区30号土坑土層断面(東)

1　A区31号土坑全景(西)

2　A区33号土坑全景(西)



3　A区33号土坑土層断面(西)

4　A区34号土坑全景(東)

5　A区34号土坑土層断面(南)

6　A区35号土坑全景(北西)

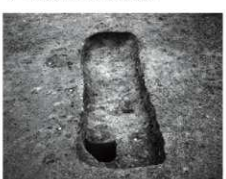
7　A区35号土坑土層断面(南)

8　A区37号土坑全景(東)

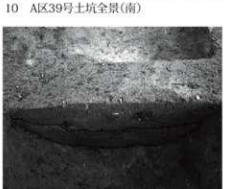
9　A区38号土坑全景(南東)

10　A区39号土坑全景(南)

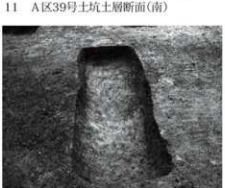
11　A区39号土坑土層断面(南)



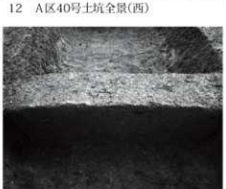
12　A区40号土坑全景(西)



13　A区40号土坑土層断面(西)



14　A区41号土坑全景(北)



15　A区41号土坑土層断面(南)

1　A区42号土坑全景(西)

2　A区42号土坑土層断面(西)

3　A区43号土坑全景(東)

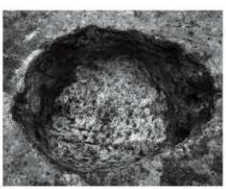
4　A区43号土坑土層断面(西)

5　A区44号土坑全景(東)

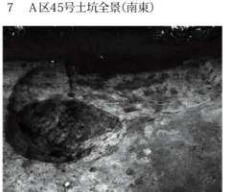
6　A区44号土坑土層断面(西)

7　A区45号土坑全景(南東)

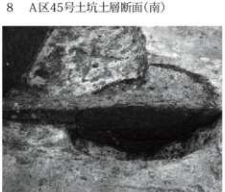
8　A区45号土坑土層断面(南)



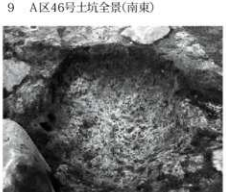
9　A区46号土坑全景(南東)



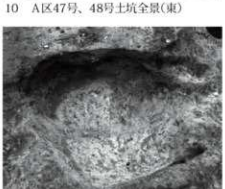
10　A区47号、48号土坑全景(東)



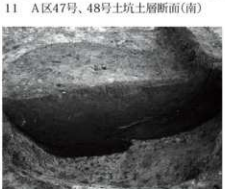
11　A区47号、48号土坑土層断面(南)



12　A区49号土坑全景(東)



13　A区50号土坑全景(西)



14　A区50号土坑土層断面(南)

15　A区51号、52号土坑土層断面(南)

1　A区53号土坑全景(西)

2　A区53号土坑土層断面(西)

3　A区54号土坑全景(南)

4　A区54号土坑土層断面(南)

5　A区55号土坑土層断面(西)

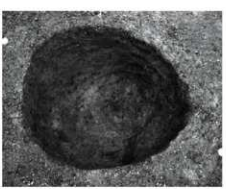
6　A区57号土坑全景(南)

7　A区57号土坑土層断面(南)

8　A区58号土坑全景(西)

9　A区58号土坑土層断面(西)

10　A区58号土坑全景(西)



11　A区59号土坑全景(北西)

12　A区59号土坑土層断面(南)

13　A区60号土坑全景(南)

14　A区61号土坑全景(南)

15　A区61号土坑土層断面(南)

1　A区２号道全景(東)

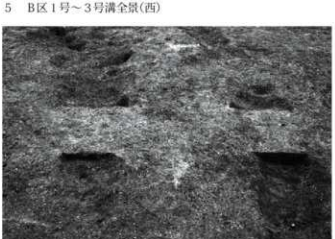
2　A区１号道土層断面A－A'（南）

3　A区１号道土層断面(南)

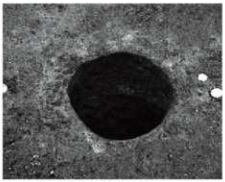
4　A区２号道土層断面(東)

5　B区１号～３号溝全景(西)

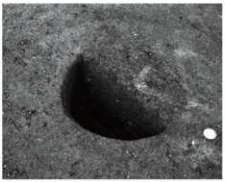
6　B区１号溝土層断面A－A'（西）



7　B区１号、２号溝土層断面B－B'（西）



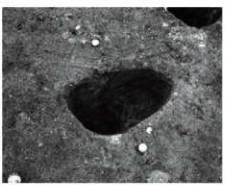
1　B区1号ピット全景(南)



2　B区1号ピット土層断面(南)

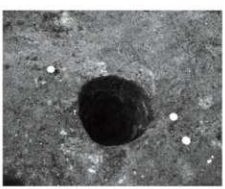
3　B区3号ピット全景(南)

4　B区3号ピット土層断面(南)



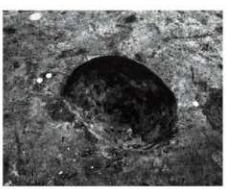
5　B区4号ピット全景(南)

6　B区4号ピット土層断面(西)



7　B区5号ピット全景(南)

8　B区5号ピット土層断面(南)



9　B区6号ピット全景(南)

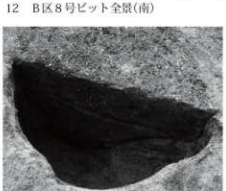
10　B区6号ピット土層断面(南)

11　B区7号ピット全景(南)

12　B区8号ピット全景(南)

13　B区8号ピット土層断面(南)

14　B区9号ピット全景(南東)



15　B区9号ピット土層断面(東)

1　B区縄文時代遺物包含層遺物出土状況(東)

2　B区縄文時代遺物包含層遺物出土状況(西)

3　B区縄文時代遺物包含層遺物出土状況(西)

4　B区縄文時代遺物包含層遺物出土状況(西)

5　C区全景(西)

1　C区１号～５号溝全景(北)

2　C区１号～６号溝土層断面Ａ―Ａ'（西側・南から）

3　C区１号～６号溝土層断面Ａ―Ａ'（中央・南から）

4　C区１号～６号溝土層断面Ａ―Ａ'（東側・南から）

5　C区６号溝全景(東)

6　C区６号溝土層断面(東)

7　C区７号溝全景(南)

8　C区７号溝全景(北)

1　C区7号溝土層断面A—A'(南)

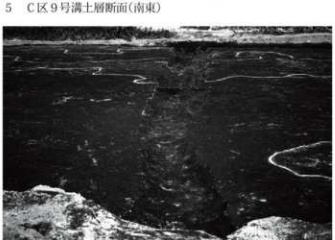
2　C区8号溝全景(西)

3　C区8号溝土層断面(東)

4　C区9号溝全景(北西)

5　C区9号溝土層断面(南東)

6　C区10号溝全景(南)

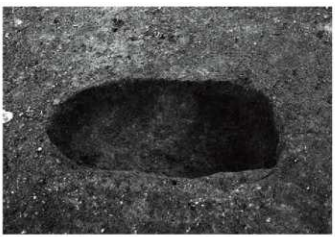


7　C区11号、12号溝全景(南)

8　C区11号、12号溝土層断面A—A'(南)

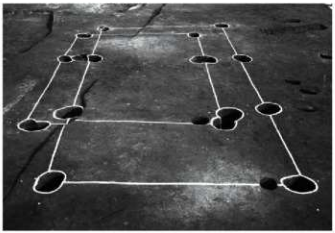
1　C区11号、12号溝土層断面B－B'（南）

2　C区13号、14号溝全景(北)

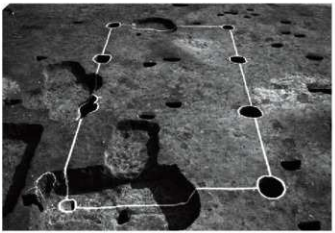


3　C区１号土坑全景(南)

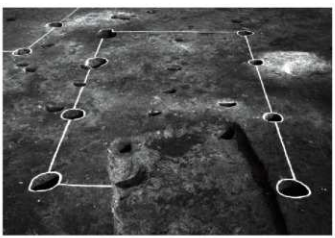
4　C区１号土坑土層断面(南)



1　D区１号、２号掘立柱建物全景(西)



2　D区３号掘立柱建物全景(西)



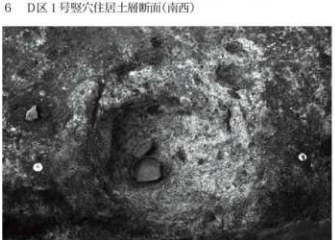
3　D区４号掘立柱建物全景(西)

4　D区１号竪穴住居全景(南西)

5　D区１号竪穴住居遺物出土状況(南西)

6　D区１号竪穴住居土層断面(南西)

7　D区１号竪穴住居掘り方全景(南西)



8　D区１号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状況(東)

1　D区１号竪穴住居貯蔵穴土層断面(西)

2　D区１号竪穴住居土坑土層断面(南西)

3　D区２号竪穴住居全景(南)

4　D区２号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（西端・南から）

5　D区２号竪穴住居土層断面Ａ―Ａ'（東端・南から）

6　D区２号竪穴住居土層断面Ｂ―Ｂ'（北端・西から）

7　D区２号竪穴住居土層断面Ｂ―Ｂ'（南端・西から）

8　D区２号竪穴住居掘り方全景(南)

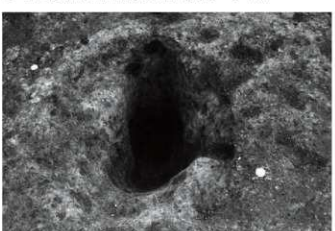
1　D区２号竪穴住居竈全景(西)

2　D区２号竪穴住居竈掘り方全景(西)

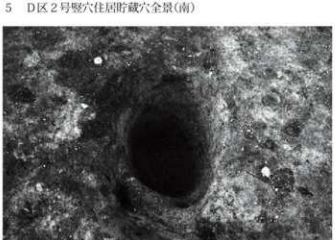
3　D区２号竪穴住居竈掘り方土層断面ａ－ａ'（西）

4　D区２号竪穴住居竈掘り方土層断面ｂ－ｂ'（南）

5　D区２号竪穴住居貯蔵穴全景(南)



6　D区２号竪穴住居ピット１全景(北西)



7　D区２号竪穴住居ピット２全景(北西)

8　D区２号竪穴住居ピット３全景(北西)

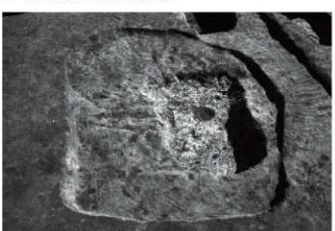
1　D区２号竪穴住居ピット４全景(西)

2　D区１号竪穴状遺構全景(西)

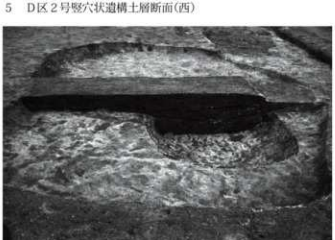
3　D区１号竪穴状遺構土層断面(西)

4　D区２号竪穴状遺構全景(西)

5　D区２号竪穴状遺構土層断面(西)



6　D区３号竪穴状遺構全景(北西)



7　D区３号竪穴状遺構土層断面(北西)

8　D区１号溝全景(東)

1　D区１号溝土層断面(東)

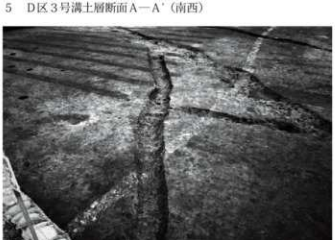
2　D区２号溝全景(南)

3　D区２号溝土層断面Ａ―Ａ'(南)

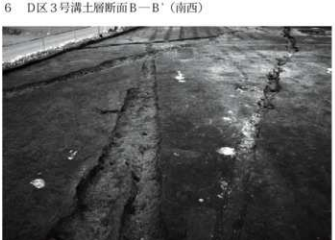
4　D区３号溝全景(南西)

5　D区３号溝土層断面Ａ―Ａ'(南西)

6　D区３号溝土層断面Ｂ―Ｂ'(南西)



7　D区４号溝全景(南西)

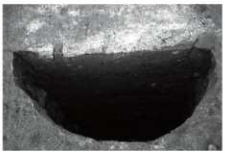


8　D区５号、６号溝全景(南)

1　D区1号井戸全景(北西)

2　D区1号井戸石検出状況(北西)

3　D区2号井戸全景(西)



4　D区2号井戸土層断面(南)

5　D区3号井戸全景(西)

6　D区3号井戸土層断面(南)

7　D区4号井戸全景(南西)

8　D区4号井戸土層断面(南)

9　D区5号井戸全景(南)

10　D区5号井戸土層断面(西)

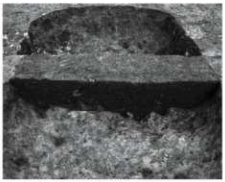
11　D区6号井戸全景(南西)

12　D区6号井戸土層断面(南)

13　D区1号土坑全景(西)

14　D区1号土坑土層断面(西)

15　D区2号土坑全景(南)



1　D区２号土坑土層断面(南)

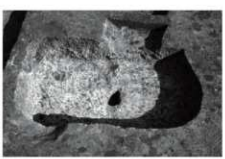
2　D区３号土坑全景(西)

3　D区４号土坑全景(西)

4　D区４号土坑土層断面(西)

5　D区５号土坑全景(西)

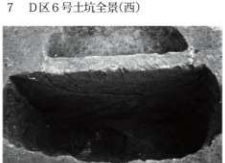
6　D区５号土坑土層断面(南)



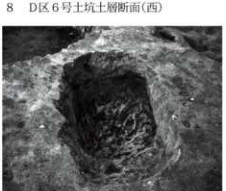
7　D区６号土坑全景(西)

8　D区６号土坑土層断面(西)

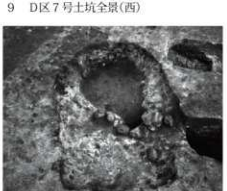
9　D区７号土坑全景(西)



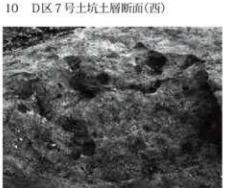
10　D区７号土坑土層断面(西)



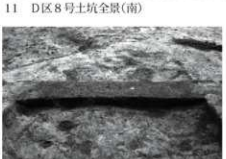
11　D区８号土坑全景(南)



12　D区９号土坑全景(南西)



13　D区10号土坑全景(西)



14　D区10号土坑土層断面(西)

15　D区11号土坑全景(西)

1　D区11号土坑土層断面(西)

2　D区12号、13号土坑全景(西)

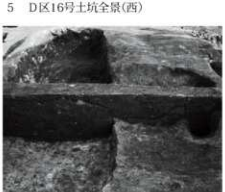
3　D区12号、13号土坑土層断面(北)

4　D区14号、15号土坑土層断面(西)

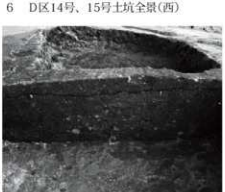
5　D区16号土坑全景(西)

6　D区14号、15号土坑全景(西)

7　D区17号土坑全景(西)

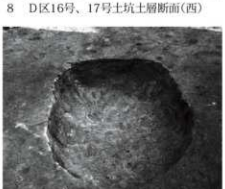


8　D区16号、17号土坑土層断面(西)



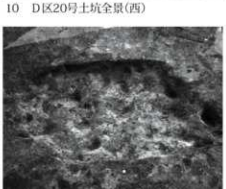
9　D区18号土坑土層断面(西)

10　D区20号土坑全景(西)



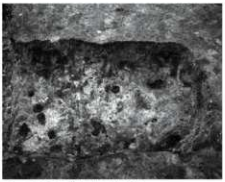
11　D区21号土坑全景(西)

12　D区21号土坑土層断面(西)



13　D区22号土坑全景(北)

1　D区22号土坑土層断面(西)



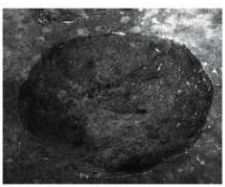
2　D区23号土坑全景(南)

3　D区24号土坑全景(西)

4　D区25号～27号土坑全景(北)

5　D区25号～27号土坑土層断面(南)

6　D区26号土坑土層断面(東)



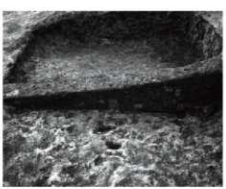
7　D区28号土坑全景(南)

8　D区28号土坑土層断面(南)

9　D区29号土坑全景(北)

10　D区29号土坑土層断面(東)

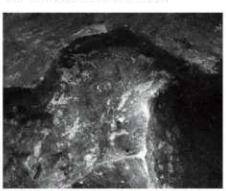
11　D区30号土坑全景(東)



12　D区30号土坑土層断面(東)

13　D区31号土坑全景(東)

14　D区31号土坑土層断面(西)



15　D区32号土坑全景(北)

1　D区33号土坑全景(東)

2　D区33号土坑土層断面(東)

3　D区34号土坑全景(北)

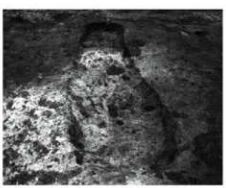
4　D区35号土坑全景(東)

5　D区35号土坑土層断面(東)

6　D区36号・37号土坑全景(東)

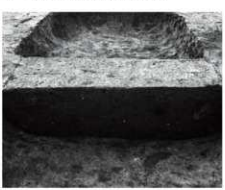
7　D区36号土坑土層断面(西)

8　D区37号土坑土層断面(南)



9　D区39号土坑全景(北)

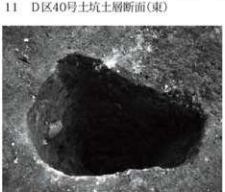
10　D区40号土坑全景(東)



11　D区40号土坑土層断面(東)

12　D区41号土坑土層断面(南)

13　D区42号土坑土層断面(南)

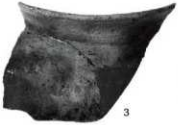


14　D区43号土坑全景(西)

15　D区谷地全景(西)

A区1号，2号竪穴住居

2


3

4

5

A区3号竪穴住居

1

2

4

5

6

7

8

A区4号竪穴住居

3

4

5

6

B区1号竪穴住居

1

2

3

4

PL.52

B区２号竪穴住居

1

2

3

4

5

B区１号溝

2

3

4

5

6

7

B区１号遺物集中

1

4

2

3

5

B区１号埋設土器

1

C区３号溝

1

C区２号溝

1

C区１号土坑

1

C区1号竪穴住居

1

2

4

3

D区1号竪穴住居

1

2

5

D区2号竪穴住居

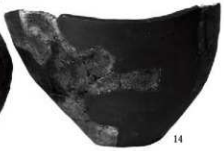
2

3

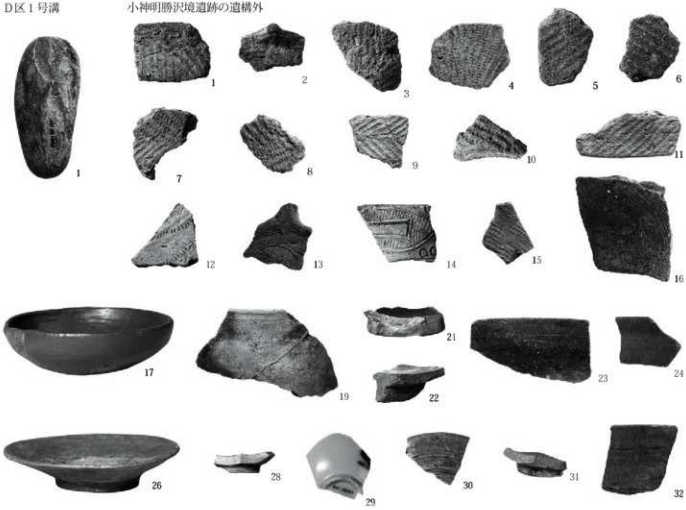
6

13

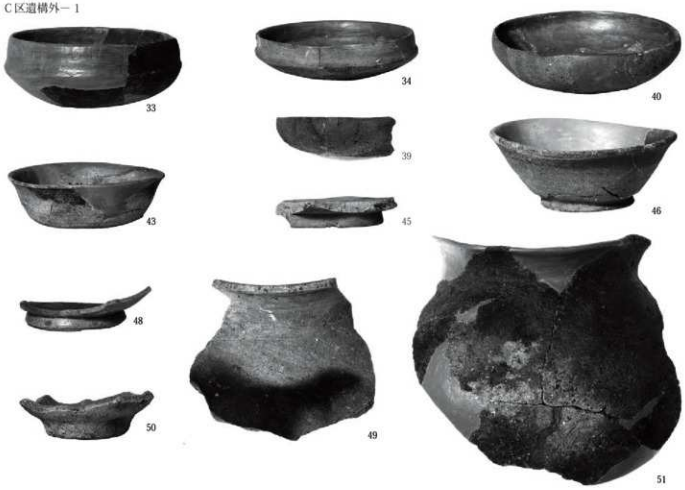
11


14

D区１号溝　　小神明勝沢境遺跡の遺構外



C区遺構外－１



C区遺構外－２

54

55

56

57

58

64

59

60

61

62

63

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

PL.56

D区の遺構外

77

小神明勝沢境遺跡の遺構外

78

79

80

81

82

83

89

84

85

86

87

88

90

A区2号竪穴住居

1

A区3号竪穴住居

4

5

6

7

A区5号竪穴住居－1

1

3

4

5

7

9

10

11

13

A区5号竪穴住居－2

A区7号竪穴住居

A区6号竪穴住居

A区8号竪穴住居

A区9号竪穴住居

A区11号竪穴住居

A区1号溝

A区2号溝

A区2号井戸

A区24号土坑

PL.60

A区10号土坑

3

6

5

A区31号土坑

1

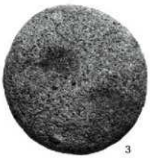
A区58号土坑

1

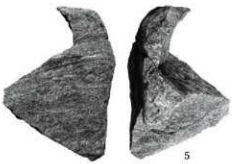
B区縄文時代包含層

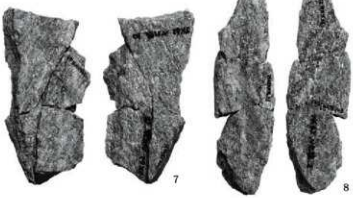
1 6

2


3

4


5


7 8

9 10

C区1号土坑

1

D区2号竪穴状遺構

1

D区3号溝

1

D区5号溝

2

D区6号溝

3

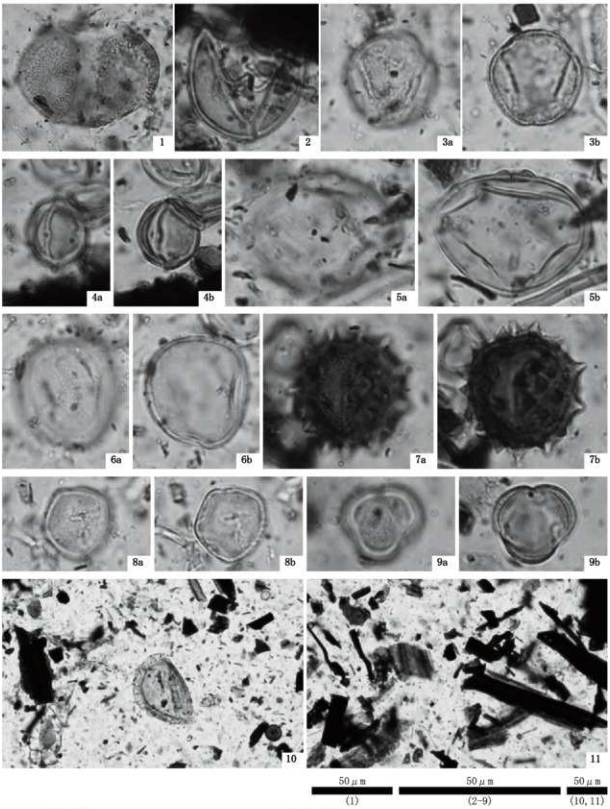
D区1号竪穴住居

D区2号竪穴住居

PL.62

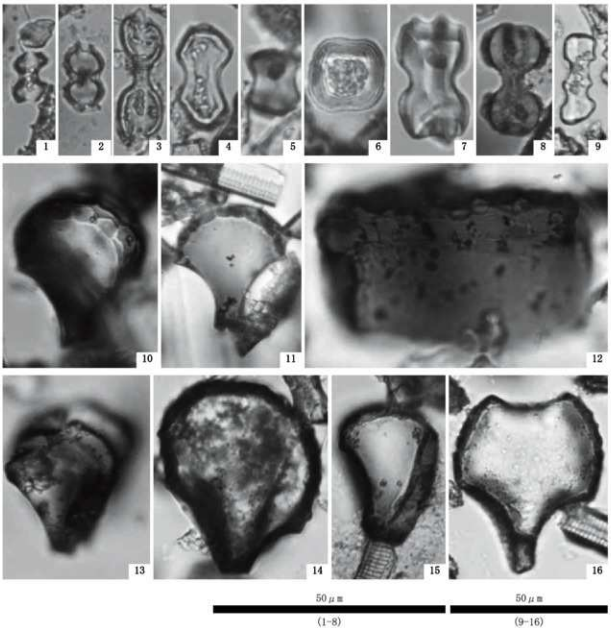
小神明富士塚遺跡の遺構外

花粉化石



1. マツ属(3地点;1)
2. スギ属(3地点;1)
3. コナラ属コナラ亜属(3地点;1)
4. ブドウ属(6地点;1)
5. イネ属(3地点;1)
6. イネ科(3地点;1)
7. キク亜科(6地点;1)
8. カヤツリグサ科(3地点;1)
9. ヨモギ属(6地点;1)
10. プレパラート内の状況(3地点;1)
11. プレパラート内の状況(6地点;1)

植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体(2地点;1)
2. イネ属短細胞珪酸体(5地点;1)
3. キビ属短細胞珪酸体(2地点;3)
4. チゴザサ属短細胞珪酸体(2地点;1)
5. ネザサ節短細胞珪酸体(2地点;4)
6. ヨシ属短細胞珪酸体(2地点;1)
7. コブナグサ属短細胞珪酸体(2地点;1)
8. ススキ属短細胞珪酸体(1地点;1)
9. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(5地点;1)
10. イネ属機動細胞珪酸体(2地点;1)
11. イネ属機動細胞珪酸体(5地点;1)
12. キビ族機動細胞珪酸体(2地点;1)
13. ネザサ節機動細胞珪酸体(2地点;4)
14. ヨシ属機動細胞珪酸体(2地点;1)
15. ウシクサ族機動細胞珪酸体(1地点;1)
16. シバ属機動細胞珪酸体(1地点;1)

抄　録

書名ふりがな	こじんめいかつさわさかいいせき　こじんめいふじづかいせき
書名	小神明勝沢境遺跡　小神明富士塚遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その３)報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第524集
編著者名	高島英之、矢口裕之、大西雅広
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120214
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地２
遺跡名ふりがな	こじんめいかつさわさかいいせき
遺跡名	小神明勝沢境遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししこじんめいまち
遺跡所在地	群馬県前橋市小神明町
市町村コード	10201
遺跡番号	403
北緯（日本測地系）	362504
東経（日本測地系）	1390600
北緯（世界測地系）	362514
東経（世界測地系）	1390547
調査期間	20081001-20081210
調査面積	5949
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	縄文／弥生／古墳／平安／中世／近世
遺跡概要	その他－縄文－埋設土器１＋遺構外－縄文土器＋縄文石器／集落－弥生－竪穴住居２／古墳－竪穴住居７＋遺物集中１／その他－平安－溝１／その他－中世－溝２／その他－近世－溝１／その他－中世－土坑１
特記事項	Ｂ区で縄文時代前期の埋設土器や浅間Ｃテフラを埋土に含む弥生時代後期の竪穴住居２棟を検出した。
要約	縄文時代前期から江戸時代までの複合遺跡である。火山麓扇状地の台地に弥生時代後期の竪穴住居がつくられ、その後古墳時代後半期の集落が営まれた。

抄　録

書名ふりがな	こじんめいかつさわさかいいせき　こじんめいふじづかいせき
書名	小神明勝沢境遺跡　小神明富士塚遺跡
副書名	一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その３）報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第524集
編著者名	高島英之、矢口裕之、大西雅広
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120214
作成法人ＩＤ	21005
郵便番号	377－8555
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地２
遺跡名ふりがな	こじんめいふじづかいせき
遺跡名	小神明富士塚遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししこじんめいまち
遺跡所在地	群馬県前橋市小神明町
市町村コード	10201
遺跡番号	778
北緯（日本測地系）	362505
東経（日本測地系）	1390545
北緯（世界測地系）	362517
東経（世界測地系）	1390534
調査期間	20080901－20090331 ／ 20100201－20100331
調査面積	15332
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	縄文／古墳／奈良／平安／中世／近世
遺跡概要	その他－縄文時代前期－遺物包含層－縄文土器＋縄文石器／集落－古墳－竪穴住居９／集落－奈良－竪穴住居３／集落－古代－掘立柱建物６／集落－中世－竪穴状遺構１／集落－年代不明－竪穴住居１＋掘立柱建物４＋竪穴状遺構３／集落－古代－道１／集落－近世－道１／その他－古墳－溝１／その他－古代－溝６／その他－中世－溝20／その他－近世－溝２／その他－中世－井戸１／その他－近世－井戸１／その他－古墳－土坑２／その他－古代－土坑５／その他－中世－土坑３
特記事項	Ｄ区から溝による方形区画で境された中世の屋敷跡（掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸や土坑群）を検出した。
要約	縄文時代前期から江戸時代までの複合遺跡である。火山麓扇状地の台地に古墳時代後期から奈良時代の集落が営まれた。中世には50mの方形区画で境された屋敷跡などが検出された。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第524集

小神明勝沢境遺跡・小神明富士塚遺跡

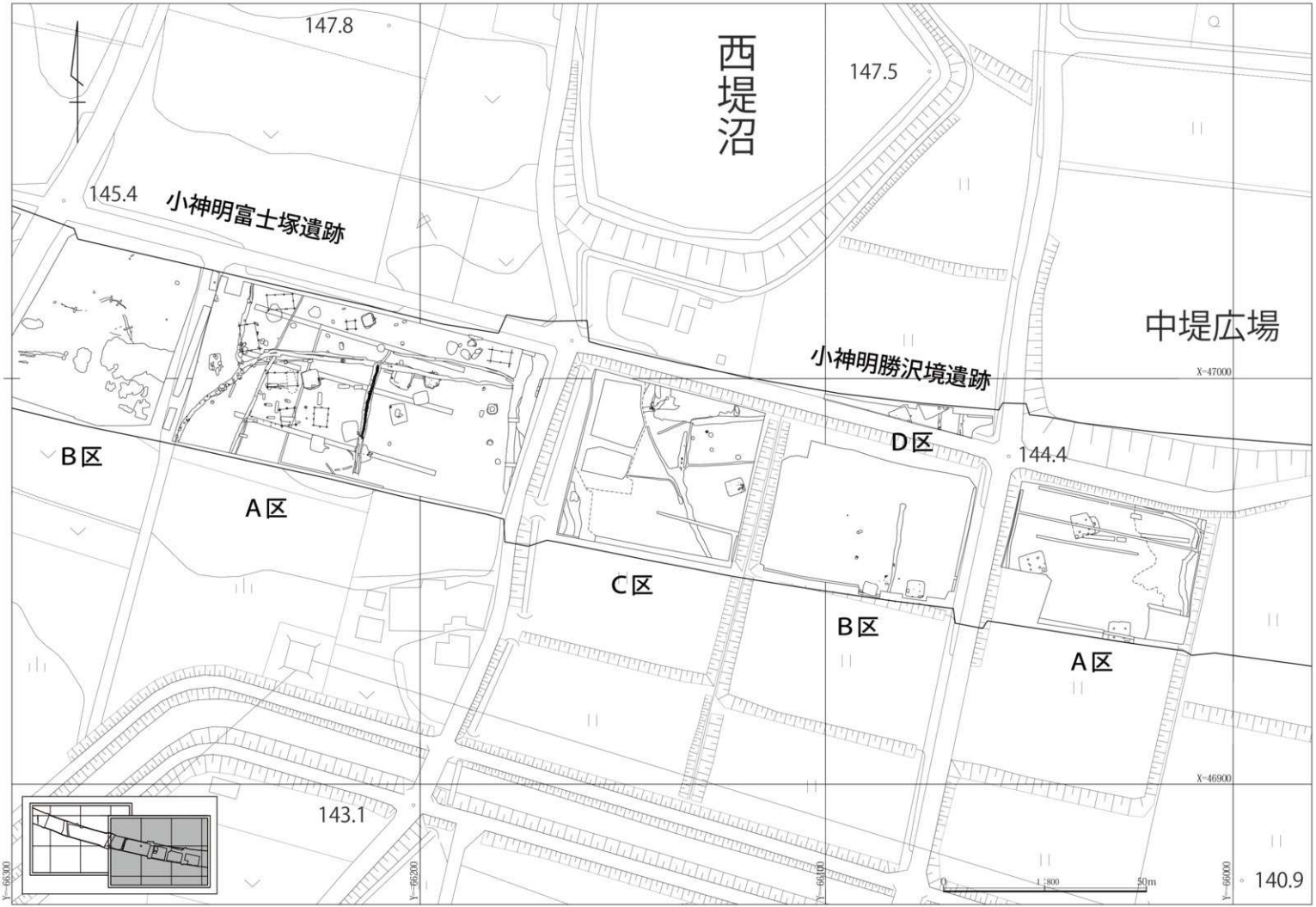
一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その３)報告書

平成24（2012)年２月７日　印刷
平成24（2012)年２月14日　発行

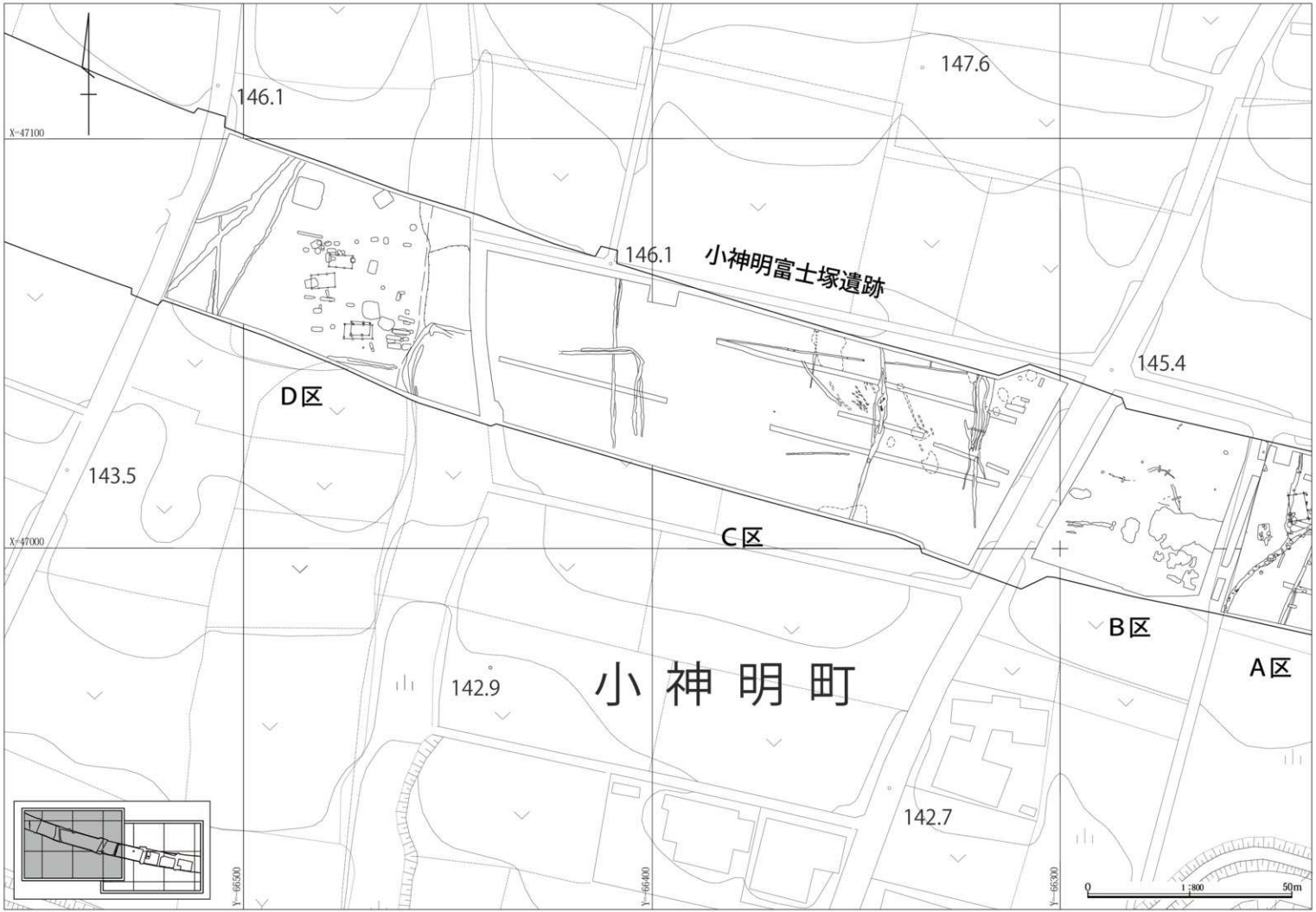
編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／松本印刷工業株式会社



付図 1　小神明勝沢境遺跡、小神明富士塚遺跡（A 区・B 区）遺構全体図



付図 2　小神明富士塚遺跡遺構全体図